奇譚クラブ

新時代の風俗雑誌

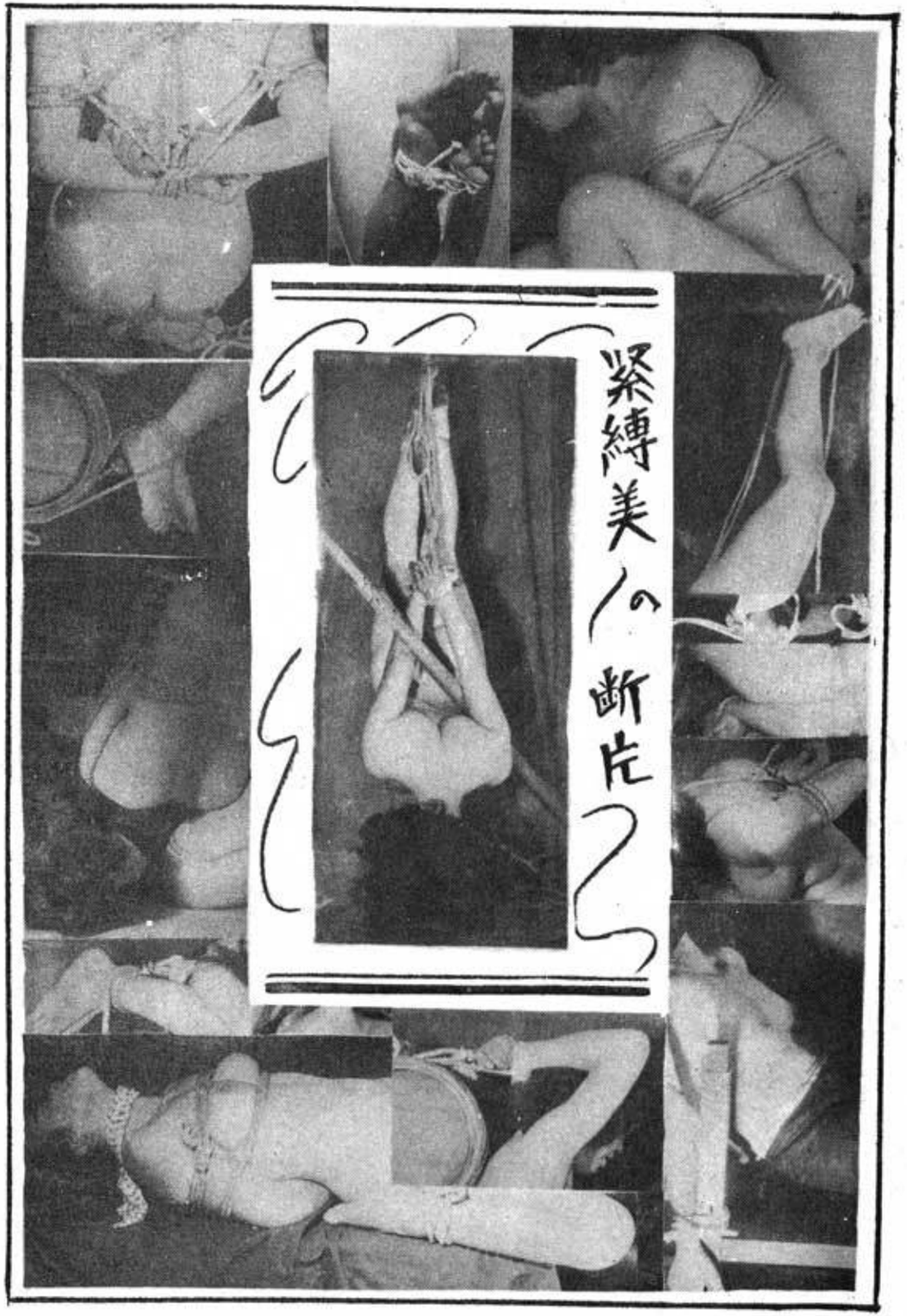
1953・6

奇譚クラブ

6

定價百円

地方売価百参円



縛られた女の集大成

美しき縛しめ

（縛られた女ばかりの十六態）

縛られた女の中、優美さと緊縛感の秀れた代表的な絢爛目をあざむく十六態

特アートに美術コロタイプ印刷を施し総て新に特写したものばかりですから、従来の写真と絶対に重復することはありません。十六葉を貼付した豪華なアルバム本誌の依頼に依り美濃村氏が腕をふるつて指導した逸品揃い、どうかコレクションの一翼にお加え下さい。

アルバムの大きさ・A5版

全部未発表の特寫！

（限定版は特別会員に限り分譲）

内容

エビ責　足枷
高手小手　鞭打ち
芋虫　蠟燭責
くさり　滑車吊
床の置物　観念
紅と白　荒縄
目の綾　犠牲台
雁字搦目　猿轡

各葉解説文句付

●構成・晃　村濃美●

●撮映・三鉄本塚●

☆ 五百部限定版 ☆

絶対に市販せず
限定番号捺印

頒価一部五百円
（送料二十四円）

申込所
大阪府堺局区内菅原通

☆ ☆

曙書房 代理部

地獄物語

往生要集

☆ 奇譚クラブ　六月号　目次 ☆

口絵 お小夜嵐　高月大三構成・喜多玲子画
緊縛による一表情　辻村隆構成・塚本鉄三撮映
扉　夢はスカートの下に（夜会が演んで見た男の夢）　ワツツ・フイリツプ筆

クリスチーヌの受難　キドロドシユトツク　吾妻新・訳　(16)
虹の階段　泉辰之助　(28)
ヴアンプ女優列傳　朝見速夫　(128)
アブノーマル・ファンタジー　岡田唉子　(78)
責苦　竹谷十三　(92)

拷問と倒錯の根源探求　翁要吉　(38)
靜安劇場後日譚　姫宮四郎　(100)
——魔都上海の思い出からその二——

時代小説　廓の灯影　片矢薫　(150)

出獄（少年矯正院体験記）　獄収一　(33)
縛られた女優たち（三）　(76)　切腹問答　中康弘通氏へ　(90)
淫みだらび火（第六回）　松井籟子　喜多玲子・画　(168)

由紀子のお仕置　大川由紀子　(60)

武家男色秘話　若衆武士道　戸崎平馬　(162)
らぶ・すれいぶ（第6回）　鬼山絢策　(44)
暴帝イワン罪惡史（二）　高取辰治　(53)

あるマゾヒストの手帖から　沼正三　(68)
其頃を語る（一）　新派劇の實場　伊藤晴雨　(158)
自殺の手段としての女性の切腹について　池田敏夫　(132)

サド・マゾヒズムの藝術
文芸に於ける切腹描寫　中康弘通　(138)
我が告白の断章　須藤律夫　(88)

第二回讀者座談會
松井籟子女史を圍んで　司会者　箕田京二　(116)

お小夜嵐

高月大三構成
吉多玲子絵

「どうでい お小夜 先刻から口をすっぱくして云う通り いやならいやでいいんだが おめえのからだは 金の低当だ 帰りてえならたった今 五十両の金耳を揃えて並べてみろ それが出来なきゃアヘッヘッヘ……どうでい……え～？」

勉権は酒臭い息を吐きながらお小夜にねじり寄ってくる

「……いやです!! 帰して 帰して下さい!!」

お小夜は縛られたまゝ必死にしだえて身を退いた お小夜の父の茂右エ門がどうにもならぬ商売の行き違いで金が欲しいの一心から ワト手を出した 丁半が弱り目に崇って 裸になるまで負け続けそれがいかさまだと判った時にはいつの間にやら悪い相手の口車に乗せられて娘のお小夜までが賭け金の低当になっていたのだった

「金もなけりやア その上に 俺の云うことも聞かねえなら おめえの着ている着物を脱げ ちっと高くて気に入らねえがその黄八丈 帯もくるめて大枚 五両で買ってやらァ」 にたりくと淫らに笑いながら

鬼権は お小夜の帯を解き 着物を引き剥りで また後手に縛り直した 逃れようともがくお小夜の口には無情な猿轡がかまされて 長襦袢一枚の姿のまゝどうすることも出来ず 美しい犠牲は身を震わせるばかりであった

「ヘッヘッヘ どうでい その長襦袢も買ってやるぜ 五両も出しやア御の字だ 十両出してもあとの楽しみも考へりやア安いものだが…」

お小夜にとっては手足を切られるよりも辛い責め苦であった

長襦袢の前が割れて 紅の色がちらくこぼれ 雪の様な膝が覗いているのを直すことも出来ない姿……

鬼権の手が無情に伸びて お小夜の身を包む長襦袢の襟にかゝった 身を縮めて突伏すのを押し転がして無理矢理に脱がせにかゝる鬼権の眼は血走っていた——

夜の白い肩を這って 猿轡の下からは思わず
洩らす羞恥の呻き……引き脱がされる胸元か
ら双っの隆起が露わになってゆくのだった
「うっふ とてえられねえ」
鬼權は突っ立ったまゝ 畳に這ったお小夜の半裸を
嘗めて心のうちで独りごと やがて その背を膝ッ小
僧でしっかり押えつけたまゝ後手の縄目を解きにかゝる
身をよじらせて逃げようとあせるお小夜の腕から長襦
袢の袖がするくと外されるとまたもや前にもすてひしく
と 縄が手首に喰い込んで縛り上げられてゆくのだ
今はもう 腰のものの一枚にされてしまったお小夜は 鬼權の
淫らな眼の前にどうすることも出来なかった ——
「最後の布っ切れは 飛び切りいゝ價で買ってやるぜ えへへへッ
こいつア一番ねうちものだァな」
そんな勝手なことを言いながら 鬼權はゴクリと唾を飲み込んだ

部屋の中に若い女の膚の匂いが 立ちこめて
鼻をうごめかせた ――――

「さあ そのたった一枚の布っ切れに十両出そうと云うんだ へッへッ」

猿轡の下で声にならぬ悲鳴を上げながら逃れようとするお
小夜の腰のあたりに鬼権の手がかかる
ハラリと足元に落ちる 紅いもの――
思わず 鬼権の眼を避けて行
燈の陰に身をかがめるお小夜の身も
世もあらぬ悶えの姿 ほの暗い破れ
行燈の灯も一糸すとわぬ羞恥の身には
憎くかった ぴったり合せた太腿が恐怖と
羞恥にワナワナと震えている ――

「あとの不足の分はどうするつもりだイ
極楽往生か それとも ウンと云うまで
痛い目を見るか……」 鬼権はそう云いな
がら 長煙管を握りしめていた ――

秘本「お小夜乱」より ――

玲子

夢はスガートの下に
（夜会が済んで男の見た夢）
―ワッツ・フイリップ筆―

新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

（六　月　号）

第七巻　第六号　通刊第五十六号

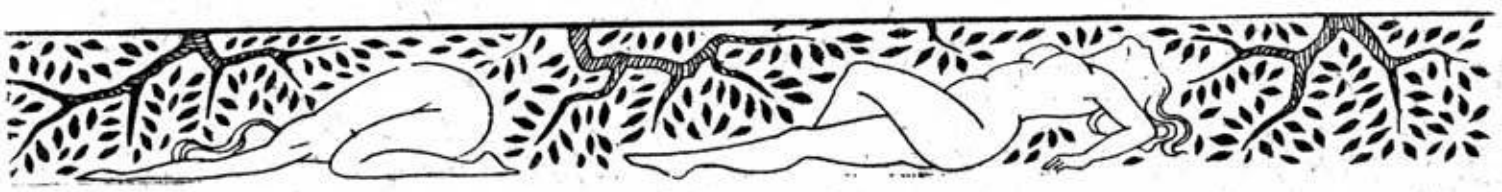
クリスチーヌの受難

キドロドシユトツク
吾妻新・訳

一、クリスーヌの告白序詞

私がこの手記を残すのは、もちろん生きてこうして机に向つているからではありますが、また司祭ジューベ様のおすすめによるものであります。さもなければ決して筆をとろうとは思いませんでした。なぜならば、人は不幸な思い出によつて慰められることはないと信ずるからであります。

私の受けたかずかずの苦難や恥ずべき苦痛はいつまでも心にうずいており、将来もおそらく墓場までつづくことと存じます。私はそれをじぶんひとりの運命とあきらめ、そつとしておきたかつたのです。しかし司祭ジューベ様のお考えはちがつていました。あの尊敬すべきお方に従えば、神はいかなる罪をもお許し下さるし、ましてやそれが不可抗力で加えられたものならば、けつして恥ずべきものではないということです。今日、私を苦しめた人々は法の裁きに服しております。だが地上の裁きはそれらの人々を罰するだけで私の心の傷をいやしてくれません。それをなしうるのは広大無辺の神の愛だけです。それゆえ私の心の傷を寸分あやまたず、かくすことなく神のみ前に訴えて、心の安らぎをうるがよいとの仰せです。



ああ、過ぎ去つた日々、眼のくらむような恥ずべき屈辱から救われるとしたら、なんという奇蹟でしよう。ただ、地獄にまさる苦難の模様を細大洩らさず告白するには絶大の勇気が要るのです。それを記すことはおそろしく、ふたたび責苦を繰り返される心地がいたします。私は眼をつむり、何びとの声もきかず、顔もみず、ただ神のみ前にだけ、なさねばならぬ義務を果します。そして灼けつくような不幸から救われたいと希います。神よ言語に絶する冒瀆のかずかずをここに打ち明けることをお許し下さい！　そしてあなたのお手にすがらせて下さい。

一八八九年降誕祭の日

みじめなる

クリスチーヌ

誘拐

一

私は不幸な星の下に生れました。父はリヨンの富裕な織物工場主でしたので、物心ついてからはなに不自由ない生活を享楽したと申せますが、母の思い出はもつておりません。のちになつて知つたことは、母はセーヌ県からきた貧しい家の娘で、父の工場で働いていたのを父に見染められたのだそうです。どんな複雑な事情があつたのか知りませんが、とにかく母は私という子供を残してふたたび父の家から姿を消したのでした。しかし私は母の美しい面影を、一枚の肖像画を通して知つております。

さて、私は告白をするために筆をとつたのです。長々と懐しかつた少女時代を述べることは略します。ただ、父は一人きりの子供である私を心から愛し、寂しがらせまいとして心を砕きました、私が語学や書物が好きだらとはいえ街に滞在していた英国の婦人にたのんで、当時としてはかなり高い報酬を払い、私に英語を学ばせたことでもわかると思います。

このようにして、私は十八才まで育ちました。英仏独三カ国語を自由に語ることができました。髪はブロンド眼は青く、顔立ちは全く母に似ていました。人々は私の延びきつた四肢や、白い歯並や、皮膚の滑らかさや、よく響くソプラノなどについて称讃を惜しみませんでした。どこまで信じていいか分りませんが、人の噂によれば

私はリヨンはもちろん、パリ中探してもめつたにないほど美しかつたそうです。

家へは、いつしか若い男の人たちが沢山出入りするようになりました。それもみな私というものが目的なのです。そのなかで、ジョルジュという青年と私はまもなく恋におちました。年は四つ上で、すらりとした物腰、明るい笑顔、すこしも気取らない態度がはじめから私を惹きつけたのですが、つき合うにつれて意外に高い彼の教養や、一つ一つの言葉に真実が溢れていることを知つたのです。

私たちはこつそり忍び合い、語り合うようになりました。神に誓つて申し上げますがこれを父は気づきながらゆるしていたのです。では、なぜ大つぴらに恋を語らなかつたかといえば、ある人間の嫉妬を恐れたからでした。

ポール——これがその悪魔の名前です——はやはり織物工場主で、しかも父とは商売上切つても切れない関係にありました。父親のミッシェルは革命後に財産を築いた人で、パリに住んでいますが、数年前からリヨンに工場を建て、その管理一切を息子に任せていたのです。勢力家を背景にしていますから、父はいやでも同業の関係上つきあう外はなく、それをいいことにして彼は私の家に自由に出入し、いやらしい眼つきで私の姿を求めるのでした。

あまり筆が進まないのですが、簡単に彼の説明をしますと、年は三十五六です。背は高く肩巾はひろく、猪首です。額に深い皺があり、濃い眉の下には小さな眼がいとも陰険に光つています。鼻と口は大きく、特にその口唇は厚くて、笑うと何ともいえぬいやらしい表情を帯びるのです。私は父から紹介されるまでは、このけだものような男が大金持のクレルモン家の一人息子だとは想像もつきませんでした。

「セルヴェさんもお人がわるい。こんなに美しいお嬢さんをお持ちになつていながら今日までお引き合せ下さらないんですね」

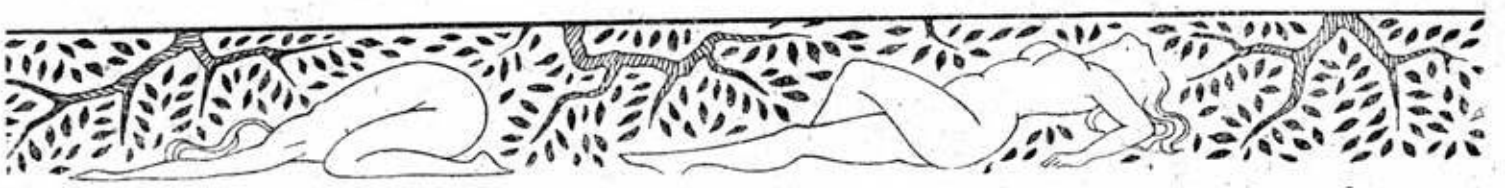
これが初対面のときに聞いた彼の最初の言葉でした。

「いや、お互いに商売が忙しくて、子供のことなど忘れてしまいますよ」と、父は笑いにまぎらせましたが、ポールは耳を傾けようともせず、

「どうでしょう。お近づきのしるしに、お嬢さんから葡萄酒を一杯、ごちそうになるというわけにはいきませんか」

と言うのです。

これがこの男の巧みなところで、奢ると言えばなんとでも辞退できたのですが、奢られたいと言われれば断わ



るわけにいきません。私はその大胆さに気を悪くしましたが、父は迷惑そうに客間に戻ると、私に最上等の葡萄酒を運ぶように命じました。

こうして酒宴がはじまり、私がやつと解放されたのは二時間たつぷり後のことでした。これですめばよかつたのですが、運命はそのとき決つていたのです。

二

たつた一日おいて、ポール・クレルモンはまた私の前に姿を現わしました。それも実に無礼なやりかたでした その日は、父は朝早くから工場に出かけていたので、家に年とつた召使のアナトールと私だけでした。

「お父さまは工場にお出かけだと伝えなさい」と言うと、

「いいえ、旦那様でなく、お嬢様にお話したいことがあるそうでございます」

と、意外な言葉です。

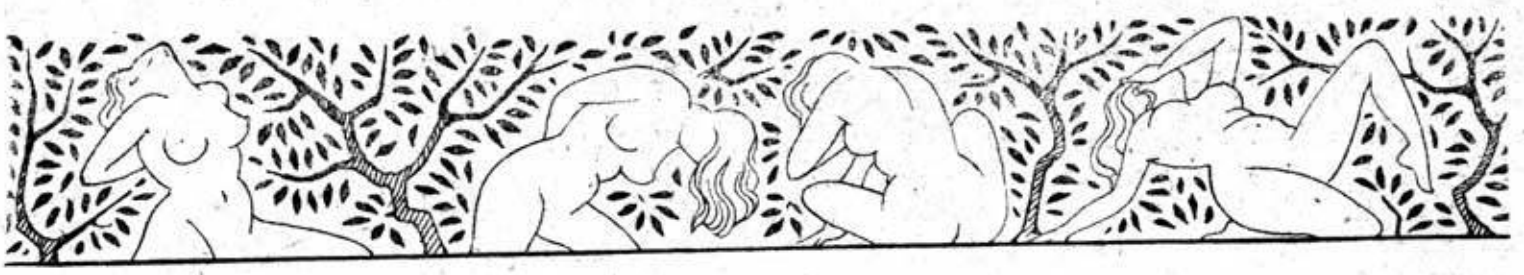
私どもの社会の習慣では、たつた一度しか会わぬ娘に若い男が、父親の留守に面会を求めることは礼儀にもとることになつています。ましてポールは二度と会いたくない人間でしたから、よほど拒絶しようと思つたのですが、父の口ぶりでは事業上の大切な相手とのことゆえ、それは憚られました。しばらく考えてから、私は思いきつて客間に通すように言いつけました。

くりかえして申しますが、私は全くうぶな世間知らずの娘だつたのです。もしポールがどんなにしつこい男か思つたことをやりとげるには道徳も、いや法律も踏みにじるということを少しでも知つていたら、絶対に会うのを避けたのでした。

「私は生来正直な人間だから、単刀直入にお話することしかできないのです」

あの怪物はこんな言葉で切り出しました。ところが、それからの話は、まず私の美しさや魅力の讃辞です。私はすこしもうれしく感じませんでした。というのは、ギラギラ光る彼の眼や、赤く濡れた厭らしい口唇が、ありありと底意を現わしていて恐ろしかつたからです。はたして彼は、そんなお世辞を十分以上も並べ立てた揚句、本心を吐き出しました。私と結婚してくれと言うのです。

「まあおききなさい、クリスチーヌさん。私はこんな醜い男です。自分でも容貌の点ではうぬぼれていません。しかし私には莫大な財産があります。現代は金の世の中ですよ。金さえあればどんな幸福でも手に入ります。別



荘を建てることも、二頭馬車でパリを乗り廻すこともできる。劇場をのぞいたり、旅行したり、宴会を開くことも出来ます。もし都会がいやでしたら、好きな地方に二人きりの家を建てて、兎狩りを楽しむこともできます。だれもあなたに命令したり干渉しません。あなたは私と結婚すれば、女王のように気儘にふるまえるのですよ」

「もうそんな話はやめて下さい」

たまりかねて、私は言いました。

「私は女王になりたいとも、栄華を享楽したいとも思いません。現在の生活で満足しています」

「つまり、立派な工場をお持ちになつているという意味ですな」と、ポールは薄笑いを浮べて、

「では、真実をお話しましょう。私は今、あなたのお父様と大きな取引を結んでいます。それに基いて、すでにお父様は投資をなさいました。もし私がここで変心すれば、お父さまはたちまちお困りになりますよ」

「まあ、あなたは私たち親子を脅迫なさるのですか?」

激しい不安に襲われて私は両手を組み合せました。が、この男はますます落ちつき払つて、私の取り乱した様子を快げに眺めるのです。

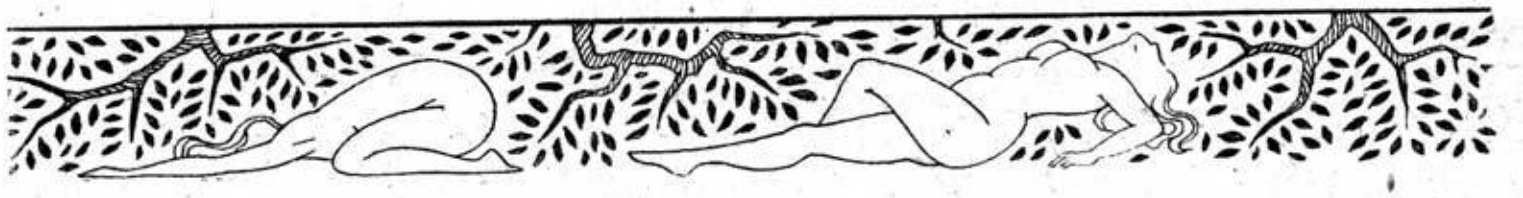
「脅迫だなんて、とんでもない。ただ、あなたは金銭の価値を軽蔑なさる。その誤りをちよつぴりお教えしようと思うだけですよ。……いいですか、私のうしろには父があり、父の背後にはさらに大きな勢力があるんです私がリヨンに工場を建てた以上、あなたのお父様はもはや私を無視できないのです。もし私にその気があればどんな大きな工場でも一年足らずでつぶすことができますよ……。だが、そんなことをして何になるでしょう。私は幸福には幸福で酬いる人間ですよ。だが、私の善良なる意志を無視されるなら、全力をこめて相手をたたきつぶします。これがクレルモン家の道徳です」

私は苦痛にあえぎました。思いもよらぬ大きな問題がのしかかつてきて、未経験の私にはどう答えていいかも分りません。ふと、私はジョルジュのことを思い出しました。私に婚約者があると言えば、さすがにこの男も諦めるだろうと、単純に考えたのです。

「ポールさま。あなたの気持はよくわかりました。が、私、もう婚約者があるのです」

「婚約者?それはだれです?」

ポールの顔色が変りました。



「それはいま申し上げられませんけど、事実なのです。私たちは近く式をあげることになつています。ですからこのことだけはお諦らめ下さいまし。あなたのような勢力家なら、どんな女のかたでも選り好みしだいですものね」

これで虎口を逃れたと思つて、はじめて私は笑顔をつくりました。が、次のボールの言葉で、ふたたび恐怖が咽喉につまりました。

「いや、男というものは、競争相手があればあるほど、欲望に油をかけられるものです。どうせその婚約者は美しい青年でしよう。私はごらんのとおり醜い男です。だから、想いをとげるには私は全力をつくしますよ……。さあ、クリスチースさん、返事して下さい。私と結婚すると約束して下さい」

「無茶なことを！私は、できない理由をお話したのですよ」

「それは私の理由にならない。ボール・クレルモンに不可能はないのです」

「冗談はいいかげんにして、もうお引きとりになつて下さい……」

私は相手の気違いじみた眼付きに、もう耐えられなくなつて、立ち上りかけました。すると、いきなりボールは近付いて、私の肩を押さえつけ、右手でしつかと私の手首を握りしめました。

「な、なにをなさるの！」

「単刀直入な男だと最初からことわつたでしよう。さあ、承諾なさい、クリスチーヌ」

無言の争いが何秒かつづきました。鉄のような腕に抱きしめられて、私は椅子から起き上ることもできず、恐怖に圧倒されて口もきけません。だが、厚顔な男の手が幽かに乳に触れたとき、私の血は逆流する思いでした。夢中で男の手を払いのけると、

「いやだ、いやだ、けだもの！」

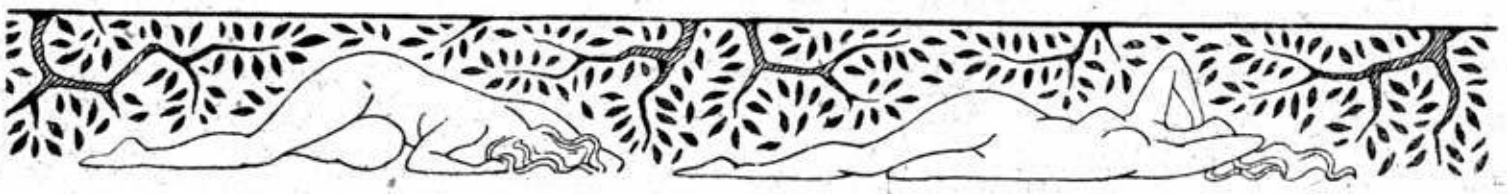
と思わず叫んでしまいました。

この一語はさすがにボールの胸を刺したものとみえます。彼は私のからだを突きはなすと、テーブルに身をもたせかけ、荒い息使いで私を睨みつけたまま、しばらくは一語も発しませんでした。

やがて何を思つたのか、彼は帽子をとり、しずかに一礼しました。

「この俺をけだものと言つたね、クリスチーヌ」

氷のような冷やかな口調。私はぞツとして、部屋から逃げだすこともできず、その場に釘付になつてしまつた



のです。

「よろしい。獣がどんなことをするか、見ているがいい」と彼はつづけました。

「ただ、おことわりしておくがね。この俺さまがねらった獲物はけつして逃がさないよ。どんな思いをしても、きつとわがものにしてみせる。その代り、骨を折らせた代償は高くつくぜ。そのときは、セレナーデの代りにお前の泣き声を伴奏にして聞いてやろう。では、ごきげんよう！」

それから、何事もなかつたように、彼は落ちついた足取りで部屋を出てゆきました。

私はじぶんの居間に駆け込むなり、わッと哭き出してしまいました。

三

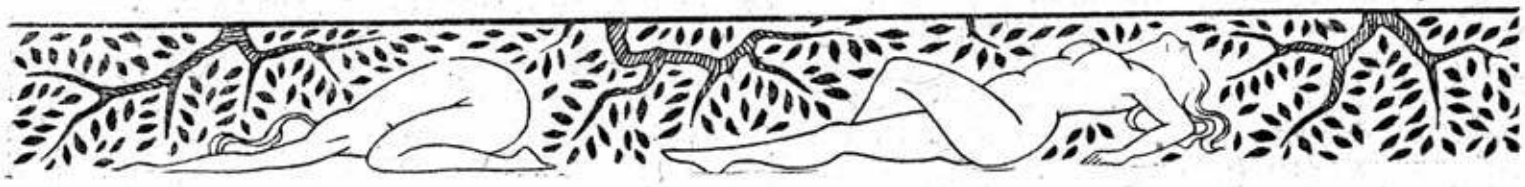
そのとき私の頭を占めていたのは、何よりもまず恐怖の気持でした。腹立たしさ、羞かしさは、この感情のため片隅に追いやられ、どうしたら彼の脅迫から逃れうるかということばかり考えました。彼の捨てぜりふは、内容そのものがおそろしかつたばかりでなく、いわば狼が本性を現わしたような態度の急変そのものにおびえてしまつたのです。おそらく、そのとき採るべき最良の方策は父にすべてを打ち明けることだつたろうと思います。ところが私は気が顚倒してしまつて、それをまるで不可能のように感じました。

正しくポールの脅迫は成功したのです。私は彼の呪文にかかつてしまつたのです。もし父に一切を打ち明けれ ば私を何よりも愛している父は驚きと怒りのあまりポールに激しい抗議や非難をあびせるに相違ない。そうなれば父はおそらく事業を失い、生涯かかつて築き上げた財産を失うことになる。それに、ポールが邪しまな計劃を立てるにしてもまだ日数のあることだし、その間にはなにかよい智慧も出るかもしれない……。

私は一心に神に祈りました。しかし不安はいぜんとして重苦しくのしかゝつてきます。結局、私はこの秘密を愛するジョルジュに話して、力になつてもらおうと決心しました。彼は二日か、三日おきには私の家へ遊びにやつてくるのです。

いま思えば、なんという哀れな女の才覚だつたでしょう！私はポール、クレルモンという男をまだまだ十分の一も理解していなかつたのです。かれの人並すぐれた奸智や、狂暴性や、迅速で用意周到な計略を想像もできませんでした。神よ、私のみじめな運命をお憐れみ下さい。

日くれがた、父は元気な足取りで帰つてきましたが、私が気分勝れず、居間にとじこもつているときいて、心



配してやつてまいりました。

「いけないね、クリスチーヌ。晩の食事も食べられないのかい?」

「ええ、気分が勝れないので、すみませんが、お父さまひとりで召し上つて下さいな」

「一体、どうしたというのだ?なにか心配事でもあるのじやないか」

私は強いて微笑をうかべ、そつと父を接吻しました。

「それより、事業の方はうまくいつているの?」

「ああ、おまえの嫌いなポール、クレルモンのおかげでな」と父は笑い出しました。

「あの男にはすでに二度儲けさせてもらつているのだ。人間は下品な奴だが、商売はうまい。あれを敵に廻すわけにはいかぬからな。今度は今までと比較にならぬほど大きな仕事なので、わしはほとんど全財産を賭けているでもクリスチーヌ、これが成功するとわしの財産は二倍になるのだよ」

「すこし話がうますぎますわ、お父さま」

辛うじてこれだけ言いました。父はさも愉快そうに、からから笑いました。

「もちろん、そんな旨い話はめつたにないし、あつても儂一人の力で出来やしないさ。ポールが半分、資金を出すことになつたから可能になつたんだ。だから、あの男の不愉快なところは見逃してやらなければいけないよ」

「えゝ、でも、あまり気を許さないほうがいいと思いますけど」

「それはまたどういうわけだね」

私は危うくすべてを打ち明けるところでした。が、思いとゞまりました。

「ときにお父さま。近い内にジョルジュを招待してやつて下さいません?そして、お父さまの口から、正式に話していたゞきたいの」

「結婚のことだね」

父は笑いながらうなずきました。そして、私の言葉を何ひとつ疑いもせず、部屋を出てゆきました。

ここまで書いて、私の胸は締めつけられる思いが致します。なぜなら、これが限りなく愛する父との最後の会話となつたのですから。この時以後、私は父の姿を見ることができず、温い慈愛にみちた声をきくこともありません。父は、私の事件が起きてから、身に余る不幸と心労のために亡くなつてしまつたのです。

しかし、父が生き永らえて、これから告白するような事実を知つたならば、死に勝る苦しみを味つたに相違あ

りません。父は私が奪われてから、あらゆる不幸な恐ろしい想像をめぐらして苦しんだでしょうが、私の体験したことはおそらくその想像を越えておりました。したがつて父の死は、不幸のなかの最大のものではなかつたと言えます。このことだけがせめてもの私の慰めです。おお神よ、わが父のために平安なる眠りをあたえたまえ。

勇気をおこしてさらにつづけましょう。

その夜のことでした。昼の興奮でながい間寝つかれませんでしたが、やがて疲れきつて眠つてしまいました。ふと眼がさめたのは何時だつたかおぼえていませんが、真夜中はとつくに過ぎていたと思います。私は異様な気配をかんじて眼を開きました。すると、黒い布で顔半分かくした男が三人、寝台のまわりに立つているではありませんか。私はしばらくの間、それが夢か現実か区別がつきませんでしたが、まるで私の眼を開くのを待つてでもいるかのように、じつと私を見おろしていたからです。あとになつて分つたのですが、私は彼らが行動に移ろうとしたときに、偶然眼をさましたのだそうです。

私は我にかえりました。てつきり強盗が忍びこんだと思つたとたんに、全身の血が凍らんばかりでした。父と召使は階下に寝ており、二階は私の寝室と居間ですから、よほどの声を立てねば届くはずもありません、だが、私が恐怖のあまり、かすかに身慄いした気配を知つて、その中の一人がさツと近づくと、ぎらぎら光る短刀を眼のさきに突きつけました。

「動くことも、声を出すこともならんぞ」

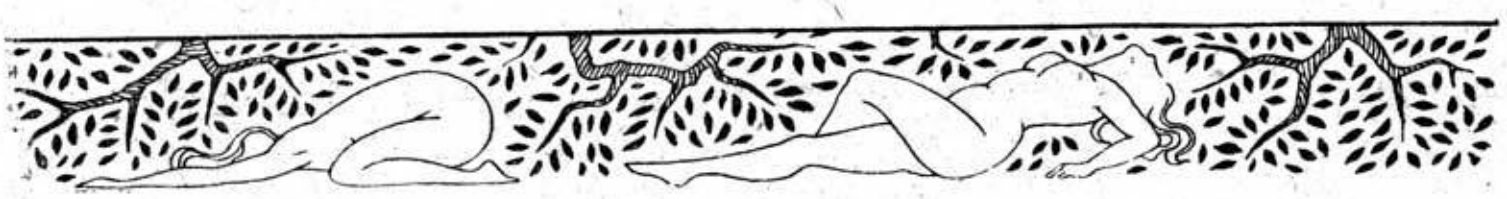
凄味のある低い声で言うと、他の二人に眼くばせしましたまもなく、私の右手はねじ上げられ、寝間着一つのいきなり一人の手が布団をめくりました。あツと思ういとまもなく、私の右手はねじ上げられ、寝間着一つの露わな姿のまま、うつ伏せに転がされました。やがて彼らは用意してきた細引で、私の手と足とを縛りはじめたのです。

「騒がないから、縛らないでください」

私は小声で必死になつてたのみました。事実、短刀をつきつけられている以上、抵抗するよりも盗難に会うほうが無事だ位のことはわかつていたからです。

だが、男たちは耳にもかけず、ひしひしと身動きできぬように縛り上げてから、こんどは汚ならしい布切れと細長い布を取り出し、私の耳元に顔を近づけて、笑いながらささやきました。

「俺たちが物盗りだと思つたのかい、可愛いいお嬢さん。強盗なら階下のおやじを叩き起してる筈だぜ。気の毒



だけど、俺たちはお前に用があるんだ……。さあ、おとなしく抱つこされるんだよ。いいところへ連れていつてやるからな」

「ああッ、助けて！」

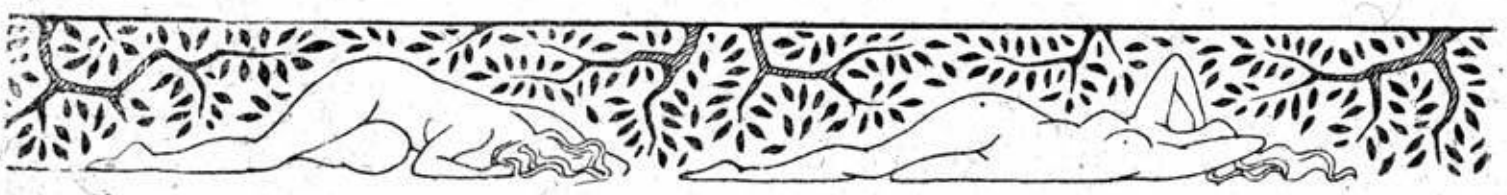
私は夢中で叫ぼうとしたが、その時はおそかつたのです。矢庭に首をかかえられ、汚ない布切れを口いつぱいに詰めこまれ、その上からギッチリと猿轡をかけられました。生れてはじめての経験でした。私は口に布を詰められただけで嘔吐しそうになり、猿轡をされるといまにも息がつまりそうで、思わず四肢をくねらせ、虫のようにもがきました。

短刀をつきつけた男はしばらく冷然とその様子を見ていましたが、やおら背後にまわると私の素足を持ち上げました。それを合図に、他の二人は首と背中に手を廻して抱き上げました。

私はもう、狂気のようにもがきましたが、もはやどうにもならないのです。中でも背中に両手を廻している男は、私が声も立てられずあまり悶えているのが面白かつたのでしよう。乱れた寝衣が垂れて彼の肩にかかると、「ほらよ」と直すふりをしながら、私の股にそれをはさみ、手をその間に下からさしこんだりしました。それでも私は避けることができず、わずかにうめき声を洩らしただけなのです。

彼らは足音を忍ばせて、階段を下り、父の部屋に通ずる廊下を横切り、客間をぬけ、台所に入りました。みると、裏口の戸が開け放たれているのです。

いよいよ誘拐されるのだ！私は、こうしてわが家から運び出される恐怖に、いまいちど最後の力をふりしぼつて死物狂いの抵抗を試みました。私は全身を波打たせて、心で叫びました。——お父さま、早く眼を覚まして下さい。私はどこか知らぬところへ連れてゆかれようとしているのです。——だがその叫びは猿轡のためむざんに砕かれて声にならず、裾も乱れて露わなまま中空にもがく手足はかたく縛られて自由がきかず、一歩一歩とゆつくり戸口を離れてゆきます。奇蹟は起りませんでした。暗い夜空に非情の星がいつぱい輝いていました。軒下に一台の馬車が停まつており、私たちの姿をみると、音もなくドアがあきました。そこにも一人の男が腰をかけていたのです。灯火が消してあるので、それが誰であるかもわかりませんでした。こうして私は馬車のなかに押しこまれ、誰れにも気づかれずに運び去られたのです。



四

馬車に投げ込まれてからの私は、二三度はげしくもがいたことを覚えています。それからあとは記憶がありません。私は恐怖で失神してしまつたのです。ですから、どれだけの時間がたつたのか、どんな道筋を通つたのか一切が記憶にありません。気がついたときは、みしらぬ部屋の床の上に転がされておりました。

再び我にかえつたとき、私はじぶんのおかれているみじめな状態に気がついたのです。私はいぜんとして手足を縛られたままでしたが、猿轡だけは外されていました。頭を上げてあたりを見廻すと、どうやら窓のあるらしいカーテンで掩われた一方をのぞけば、あとは全部裸の壁で、片隅にドアがあります。さらにその壁に沿つてベッド、それと直角の位置にソファがあり、数歩はなれてテーブルと椅子が三脚ありました。私はその椅子の傍に投げ出されているのです。

手首はほとんど感覚を失つていましたが私は必死になつて身動きしました。事情の分らぬまま、ただおそろしい危険が迫つていることだけが感じられたからです。そのとき、ドアがあいて、一人の男が入つてきました。私はあッと叫び声を上げました。紛うかたなきポール・クレルモンです。

彼は悠々と近づいてくると、すぐ眼の前の椅子に腰をおろし、

「意外に早くお目に掛れたね、クリスチーヌ」

と言いながら、からだを二つ折りにして、足元に横たわつている私を満足げにのぞきこみました

「少し手荒い目に会わせたが、そうしなければならなかつたんだよ。俺はあまり気の長い男じやないからね。お前が俺の求婚をしりぞけたとき、肚はきまつたんだ。だから、身から出た錆というわけさ」

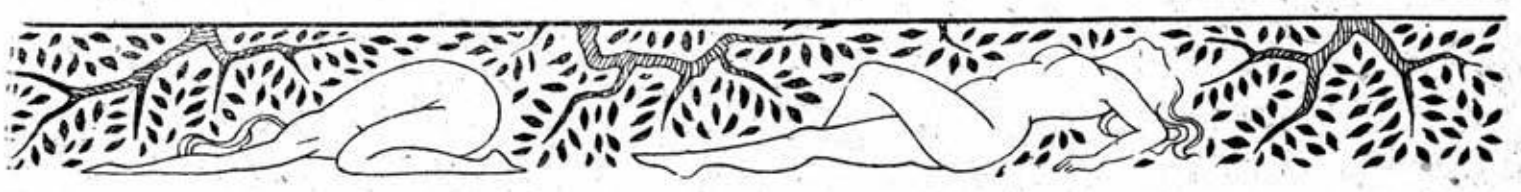
「卑怯もの！」

と私は全身の力をしぼつて叫びました。

「こんな大それたことをして、無事で済むと思つてるのね。今ごろ、家では大騒ぎしてるでしょう。そして、警察がきつとここへ踏みこんできて、あなたを逮捕するわ。そしたら私、何もかもぶちまけて、しやべつてしまうわ」

「そりや結構だ」とポールは笑いました。

「だが、警察は俺を疑う理由は少しも持つてないよ。おまえの父親だつてそうは思うまい。一緒に事業をはじめ



たボール・クレルモンともあろうものが、たつた一度しか会つたことのない共同出資者の娘をかどわかすとだれが思うものか。第一、ここは俺の邸じやない。だから俺の邸へ来たつて何も得られやしないさ。ここは、お前がどんな大声を出しても誰も助けに来つこない、絶対確実の隠れ場所なんだ」

「あなたは、人間の皮をかむつたけだものよ。一体、私をどうしようというんです」

口惜しさに身を震わせて、私は言いました。

「けだものという以上、それにふさわしいやり方をしてやるよ」

そう言うと、ボールは片脚を私の胸にのせました。私は悲鳴をあげました。次に、彼は右足で私のからだを半回転させ、尻からぐツとその足を入れました。

「可哀そうなクリスチーヌ。なにをされても抵抗などできやしないのだ。こうなれば抗うほど不利だということが分つたかね」

厭わしい男の足の下に身を横たえている私の気持は耐えがたく、しかもその男の言葉は鉄の恐怖で私を縛るのです。もはや争うことは無意味なばかりでなく、残忍な怒りを誘うばかりだと思うと、熱い涙で頬をぬらしながら私は奴隷のように哀願しました。

「ゆるして下さいボールさま。あなたの執心は分りました、でも、力づくでこんな目に会わせるのは、よもやあなたの本心ではないと信じます。とにかくこの紐をといて下さい。そしてゆつくり話して下さい」

「その返事は昨日聞くべきだつた。もうおそすぎる。私は思い切つた危険を冒してしまつたんだからね。それに今更お前に結婚してくれと願う必要もなくなつたよ。俺はどんなふうにでもお前を扱うことができるんだからね」

「しかし、どうせ私は逃げ出せないんです。せめて手足をほどいて……」

と尚も必死にたのむと、ボールは椅子から立ち上つてぞツとするような微笑をうかべました。

「いずれ、ほどいてやろう。が、最初はそのままのほうが始末がいいよ」

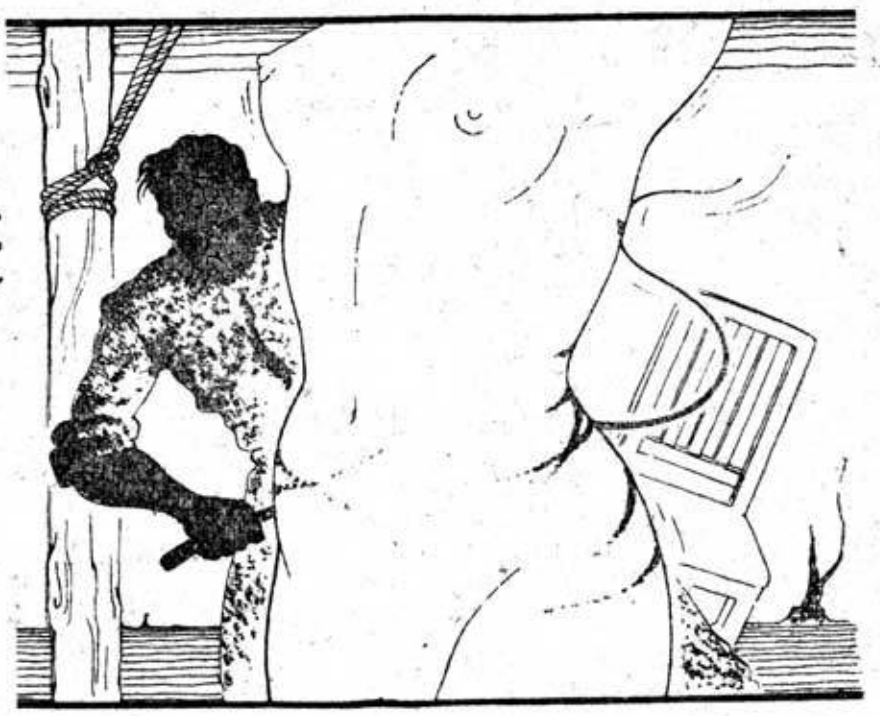
その言葉がなにを意味するかを知るにはほとんど時を要しませんでした。

× × ×

（未完）

虹の階段

泉辰之助



（一）

春浅い銀座の並木通りは、銀座会館、グランドパレス、ウルワシ等の大キヤバレーが豪華なネオンを久し振りに煌らめかしているが、クリスマス前後の賑やかさ、華やかさもなく寧ろほの白い街燈が柔かく夜気を通して、かえつて旅愁に似た様な哀感をそゝつていた。その間を名物の花売り娘たちが二人三人とたゝずんでいる。いつもならうるさい様に寄つて来る彼女達も心なしか淋しい。新橋駅へ向つて難波橋から河沿いに土橋の方へブラ〳〵歩いていた私達、私と友人の浅井と友野とは、いささか飲み疲れた気味であつたが、急にこのまゝ別れて了うのが惜しい様にも思えたし、又少しは液体の外のものも腹に入れたくなつたのでショーボートの角を駅とは反対の右にまがつた。あの辺は昼間の俤がどこにも見当らぬ位の静けさで、殆んどの人達は私達とは反対に新橋駅へとすれ違つて行く。その中を訳の分らぬ気焔を上げながら三人で肩を並べて何処という当てもなく数寄屋橋の方へ歩き出した時の事であつた。

突然、清井と友野の二人の間にレインコートを着た男が割り込んで来て、浅井と話を始めたのである。私は当然彼の友人だと思つて何んとも気にかけなかつた。

すると今度は私のそばへ近寄つて来たレインコートの男は、

「旦那、二十分のところです、お供さして下さい」という。私はそう云われて、その男を初めて見直したのである。普通ならまだ合オーバーを着たい季節だのに、一寸薄汚ないレインコートが先ずおかしい。すると勿論今の言葉から推して浅井や友野の友人でない事だけはのみ込めた。私はその男を暗がりの中ながら眺めた。

「自動車で二十分です、どうです？　夜中迄風呂のある家で、とても清潔です、そして旦那、女学生でもオフイスガールでも未亡人でもお好みのが来ますから」

ナアーンだ、いつもの手かと半分ガッカリして了つた。今でも浅草の雷門や松竹座前辺りを歩くと輪タク屋が寄つて来て同じ様な事

をさゝやくのである。

「すぐ此の先で飯を食うんだから今夜は駄目駄目」と、こんな男にかゝり合うのも馬鹿らしく、ドン〳〵私は急ぎ足になつた。

「マア聞いて下さい、私のは会員組織で毎月何回か面白いショウを見せるんですよ。そうしてから大いに各自の好みによつてエンジョイするという訳で、どうです」

面白いショうといつた処で、京浜間の外人専門のホテルで若い女二人による熱演を見た事もあるし、又ある処では本当に発剌たる男女の実技も味つたし、これ等と比べたらもの〳〵数ではあるまい。余程芸術的に秀れた手腕によつて演出されなくては見るもの〳〵方が助からない。まして比んな薄汚い男の言葉など決して真に受ける事はないのである。浅井と友野は一寸私を振返つて、私が困つている様子を察したのか「サア早く飯を食べよう」と急き立てゝ呉れたので、その男は暗い横丁へ消えて行つた。

「一体今のは何んだね」

「あれだろう、上野の広小路辺りをうろついている、」

「自動車で二十分と云つたが一寸遠いな、洲崎方面かな」などと、丁度五六軒行つた処に中華料理店があつたので、そこで料理の出来る前まずビールの杯を上げながら話し合つた。

そしてその男の事などすつかり忘れて一時間もたつぷりかゝつて食事を終えた。浅井と友野とは有楽町の方へ、私は新橋へと互いに「ヤー」と手を上げながら右と左に別れて行つたのであつた。

話はこれからである。私は相当酔つているので全く酔歩満跚としてチト薄寒い夜の街を歩き出した。すると十間も行つた時、暗がりから例の男が現れたのである、私はヒヤツとしたが、これは面倒だわいと思わずにはいられなかつた。

「旦那、お待ちしてましたよ、きつと出て来ますから」

「まるでお化け見たいだなあ、君の熱心さには感心するが、たとえ面白い目にあつても家へ帰つてから又ゴタ〳〵したら全く閉口するよ」

「私はこう云うものです、そしてホラ御覧なさい、立派な人達の名刺があるでしよう、みんな会員ですよ、入会金三千円、一回二千五百円ですが今夜は初めてゞテストという意味で入会金は入りません」

こんな話を交わし乍ら土橋近く迄来た。辺りには人影もまばらになつて了つて、国電も終電が出て了つたらしい。タクシーが傍へよつて来て酔漢どもを拾おうと懸命だ。

私はどうしてこの男を振り切ろうかと思案にあぐんだ。

「君、僕はね、普通じや面白くないんだ」

私は前にもこの手で逃げた事があつた。

「いくらいゝ女でも普通のやり方では駄目なんだよ」

「あゝそうでしたか」

「僕のはそう簡単なのではないんだ、女を裸にして色々のポーズをとらせて眺めてから、縛り上げてバンドか鞭でヒツパタクんだよ、本当だとも、女の中には却つてそうされて喜い、きつと出て来ますから」

「まるでお化け見たいだなあ、君の熱心さには感心するが、たとえ面白い目にあつても家へ帰つてから又ゴタ〳〵したら全く閉口するよ」

「私はこう云うものです、そしてホラ御覧なさい、立派な人達の名刺があるでしよう、みんな会員ですよ、入会金三千円、一回二千五百円ですが今夜は初めてゞテストという意味で入会金は入りません」

こんな話を交わし乍ら土橋近く迄来た。辺りには人影もまばらになつて了つて、国電も終電が出て了つたらしい。タクシーが傍へよつて来て酔漢どもを拾おうと懸命だ。

私はどうしてこの男を振り切ろうかと思案にあぐんだ。

「君、僕はね、普通じや面白くないんだ」

私は前にもこの手で逃げた事があつた。

「いくらいゝ女でも普通のやり方では駄目なんだよ」

「あゝそうでしたか」

「僕のはそう簡単なのではないんだ、女を裸にして色々のポーズをとらせて眺めてから、縛り上げてバンドか鞭でヒツパタクんだよ、本当だとも、女の中には却つてそうされて喜

ぶのもいるにはいるんだが……」

「旦那、少しハズんで呉れますか？　とつて置きのを提供します、嘘なんぞ決して云いません、実は私も旦那と同じ趣味でして」

私は一寸考えざるを得なくなつて来た、喜美子を見失つてからの郷愁に悩んで来たのだから。

「ほら上野の一つ先の駅、御存知でしよう、あの駅前のゴチヤ〳〵した中の一軒の飲み屋に旦那や私の趣味にピッタリする女がいるんです、一寸顔もいゝし色も白いし、第一体がとても素晴しいんです、さあ、乗りましよう」

といゝ乍ら、グン〳〵私の腕を捉らえ、片手で寄つて来たタクシーを止めて了つた。

(二)

自動車はたしかに上野の方向に暗黒の街を驀進している。この男の云う事に間違いがあろうが、あるまいがもう何うする事も出来ない。或は身ぐるみ剝がれて了うかも知れない岩本町から和泉橋を渡り昭和通りを車坂に出た。私は酔いのため幾分ボンヤリしている頭脳でも、これから一体どんな女が現われてくれるのかという期待がチラ〳〵と明滅する。

急に車がカーブしたかと思つたら、

「旦那、すぐ連れて来ますから」と、その男はソヽクサと下りて行つた。その間に自動車を何処か他へ廻して了う事も案外たやすい訳だつたのであるが、私はもうそんな気持はなくなつていた、却つて女を連れてその男が引返して来る時間が余りにも永くて仕方ない位であつた。

「すみません〳〵、大分お待たせして了つて」と云い乍ら女を先にして車に入つて来たので、丁度私とその男との間に女が腰を下ろした。車はまた走り出した。ルームランプがないのでどんな女かよく分らない。然し二十四、五か、それとも八、九位か、髪をアップにしているだけは分る。そして酒を相当飲んでいる様だ、体を車のゆれる度に私の方へもたせかけて来る。

二、三度横丁を廻つたかと思つたら車が止まつた。夜の事だから何処ら辺か一寸見当が付かない。男は私の後から押すようにして、女をうながしてその家に入つた。比較的玄関も立派だし夜目にも小綺麗に掃除が行届いている。勿論騒いでいる客もない。こんな家にしては想像外に廊下も巾広い。男は案内に出た女中には構わずドン〳〵奥まつた方へ私を連れて行つた。却つて会員組織でショウを見せるには恰好な処かも知れないという気もするが、概して古めかしい空気がたゞよつている。部屋は六畳ぐらいか、私はこの三十分あまりの時間に起つた変化を思い乍らチヤブ台に片肘をついたまゝだつた。女は飲み疲れといつた様子ですぐ傍にくず折れている。

「どうです」と男が女の方を頤で指差したので、私もその方へ自然と眼をやつたが、満更捨てたものでもない、却つてある方法では大いに楽しめるタイプの肉の締つた体である。そこへ又酒とビールが来た。もう飲みたくもない、然しその男だけがうまそうに幾らでも飲む。……どの位時間がたつたろう。

「旦那、支度が出来ました」と男にゆり起された。私が眼を開けて見るともう女は傍にいない。「準備完了です」と云いたげに男はニヤリと笑つた。私は云われるまゝ男について今一つ廊下を廻つた処から階段を下りた。風呂にでも連れて行くのかと思つたらそうでもない。下はタヽキの様になつていて余り明るくもない薄暗い電灯がついている、私はやつと階段を下りきつて男の後からついて行つた。

「一寸待つて」と男は私を止めて、壁のスイッチを押す。暫く瞬いてパッと華やかに螢光灯がついた。いや華やかに感じられたのかも知れない、男は又ニヤリとした。

私は顔を上げて思わずドキリとした。天井から下つている細引にさつきの女が両手を別々に高くくゝり上げられていて、腰に白い布を少し巻きつけたまゝの裸体で吊り下げられているではないか。女はガックり首をうなだれている。

男は「どうです」と云わぬばかりで女に近づくと、女の髪をグッと片手でつかんで上に引上げた。私はその時の羞恥を含んだ女の顔を忘れる事が出来ない。女はかろうじて爪先で立つているといつた恰好だ、男はそこにある鞭をとるとピシリと女の腰から尻に打ち下ろした、女はピクッと体を縮める様にした、又ピシリと鞭が鳴つた。丸い双つの乳房が張り切つていて両の腋の下の黒い影が却つてこの場合異様な艶色を一層かき立てる。男は再び鞭を背中に浴びせた。女はウ、と云うばかりで声を上げない。よく見ると口の中にハンケチの様なものが入れられているらしい。ピシリ〳〵と次第に激しく打ちのめされるにつれ、少しでも逃れようとする本能からか裸身を左右にくねらせるが到底そんな事ではどうする事も出来ない。男は女の腰に巻いていた布迄も無惨にむしり取つて了つた。……

私はその瞬間ハッとした、そして眼をみはらざるを得なかつた。が、部屋は元の部屋で女が傍にいるきりさつきの男の姿がない。

「どうしたの、もつと飲みましようよ」

「君、さつきから此処にいたのかい?」

「えゝそうよ、貴方こそどうかしてる、フ、」

女は私に無理に杯を持たせて酌をした。

「随分酔つているのね、妾も酔つているけれど」と言い乍らも女はなおも飲んでいた。

「おい、大分元気が出たな」

「出たわよ、これから面白い事するんですもの」

「面白い事つて?、知つているくせに……」

「それが分らないんだよ」

「うんと酔わなきや教えて上げない、酔わせてくれりや何したつて構わないわ」

「何してもいゝのか?」

「えゝ、いゝわよ。妾を打とうが、縛ろうがどんなに虐めたつて構わないわ」

女はそう言うと身体をくねらして媚態を示すのだつた。

私は急に親近感が湧いて来て女をグッと引よせた。

「妾にもお酌して」そして私達二人は又盃のやりとりから一つの盃を二人で飲む様になつた。

「お風呂があるのか」

「あるわ、二人で入りましよう、それからの方がいゝわ」

女は酔つていながら案外シッカりした足取りで出て行つた。暫く待つていたが帰つて来ない、私も廊下に出て見たが皆目見当が付かぬ。何処か何処かとフラ〳〵し乍ら廊下を行くと左手の方へ曲つたつき当りにドアがある私は何の気もなしにヒョイとその把手を握つて引くと、内からサッと灯が流れ出て、朦朧たる湯気の中に今下着まで落して了つた女の若々しい姿態が、床に落ちたタオルを取ろうとして立つたまゝかゞんだ処である。豊かな尻の丸味が此方を向いて、何んとも形容の出来ない立派な自然の芸術を惜しげもなく描いている。私はグッと生つばをのんだ。こんなにもよき天使を恵まれたのか、腰と大腿が見事に発達して、足先は割にスンナりしてい

る。肩から胸、しかも伸び切つた背面の美くしさ、私は暫し茫然となつて了つた。

(三)

女は裸に浴衣を纏つただけの姿で私と肩をか〻い合い乍ら元の部屋の前迄帰つて来た。

「貴方先へ行つていて」と二階を指差した。

「だつて階下ではまずいのよ」ニッと微笑した。広くもない裏階段を上つた処に洋室がある。これでも洋室であるといつた程度のものだ。成程こ〻なら少しぐらい鞭の音も女の呻き声も洩れる心配はない、二人にとつては絶対の天国となる処である。

間もなく女は音もなく扉を開けてすべり込んで来た。

「貴方、遠慮深いのね、本当に今夜は虐めてよ」と女はクス〳〵と忍び笑いをした。

「ヨウし、君がそう云うならもう勘弁しないぞ」

私はズボンから急いで革バンドをはずすと「うつ伏せになるんだ」と怒鳴り、女の肉が盛り上つた様な尻に向つて第一打を浴びせた。次いで背へ肩へ、見る〳〵白い肌に薄赤い幾条もの斑が走つて肌を淡紅色に次第に染めて行く。女はうめき声一つ立てないばかりか、裸身を伸ばし切つたまゝピクリともしない。もつと〳〵強く打つてと云つている様だ。今度は次第に背から腰、尻、腿と下へ下へと鞭を振るつて行つて遂に足の裏迄達した。すると女は何と思つたか矢庭に髪のピンを全部抜き取つて了つた。

私は伸した女の両腕をネじ上げて腰紐で縛り、ぐるりと仰向けにした。今に泣き声を上げさせてやるからと、続けさまに乳房へ鞭を当てた、流石に痛いのか女は急所を避けようとして体をくねらせ始めた。

「サア、起きるんだ」と女の髪を無造作につかんで引き起すと、ベットから引ずり下ろして背部がくり抜いてある折り畳み式椅子に、腰掛ける時とは反対に向つて立たせると、背中の当る処に女の首を俯伏せに突つ込ませ、両足は椅子の脚にがつちりと縛りつけた。この姿勢は男性にとつて女性を悦虐するにふさわしい最上のポーズである。腰掛けた場合の掛ける処に双つの乳房が当り、十二分に真白い丸きドームを鑑賞する事が出来るのだ。然もそこへは此れから最も残虐な鞭が用捨なく飛ぶのである。そして両手はシッカりと体にくい入る程きつく縛り上げられている。恐らく女も女らしい愉悦にひたり切つた事であろう。私にはもう他に何ものもない、眼の前に高く捧げられた犠牲のドームと鞭の音とがあるばかりであつた。……

(四)

虹の階段の頂点を登りつめると、私は女にさつきの客引きの男の事を尋ねてみた。

「さつきの男つて？」

女は一寸顔を心持ち伏せていたが

「あの人妾の主人よ」

「えッ、君の主人？」

「あの人からこんな事教えられて、今じや却つて妾の方がこの悦びが忘れられないの」

恐らくこの女がこ〻迄来て了つたのには興味深い数々の挿話があるに違いない。私は静かに女の口からマゾヒストに仕上げられる迄の話が聞きたい。私はやおらピースをもとり上げた。

（此の項終り）

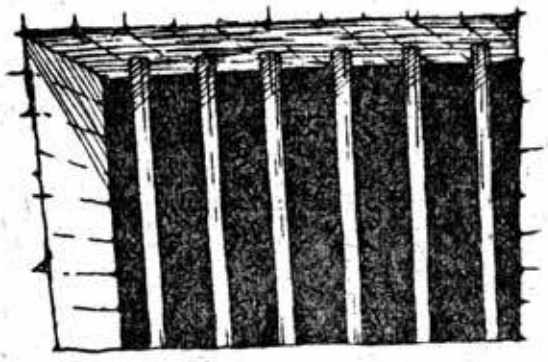
次号予告

怪奇時代小説

片耳傳奇

窪村弘

出獄



獄牧一

四月号に窄衣を着せられて水責めにされた事を書きましたがその後の事を書いて見ようと思います。

私が投獄されてから三ヶ月目に接見に来られた先生から（接見とは面会の事です。）〃学校と父兄の奔走の結果、どうやらやつと近い内に釈放されるだろうが君が此処へ入れられたのは学校当局の重大な責任であるから何も心配せずに学校へ帰つて来い〃と云う話を聞きました

此の話を聞けば全く飛び上る程嬉しい筈であるのに、嬉しいのは嬉しかつたのですが、その半面先程芽生えたマゾヒズムの為でしょう、これからは、捕縄の味を充分にたのしむことが出来ないという失望の心と四分六分でした。その接見の日から三日目に院長より呼ばれました勿論、監房を一歩でも出るときは縛られる規定ですからまして院長の前へ行くのですから、後手に厳重に、二の腕に縄がめり込む程縛られ引立てられて行きました。院長の部屋へ入る直前に両足に足枷をかけられました。そして長いお説教の後、〃二四号を釈放する〃と申渡されましたので直ぐ捕縄も解いて呉れるのかと思いましたのにそうではなく、少年審判所まで送り返してそこで父兄に引渡すとのことでした。やがて院長の部屋を出ると押し送りされる準備にかゝりました。

先ず捕縄を解かれ全裸体にされて風呂へ入れられました。風呂から出ますと今迄着ていた衣類は全部取り上げられ別のを呉れました今迄は柿色だつたのですが今度はエンジの物でした。つまり押送用衣類を着せられるわけです。〃娑婆〃に出るのだからこれをしろと云われ、水泳の時穿くようなサポーターを締めるように云われました。これもやはり赤色でした。そして裸のまゝ腰縄をつけられ風呂場で今まで着ていた物を全部洗わされ、そして物干場まで腰縄のまゝ連れて行かれ、物干竿に干させられました。全部終つて眺めますとP24と云う文字が非常に懐かしく感ぜられました。投獄されてから今迄の事を、あれを思いこれを思つて、しばらく佇ずんでいますと〃行こう〃と、捕縄を引かれ元の場所迄行きました。

釈放と云つても少年審判所ではつきり申し渡しを受け囚衣を脱ぎ父兄に引渡される迄は囚人ですから捕縄をかけられても仕方がないと諦らめてされるまゝになつていました。やがて今一度サポーターを締めるよう云われ、エンジ色の短いパンツと同じくエンジ色の胸

を締めつけるようなきつちりとしたランニングシャツを着せられました処、胸にも背にも今度は番号も何もありません。そして一部屋へ連れて行かれ、次の看守に引渡されましたがこゝに居たのが運悪く、前に述べました〃窄衣〃の時の看守です。普通は少年審判所へ送られるにしても、釈放ですから申しわけ的に腰縄位ですませるのですが、私の場合は、

「24号、貴様出るのか、いろ〳〵運動したんだろう、よし最後の恥をかゝせてやろう、貴様はまだ囚人だ。」

と云つて先ずきびしく後手に縛り、そして首に吊り、二の腕、そして胸、又二の腕と厳重に縛られました。何時も縛られて居るのでさほど良い感じはしませんでした。心の中では〃なんだ恥をかゝせると云つたが大した事はない〃と思つていました。

やがて午後一時頃出発を命ぜられ、例の看守に縄尻をとられ、素足に藁草履を履かされ深編笠をすつぽりとかぶせられ獄門を出たわけです。出て駅へ向う途中、出発して十分もたゝぬ間に例の看守が顔を隠している深編笠を取つてぽんと溝の中へ棄てゝしまつたのです。一瞬びつくりしましたが縛られている身でどうしようもありません。この時始めてさつき看守の云つた言葉の意味がわかりましたつまり縛られたまゝ晒されるのです。そしてたじろぐ私に後から強く〃24号歩け〃と、どなりました。そうでなくても赤いパンツを穿き赤いランニングシャツを着た若い男が高手小手に縛られて縄尻をとられて歩くのは目立ちます。その上、24号等と殊更に云われたので通行人の目が一せいに私の顔が注がれたのを見てそれこそ消え入りたいような恥かしさで、どうか編笠をかぶせて下さいと、不自由な体で土下座して頼んだのですが結局は蹴跳ばされ、ひきずられて歩かされました。

そして駅まで来て待合室のベンチに腰かけさせ、未だ時間があるからと云つてベンチに腰かけたまゝ動かれぬように縛られてしまいました。後手で首と二の腕に縄が懸つているので下を向くと首が締まり非常に苦しいので自然に真直ぐ向かなければなりません。待合室の人々が人垣をつくつて見物します。看守は切符を買うと云つて窓口へ行つてしまいました。完全に晒し物です。人々がひそ〳〵と云うことを聞かないで物を盗むとあんなようになりますよ〃と云い聞かされています。もう恥かしくて顔から火が出るようです。それにしても私の住所はその駅から三時間もかゝる位離れているので、顔を知つた人もないのがせめてものなぐさみでした。

やがて汽車に乗せられましたがやはり晒し物でした。しかし先程よりはましだと思つていました。所がいよ〳〵少年審判所のある所まであと三十分という時、どやどやと乗込んで来た中等学校の生徒の一団がありました。当時の勤労奉仕の帰りの生徒です。ところが何とそれは私の属している学校の生徒ではありませんか、その時の私の驚きと恥かしさといつたら、もう何ともかとも表現のしようがありません。何とも我慢が出来ないので、看守に、〃あの生徒は私の居る学校の生徒ですからどうか顔だけでも隠さして下さいと頼みますと、〃馬鹿野郎、24号、貴様が悪い事をするからこんな事になるんだ。よく顔を見てもらえ〃と又途方もない大きい声でどなりました。車内の目が一斉に私に注がれました。

あゝとう〳〵あさましい姿を同級の者に見付かつてしまつたのです。向うでも驚いたらしくやがてかたまつてひそ〳〵話しています

始めはあまりにもやつれたあさましい私の姿に気がつかなかつたのでしよう。中に勇敢なのが居て咄嗟に便所へ行くふりをして私の側を通ると小さい声で〃嶽〃と呼んで行き過ぎました。私は観念して〃うん〃と答えますとたんに看守に〃24号、貴様社会人と話す気か、もう一度牢屋へぶちこんでやろうか〃とどなつてびんたをとられました。

あまりの事に同級の者は蒼くなつてとんで逃げてしまい遠くからかたまつて見ています。あゝ遂にこのあさましい姿をクラスメートに晒されたのです。口惜しくて涙がとめどなく流れます。すると看守は〃捕縄がゆるんでいる。立て！〃と云つて衆人環視の中で今一度縛り直されました。

もう締めるだけ締められて恥かしさのあまり何ともいえぬ気持です。処がその気持がとても快く、首に喰い込んでいる捕縄と両の二の腕に喰い込んでそれから下は色も変つているその捕縄が、又両太腿、腰を縛られている捕縄が何とも云えぬよい気持で思わず、うんと体中に力を入れて力みました。赤いシャツに赤いパンツ、そして体中縛られ、衆人環視の中へ立たされ、多くの人から穴のあく程眺められるのは今迄とは全く違つた快感でした。

処が私の様子に気のついた看守がおこつたのなんの、その場でふんだり蹴つたりの目に遭わされました。そしてそのまゝ、とう〳〵素顔で少年審判所まで送られてしまいました。やつと釈放の申し渡しを受けたのですが引取人が来ません。処が例の看守が〃もうその着物はお前に着せとくわけにはゆかん〃と云つて素裸にし釈放の申し渡しを受けているのに腰縄をかけ、パンツもシャツもサポーターも洗わされ、暑いのに火鉢で乾かし、きちんとたゝまされました。これで看守の役目は終つた筈です。やつと今度は捕縄を解いて呉れたと思つたのも束の間、何時の間にか藁縄を用意していて今度は藁縄で全裸体のまゝ縛られ引渡室へ連れて行かれました。

やがて先生が来ましたが私の姿を見ると驚いたのなんの、直ぐ町へ出てとりあえず白のランニングシャツとパンツを買つて来て引渡しを要求されたのです。そこで藁縄で荷物のように縛られたまゝ引渡されました。そしてやつと縛しめを解いて貰い白のシャツを着た訳です。よく見ると引渡室には鏡がありました。やつと自由になつた体で手足をうんと伸ばして歩いて見ました。そして鏡を見た私の体は、縛られ通しだつた二の腕及び首、手首には、はつきりと捕縄の痕が見え、おまけに陽に照らされた事等で他の所は黒く焼けているのに捕縄で縛られていた処だけが色が違うのでよけいにはつきりします。全くぶさいくな事甚だしいのです。

やがて父も来て、付き添われて家へ帰りました。そして一月余りは心に受けた痛手と身体を休養させる為休まされたのですが今一つは噂のうすくなるのを待つと云う事もあつた

のでしよう。その間はただ泥のように寝てばかり居ました。一月もするとやつと正常になりましたがやはり繩の痕はついていました。

いよ〳〵晴れて登校したのですがみんな私を変な目で見ているようであまり口をきゝませんでした。受持の先生が始めからのいきさつを話され〝獄は決して法にふれるような事をしていないがただ手違いであのような破目になつたのだからみんなで同情してよくいたわつてやるように〟とのお話でそれからは皆がとてもよくしてくれました。そして努めて明るくなるようにしてくれました。しかし体操の時や水泳の時は体の捕繩の痕をみんなでじろ〳〵見ていたようです。又兎に角、ランニングシヤツとパンツを着ると興奮を感ずるのには困りましたがこの点についても誰もが変に思つていたようです。

一カ月程は何ともなく非常に楽しく、暗い思い出なんか忘れたようでした。処が復校してから一カ月半もした頃でした。例の汽車の中の事を思い出したのか誰云うとなく〝獄のやつ赤いシヤツを着せると興奮するそうな〟と云う噂がたちました。しかしすつかり朗かになつていた私は別に気にも止めず遅れた所を取り返す為、一生懸命に勉強に励んでいました。

或る日のこと放課後Tという生徒が〝一寸来て呉れ〟と云つて体操用具の倉庫へ連れて行かれました。このTという生徒は同級生のM検等をやるグループの大将でサデイズム性の生徒でしたが私は何という事もなくついて行きますと、Tの一味が居ます。何の話かと聞くと裸になれと云います。嫌だと云うと同時に四方から押さえられ、シヤツは取られ、パンツだけにさせられました。何しろ暑い所ですから学校でも上衣なしで済ませる日が多く自然、すぐ裸に出来る服装ですから簡単にやられたわけです。処がTが云うには

「M検するのは待て、平素皆が云つている事が本当かどうか試してみようじやないか」

と云い出したのです。

体操用具の倉庫ですから色々の道具があります。何処をどう捜したのか陸上部の体格の小さい者の着るエンジといつても幾度も洗濯して色のさめた赤いランニングシヤツを持つて来て無理に着せられたのですが体に喰い込むように小さいのです。始めは何とか抵抗しましたが相手は大勢、と云うよりむしろ何時の間にか進んで後手に縛られて居ました。すうちに蘇つて来るではありませんか。その頃、私は今迄のマゾヒズムとは別に衆人の前で快感を味わう露出症的なものに変化していたのです。Tのグループはびつくりしていましたがそれからは毎日のように連れ込んでいろ〳〵に縛つて喜ぶようになり、私も進んでTと附き合うようになりました。

体操用具の倉庫はそんな事をするのにもつて来いの場所でした。マットの上で両手両足を縛られたり、百たゝきに合つたり、平均台で尻打をされたり、色々の事を行いました。しかしだん〳〵とその噂が拡がりましたのでTと相談しTの家の地下室で行うようになりました。Tは私と無二の親友?となり、色々監獄の話をしてくれとせがみますので私も得意になつて受けた拷問の数々を話してやりました。そんな時はお互に全くの興奮状態に入ります。

Tと私は話合つて次の事を約束しました。学校では一切遊戯に就いては話さぬ事。しかし地下室へ入つて赤いシヤツとパンツを着ている間は私はTの囚人であり奴隷である事。というのでした。そしてそんな遊戯を始めてから私の成績はどん〳〵落ちました。一年位たつた時、私のよき相手であつたTが、突然

コレラで死亡してしまつたのでした。

当然私は大きなショックを受けました。この時は全く泣けて〳〵しようがありませんでした。今も読者諸兄の中にTのような人物が居られたらおつき合いさして頂くのにと何時も〳〵思つています。私の好みは四月号で申しましたようにサポーターをぎゆつと締め肌に喰い入るような赤いランニングシヤツを着せられ、狭い目の赤いパンツを穿かされ、首二の腕、小手と、大腿と、捕縄術にあるようにきちんと、体格のよい男性に縛つて貰い種々拷問を受ける事です（ただでたらめに縛られるのは好みません）

但し私は猿轡とか、足を舐めさせられる事や糞尿を食わされるのはお断りです。私は身長一七〇糎、胸囲八六糎、体重六〇瓩あります。どうか私と同傾向の方のお便りをお待ち致します。

次回はTとの交際中楽しかつた思い出を述べさせていただきたいと思います。（終）

◎縛られた女の寫眞集分讓◎

大好評！全部未発表の素晴しい特写成る

女体緊縛美の寫眞

光沢面　印画紙　焼付　五枚一組（一集分）

二百円（送共）

第六篇（五十一集より六十集まで）　十集分
第七篇（六十一集より七十集まで）　十集分
第八篇（七十一集より八十集まで）　十集分

◎各組とも一集分は五枚一組です。

こゝに掲げました分は何れも直接分讓用として特別に撮映しましたもので印刷ではなく印画紙に焼付けた写真で、読者の要望によつて多くはヌードの縛られた女の各種姿態でありますが、長襦絆や洋服或はストツキング、腰巻等を纏つた分も含んで居ります。KK通信第8号には以上三篇三十集分の各姿態を発表してあります。

従つて此の三篇の中にはあらゆる〃縛り女〃の姿態が包含されて皆様同好者の御申込みをお待ち致して居ります。

◆**吊り三態特選集**　キヤビネ版三枚一組　五百円

（第一組、第二組、第三組完成）

トリツクでない本当の吊し責めの姿態の中最も興味のあるとつて置きの特選集です。これは総て未発表のもので勿論前記の女体緊縛美の写真と重複することはありません。

◉**襲われる女**　シリーズ　十二態集　五百円送共

此れは暴漢に襲われる美少女の恐怖の姿態を縄をアクセサリーに使用して極度の緊迫感を誇張した珍しい得難い作品です。

△**鎖を纏つた裸女**　第一組　第二組（各五枚一組）　二百円

豊満な白磁のような女体の肌に喰い込むくさりの醸し出す微妙なコントラスト

大阪府堺局区内菅原通

曙書房　代理部

振替大阪第34956番

拷問と倒錯の根源探求

翁　要　吉

体験のある私には身に泌みてわかるのだが、女友達の横顔は恐怖を越えて、女の持つ本能的な嗜虐性の昂奮をありありと浮べていた。こんな経験は前にもあつた。イタリー映画「無防備都市」で、ナチス特務将校に捕えられたバドリオ党のイタリー将校が拷問で殺される凄惨な場面のときであつた。上半身を裸にされ、がんじがらめに椅子に縛りつけられた犠牲者は、皮の鞭で打ち据えられるのであつた。皮膚が破れて淋漓たる鮮血に塗れる断末魔の表情と呻き声には、私もぐつと心臓を冷たい手で摑まれるような戦慄を感じたが、連れの女友達は恐怖に打ちのめされながら、やつぱり銀幕から一瞬も眼を離さなかつた。「真空地帯」を一緒に見に行つたのは二十一才の女子大学生、「無防備都市」に誘つたのは三十三才の未亡人であつた。年代の異なるアプレとアバンの女性が、男の拷問の姿態から、恐怖や戦慄以上にもつと深い根強いサジズムの満足を感じるらしいことに、私は強い興味をおぼえた。そういえば、私のなじみの芦屋マダムや夙川令嬢の中にはボクシングのファンが相当に多いのである。猛烈なストレートパンチが顔に爆発して、ボクサーが吹き出す鼻血で血だるまになるとき、彼女達はたまらないほど強烈な甘美な刺戟を満喫するという。

私はサジズムやマゾヒズム等の倒錯傾向を全く持たないつもりである。自分では極めて健康な常態だと信じているが、日頃虫も殺せないような淑やかで慎ましい彼女達の胸の底にも、やはりそうした倒錯本能が潜在することを実検して以来、私自身にもあるいはそういう素質があるのではないか、と疑い出たし

・1・女性の嗜虐性

先だつて映画「真空地帯」をS座へ見に行つた時の事である。ヒロイン木谷一等兵が将校の金を盗んだ無実の嫌疑で、憲兵分隊に引つぱられ、吊し責めの拷問を食う凄惨な場面があつた。両手首を縛つて天井の梁から吊下げられ、冷酷な憲兵下士官から竹刀で殴られる。その苦痛に歪み、べつとり脂汗の吹き出す木谷の髭づらが大写しになる度に、

「残酷だわ、ねえ、もう出ましようよ、我慢してると私気絶するかも知れない」

同伴した女友達は夢中になつて私の腕をゆすぶるのであつた。だが声はふるえながら、銀幕の拷問を彼女は食い入るような眼で見ていた。木谷の逞ましい体が竹刀の乱打を受けてうねり、歪み、波打つそれは、軍隊生活に

のである。とすれば、私の持つ傾向は一体サドとマゾのどちらが濃厚なのだろうか。ナルシズムとか、ソドミーの傾向は全く私にはない。考えると、私はずいぶん異性の友達が多い。少年時代、青年時代、そして結婚して立派に子供を持つ中年時代の現在でも不思議に女性との交渉が途絶えたことがない。容貌はまずいし、才能はなく、財産もないのに、女友達に不自由しない。自分でもどうしてだかわからない。たゞ少年時代から私が強く惹きつけられる女性は、線のきつぱりした秀でた容貌と、勝気で積極的な気性の人が多く、年令も大体同じか二つ三つ年長である。そんな関係に入るきつかけでも、たいていの場合相手の方が能動的で、こちらが受動的であるし、その体位もほとんど女上位になりがちだ。

いろいろな角度から観察して、私は確かに被征服を喜ぶ男性マゾ的性格を持っているようである。この性格が、女性サド性格をもつ相手を惹きつけるのかも知れない。だが、実は、弱々しそうでも、私は、柔道の有段者なのである。大した自慢にもならぬから、誰にも洩らしたことはない。喧嘩の起りれうな空気になれば間髪を容れず逃げてしまう。危険な場所にもなるべく近よらない。けれども、万一逃げても追いつめられ、どうにも仕方のない場合には、嫌だが腕に物を言わせる。二三人の不良相手にしてもまず負けたことはない。私の十八番は立業の一本背負いであるが白帯からはじまつて、茶、紫、最後に段位の黒帯になるまで、いろいろな試合にも出て、寝業の押さえ込み、絞め、巴投げの猛者にもずいぶんぶつつかつた。柔道は力業でなくあくまで技の勝敗である。攻める立業の好きな私は、守る寝業はきらいでもあり不得手でもある。押さえこまれて、巴投げをきかす前によく絞め手で参つたことがある。寝業の妙手にかゝつて絞められると、あつと思う間に落ちて失神してしまうが、上手な技で絞められることは決して苦痛でなく、むしろたまらない快感を伴なうのが常である。私が柔道を習つたのは中学二年生、段位をもらつたのは専門校の卒業前であつたが絞められる快感を知つてからは、下級生に稽古をつけるときに、よく相手に技を教えて、わざと絞めさせたものである。十四五―十六七才の頃は、少年期から青年期へ移り変る時期である皮膚が輝くほど美しくて筋肉も柔かい。そういう年頃の下級生に絞めさせると、まるで若い女性に絞められるような妖美陶酔感を満喫することができる。むろん落されて（失神）そのまゝ時間が経てば死んでしまうから、師範の先生に活を入れてもらうのである。

こうした陶酔感を味わつた私は、いつか一番愛している恋人か女友達に、柔道の絞めの技を懇切に教えて、寝床の中で絞めてもらうことを望んでいる。そしてまた今までの試合や稽古で体験したことだが絞られて失神する直前には不思議な恍惚感があるものである。

私はいつかぜひこれを試してみたい。しかし、これに伴なう危険は、うつかりすれば絞められたまゝ死ぬかも知れないことである。いや、現に、阿部お定の情人であつた吉蔵の死は、私の勇敢に考えていることを実行したための失敗だつたのである。あの場合、男性マゾの吉蔵は柔かい絹紐か何かを女性サドの愛人お定に手渡して絞めさせたわけである。あるいはこれが二人の間で常習の性技巧だつたのであろう。愛の陶酔を満喫するための「絞め」の遊戯で誤つて死んだ吉蔵は実に満足であつたろう、お定としても全く最初から殺意がなかつた。だから事後に起きた例の切り取り事件なども世間が好奇の眼を見張るほど大したことでもなく、単なる副次的な出来

事に過ぎなかつたのである。

嘱託殺人でもなく自殺ほう助でもない愛のたわむれの誤りに対して、懲役十年の判決申し渡しなど、いくらけわしい軍国時代だつたとはいえ、あまりに過酷であつたと私はお定に心から同情している。この事件等は男性マゾと女性サドの好例であつて、偶然吉蔵が失神したまゝ蘇生しなかつたのである。犯罪の意志も条件も伴つていない。お定にどうして法律上の責任を問われねばならぬ理由があつたのだろうか、またたとえファロスの切り取り行為が伴つても、それは「愛すればこそ」の過剰行為である。お定は倒錯どころか、実に健康で実に正常な女性であつた。強いて云えば法律では例の「死体損傷」とかいう条項にあてはまるのだろうが、今ならどう考えても執行猶予の申渡しが当然である。

・2・手を焼かせた女囚拷問

前記「真空地帯」の吊し責め、「無防備都市」の鞭打ちは、どちらも現代の拷問であるが、幕府時代に公許された拷問には、その他石抱きと海老責めがあつたことは、本誌でもすでに紹介されている。切支丹取調の場合にはその他に水責め、火責め、水牢、木馬等が用いられたらしいが、それらは特殊な場合に限られ、一般囚人に対して使用された実例は残つていない。また、やむを得ず拷問を行う場合でも、いろいろな規定や条件があつて、奉行の随意にやれたのではなかつた。日本映画や大衆小説の場合、筋の運びを面白くして観客や読者を喜ばせるために、よく拷問を取り入れているが、ひそかに行う私刑の場合は別として、天下の白洲の上では法定の拷問は鞭打ち、石抱き、海老責め、吊し責めの四種に限定されていたのである。どういう容疑者がどういう場合に拷問に処せられるか、ということもちやんと定まつている、すなわち殺人、放火、盗賊、関所破り、謀書謀判の五つの重罪犯人が、確実な物的証拠が揃つていても自白せず、あるいは共犯の一味徒党が悉く自白しているのに一人だけ口を割らないという場合、最後の手段として使用されたのである。また、以上の五種の内二種以上の重犯（たとえば強盗殺人、殺人放火）で一つだけを自白し一つを否認した場合にも拷問は許された。つまり、仮りに本人が自白しなくても、死罪（殺人、盗賊は斬首獄門、放火は火焙り、関所破りと謀書謀判は磔）を免れ得ない証拠証人が揃つているのだから、たとえ拷問で死に到つても、どうせ死ぬ他ない運命なのである、呵責（お叱り）、押込み蟄き（たたき）所払い追放程度の比較的軽い犯罪の自白のために拷問が行われるようなことは絶対になかつた。この点、専制的な幕府時代の方が極めて慎重であり、むしろ旧大日本帝国時代の憲兵隊とか特高警察の方が拷問を濫用し残忍を極めていた、といえるであろう。特に社会主義、自由主義等を信奉したいわゆる、思想犯」に対する拷問の酸鼻さは世界に類型がなかつた、といえよう。

拷問にかける場合にも、幕府時代は女囚の取扱いには細心の注意を怠らなかつた。かりにもかよわい女性の身で、斬首獄門、火焙り磔にかゝるような重罪を犯すものは極めて稀有である。もしあるとすれば、よほど性質の兇悪な毒婦妖婦の類でなかなか一筋縄ではゆかぬ女である。また取調べにあたる奉行側も女囚の犯罪には特に慎重を期し、情状を酌酌し、極力処刑を軽くしようと苦心惨胆したものである（実例＝八百屋お七）から、その慈悲愛に動かされて、ほとんどの女囚は喜んで一切を自白するそれにしてさえなおかつ自白を拒み、拷問を受ける女囚といえばたいてい想像がつくであろう。古い記録には次のよう

な実例が報告されている。（原文通り）

我等も度々女の囚人を手がけしが、其内一人の女、密夫と申し談じ、夫を殺し、密夫は既に白状候も、女は白状せず、致し方無く候へば、拷問にかけ、縛り上げて、一打ち打たせしに、忽ち癪気さし込み絶息したり。余儀なく日を延ばし、再び出役せしに、此度も左様なり。かゝること再三なればかくては吟味渉らずと思ひ、工夫して打ちをやめ、直ちに石を抱かせしに、いつもの調子と違ひ候へば殊の外苦痛の体にて、直ちに白状致し候。尚牢内へ探りを入れしに、女のいふには、打ちならば直ぐにも絶息する工夫を覚へ、度々の責問を逃がれ、其内出火でもあれば、切り放され命助かることもあるべしと、楽しみ居りしに、石を抱かされては気絶する訳にも行かず、死ぬ程の苦痛をせし故、残念ながら白状したりと、相牢の者に語りしよし。」

こうした策略を弄した女囚の例は他にもあつた。

「又、或女を拷問致し候処、一打たたかせし忽ち後へ倒れかゝり、両足をひろげ、陰部を憚りもなく現わし、其の失態に困らせん謀みに候故、是も打をやめ、石にせし処、堪へがたく白状致し候」

奇襲作戦で、謹厳な奉行を狼狽困惑させるかと思えば

「又よく大小便をなし、一時の責苦を逃れんとする者など多くあり。別して吊し責にかけ候時は、注意致すべく候へば、小便をかけられんとすること之あり候」

など、陰惨な拷問にユーモラスな空気を漂わせている。これは天保亨保頃、町奉行与力の吟味掛りの心得書として、必読された「吟味の口伝」の一章である。拷問の順序は笞打（鞭打）石抱き、海老責め、吊し責めと次第に苛酷になる。どんな強情我慢な女囚でも笞打には耐えても、次の石抱きにはもろく陥落したらしい。男囚の中には流石に奉行に舌を巻かせる豪胆不死身な者もあつて、例えば天保七年七月、江戸北町奉行榊原主計頭の掛りで拷問にかけられた播州無宿大阪入墨定蔵などは、七月二十一日に笞打、石抱き五枚（一枚十三貫計六十五貫）以後、天保九年四月二十一日迄に二十八回の拷問を受けてビクともしていない。その間笞打十六回、石抱き十六回、海老責め二回、吊し責二回である。超人的不死身とでもいうべきであろうか。しかも最終の四月二十一日に到つて、ついに記録は「不決」自白せずと筆を投げているのである。この播州無宿定蔵という快男子がいかなる兇状持だつたのかは明らかではないが、おそらく、上州無宿国定忠治に匹敵するような大親分だつたかも知れない。同じ悪党でも吹けば飛ぶようなコソ泥ではなかつただろう。

拷問マゾヒズムもこゝまでくると立派な英雄的行為に近い。多くの女囚が小細工を弄し

KK通信第9号 完成

ボクの責め方
罪の椅子
伊豆波仁補遺抄
特別会員交通規程
続・錯乱の倫理
会友通信。短信往来
アブニストという語について
読者の声A・B・C
特別会員だより

本号ヨリB6判16頁ニ

KK通信第十号より贈呈中止

本誌月極購読者に対して従来毎月無料贈呈の上本誌と同送致して居りましたKK通信は次号第十号より、多数読者の御希望により本誌と別送することゝなり、更にこの機会に内容の大充実を計るため、無料贈呈を中止することになりましたので御諒承下さい。引続いて購読御希望の方は半年分百円（切手代用八円切手十三枚）御払込下さるよう御願い致します。

て卒倒したり陰部を現わしたり、大小便を洩らして一時の責苦を逃れようとしたのに比較すると、やはり男囚の方の態度は胸がすくほど小気味よく颯爽としている。女囚拷問の妖奇美を空想して堪能するのもよいが、私はそれよりもその実録に現われた正直な事実の方により多くの人間心理への興味を感じるのである。つまり女囚拷問の実状は想像を裏切つて醜怪で卑屈そのものだつたにちがいないということである。残念ながら倒錯美として鑑賞するには足りないのである。

・3・倒錯趣味は反社会性か

倒錯趣味は必ずしも反社会的ではないし、倒錯行為の満足は孤独又は対者とのみの秘密裡に行われるから、社会的に大きな悪影響を及ぼすことも少いといわれている。いわば日蔭に咲く妖花の美である。しかしこゝに注意しなければならないのは、それがあくまできびしい美醜の差別を心得た、甘美な「趣味」としての場合にのみ許されることである。先般アメリカ政府の発表した「反米行為」の対象として共産主義と共に同性愛（ソドミー）が採り上げられていることは、倒錯者が増えてきて、その秘密性が破れた場合は、反社会的危険分子の集団として必らず厳しい弾圧を食うことである。私生活への干渉を許さない自由の国アメリカにおいてさえ、同性愛者の倒錯変態が秩序安寧を紊乱する場合には断乎たる処置を取る。これは決して不当な官憲の暴力ではなく、その背後にある輿論の圧力である。倒錯讃美はよいが、しかし、その許される限界だけはハッキリ知つておかねばならぬ。これを裏返して云えば、倒錯趣味というものは、健全で正常な人間生活をより一層発展成長させるための、一種の刺戟剤又はアクセサリーとして存在すべきで、本来の意義を逸脱することは厳に自戒しなければならないことである。

たとえば、相思相愛の心身共に成熟して健康な男女両性が、その恋愛あるいは結婚生活を、より一層甘美に濃厚にさせるために、あるいは対者の歓喜と昂奮を一層掻き立てるために、意識的又は無意識に行う軽度の倒錯行為、というようなものに対しては、誰一人非難する余地と権利は与えられていない。これは正常にして健康な逐行への絢爛たる前奏曲だからであり、たとえ意識していなくとも大自然の意志に添う新しい個の生産姓娠分娩を窮極の目的とするからである。こうした場合に随伴する軽い倒錯行為は、一つまみの塩を大量の砂糖に混じるのと一緒で、ますます砂糖の甘味を増すものである。

ところがこれに反して、相手を熱愛すればこその献身的倒錯行為でなく自巳に主体をおき、愛せざる相手に奉仕を強いる倒錯行為、又は全く相手を有しない倒錯行為などは最も動物的であり醜悪であり不健康な病的行為であつて、自巳への侮辱であり現代人の叡知に欠けると思う。

第三次大戦前夜の陰鬱な現代に生きるわれわれは、救われようのない絶望と懐疑の中にある。明日への希望を持てない時代に、人間が強烈で不健康な刺戟と享楽を渇望するのはやむを得ないかも知れない。倒錯趣味への耽溺と誘惑はこうした状況の中で、われわれを捉え、窒息しそうに厳しい現実から逃避させる役目を果すのである。麻薬に中毒したものが果てしない麻薬の妖夢を追求するように、倒錯趣味に中毒したものもますます強烈な刺戟と享楽を追求する。そして、人間本来の正常で健康な快楽から達ざかつて了うのである。甘美な抒情の所産たるべき倒錯趣味の夢が、蒿じるにつれて醜怪で嫌忌すべきグロテスクな現実に変質してゆく。これは実にたま

らないことである。美と醜、善と悪、真と偽の判断は各個の教養と性格と知性によつて幾分は異なるであろう。けれども、たとえば、私はどんなに愛する美貌の恋人や女友達でも彼女達の分泌したり排泄したりする液体や固体には眉をしかめ鼻をつまむ。いくら熱愛していても汚ないものは汚なく、臭いものは臭いのである。美醜に対する私の感覚はごま化せないのである。又、たとえば、歌舞伎の舞台の上で縛られて悶える美女の姿には恍惚と陶酔する。しかし、それは、現実にあり得べからざる夢の世界を「芸」の技術で描いている美しさなのである。私はその「芸」の甘美さを現実に実行したとき似ても似つかぬ幻滅であることを身に泌みて知つている。さらに又ソドミーの世界も、経験したあとの味気なさ卑らしさは果てしのない自己嫌悪を掻き立てるだけのことであつた。愛情が紅蓮の炎をあげて燃え盛つても、一方に水のように静かで冷たい理性を捨てない私は、夢に向つて限りなく挑んでゆく人人を心から羨しいと思う。

これは私の常識あるいは分別の低さであるかも知れない。飛翔し浮揚する倒錯の妖夢に対つて一途に惑溺できないことは確かに不幸でもあろう。それからまた「倒錯趣味は性的慾求とは別の物である」「性的慾求と生殖本能とは異なる」という詭弁にも、私は大きな疑問を持つている。今さらフロイドをかつぎ出すのも面映ゆいが、人間の「夢」が、満たされざる性的願望の潜在によつて惹き起されることをすでに知つている私は、倒錯趣味がある種の「夢」の一種であり、性的慾求の歪形あるいは昇華であることを信じて疑わない。原始芸術である舞踏、音楽、絵画などが、性的慾求の昇華したものであり異体同質であることを思えば、倒錯趣味も亦然りということはまちがいではないはずである。

ということは、具体的にいえば、病的倒錯趣味に耽溺しやすい人は、外的、内的、肉体的、精神的に、なにかの圧迫または条件によつて、正常で健康な性的慾求の発散を妨げられているからだ、ということである。その病根がどこにあるかは、老練な内科や精神科医ならすぐに判るはずである。いろいろな新しい治療を根気よく受ければ九割九分までは治つてしまう。心身に異状がなければ、病的な倒錯症候は起らないものだし、成熟した健康な女性との正常結婚の歓喜に浸れば、ソドミーなどは雲散霧消する。男性として、又女性として正常で健全且つ満足な性生活に入つて過去の病的倒錯傾向を静かに反省してみるとそれが、いかに現実放れのした痴夢にすぎなかつたかが判るであろう。

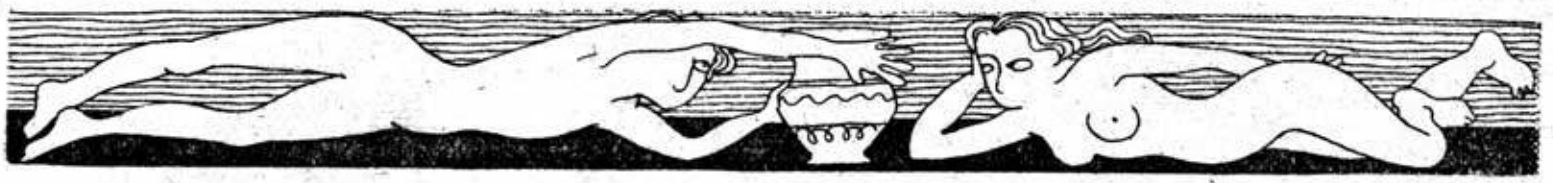
私はあらゆる倒錯趣味をきらうのではない。たゞしかし、当然医療を受ければ全治するそうした悪癖を、自ら恥じ、人に告げられぬ秘密の喜び悲しみとして持ちつゞけて行く非科学非合理というものは、決して現代人の名誉でも光栄でもない、と思うのである。誤解を招きたくないために、私は繰返して次の事をいつておく。

「相手を熱愛し、相手の歓喜を倍加させる献身的な、そして甘美な倒錯を、あなたの正常恋愛、あなたの健康な結婚における、一つまみの塩としてのみお試しなさい」と。

謹告

従来本誌に傑作を発表、将来を嘱望されていました二俣志津子さんは去る三月華燭の典を挙げられた為残念乍ら只今筆を断つて居られます。更にお馴染の喜玲子女史は今回良き配偶を得られて新生活に入られましたので編集部に於て企画しました諸行事は一時中止のやむなきに至りました。御期待下さいました多数の方々に謹んでお詫び旁々御報告申し上げます。

（編集部）



○アブニストの記○

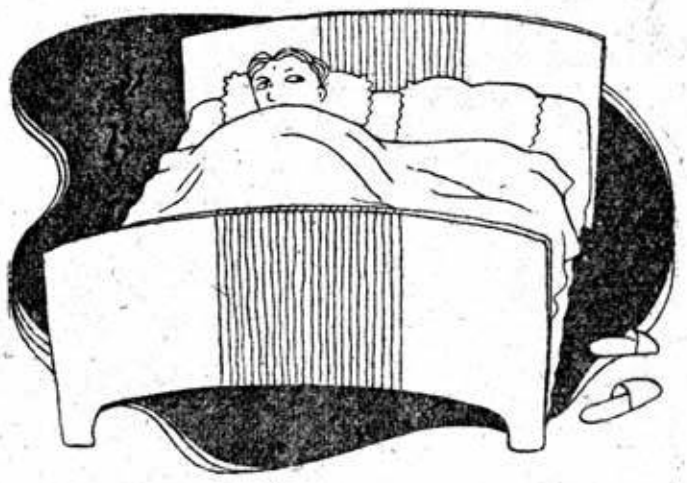
らぶ・すれいぶ (六)

鬼山絢策

「莫逆の友」とも言うべき池崎が、私の全財産を賭してかち得た「秘宝」をぬすんで居ようとは、彼のズボンの縞柄を、目の前に見る迄は想像もして居ない事でした。

彼の出版事業は、私の投資に依つて成立したのです。勿論彼の並々ならぬ手腕と社会的信用とが、大きな無形の財産だつたでしようが、それにしても私が投資しなかつたら、今日の彼の位置は築けなかつたでしよう。

私は彼に決して恩を売つて居るのではありません。然し私は彼の人格と手腕を信じて、彼の仕事を援助して来たのでした。彼は「出版ブーム」の波に乗つて一挙に堅実な経済的基礎を作り、現在では向上発展と迄は行かなくとも、赤字にはならぬ程度の経営を続けて居る筈です。私も彼の仕事に依る報酬は相当に受けました。だから恩をかけたとは思つて居ませんが、共に信じ合い助け合つて今日迄過して来た友情は、混濁した私の人生に美しい花を咲かせたと、私は自分の不甲斐ない所業に嫌悪を感じた時でも、それを想い出して、慰めとし、励みとして来たのです。



その池崎が私との信義を根底から覆えそうとは今の今迄夢にも思つて見ない事でした。

激怒！

私は昨日以来、始めて抑えきれない位の激しい憤怒に、ベッドの下から這い出して行つて、池崎の厚顔な面の皮に一撃を与えてやろうかと、思いました。

（だが待て！）

彼が春美に何をしたのだ。まだ何も始まつては居ないではないか、只私の留守中に私達の寝室に這入つて来たと言うだ

けの事だ。私は昨日からの春美の行動と気配から過去の秘事を想像して居るだけだ、現場を見つけて、のつぴきならぬ証拠を見る迄は自重しなければならない。

私は怒りを抑えて、眼の前の椅子に腰かけた彼のラバソールの靴を脱んで居ました。

「お金持つて来てくれた？」

「持つて来ないよ。今日は日曜で銀行がダメだもの。」

「あら困るわ。明日の朝どうしても要るのよ、今晩恭夫が来るのよ」

「明日の朝だつていゝじやないか」

「だめよ。現金取引でなけりや、〃明日は明日の風が吹く〃つてのは貴方の口癖じやないの」

「だつてない袖は振れないだろう。下条だつてまだ持つてるよ。今晩話して御覧」

「何言つてるのよ。うちはもうほんとの文無しよ。第一筋違いよ」

「ハ、、、そんな文無しにしちまつたのは一体誰の。妾も約束を破るわ」

「下条自身じやないの、妾の知つたこつちやない。今度はお金のためにつき合つてるのかい」

「君は妖婦だよ。下条から絞れるだけ絞り取ると、第一筋違鉢が此方へ廻つて来たつて訳だな」

「だつて好きよ」

カチンとガラスの触れ合う音がしました。池崎の靴の先にグッと力が入りました。

春美がウイスキーを酌いでやつて居るようです。

「そうよ、そう思つて妾とつき合つてれば間違いはないわ」

「此の嘘つき。女たらし……」

「君は俺が好きじやないのかい」

「キライよ」

「じや金のためにつき合つてるのかい」

「そうよ」

私の頭の上にグーツと重量が圧しかぶさる気配を感じました。

今だ！

私はとび出すチヤンスを摑んだと思いました。

「じや下条はどうだい。好きだつた事もあるのかい」

「今だつて好きよ」

この春美の一言がとび出そうとする私の勇気を挫きました

「ほんとうに好きなのかい」

「ほんとに好きよ」

「それじや俺なんかとつき合うのは罪悪じやないのかい」

「貴方もそれは御承知じやないの。……だめ〳〵！そうと分つて居て何故そんな事するのよ、フ、、、だめだつたら」

春美のカン高い声が響きました。

「此の嘘つき。女たらし……」

「痛い！アハ、、、。痛いよ、おい、ハ、、」

「フ、、。どうだ！降参か！参つたか！」

この春美の嬌慢な言葉は、私の耳にタコの出来る程聞いた言葉です。

「コラ！お金出せ！」

「だめだよ〳〵、ウフ、、くすぐつたいなあ、そんなとこにや何にもないよ……ア、だめ！」

「ホラ此処にあつたじやないか」

パアツと床へ飛び下りた拍子に春美の白い肌がチラツと光つて見えました。

「こら！」

続いて池崎がとびおりて追いかけます。

「アハ、、、」

春美はパジヤマの裾をひるがえして、室中を逃げまわります。右手になにか白い紙片を持つて居るのは、多分小切手でしよう。二人はハア〳〵言いながら、白い足と毛脛とが眼まぐるしく部屋の中を駈けめぐります。

女豹のように素早くテーブルの上にとび上つた春美の足が池崎のどこかを蹴とばしました。

ドタンと床に尻餅をついた池崎の横顔を私はその時始めて見ました。

あの事務所で見る寸分の隙もない鋭どさを持つた池崎の容貌が、まるで白痴のように間の抜けた、何もかも隙だらけの顔に見えました。アハアハとだらしなく笑つて居る顔を見ると、私は急に池崎の今迄見えなかつた性格の弱点を見つけたような気持になつて、思いきり軽蔑してやりたくなりました。然し彼の視線がベットの上に向けられて居るから良いようなものゝ、もしもそれがもう一寸下に向いてたら……

私は息をつめ、もう少しベットの奥へ潜りこみたかつたのですがそれもならず、只彼の視線を見下げて居ました。それもホンの一瞬のことで、両手を後について足を投げ出して居た池崎がムク〳〵と起上つて、春美の方へ笑いながら近づいて行きました。

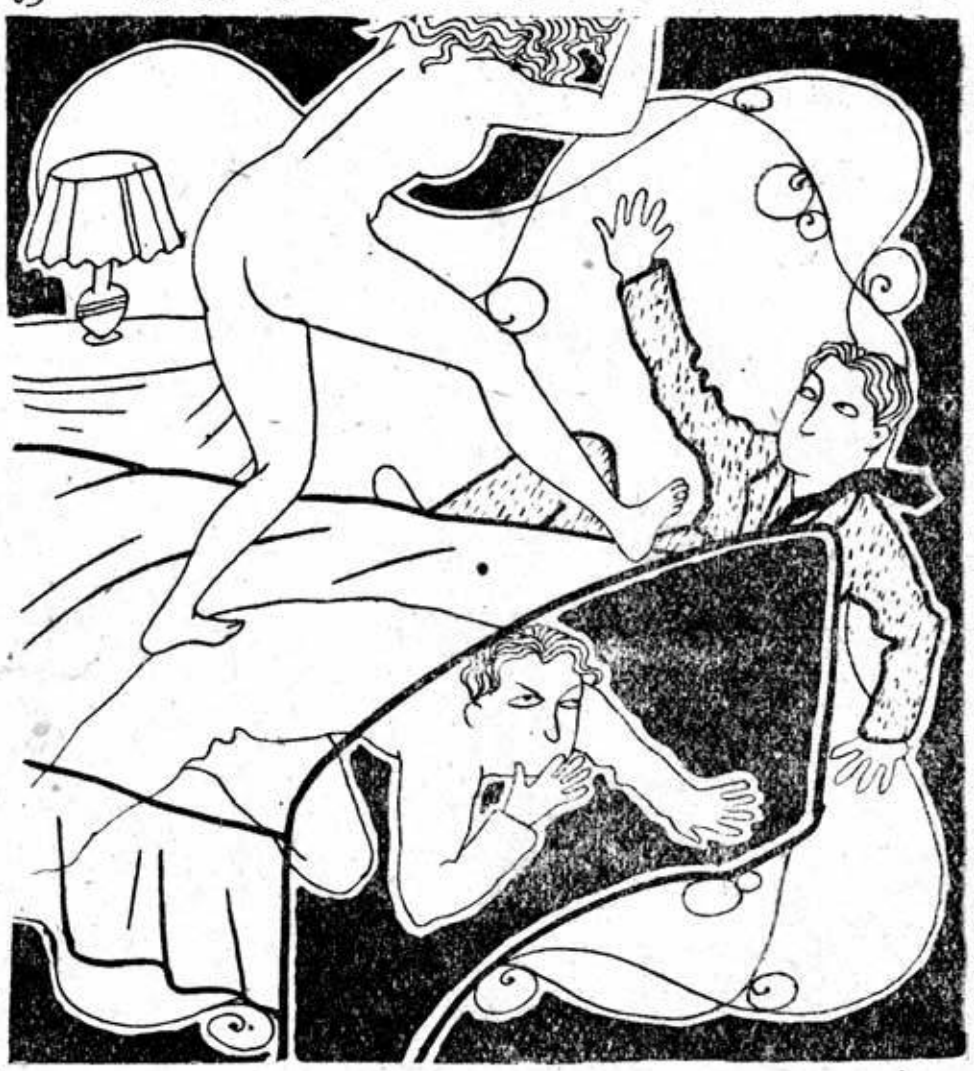
それから私は、幾度もベットの下から躍り出す機会を見つけ出したのです。いや、機会と言うにはあまり長い時間でした。その間のどこでもとび出してよい機会だつたのです。

然し私はとう〳〵とび出す事が出来ませんでした。それは只一言、春美が池崎の問いに答えて私の事を「今だつて好きよ」と言つたあの言葉のためでした。それと池崎の背徳行為に対して、私が或る程度満足する程春美が膺懲してくれたからです。

私は非常に疲労を感じました。

こんなに激しいショックを受けた事はありませんでした。この長い時間の忍耐。私は春美と一緒にこの家に移り住むようになつてからは、あまり妄想を必要としなくなつたのです。妄想は総べて現実となつて現われたからです。その久しく不用になつて居た妄想が、昨日以来、私の脳裡にダニの如く喰いついて、暴れ廻つて居るのです。然もそれは全部春美の姿がクローズアップされて或は私を打擲し、或は嘲笑し、或は弁解し、その姿は私の意思のおもむくまゝに変化して行きます。

私がもし毅然たる態度に出たら春美はどうするだろう。ボールを壁に打つつけたようにそのまゝの勢いで私に跳ね返つてくるだろうか。それともそのボールはその儘遠くの叢の中に見えなくなつてしまうのではなかろうか。恐らくはそのどつちかだろう。私の期待して居るように、静かに私の足許に転がり返つて来て留まる事はないだろう。それとも私の持つて行きようでは、彼女自身の非を反省してくれるだろうかイヤ〳〵そんな事にはなり得ない。そんなおとなしい彼女ではないのだ。



私の頭の中には私自身と彼女の映像のみです。その原因となつた二人の男性の影など殆んどないのです。つまり私は昨日と今日の二人の男性を眼中において居ないのです。

ですからさい前ベットの下から躍り出そうとした時にも、もしもそうしたら彼女はどんな態度をとるだろう、とそれのみ考えて、池崎がどんな風に対するかと言う事は、私の計算の中に入つて居ないのです。

然し読者のみなさんは私のこの心境を理解して下さるでしようか。

ベットの下に潜りこんで居たとしたら、とつくの昔にとび出して居たでしよう。

例えば池崎と戦つて敗れようとも、そんなことを考えて居る暇もないでしよう。

私もその通りだつたのです。今も言つたように池崎の場合でも昨日の男の場合でも、男がどう言う風に出て、どう言う結果になるかなどと言う事は考えても見なかつたのです。

只私の恐れたのは春美一人です。

春美がもしも私の眼前から消えてしまつたら——

ばか〳〵しくて話にも何にもならないと、この本を投げ出してしまう方がありはしないでしようか。

眼の前で（眼の前も同然です）最愛の妻が盗まれようとして居る。或はもう何度か盗まれて居たかも知れないけれど、少くとも今日はまだ盗まれて居ないや盗まれつゝある現在、夫としてそれを黙視して居るなどと言う事は到底考えられないとお考えになるでしよう。

もしも貴方が私の身になつて、

馬鹿！貴様は男ではないのか。たかが女一匹に、そんなにも未練があるのか。

だが春美とこゝまで来るには、私は一生の総べてを賭けて居る。親から貰つた財産とは言え、私がどんなに働いても得られそうもない財産を傾け、罪もない妻子を離別してまで得た、一生に一度めぐり会うかどうか分らない程貴重な女なのだ。今手離したら、もう二度と手には入るまい。だがこのまゝ見逃して居たら、春美は野方図もなくのさばり、気儘放題の事をした揚句。最後には腐れわらじの如く私を足の先でポイと蹴り捨てゝしまうだろう。

その時になつて悔を残すより、今男らしく決りをつけてしまうべきだ。

でもそうなるばかりとも考えられない。春美は私を〝今も好きだ〟と言つたではないか。あれは嘘なのか。だが私の眼の前で言つた言葉ではない。蔭で言つた言葉には往々真実があるのではなかろうか。もしも私のどこを好いているのか知らないが、それが真実とすれば、私さえ許して居れば春美はいつ迄も私の傍に居るのではなかろうか。

だが、現在の春美の行状に我慢が出来なかつた。夜になつて、私が春美の前に姿を現わせば、春美は何事もなかつた顔をして昨多のように私に対して又さま〴〵な屈辱を強いるだろう。その不貞も、汚れた肉体も、良心も羞恥も一切を私の唇に吸い取らせようとするだろう。その屈辱に迄耐えられるか——

私の脳裡では次から次へと二人の私が論争を続けて行きます。そうして最後には私の持ち前である優柔不断がこの結論を何となしに決めてしまうのです。

（とび出すのは今日に限つた事ではない。二人のデイトは今後も続くだろう？そのいつの場合でもいゝのだ。もう少しよく対策を練つてからにしてもおそくはない——と）

そして私の頭の上で今日のチヤンスはゆつくりと、次第に遠のいて行きました。

「小切手は現金に代えてから恭夫君に渡し給えよ。僕の名前の入つて居る小切手を見たら恭夫君が変に思うだろうからね」

「えゝ分つてるわ」

「これから一寸踊りに行かない？」

「いゝわね。」

池崎はベッドから飛びおりてズボンをはきにかゝりました。春美も洋服ダンスを開いて、あれやこれやと、外出着を選んで居ます、そして二人が完全に着終つた時、私のとび出る幕は遂に去つてしまつたのでした。

春美は急いであたりに散らかつた衣類や、食べ物を片づけると、二人は腕を組んで、この淫らな室を出て行きました。

二人が完全に外へ出たと思う頃、私はようやく長い〳〵忍苦の穴倉から這い出して立上りました。

あゝ……

私は室のまん中に仁王立ちになつて大きくノビをすると共に深い溜息を吐きました。

私の真正面に鏡台が据えられてあります。

私はその前に歩み寄つて、私の顔を鏡に近づけました。

（世にも間抜けな亭主の顔はこの顔か――）

鏡の中の顔は私を軽蔑しきつた表情で、そして憎悪をこめて私を睨んで居ます。

（意久地なし！　この腰抜け男め）

私は自分の顔を正視するに耐えられなくなつて、視線をおとしてしまいました。

ベッドを見ると、此処だけはキチンと羽根蒲団がいつもの位置にのべられ、枕も正しく置かれてあり、知らぬ気に取り済まして居る風に見受けられました。私は手荒く羽根蒲団をはねのけました。

その下の真白いシーツも、昨日見た時と違つて、今日は、ピッタリと皺一つなく敷かれてあります。

私はその上に寝るのさえ厭おしく思いました。そこには春美の常用するコテイの香水と、彼女の甘い体臭がしみこんで、私の鼻をに鼻をつけて匂いを嗅いで見ました。私の鼻を嗅ぎあてようと躍るように撫でて行きました。池崎の匂いを嗅ぎあてようと求めて見ましたが、それらしいものは何も残つて居ませんでした。

いかに清潔に、整然として居ても、このベッドに寝る事が何だか汚らわしく感ずるのでした。

私は一人家を出て、あてもなく街をさまよい歩きました。何処を歩いたのかさつぱり分らず、頭の中は春美の事で、一ぱいでした。

おでん屋に入つて、好きでもない酒を飲んで見ましたが、サッパリうまくもなければ酔いもしませんでした。

その夜おそく家に帰ると、春美は例の桃色のパジヤマ姿で池崎を迎えた時と同じように私に対しました。

「おそかつたのね。あら、お酒飲んでらしつたの」

「会社のつき合いでね」

「御飯は？」

「食べたよ」

「じやもうおそいから寝る？」

私は昼間の息の詰るような思いをした寝室へ入つて行きました。

「あなた此の頃余つ程疲れて居るようね」

「……」

（これも皆お前のためだよ）

私は無性に腹立たしくなつて、春美は背を向けてしまいました。春美は私の腕に手をかけてグイと此方を向かせようとしました。私はその手を邪けんに振り払いました。

「フン……」

春美は飛上るようにはずみをつけて、寝返りを打ちました背中合わせに寝る寂しさ……

昼の情景を思い浮べると、鉛のように重苦しく、又奇妙に昂奮して私はなか〳〵眠れませんでした。

あけ方になつて、トロ〳〵とした時、私は悪夢にうなされて居ました。

春美が全裸となつて私の胸の上に跨がり、アハ〳〵笑つて

居るのです。その傍に池崎や、学生服の大槻や、恭夫や、その他見も知らぬ男が二三人ベットの廻りに立つて私を見下して笑つて居ます。春美は得意そうにグイ〳〵と全身の重量を圧しつけて、得意になつて居ます。私は身動きも出来ず、もがこうとしてもがく事さえまゝにならず、ふと気がつけば荒繩で全身をグル〳〵巻きに縛られて居るのです。

春美は傍の見物の男と何か笑いながら話して居ましたが、やがて短刀をとり出すと、私の顔の真上にかざしました。

あゝ私はこのまゝ彼女の手にかゝつて殺されるのか——その時眼がさめると、春美がいつの間にか此方向きに眠つて居て、私にすがりつくような恰好で、私の胸に手をのせて居ました。

たつた一本の腕でしたが、それが非常に重く、私には苦しく感じましたが、私はそれを払いのける気にはなりませんでした。

今の春美のこの寝姿が、春美が私に対する心の奥は秘めた気持ではないか？

そうであつてほしいと思うと、私はこの腕の苦しさを我慢して、幸福感のような自己陶酔に陥つて居るのでした。

会社に居る間も、睡眠不足で頭がボーッとして、サッパリ神経が集中せず、ペンを握つてボンヤリ考え込んでる日が多くなり、あれからの四五日は、今にも降り出しそうな空のように暗くたれた雲に囲まれた気持で、私はおちつきを失つて居ました。

又留守の間に池崎が、あの謎の男が来て居るのじやないか今頃は何をして居るやら……

私は今一人の男の正体をどうしてもつきとめねばならないと思いました。

時には会社を休んで此の間の日曜のように、午前中ずつと家の玄関を見張つた事もありましたが、春美は全然外へ出ず訪問者もなくて、徒労に終つた事もありました。

一週間ばかりの間に私は大病人の如くゲッソリと瘠せたのが自分にも分る程でした。これではいけない、何とか気分の転換を計らねばと思いながらも、仕事の方に精出す気持にもなれず春美との間にも近頃は大きな溝が出来てしまつて、急

に他人行儀になつた事が、我ながら情けなくなりました。

この頃の私は殊更に夜おそく帰りました。

用もないのに映画を観たり、銀座をブラついたり、時には江東の鳩の街や赤線区域をひやかしたりして、終電車にやつと間に合う頃に帰るのです。

恰度一週間目の金曜日の夜でした。

私は少し酒を飲んで一時近くなつて家に帰りました。

室に入ると春美がパジヤマ姿に鞭を持つて待つて居ました。

「今迄何処をうろついて居たのさ」

室の中央に仁王立ちになり、私を睨みつけて居る表情にはどこか芝居じみた、おどけた所がありました。

「いつも黙つてればいゝ気になつて、毎晩じやないの。今日はお仕置きしてあげるわよ」

「僕は疲れてるんだ、お仕置きは明日してくれ」

「だめ〳〵、今夜はもう我慢できないの、洋服を早くお脱ぎなさいよ」

春美の頬に僅かな微笑が浮びました。それが私をひきつけたのです。私が服を脱いでシヤツ一枚になつた時、

ピシツー、

と皮バンドの鞭がとんで来てシヤツの上から私の背中と腕に絡みつきました。それは大して痛くはありませんでしたが久し振りの鞭打に私の妖しい心の動きはカツと燃え立ちました。

「それを脱ぐのよ」

命ぜられるまゝにシヤツを脱いで上半身裸体となり、床の上に坐りました。

ピチツ！　ピチツ！　ピチツ！

今夜の鞭は今迄になくきついものでした。そして、その強さは刻々に加わつて行きました。

私の白い皮膚には何本ものうす赤い筋が乱れて殖えて行きました。

息も出来ない激しい痛みは、私に素晴しい刺戟を与えてくれました。

（もつと打て。もつと打て、この不甲斐ない夫を叩きのめしてしまえ！）

両脚を踏張つて、大上段に鞭を振りかざす春美の姿の中に私自身の心が溶けこんで居るような気がしました。

何か知らず、心の中にうつ積して居たものが、鞭の一声々々に依つて叩き出されて行くような快感を覚えるのでした。

春美の鞭は主に背中へ集中されて居たのでしたが、時には頬へその先端がとびついてくる事もありました、それは平手打ちを喰つたよりも遥かに尖鋭な痛みを覚えました、

「あんたの身体の中には此の頃悪いむしが巣をつくりはじめたのよ。それを今夜は徹底的に妾が叩き潰してやるわ」

春美は私の肩へ片足をかけてそう言いました。

「この頃お前はほんとに生意気になつたよ。妾に奴隷として奉仕すると約束しておきながら、此の頃は主人面してるじやないか、何だいこの面！」

春美の足が強く私の頭を蹴りました。仰向けに転がつた私の顔へ足の裏をのせて踏まえた春美は、

「あんたは妾にこうされるのが、嫌になつたの、え？イヤになつたのかと聞いてるのよ」

とグイ〳〵と踏み躙りました。そうされながら、私は春美に済まない事をして居た、奴隷の奉仕を怠つて居た事は私が悪かつたのだと思いました。

春美は足をどかして、私の返答を促がすように上から見下して居ります。

「嫌になぞなりはしない、僕はあなたの奴隷です」

「フゝン、それなら何故今迄妾を避けて居たのさ」

「僕が悪かつた。許して下さい」

「馬鹿、ばか！お前がいくら妾に反抗しようとしたつて、出来るもんか」

春美は、私の顔へ自分の足の裏をぺつたりとのせて私の哀訴の声を塞ぎました。

私は春美の肉体を、永遠に汚れなき処女と想像して掌中の珠のように愛撫し、崇拝して来たのでした。それがいつの間にか、池崎や、その他の男に汚されて、私の偶像は破壊されてしまつたのです。それ故に悩んで来た私です。

それが……

今、彼女の暴慢な強圧にあつて見ると、私が〝汚れて居たもの〟と考えて居た事が誤まりであつたと思う気持になりました。

春美の現在の生活は「チヤタレイ夫人」のような不具な夫を持つた妻として、彼女の行為を責める資格が私にない事を悟りました。

春美が、私の夢に描いて居た通りの女と思つて居た事が、私の間違いなのでした。春美が、普通の女性であつたとしたら、彼女の行為もまた一概に責めることはできないと思いました。

私は彼女の快い鞭打に恍惚とした苦痛の中に、もういろいろな事を考えるのが臆劫になつて来ました。

私は彼女の命ずる儘に、愛の奉仕を続けて居ました、

（何と言うだらしのないお前のざまだ！）

と罵しる声を聞きながら、一方では

（仕方がないじやないか、私はラヴ・スレーヴだ。私が彼女に対しては、これより他に能がないんだ、何でも構わない、只彼女の命令に従がつて居ればいゝんだ それを望んで一緒になつたんじやないか）

と囁やく声も聞きました。

「フゝ。ざま見ろ！　これから少しでも妾に逆らつたら承知しないよ」

春美は勝誇つて、私の抗弁の自由を奪つて、奴隷としての〝無言の宣誓〟を強いるのでした。

——続く——

次号予告

礫になつたお姫様　毛利綾子

くすぐられる　よろこび　山本百合

妻は縛らず　岡田圭介

暴帝イワン罪悪史

(二)

高取辰治

五

イワン暴帝の惨虐性は彼の性的享楽に結びついていた。一五六八年の七月、彼は美しい妻を持つているという噂のある商人や役人の家を襲い、前以てツアー一夜の寝所を設けてある広場へ女を引き出した、その中の一番美しいのを自分の寝所へ引き込み、他は全部寵臣に下げ渡した。この淫楽の宴を盛大にするため、周囲の家全部を焼き払い、家畜穀物の悉くを破壊し尽した。そして翌朝、恥かしめられた妻を夫へ帰したのであつた。だが、この事件もまだほんの序曲である。第三期虐殺時代が新しい刑罰方法の発見によつて開始される。

フエロドロフという憐れなよぼ〳〵の老爺がツアーの命を縮めて、自から帝位に即こうとしているという飛んでもない罪を塗りつけられた。イワンはこのお伽噺を真正面から信じ切つて復讐を企てた。

彼はフエロドロフにツアーの衣裳を着けさせ帝冠を戴かせ、笏を手に押しつけて帝座に着けと命じ、さてその前で皮肉たつぷりな口上を述べ立てた。

「ロシアの大帝、齢長久にあらせ給え。叡覧下され陛下の望み給うた栄位は今私からお受け遊ばされました。じやが、儂は君をツアーにする力を持つておるから、君を帝座から引きずり降ろすことも出来ようもの、どうじやな！」

この言葉の終るか終らぬかに、剣の光がキラリとして老爺は胸をぐさつと刺された。合図によつてオプリチユニキが息を引き切らぬ老人に飛びかゝつて生きた肉をバラ〳〵に切り刻んだ上、宮殿の窓から街上の犬へ牛肉でもやるように投げ与えた。この云うに堪えぬ悲惨な運命は同時に老爺の妻と勝手にきめられた無数の「一味の者」にも襲いかゝつた。或者の如きは裸のまゝ河辺に引き出されて首を叩き落し、胴を水へ捨てられた。

シユチエンイエテフ太公はその余生を修道院で静かに送つていたが、捕えられて拷問に死にかゝつた。この徳行の高い太公が拷問に堪えたと見ると、ツアーは大きなフライ鍋の中で炙りながら爪の下を針で刺せとの命を下した。

プロンスキー太公は高齢のため特別の慈悲を以つていたチユーチンとその妻、二人の幼い息子、二人の花はずかしい娘はツアーの義

兄ジェルカースキーの手で八つ裂きにされた。八つ裂きは第三虐殺時代の特徴である。

カラムジンはいう、「当時オプリチユニキは長刀と斧を持つて市内を横行し、毎日十人乃至二十人の人を何等の意味なく虐殺した。

そのうちで一番やられたのは教会で祈つている人間であつた。血は街上に流れ、死骸はそのまゝ街上で腐つた。埋葬どころか家を出るのが生命がけだつたのだ。モスクワは死の沈黙の下に静まり返つた。時として聞えるものは斬首役人が恐ろしく吠える声ばかりだつた。」

この乱行に抗議した第二の人は藩王ミートコフであつた。ツアーと会食するとき、すゝめられた酒を前にこう云つた。

「おゝツア陛下、陛下はこの酒を下されましたが、この酒には私共の兄弟キリスト教徒の血が入つておりますぞ！」

ツアーは酒の代りに死を押しつけた。肌身離さぬ長刀はこの勇敢な藩王の身体を即座にえぐつたのであつた。

第三の英雄、まことに死をも恐れぬ人道の英雄は大僧正フイリップである。一五六八年の或る日曜日、イワン暴帝はマリヤ昇天祭を行うため教会堂へ行幸した。ところが大僧正はじつと救世主の像を見詰めたまゝ行幸を知らぬ顔である。扈従の藩王達は胆を消した

「御神父殿、ツワー陛下の御来臨でござる！御神父殿、陛下への祝福を！」

大僧正は、しかし、泰然自若として動かなかつた。が、やがて彼は大声をはり上げて叫んだ。

「拙僧はツアーを認め申さぬ―おゝ、陛下は神を犠牲に遊ばされた。祭壇の彼方には無辜のキリスト教徒の血が流れておりまするぞ！天に日が輝き初めてよりこの方神を恐れ給うツアーにしてかくもその国を切りさいなみ給うを見たことがござらぬ！異教邪教の国にさえ法もあれば人間に対する慈悲の心もござりますロシアにはそれがない。民の生命財産に何の保証もなく、到る処に強盗、到る処に殺人、それが皆ツアーの名に於いて行われておるのでござるぞ。しかも陛下は安閑と帝座に座つてござる。陛下と拙僧等が裁きどの顔をさげてその裁きの廷にお出遊ばされる？陛下は無辜の民の血に汚れ、民の呻き声に耳聾いてござるではござらぬか？御足の下の石までが復讐の叫びを挙げておりまする。陛下、拙僧は魂の飼い主としてこう申すのじや、拙僧の恐れる者はたゞ〳〵お一人の神ばかりでござるわ！」

イワンは憤怒に震えしばし無言であつたがやがてその長刀を石の床に衝き立て、物凄い声で叫んだ。

「坊主！儂は今迄貴様という謀反人を見逃がしてやつておつたが、これからは今貴様の云うた通りにしてやるわい！」

これで又新しい虐殺が始まつた。教会最高の僧正達は謀反人として捕えられ拷問にかけた上首斬り人に引き渡された。ただこの大僧正だけは別だつた。イワンは外聞を考えて、先ず型の如くフイリップを魔法使として起訴し、裁判にかけた。大僧正は平然とこう云つた。

「この不幸なる時に大僧正の身として生き永らえ、悪業乱行を見るよりも、罪なき殉教者として死するがましでござるよ。」

ツアーは真赤になつて怒鳴つた。

「貴様は裁判官ではないぞ！」

フイリップ大僧正はその教服を脱がされ、簀で教会堂から追い出されて、修道院に監禁され、其処で饑えに苦しめられた。或日のこと監房のドアが開かれると、一人の男が皿に甥の首を盛つて入つて来て、ツアーの手紙を

見せた。

「貴様の可愛がつていた甥だ、貴様の魔法の酬いはこの通りだ。」

二度目の使者は殺人者ツアーの身を前大僧正として祈つてほしいというツアーの冗談の願いを齎らした。フイリップは真面目にそれを断つた。

「祈るはたゞ善人の身の上のみじや！」

この返事を聞くや否や使者は大僧正に躍りかゝつて首を締めた。僧侶仲間は恐ろしさに身を震わせながらも秘かにこの英雄的僧侶の死骸を祭壇の後に埋葬した。さてツアーの方ではこの厄介な理屈屋を片付けたので益々自由に思いを遂げることが出来た。殺人又殺人虐殺又虐殺、しまいには首斬り役人自身が夜となく昼となく人間の首を斬り続けてへとゝになつてしまつた。だが、たつた一人イワンだけは少しもこの血まみれの仕事に疲れなかつた。彼には人間が苦しみ人間が死ぬのを見る以上楽しみはなかつたのだ。

彼の食卓上にある最も上等の薬味は、会食する廷官や藩王たちの絶望的な顔付きであり彼の歩むところはすべて人間の肉の敷物を敷いてあつたとも云えよう。人間に対する不信の焦らたゞしい気持はたゞ際限のない殺人によつてのみ慰められたのである。

六

暴帝イワンは個人々々を殺すことを以つて満足しなかつた。彼は一族全部が同時に死ぬ処を見ようと思つた。一人が殺されるとその人に関係のある者は全部やられた。どんなに血縁の遠い者でも、又どんなに遠くに住んでいても、きつと探し出されて断頭台へ送られた。老人だつて乳呑子だつて、姙婦だつて無垢の乙女だつて首斬役人の手から逃れ得る者は一人もなかつた。人間の屠殺は都市、更には地方農村全体の荒廃を伴つた。生き物は勿論人民の財産までがぶつ壊された。野や林の動物までが殺され、河や湖水には魚を殺すため毒が投ぜられた。

上は立派な家から下は農民の納屋までが灰燼に帰し、穀物が山をなして焼かれた。これが所謂ボグロムである。後にはユダヤ人に対して行われた大衆的屠殺ボグロムの起源は実に彼イワン暴帝にある。人民に対して大虐殺を行おうとする場合、イワンは地方全体をモスクワの恐怖連隊オプリチナに対する反逆者として告発した。だが、それはたゞ口実だけだ。膺立てが出来ると彼はオプリチユニキを率いてその地方へ遠征する。トウウエール地方の都クリンはこれをやられた。栄えた都市は数時間のうちに石と煉瓦の山になつた。屠殺者の立ち去つた後にはたゞ死のみが残つた女であろうと子供であろうと、いやしくもクリンの市民たる者に対して生き残つた人は一人もなかつた。

クリンから更に殺人遠征軍はトウウエールを襲つた。屠殺と掠奪が五日間に亘つて間断なく行われた。破壊されぬ家は一軒もなかつた。持ち運びの出来ぬ物は悉く破壊し尽された。血みどろの惨劇はメドヌイとトルショックでも繰り返された。クルイムとリヴランドの人々はツアーの鼻歌をきゝながら虐殺された。かくして町から町へ、今日も明日もと、オプリチユニキの赴く所、いかなる人間もいかなる動物も生かしては置かれなかつた。もう誰一人この乱行を諫める人はなくなつたのだ。

一五七〇年一月五日、イワンの前衛隊は突然ノウゴロドに現われた。町は囲で取り巻かれ誰一人逃げ出すことが出来ないようにせられた。オプリチユニキは町に乱入し教会堂や僧院を閉鎖して僧侶を先ず監禁し、各人に二十ルーブルの寄附を強要した。すぐ金の出来

ぬ僧侶に公衆の前で朝から晩まで笞打たれた商人や役人達は全部捕えられ、女という女は家の中に監禁された。街上には死の静けさが満ち亘り、この大都会は死んだようになつてしまつた。

一月八日ツアー・イワンはその息子と一緒に恐怖に襲われたノウゴロドの町へ入つて来た。ウオルホフ河に架せられた大きな橋の上で、神像を捧げた大僧正がイワンを迎えた。呪われた人民の帝王を祝福する大僧正の声が震えていた。イワンは大僧正を突き飛ばして驚き怖れた顔に顔を寄せ

「儂の胸につきつけようと思うのは、生命を与える十字架ではのうて、人を屠る双物じやろう。儂は貴様の考えをよく知つとるぞ」

だが、何と思つたのかイワンはその儘教会堂へ行つて、祭礼を行い、熱心に祈りを捧げた。中食の時ツアーは大僧正の邸宅に現われ、大僧正を自分の隣に坐らせた。そうして中食が始まつたが、その最中イワンは恐ろしい声を挙げた。合図をきいてオプリチユニキが乱入し大僧正を捕え掠奪を行つた。イワンとその息子とは街の広場へ出て、ノウゴロドとその市民の裁判を行うことになつた。毎日々々五百人から千人の人がツアーと皇太子との前に引き出された。誰一人犯罪の証拠も持ち合わさねば、誰一人悪いことをした覚えはないのに、片つ端から死刑の宣告を下された無理もない、この裁判所は慈悲も知らず正義も求めず、たゞ〳〵虐殺と恐怖を製造するのみ努める裁判所なのだ。

かくして人々は長い列を作つて裁判所から刑場へ連れて行かれた。或る者は灼熱した湯を浴びせられ、或る者は二人三人と頭か足かを縛り合わせたまゝウオルホフの激流へ投げ込まれた。一家族全部、夫は妻と、母は幼児と一まとめに繩で縛つて川へ毬のように投げ込まれるのもあつた。オプリチユニキは眼を皿のようにしてボートを漕ぎ廻り、水面から頭を出す者があれば手にした鉄棒、斧、鉤などで斬り、撲り、突刺し寸断せずには置かなかつた。

これが昼も夜もぶつ続けに行われた。陸上での惨殺、水上での虐殺、それは一週間経つても二週間経つても終らなかつた。イワンが

【読者通信】

（投稿歓迎）

読者の希望といつても様々とりどりなので編集方針も従つて公約数的なものになると思いますが私なりの注文をつけさせて頂けば次の様なことを望みます。一、単なる虐待ではなく合意の上で行われるもの、二、特に女性の乗馬に関連したもの三、古典ではなくして外国の現代例を引用して家庭でも実行可能なもの――等々です。女性の乗馬は比較的実行容易で私の妻の話に依れば非常に元気が出て一週間位身体の調子が良いとの事です。これは女性の身体の構造の然らしむる所だと思います それに現代社会では女性があらゆる面で兎角圧迫され勝ちなのを差し当り馬を使つて救うわけですが、男性が好むなら馬の代りになつてやつてもよいでしよう。

思いきり馬を駈けさせ命令に従わぬ時は尻に痕が残る程鞭で打ちすえ、拍車で蹴り上げてやります従順な時は人参などやるのもよいでしよう。愛とこらしめは並行的でなければ自らが楽しめなくなります。一汗かゝせたらゆつくりとあぶみから足をはずして馬を歩ませます。この時が女性にとつて一番よいようです。女性はその構造上男性より楽しみが大きいらしく下手な若返り薬よりも明るく健康的でヒステリー等は消し飛んでしまいます。

（横浜・SEMI・M生）

七万人目の人間に死刑の宣告をしたのは実に五週間の後であつた。イワンは生き残つた人間を一人残らず面前に引き出した。誰も彼も怯え切つて戦き震えながら地下室から幽霊のようにこの死の街上へ出て来た。ツアーは優しい眼付きでこの絶望の人々を見下し、憤怒の色も何処へやら静かな演説を行つた。

「まこと神を恐れるツアーの支配のために神に祈れ。神は反逆者ピーメン大僧正を裁き給うたのじや。血が流されたはその為である今は、汝等、歎きと涙とを止めて、この町に行く末永く住み栄えよ！」

やがてピーメン大僧正はボロ服に風琴太鼓を持ち、道化師のような風をさせられ、白い馬に乗せられてモスクワへ送られた。イワンは馬をプスコフへ進めた。ノウゴロドの運命が又プスコフで荒れ狂うのである噂を聞いたプスコフの市民達は悉くツアーを迎えて塩とパンとを捧げ、跪ずいてツアーに嘆願した。

「陛下の愛し給う臣等の塩とパンとを御嘉納下さい。たゞ臣等の生命だけは御仁慈を以つて御許しを願い奉ります。いずれにせよ、臣等の持ち物も臣等自身も偉大なる皇帝陛下の物に外ならぬのでございますから。」

この忍従は一寸成功しかけた。ところが飛んでもない事件が勃発した。市民達はその忍従の徴として塩とパンとをツアーの前に出したのであつたが、一人の頭の悪いのがその代りに生の肉を捧げていたのである。イワンはそれを見て、

「儂はキリスト教徒じや。この四旬斎には肉類を断つておるのじや。」

止せばいゝのにその男が、又飛んでもないことを喋り立てた。

「悪党奴、肉は食わぬと？人間の肉と血なら食う気かい！」

プスコフの市民はもう死んだ気になつていた。思いがけないことだ！とところがどうしたことか、イワンはこの無礼者に目もくれず、後に控えた殺人軍に向つてこういう命令を下した。

「石で剣の刃を落せ！」

不思議なことに違いない！人々は何が何だか判らなくなつてしまつた。

七

プスコフの流血はこの珍妙な事件で比較的に少なかつた。だが、イワンはその埋め合わせをモスクワへ帰つてから思う存分に行つたゞ今度は一寸犠牲の毛色が変つて、首斬り人の下へ首を差し出したのはツアーのお気に入りの連中ばかりだつた、嘗ては悪鬼のように人間狩りを手伝つた人面獣心の輩が今は野の獣のように狩り立てられることとなるイワンはもう普通の刺戟には飽き〳〵していた。彼は首斬り人を断頭台に送るという痛快さを思いついて、やつといゝ気持になることが出来た。こうしてツアーの一番気に入りの連中が今度は続々と断頭台へ追い上げられた。ウイエゼムスキー公が先ずそれだつた。

イワンはこの公爵には絶大な信用を置いていた。イワンも時には気が弱くなつて自分の悪業が空恐しくなることがある。そんな時にたゞ力と頼んだのがこのウイエゼムスキーであり病気の場合なんか侍医のアルヌルフ・レンゼウスの手からよりもむしろウイエゼムスキーの手から薬を貰つて飲んでいた位である毎夜この公爵がイワンの寝所を訪れる。そうしてこれからの虐殺方法を話して聞かせ、暴君に喜びと安眠とを与えていた。そのウイエゼムスキーを殺す。何という痛快なことだろう！イワンはふと思い付いて天にも昇るような喜びを感じた。

イワンがそんな事を考えているときこれも亦そのウイエゼムスキー公爵から一方ならぬ

寵愛を受けている一人の将軍が、その恩人を謀反人だと讒訴して来た。イワンはそれ以上何も尋ねなければ、それを聞いて何とも云わなかつた。だがもうその寵臣の運命はきまつていた。或る晩、ウイエゼムスキーはクレムリン宮殿を退出して我が家へ帰つて見ると控えの間に召使の死骸がころがつていた。彼はそれが何を意味するかと誰よりもよく知つていた。そうして自分の運命の命ずるまゝに潔ぎよく従うことにした。

ウイエゼムスキーに続いてバスマノフ父子が捕えられた、子供の方のバスマノフ、テオドール・バスマノフはツアーの男色の相手であつたが、この青年ももう逃がれられぬ運命にあつた。これらの連中は尊つてツアーの意のまゝに数え切れぬ程の人を虐殺したのであるが、それが今は我が身に降りかかゝつてこれも亦ツアーの喜びを満たすため、獣のように拷問された挙句考えもしない犯罪を述べ立て、見たことも聞いたこともない何百人の人間を共犯者として「自白」した。こんな連中の首を刎ねることは、ツアーにとつて痛快極まりないことにちがいなかつた。

一五七〇年六月二五日キタイゴロドの広場で一大殺人ページエントが行われた。八十の絞首台が作られ、それを取り巻いて珍らしい拷問台がずらりと並んだ。広場の中央には薪が山と積まれその上には水を入れた桶が綱で吊されていた。この物凄い用意を見たモスクワの市民は胆を潰して震え上つた。ツアーはノウゴロドを壊滅したと同じように、今度はこのモスクワを狙つているのだ、市民はそんな噂を立てゝ身も世もなく恐れ戦いた。だが、この運命を誰がどうすることが出来ようた瞬間、誰が金や宝石に目をくれよう!、たゞひたすらに願うのはツアーの発明した拷問台や断頭台から逃げ出すことばかりである。

市民は地下室や屋根裏へ逃げ込んだ。商人は店を捨てた。店頭には商品が置きつ放しになつている。金でも宝石でも盗みたければ勝手だつた。しかしこの大衆的虐殺の迫つて来と、突然、街にドラの響がきこえ、重い馬足音、囚人の呻き声、鎖の触れ合う音が流れて来た真つ先きには厳めしい式服に身を固めたツアー、その側にはその名とその国とその心とその惨忍性とを享け継いだ皇太子のイワンが、続いて藩王と貴族、一隊のオプリチユニキ、その後には何百人という囚人の長い列その囚人はロシア最高の身分のある人々であり、昨日は太陽の輝やく下に人の羨やむ権勢の頂上に立つていたのが、今日は今、巷の乞食よりもあさましく傷つき果てた身体を刑場へ引きずつて行かねばならない!行列が止つた。だが誰一人出てこの壮大にして悲痛な行列を見に出る者はない。ツアーはその訳をきいた。

「人民共を引きずり出して見物をさせい!」

オプリチユニキは四方へ走つた。イワン自身も馬に拍車を加えて愛するモスクワ市民を駆り出した。今此処まで刑戮するのはモスクワ市民ではなく大官連である。イワンはそれを人民に見せたかつたのだ。ツアーの召しに応ぜぬ者には復讐と刑罰、隠れ家を出て絞首台の周囲に立ち、これから行われる大悲劇を見る勇気のある者には慈悲と保護。オプリチユニキがこうしてツアーの前に人民を駆り出すと、ツアーは怯えた群集を前にして演説した。

「人民共お前達はこれから死の苦しみを目のあたり見るであろう。だが朕が罰するのは謀反人じや。人民共、朕の裁判に間違いがあるかどうじや?」

民衆は一斉に答えた。

「大帝万歳!謀反人をやつつけろ!」

かくして殺人劇が始まつた。先ずウイエゼ

ムスキーの首が落ちた。次いでイワンは若いバスマノフに父バスマノフを、ニキータ・プロゾロフスキー太公にその兄を殺せと命じた惨忍というも足らず、悪逆というもなお足らざるこの悲劇が終つた後、若いバスマノフとニキータ・プロゾロフスキー大公とは夫々父殺し、兄殺しの裁判の上惨殺された。人民はツアーの裁判を承認した。

囚人は一様な刑ばかりを受けることは出来なかつた。或者は寸断され、或者は右半身に熱湯を、左半身に冷水を掛けられて死んだ。こちらでは首を打たれるは槍で刺される者があり、あちらでは槍で見事に刺され、或る老人は槍で下した。イワンも自ら手を実に彼は自らその母を拷問しつゝ、その面前で皇太子にその娘を××させたのである。男は剣で貫ぬかれ、又第三の男は撲殺された四時間のうちに二百人が殺された。

イワンはこの血の饗宴に上機嫌だつたが、まだ何か後口がほしかつた。そこで彼は馬を駆つて惨殺された人々の家へ行きその遺族の嘆きを嘲倒し、更に掠奪を行つた。殺されたツニコフの家でイワンは十五才の娘を見た。涙にぬれたヴエールの下から地上にありと思えぬ美しさが輝やいている。暴虐の帝王は何をしたか？私はその詳細を茲に記す力がない

三日間の休養をした。三日の後、残つた囚人の全部が又同じ方法で惨殺され、刑吏の隊長マリユータ・スクラトフは彼等の死骸を寸断して犬に食わせた。殺された遺族の妻達も遂に引き出され、八十人一緒に綱でしばつて河へ投げ込まれた。

未完

【読者通信】

（投稿歓迎）

吾妻新氏の〝サデイストの精髄〟〝風流猿轡〟〝風流責各態〟等は真に小生の趣味にぴつたりとした完璧の作品です。小生は尋常三年の頃でしたでしようか、日活映画で当時まだ日本映画としては初歩の部に属するウエスタン式トーキーで大河内伝次郎主演の〝丹下左膳〟と山田五十鈴が柱に縛られてもがくシーンを見てから後手に縛められた美女に興味を持ち初めました。吾妻新氏と同様凌辱に主眼を置いた猿轡後手の姿が好きなのです。鞭で滅茶苦茶に打つたり血を出したり腹を断ち割つたりするのはグロで陰惨で好みません。

（東京　S・A生）

○

喜多玲子様へ

貴女の描かれた縛られた若い女の美しさに私はいつもうつとりとしてしまいます。しかし私の不満な点もいさゝかありますので縛り方責め方について少し御願いしてみたいと思います。一、野暮なものは纏つていない方がよいと思います。一糸まとわぬ全裸にして縛り上げたものを描いて下さい。二縄をもう少し厳重にかけてほしいと思います。少くとも二の腕や乳房の上に、三重四重にかけて頂きたいのです。出来れば股にも縄をかけてみて下さい。三、ローソク責め、石抱き、逆さ吊等の責め場も書いて下さい。四、時代物で武家の娘、女侠客の責め場を頼みます。五、その外男の責め場や、男と女を背中合せに縛り上げたようなのをお願いします。

（大阪H・O生）

○

KK通信の宝塚二三氏は完全に我々の興味の百二十%集注することになりました。日本のサド候爵という所ですね。尤もサド氏は古い型の残虐非道ぶりですが宝塚氏は洗練されたる新しきネオサドですな、大体女の子をモノにするだけでもホネなのに、よくまあ、あれだけモノにした上縛らせたものです。初めはブルジョアが金に物言わせてであろう——とヒガンでいましたら、ナント「全然無料のもある」そうで稀代の手腕にイヤハヤ恐れいりました。彼氏の書きぶりたるや、自信タップリ、あふれそうで、さらばこそ女の子も押しきられるのでアロウと納得したる次第——

（小此木闇一）

由紀子のお仕置

大川由紀子

綾子さんと私との奇怪な関係が始まつてからもう三年以上にもなります。それは私の女学生時代二級上の綾子さんに、世間にもありきたりのSとして可愛がられて過した数年の後、偶然の機会から私の肉体の中の悪魔と、綾子さんの肉体の中の悪魔とが握手してからの事でございます。でも、〝奇ク〟を拝見する迄は二人だけの絶対秘密としての楽しみとアブノーマルな女と云う反省に戦いて居りましたが今では安心して皆様に変つた女の告白を聞いて戴きたいと思つて筆をとりました

綾子さんは私の家に程遠からぬ隣町の旧家の末娘で、大きな構えのお宅にはお婆さんと通いの女中さんとの三人暮しでした。私は男兄弟の中の一人の娘ですのでお休みには度々綾子さんのお邸に参つて一日を過して、いまし

編集部の皆様へ

編集部の皆様、御元気でいらつしやいますか、四月号を拝見して先日私の写真をお送りした時のお便りがそのまゝ載つているのを見て本当に驚きましたわ、写真の説明だけの積りで書いたのですのに、でも自分の書いたものが雑誌にのつて居るので何んだか嬉しい様な恥しい様な気持ですわ、素直にお礼申し上げて置きます。で其の御便りでお約束した通りお姉様のお許しも出ましたので別紙の様に二人の記録を同封致します。拙い文章で恥しいんですが笑わないで見て下さいね。只一つ始めから終いまで全部ありのまゝの真実ですからこの点だけは認めて下さるでしよう。

今日は由紀子は磔を受けて今帰つたばかりですの、手首がしびれて巧く書けませんの、若し奇クにのせて頂けたら私達本当に光栄ですわ、でもそんな望みは不遜ですわね、せめて編集部の皆様だけでも、御覧になつて下さいね、お願い、本日同封しましたのはお白洲で判決を受けている由紀子の姿と三宝にのつた首ですの、では何れ又お便りいたします。

三月二十二日

奇ク編集部御中

左様なら
大川由紀子
かしこ

た。

扨て、最初の発端はそんな日曜の一日に起りました。確か六月頃だつたと思います。綾子さんのお部屋で何か本をお借りしようと何気なく本棚から手に取つて見た写真ブックを開いて見て思わず「ハッ」と息をのみましたそれは女の人が縛られて天井から吊り下げられて居る写真なのです。何かの映画のスチールだつたかも知れません。が兎に角皆縛られた女体ばかりです。その後は雑誌の挿画の切抜き、これは画の事とて写真よりもつと無惨な光景でした。

でも今から思えば、その時の私は目をそむけるよりも反対に焼き付く様に見つめて居たのです。やつぱり私の心の中には生れつきマゾの悪魔が居たのでしよう。夢中になつて頁を繰つて居たので綾子さんが私の後に来て居たのも気付かず。

「由紀ちやん、駄目よ、それ見ちや！」

と耳元で云われて〝ハッ〟と本を伏せた時始めて胸がどき〳〵躍り、顔に血が上つて居るのに気がつきました。

「済みません、見ちやいけなかつたの？」

「ううん、そうでもないけど、由紀ちやんには毒だわ。だけど貴女見たいの？見たけりやもつとあるのよ」

「えゝ、是非見せてちようだい。お願いよ、お姉様」

「じや由紀ちやんにも見せるかな、だけど私の云う事何でも聞かなくちや」

「えゝ、なんでも……」

「それじや一寸待つてゝ」

と云つて押入から何か出して来て私の後へ廻つた綾子さんは、

「目をつむつて手を後で組んで御覧」

私が云われた通り手を後へ廻した途端、綾子さんは「アッ」と云う間に私の両手を、持つていた〝しごき〟で縛つてしまわれたのです。

「由紀ちやん、痛かつた？許してね」

と云つて何時もの様に愛撫されると

「うゝん、由紀子嬉しかつたの」

と云つて綾子さんに抱かれました。

その日はそのまゝ帰りましたが次のお休みには前以上に待ちかねた様にいそ〳〵と私は出かけました。綾子さんは会うなり

「由紀ちやん、もう怒つて来て呉れないかと心配したわ」

と云われました。

「お姉様にならどんな事されても由紀子怒らないわ、今日もお姉様縛つてもいゝのよ」

「ほんと、嬉しい」

この時、二人の悪魔は完全に結ばれたのでした。その日はお昼からずつと私は、和服の先に拡げて見せて呉れます。でも私は生れて始めて縛られたのですからもう写真どころでなく、身体中の熱い血が躍つて無我夢中でした。これが他人に縛られたのなら恐怖で一杯だつたでしようが、あの様な写真を見た直後ですし、外ならぬ綾子さんに縛られたのですから一種異様な心境でした。或は一種の歓喜だつたかも知れません。乳房に掛つた紐から身体中に疼きが伝わる様でした。後で紐を解き乍ら

「由紀ちやん、痛かつた？許してね」

と云つて何時もの様に愛撫されると

「うゝん、由紀子嬉しかつたの」

と云つて綾子さんに抱かれました。

その日はそのまゝ帰りましたが次のお休みには前以上に待ちかねた様にいそ〳〵と私は出かけました。綾子さんは会うなり

「由紀ちやん、もう怒つて来て呉れないかと心配したわ」

と云われました。

「お姉様にならどんな事されても由紀子怒らないわ、今日もお姉様縛つてもいゝのよ」

「ほんと、嬉しい」

この時、二人の悪魔は完全に結ばれたのでした。その日はお昼からずつと私は、和服の

上から帯や腰紐で縛られ、柱に括くられて綾子さんの愛撫の中に過したのです。

もうそれからというものは綾子さんのお邸が広い上にお婆様がお寺詣りで留守勝ちなのと日曜は女中さんも居ないのを幸い、休日毎に私と綾子さんの縛りごっこが続きました。綾子さんも時々私が縛って上げるのです。細引や繩を使ったのはずっと後になってからでした。

こうして私達は挿画や写真から色々縛り方を研究し鴨居から宙吊りになったり、立てかけた梯子に縛られたり一回毎に新しい方法を自分達の身体に試みて見たのです。そして私達がお仕置と名づけて居る最初の刑罰はノートルダムの中のエスメラルダの絞首刑を見てからでした。下手をすれば私は首吊りになるかも知れないのも構わず、和服のまゝ後手に縛られて踏台の上で鴨居にかけた腰紐に首を入れ、綾子さんが後から私を抱き緊めて序々に下して下さいました。

初めは気管に当つて無闇に苦しいだけでしたが、偶然頸動脈を締めたのでしょう「じーん」と頭がしびれて何とも云えぬ恍惚境に入り、思わず「あゝ、死ぬ〳〵」と叫びました驚いてお姉様が止めて下さいましたがそれからは何時もこの恍惚境を求め、後に述べる私のお仕置の最後の死の瞬間はこの境地を連想して居ります。それから暫くは専ら絞首刑ばかりで首に斑条が附かないように真綿を入れたモミの布を首に巻いたり、自製のドレスでエスメラルダのつもりになつたり、又その頃から二人で裸体で縛り合つたりし始めました。でも二人共五尺二、三寸で肉体には自信がありますが、余り裸体は好みません。夏以外は大抵和服でこれ等の事をして参りました私が初めて磔刑と云う刑罰にあつたのは次の様にしてでした。

その日は綾子さんから前もつて、変つた事を考えたからと云うお約束でしたので私は胸を期待に疼かせてお訪ねしたのです。色々お話してから扨て何時もの様に私は後手に縛られて次の部屋へ入りますと、正面の「ナゲシ」に釘を打つて太い青竹を横にわたし、中央から真直ぐに別の竹を立て、丁度十の字に し、縦の中程に一尺程の板を竹を抱く様にして前に出る様に結んであります。そして長い帯や細引をそろえ、その前に机が置いてありました。

「何だか判つて？　私の苦心の作よ。」

「判らないわ、でも又苦しいんじやなくつて？」

「大丈夫。後で教えるけど昔の一番極刑だけど、このまゝでは痛い筈はなくてよ。」

「それなら由紀子、思い切つてして戴くわ。どうぞ御存分に。」

綾子さんは私の繩を解いてから、

「一寸待つて、袴を着けて見たら、」

と御自分の緑の袴を出して下さいました。

私は早速袴を着けて云われた通り机の上に乗りますと、丁度板の突起がお尻の処に当ります。其処へ座蒲団を当てゝ腰掛けますと何かに跨つた様な工合でした。そして竹の交叉した処で両脇を帯で縛り付け次に両手を拡げて横の竹にくゝられました。それからもう一本の竹を足の処で横にし両足を思い切り拡げて足首を結んでしまうと

「ハイ、これでお終い。」

と云つて机を取去られました。ぐつと体重が掛つて竹が「ミシ〳〵」としわり、両手両脇の紐がぎゆつと締り、両足には更に拡げる様に力がかゝりました。でも体重の半ばは腰掛けた板に支えられて居りますので、我慢出来ぬ程痛む処はありませんでした。

「あゝ、素敵、大成功よ。由紀ちやんこれがね、昔の磔刑と云うのよ。どう、痛くなく

て？」

「え、まだ痛くはないの、お姉様鏡もつて来て由紀子にも見せて」持つて来られた鏡に写つた私の姿！　それは今迄に私が見たどの写真や画よりも素晴しいものでした。文字通り大の字なりに、宙に浮き出した様な私の身体両足に沿つて拡がつて袴の出す美しい曲線、対照的に両方に垂れた着物の袖、等々……

「そしてね、由紀ちやん。お仕置は両脇やお乳の処を槍で突かれるのよ。」

と云い乍ら綾子さんが物指しで突かれると

「いや〳〵くすぐつたいわ、やめてでもお姉様、私断然磔刑が気に入つたわ、このまゝ暫くほつて置いてね。」

「承知よ。私もこんなに素晴しいとわ思わなかつたわ、今度は私がなるわ、由紀ちやん、貴女裸でそうしたらどうか知ら？」

「そんな恥かしいの嫌よ。でも昔、やつぱり女でもこんな姿にされたの？」

「え〵、そうらしいわ。本にも色々書いてあるわ、佐々成政の娘の鶴姫が栗田口で磔刑にされるなんて出て居るからでも女の時はその貴女の腰掛けて居る台ね馬乗りと云うんだつて。それが無くて両足を揃えて縛つたのよ」

「そうでしようね。私は袴を着けて居るから良いけど、着物だけでは可愛そうよ。」

「じや、私晩の食事の仕度をして来るけど由紀ちやんそのまゝで居る？」

「え〵此のまゝがいゝの。だけど早く来てね。」

私は此の簡単な磔柱の上で夕方までこの上なく満足を味わい乍ら磔られて居たのでした此の様にして私達は色々な刑罰を私達自身に適用して参りましたが今度は気に入つたポーズを写真にして残して置きたいと思い立つたのです。それには今迄の様に室内ではとても無理ですので、綾子さんのお宅の花壇の跡が戦時中から荒れるにまかせてあり、周囲は高い塀で囲まれ誰にも見られる心配が無いのを幸い此処を私達の刑場に定め、二階建の物置小屋を牢屋と拷問屋に決めました。これから愈々本格的な由紀子のお仕置が始まるのです。

大体を先に説明しますと刑場には杭を打つて孔をくり抜いた板を乗せて獄門台とし、首

上ったのが確か一昨年の九月でした。

前日すつかり打合せて置いたので其の紀念すべき日、何時もの様に訪問しますと、その日も首尾よく綾子さんお一人で玄関まで出迎えて下さいました。そしてその場で直ぐ腰縄を打たれてお部屋まで参りました。綾子さんは一寸あらたまつて、

「由紀ちやん、今日愈々本格的にお仕置するけどよくて？」

「えゝ覚悟して来ましたんです」

「じや早速始めましようか」

と、私は綾子さんのお役人に引立てられて牢屋へ参ります、其処で私は裸にされ腰巻一枚で拷問衣に着更えました。そして色々の拷問を受けました。椅子に縛られて打たれたり寝台の上でエビ責の様にされたり、又両足を縛つて滑車にかけ、一気に引き上げられると床から頭まで三尺も離れて宙に逆吊りになりました。

でも私達は責めが主眼ではなく、単にお仕置の過程として行つて居りますので責めの説明は省きたいと思います。それに私は最も憧れていたお仕置に早くなり度いのですから、拷問の途中で私が、

「もうお許し下さい」

と悲鳴をあげますと牢役人は

「深雪、では白状致すか」

と申されます。（深雪と云うのは囚人の私につけられた名前です。）

「いえ、何も存じません。お許しを」

「それでは又責めるぞ」

と、二、三回繰返して責められ、最後に

「はい、何もかも申し上げますからどうぞお許し下さい。」

と申しますと、やつと拷問が許されます。そして罪状（殆んど私は切支丹として処刑されます。）に拇印を捺しますと、縄を解かれて着物を着更える事を許され、そのまゝ牢屋に閉じ込められ、綾子さんは出て行かれます。暫くして綾子さんが又お役人として迎えに来られ私は又腰縄姿でお邸のお庭先に引出されます、お庭には席が敷かれ、私が座りますと綾子さんは縁側に上つてこんどはお奉行様です。この様に綾子さんは捕手から牢役人お奉行、首斬役、後始末の人夫まで早変りの一人数役をして下さいます。お白洲ではお奉行様が、

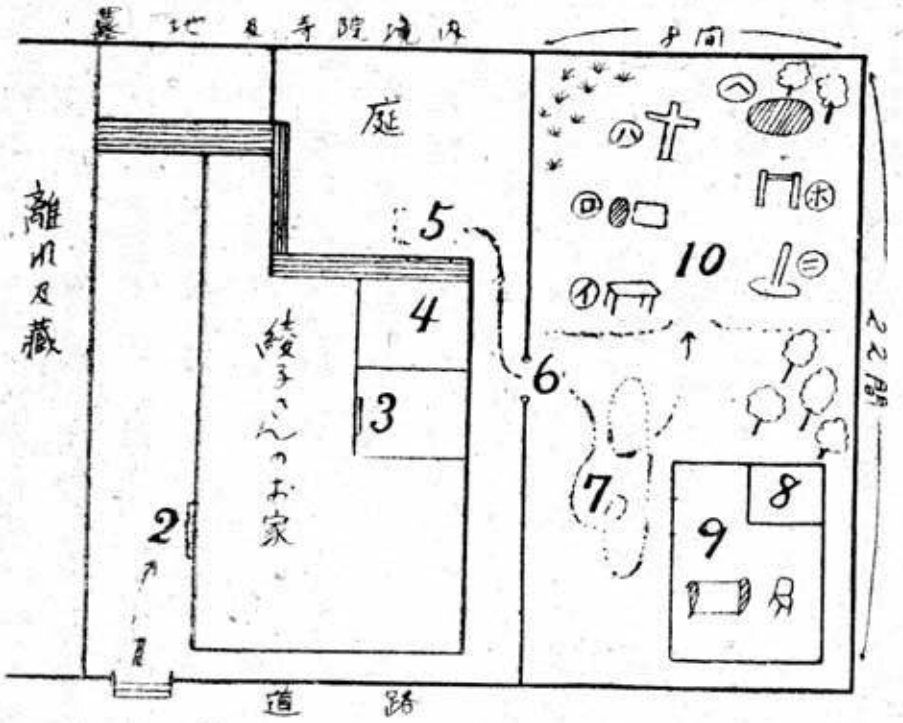
「これ女、面を上げい、名は何と申す」

「ハイ、深雪と申します」

斬台を決めてその前に穴を掘り、又アーチ型に木を組んで絞首台、十尺ばかりの木を立てゝ火焙台としました。最も苦心したのは磔柱です。本当は私が縛られてから立てるのですが女一人では無理ですので、立つた柱に縛られる事とし、五寸角の十二尺の木を探してこれに合つた箱を作り地面に埋めてその箱の中に入れると直ぐ立てられる様にし、横木も女子用として一本で馬乗りもつけませんでした。それから刑場の一偶に大きな穴を掘つたのですがこれは後で申し上げます。拷問室には古椅子や古寝台を置き、又薪を二階に上げる滑車がありましたのでそのまゝ宙吊りや逆吊りに用いる事としました。

刑場の準備と共に本を見て刑罰のやり方を覚え、又普通の着物では屋外では汚れたり、あまり無茶も出来ないので二人で相談の結果白無垢の着物と絣の長襦袢、丈の短い白の拷問衣、それに普通の帯では磔刑や後手の邪魔になりますので広巾の絣の扱帯、それに西洋の囚衣、又「カモジ」で簡単な「カツラ」も作りました、これを着て「お仕置き」になる自分を想像しながら囚衣に針を運ぶ私達の気持、お判りになつて下さいますか知ら？　すつかり準備が出来て最初の公式なお仕置きに

「幾才に相なるか？」
「十八才になりまする」
「罪状を白状致したと申すが確と左様か？」
「はい、左様でございます」
「では刑を申し渡す、神妙に承われ、深雪儀切支丹を奉じ不届至極に付、極刑申し付くべき処、女の身を以て格別の御慈悲に依り引廻しの上磔刑申付くる。有難くお受け致せ」
「ハイ、有難うございまする」



1 門、此処で捕われる
2 玄関
3 最初の磔の場所
4 綾子さんの部屋
5 お白州
6 不浄門
7 木馬引廻す処
8 牢屋
9 待問室 } 二階建物置小屋 } 看守寝台イス等が用意されている
10 由紀子の刑場
(イ) 磔門台 (ロ) 首斬台
(ハ) 磔柱 (ニ) 火あぶり柱
(ホ) 絞首台 (ヘ) 土葬穴

刑が決まると私は臆せずに覚悟を決めます。そこでこの判決文に又拇印を捺しますと今度はいよ〳〵死罪人として高手小手に縛られ、牢屋に入れられてお仕置を待つばかりとなります。

判決までは当日どの様なお仕置を受けるか私には知らさず綾子さんが決められます。

今度は牢役人として綾子さんが牢にお出でになり、私は白装束の囚衣を手渡し、お仕置を受ける注意を色々申し渡され、愈々死装束に着更えました、その時分には私の魂は恍惚として、催眠術に掛つた様にすつかり上気して、もう綾子さんのお役人の云われる通り人形の様に動いて居りました、お引廻しは小屋にあつた車付きの木馬を直して使い、これに本縄をかけられた私が跨つて刑場迄の少しの間を何回も行きつ戻りつ引廻されます。

愈々刑場へ参りました。馬から下された一隅の席の上に座つて俯向いて居ますと

「不憫乍ら愈々そなたのお仕置が行われるが何か願う事はないか？」

と言葉をかけられ

「では支度しなさい」

と、此処で縄を解かれます。そして私は御不浄に参り身仕度を整えます。刑の執行は大体二、三時間もかゝりますので当然の生理要求を果す為と、本当のお仕置の時も最後の時に御不浄を漏らしたら恥かしいとの女心からです。そしてお役人に付添われて目の前に立つている磔刑柱の前に行き、両手を合せて

「主よ、深雪は今御下に参ります。アーメン」

と称え、台上に乗つて両手を拡げます。室内での磔刑の時と違い、両手首を横木に、両足を揃えて縛り、更に太腿を縛られます。こうすれば台を外しても余り下らず又苦しみもありません。目隠しは着ける時も着けぬ時もありますが、刑の執行の実感は一層身に迫りますので打首の時は必ず着けて居ります。お仕置が迫り、執行人になつた綾子さんは矢絣の着物に襷鉢巻の姿で竹槍を持つて処刑を待つて居る私の前に立たれます。

「深雪、お申付通り唯今より磔刑に行う。覚悟はよいか？」

「ハイ、どうぞ」

「では……、エイッ」

と掛声諸共竹槍で私の両脇乳下等を交互に突かれます。ちくり〳〵と槍先が痛く感じる毎に私は実感を出して

「ア、ア、……ウ、ウ……」

とうめき、身をもがきました。十本目位が突かれると綾子さんは

「深雪の仕置唯今終りました」

と宣告されます。すると私は全身の力を抜いて頭も前にぐつたり垂れてしまいます。

これでそれから私は死体となつたのですから身動きしたり声を出したりしてはいけないお約束ですので一切綾子さんにおまかせする時なのです。

刑の執行が終つてからも磔柱の上でそのまゝ一時間、或は二、三時間以上もほつて置いて晒らされるのです。勿論今迄の始めからのポーズはどし〳〵写真にとられて居るわけです。そして晒しの時間がすむと綾子さんに抱かれて柱から下され席の上に横たえられます。そこで再び後手と両足をくゝられますがその時も私は動いてはいけないのです。それから先程申しました大きな穴の処へ抱いて行かれ、穴に埋めた木箱の中へ横たえられます。綾子さんはその箱に蓋を閉め、コモをかぶせて鍬で土をかけます。斯うして私は、完全に地上から葬られるのです。箱には竹で横に空気抜きをつけてありますので相当時間入つていても大丈夫ですが、然し真暗な箱の中で、然かも両手両足を縛られて居り、又地上の物音は何も聞こえず全くの静寂の世界なのです。

今迄幾回となくこの箱の中へ入りましたが直ぐ出して貰えると判つて居ながらこの中の時間が一番長く、又死の実感が胸に迫つてきます。何時だつたか、催眠薬を飲んだ上素裸で夕方入れられた時、翌朝の八時頃に出して頂くお約束が綾子さんの都合で二時間程延びた時等、目が覚めてから声を出しましたが聞こえず、縛られているので身動きも出来ず、とう〳〵泣き出した位です。うつとりと死の世界を想像していた私の真上に突然陽の光がさし込んで、私を現実の世界に喚び起して呉れました。

「由紀ちやん、すつかり終つたのよ。御苦労様、今日の由紀ちやんは本当に可愛らしかつたわ。私はあのまゝ殺してしまいたかつた位よ。」

「私も嬉しかつたの、本当に由起子幸福でしたわ、さあお姉様起して抱いてちようだい」

「ハイ」

×月×日

「今日は綾子さん何をなさるお積りか知ら?」と考え乍ら門をくゞりました。

入口で繩を打たれ拷問、お白洲までは何時もと大差ありません。

「……縛首の上、獄門に処す、死体はお取捨て置かれる。」

「ハ、ハイ。」

そして私（千鶴）は斬首される事になりました。白衣に本繩首斬台の穴の前に引据えられます。綾子さんの首斬役人は本物の刀をすらりと抜いて手桶の水を掛け、一振り水を切つてから俯向いている私の目の前にぬつと突出されました。

「千鶴、首を刎る、覚悟は良いか。云い遺す事はないか?」

「ハイ、有難うございます。どうぞ御存分に遊ばして下さいませ。唯お願いですから目隠しをして膝頭を縛つて下さいます様」

「おゝ、よき心がけじや。望み通りに致してつかわそう」

「有難う存じまする」

準備が出来ると、

「では覚悟を致せ」

「ハイ」

と観念した私は眼を閉じ、首をさし延べます。

「エイッ……」

「アッ！」

そして私は後手のまゝ前の穴へ思い切つて俯伏に倒れてしまいます。それで縛首が終りました。お手打の時は私は縛られずに首を打たれます。次は獄門です。この時だけ獄門台まで歩いて行き台の板に開けた孔にちようど首枷の様に首を入れ、首の周りを赤く塗つて写真を撮つて戴きます。次に写真機と同じ位置で台のみを写し、二枚の写真を台の所で継ぐと千鶴の獄門の写真が出来上ります。

それから再び首斬台の席の上に横たわりますと、綾子さんは私の繩を解き、着物を脱がし、一糸まとわぬ裸にした私を、机の上に藁を乗せた試斬台に置き、木刀で私を寸断されますが私は絶対に悲鳴を挙げてはなりませんそれが終ると真裸のまゝ刑場の一隅の草原の中へ運んで放置されます。これが死体を捨て置きの刑なのです。

火焙りは割木を積んだ上に乗つて柱に縛られ周りを薪で囲み、少し離れた所で紙屑や藁を集めて火を付けます。そして煙や熱気で柱に縛られた私が苦しみ責められるのがこの刑罰です。この時は普通の着物や囚衣、或は裸で刑を受けます。

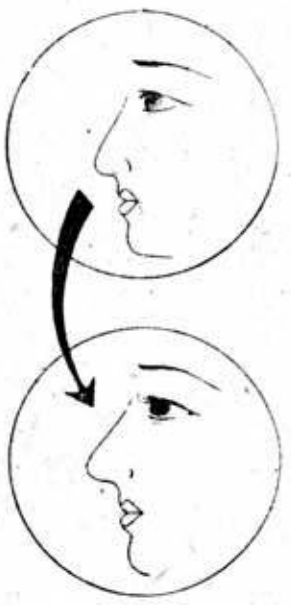
絞首刑は和服或は洋式では「ワンピース」か「ドレス」又は真裸で後手のまゝ両足も縛つて刑台に乗り首に太い綱を掛けられ、この綱を序々に綾子さんが締められます。段々引張られて私が爪先だけで刑台に立ち、目を閉じて失神する寸前に下して下さいます。そして今度は死体として宙吊りになつて晒されます又其の後で土中に葬られるのです。

逆磔や車裂きは、とても女の身には無理ですので未だ実行して居りません。此の告白を御覧になつた皆様の中には男の方でも無惨な刑罰だと嫌がられるかも知れません。でも若い女の身で此の様な刑罰に会うのを無上の喜びとして居ります私にとつては本当に、私達の刑を執行し、又執行される其の姿を最も美しいもの、そして其の境地を、悦楽の極致を信じて居るのです。

では余り長くなりますので、この辺で筆を置く事をお許し下さい。

（終）

美容整形の栞呈



永久不変

術前　術後

内容

隆鼻、短身、豊頬、二重瞼、
わきが、キズアト、はげ、シワ
若返り、肥り過ぎ、やせ過ぎ、
過小乳房、不姙性、更年期障害、
腦下垂体移植

大阪市梅田新道交叉点
東一丁電車道

三山医院

あるマゾヒストの手帖から（一）

沼正三

第一　マゾヒストの詩

普通の詩歌でマゾヒスティックな色彩を有するものは随分ある。そういうのも段々紹介してゆくつもりであるが、ここにあげるのはマゾヒストが純粋にその願望を詩形に托して表現したものであつて、割合珍らしい文献である。文学的にとやかくいうべきものでは勿論ないが、内容において本誌読者諸君に紹介する丈のものはあるであろう。詩の訳は自信がないし、本誌読者層の教養度から考えて、原文を示せば或いはよりよい訳文が得られるかも知れぬと思い、特に原詩をも併せ示しておく。「性科学雑誌」にシュピンナー博士の報告した中にあり作者の名は分らないが、一九二〇年のものである。一読して分る通り、マゾヒストが女主人にあてて手紙代りに書いたもので、博士の解説によると、この女主人はマゾヒスト専門のいわゆる職業的女主人であつたようである。（他の手紙も報告されているが、今は詩丈に止めておく。）

私の支配者なる女主人に
いつでも私にきびしく当られる御方
貴女を見出して私は何と幸福なことでしよう

黄金も宝石もその値打ちは
私の女主人に比すべくもありません
厳しい御言葉と力強い御手とで
女主人の不機嫌はすつかり私に向けられ
彼女は美しくも怒りに燃えて
たしかに奴隷を責め苛なむのです

そして彼をば自分の思い通りに処置しますが
奴隷はそれをじつと耐えねばなりません
彼女が彼に自分の足許に来るように合図すると
彼は彼女の（股間に湧く）泉を飲まされるのです
従順の徳を身につけるために
彼は彼女の（体内に醸された）酒を飲まねばならず
しかも彼女が飲ませようと思う毎に飲まねばなりません
彼女は又彼をいきなり縛り上げ
彼が身動きできぬようにします
まことの苛責はこれより始まるのです

彼の口中へ好き勝手なものを塡め込んで
から
彼女は直ちに彼を馬にして跨り
もつとよく乗り廻せるようにと
彼の脇腹に拍車を当てます
それから彼は足蹴にされ酷使されます
彼女からあてがわれたものはいつも彼に
は御馳走でなければならず
たとえ彼女の体から出たものであつても
彼はそれを美味しい美味しいと味わねば
ならぬのです
奴隷として彼は彼女の私有物なのですし
彼の生命を奪うことさえも彼女には許さ
れているので
彼をどうしようと彼女の気紛れ次第
彼は苦しまねばなりませんが不平は許さ
れません
彼は折檻するのは彼女の権利で
彼は下僕として御仕置に感謝せねばなり
ません
私――奴隷ハンスこそ彼女にとつては
なん時でも心ゆくまで責め虐げられる手
頃の品
拷問も打擲も足蹴も御自由で
私はそういう取扱いに対して崇めねばな
りません
拷問の時彼女は私を嘲笑するのです
妾はお前をどのようにも料理できるんだ
よと
私は奴隷として彼女の玩具に過ぎません
彼女はこのことを奴隷に誓約させている
のです
されば私の美しく誇高き女主人よ
貴女の奴隷は土曜日の正三時に
貴女の御部屋の前に参りまして
呼鈴を押しまする
又例のバラの花も忘れますまい
さもないといきなり貴女の御打擲を蒙る
ことになりますから
それではこの辺で筆を擱きます
どうぞ御返事を下さいます様に

・読者諸君に・

この「手帳から」は、人事百般の事象の中マゾヒストとしての視角から見て興味のある各種の話題を取上げ、間々筆者の体験と空想をも交えて、同好の士に一寸した読物を提供するのを目的としていますが、兼ねて、これからマゾヒズム道に入門される方々のために、マゾヒストとして読んでおいて良い古今東西の作家、作品を、出来るだけ多く紹介することも狙つています（もとより個人の力として甚だ限られた範囲内ではありますが）また読物性を失わぬよう、固くるしい註は一切省きましたし、引用の文献名にも、巻号章節は示していませんが、例えば「第一のマゾヒストの詩は性科学雑誌の何巻何号に載つているか」とか「第五のユヴエナリスの全詩を図書館で読みたいが何と云う本を借りればいゝのか」といつたような篤志の方の御要求に対しては、その都度出来る丈のお答えを誌上で致します。と同時に、博学の読者にして「ここは間違つている」「その話題についてはこんな話もある」とお気附の節は、マゾヒストの共通の地盤を作るために、知識の交換がもつと行われるべきであるとの筆者の意図を諒とせられ、教示の煩を厭われぬようにとお願いする次第であります。

An meine gestrenge Gebieterin
ŭnd Herrin:

Wie glücklich, daß ich Sie Gefŭnden,
Die streng mit mir inallen Stūnden,
Es kann nicht Gold ŭnd Edelstein
Gleich meiner Herrin köstlich sein.
Mit starker Hand ŭnd strengen Wort
Treibt sie mir alle Mŭcken fort.
So schön die Herrin ŭnd voll Glŭt,
Peinigt den Sklaven bis aŭfs Blūt,
Und macht mit ihm,was sie nŭr will,
Der Sklave hat zŭ halten still.
Tŭt sie ihn zŭihren Füßen winken,
Soll er von ihrem Urquell trinken,
Aŭf daß er lerne folgsam sein,
Hat er zu triuken ihren Wein,
Und trinken muß,so oft sie will,
Aŭch bindet sie ihn aŭq der Stell',
Damit er sich nicht rührev kann,
Nŭn Fángt die Peinignng erst recht an.
Verstopft ihm den Mŭnd,mit was sie
will,
Daun reitetnsie ihn aŭf der Stell',
Schlägt ihm die Sporen in die Seiten,
Damit sie ihn kann besser reiten,
Dann wird getreten er, geschŭnden,
Was sie ihm gibt,mŭß ihm stets
mŭnden,
Und soll es aŭch vom Hiutern sein,
Es hat zŭ schmeckKen lhr gauz fein.
Er ist als Sklav' ihr Eigentŭm,
Sie darf ihn sogar machen stŭmm,
Von ihren Lauŭen bängt erab,
Er hat zu leiden ohne Klag',
Zu mißhandeln ihn, hat sie ihr Recht,
Er hat zŭ danken als ihr Knecht.
Der Sklave Hans ist ihr gŭt genŭg,
Zu quŭlen ihn stets bis aufs Blut.
Sie darf mich foltern, schlagen, treten.
Ich habe sie aafür anzubeten.
Beim Folt ern soll sie mich verlachen,
Daß sie mit mir kann alles machen,
Icb bin als Shlav' ihr Spielzeūg nūr.
Sie nimmt ihm dafür ab sein Schwur.
Drūm schöne, stolze Herrin mein,
Am Samstag kommt der Sklaue Dein,
Pūnkt drei Uhr bin ich aūf dem Gang,
Und gestatte mir zū läiten an.
Aūch die Rose will ich nicht vergessen,
Soust soll Ihr Schlag mich sofort treffen,
Nūu möcht' ich meine Zeilen enden,
Uud bitte Sie, das Blatt zū wenden

第11 飲器

マゾヒストの手帖から

もりであるが、ここでは飲器について書こう
私は小学校の時担任の老先生に可愛がられて
早く漢文を学んだ。六年生の時十八史畧を読
まされたが、有名な予譲の故事の条りに、
趙襄子。殺(シ)智伯(ヲ)漆其(シテノ)頭。以(テ)為飲器(ト)。
とある。先生は「頭蓋骨に漆を塗つて盃に作
つて酒を飲んだのだ。」と教えてくれた。と
ころが字書を引くと飲器は「しびん、おま
る」と出ていた。私は今でもこの解釈を知つ
た時のショックを憶えている。酒盃と解すれ
ば飲器とは素直に飲むための容器である。尿
瓶とする解によると、そうでなく、頭蓋骨の
内部の空洞に口から尿を注ぎ込まれる所が丁
度飲んでいる様だというので飲む容器だから
飲器というのである。

頭蓋骨を飲器にするのは死後にも相手に対
して最も甚だしい辱しめを与えようとする意
図から来る。そうであろう、脳髄といういわ
ば人格の座であつた所に、人間生前の最も大
切な秘奥の個所に排泄物を流し込んでやるの
であるから、凡そ侮辱としてこれほど酷烈な
ものはあるまい。

ウロラグニストとよばれるマゾヒストの一族は生きながら貴婦人の尿瓶として使用されたいと夢想するけれども、いかんせん口腔の容積は膀胱に及ばず、しかも排尿は非常な勢で間断なく継続されるに反し嚥下は呼吸との関係で小量を断続的になしうるのみだから、必ず口腔から溢れてしまつて尿瓶としての御役に立ち得ぬのを嘆くのである。この輩にとつて残された唯一の希望は生きてなし得ざりし御奉公(サービス)を死して飯器となつて為すことではあるまいか。豹は死して皮を残しマゾヒストは死して頭骨を留むということにならぬものか。因に近時発表された真鍋呉夫の天命は春秋時代の晋の内乱を扱つているが、この中に「飲器」が出て来る。献公を諫めて殺された家老の頭蓋が添されてもたらされる。公が酒盃にしようかと思つていると、妖婦麗姫が「死骨は人の忌むとこなり、何ぞ酒を盛るを用いん、溲器(しびん)と為さんのみ。」といつてこれに跨つて用を足す姿勢をとる。この小説では頭骨を所謂髑髏盃(しゃりこうべ)になる迄晒(さら)すのではなく皮肉をひからびさせる丈で漆を塗つており、従つて生前の容貌が見分けられるということにして書いてあつたと思う。根拠は知らぬが、そうとすると飲器の凌辱性も倍加するであろう。又逆にその素質の限界も描いたものから決定できるわけだ。

第三　香唾壺

飲器について書いたついでに触れておく。香唾壺というのは「生きた痰壺」である。「情史」に厳東楼の故事として出ている。谷崎潤一郎の「少年」の未節で「吐月峯(はいふき)」におなり。」と女主人公に命ぜられて三人の少年が口を開くのも香唾壺であろう。厳東楼は女中の口を使つた。だから「良い匂いの唾壺」の意で香の字は壺にかかる。マゾヒストが貴婦人に香唾壺として奉仕する時は香の字を唾にかけて「貴婦人の良い匂いの唾をうける壺」と考えればよかろう。

第四　漫画家のマゾヒズム

落語とか漫画とかいうものは人を笑わせる為にわざと通常でない状態を設定する。だから家庭を画くと嬶天下が多い。嬶天下の漫画を描くから実生活も嬶天下だろうというのは少し飛躍し過ぎている。（尤も近藤日出造は恐妻で有名である。）ただ人間根も葉もないことは創作できぬものだから、そういう漫画を描く人には必ず何等かの素質はあるといえよう。又逆にその素質の限界も描いたものから決定できるわけだ。

例えば小野佐世男について見よう。近頃の大衆誌に「男の一生」という漫画を書いている。結婚式後、花婿が結婚菓子(ウエッデングケーキ)を切ろうとすると自分が土下座している首根ッ子を花嫁がハイヒールの踵で押えつけてる立体像の形のデコレーションが用意されているので仰天するのから始まつて、夫が家事一切を押付られ妻が出歩き、おまけに科学の発明で男が出産することになつたり、そうかと思うと妻が他の男の子を生んだり……といつた結婚による男性受苦の漫画である。小野は外にもマゾヒステイックなテーマで描く。例えば男に馬乗りになつた女性。男の首に犬の首輪をつけ鎖で繋いで曳いて歩く女性。この後者の一つとして「百年後の世界」と題した絵では「百年後の世界は全く女性中心の文化となり男性は家畜化されん。」と説明して、丁度犬を連れたマダムのように、小ぽけな男を鎖で曳いた夫人を二人立話させている。男はどちらも夫で、首輪はエンゲージ・リングとして

婚約の時はめられるという。男同志は「ウーウー」、「ウーウー」と唸り合つている。夫人同志は「うちのつたら食べるばかりで全く能なしなのよ。」「うちのもよ。困つたもんね」と対話している。要するに全くの犬扱いである。——すべてこれらは相当にマゾヒステイツクな感じを与える。が私達マゾヒストが見て何かありきたりない点がある。何か。彼の女性は男性的な要素を持つていないからである。例えば男を馬にしている所を何枚描いても女が乗馬服を着ているのは一つもない位であつて、彼の女性は決してズボンを穿かないその女尊男卑は豊満すぎる位に豊満な女体のもつ自然的本能的な力に男性が圧伏されている結果であつて、本来マゾヒストが女性に要求する惨酷なものには触れず、又右のように男性的な面も現れない。ここに小野佐世男のマゾヒズムの限界がある。

　嬰刊したが「ホープ」という大衆娯楽誌があつた。私はそれに連載されていた杉浦幸雄の「アトミツクのおぼん」という漫画が見たさにこの雑誌を開いたものである。この女主人公は美貌の女賊である。小学校に通う子のある大年増であるが、手下の青年を若い燕にしており、自宅の家事一切から、自分の着更えの手伝い、入浴中の三助、浴後の足の爪切り……と青年をこき使い、彼はマメマメしく彼女に仕えている。この情況設定は甚だマゾヒステックである。そしてこういうヒロインを活躍させるには作者自らもマゾヒズムを具えねばならぬ。

　がこれより更にマゾヒステイツクだつたのは秋好馨の「ますらお派出夫会」であつた。これは雑誌連載後単行本になつたし、映画化もされた。（但し映画は全く原作の俤のない愚作であつた。）たしか佐々木邦の小説にも「昭和派出夫会」というのがあつた。それは然し失業サラリーマンを奥様方令嬢方の話相手に差向けるという丈のアイデアであつたが秋好の漫画はそうでなく、派出夫は派出婦の競争者として初めから家事手伝を目的とする下男というよりむしろ、男の女中であり小間使である。

　マゾヒズムの一形態にセルヴイリスムス（Sevvilismus）というのがある。（Sevuile）は奴隷の意で、セルヴイリスムスとは奴隷志望のタイプを指したことばである。）この種のマゾヒストは現代に奴隷制度の存せざるを悲しみ、又男が家事に従事する習俗のない日本という国に生れたことを嘆く。彼等にはダグウツドがブロンデイと交替で附けねばならぬ皿洗いのエプロンが羨ましい。が嬶天下の家庭を作ればそれはまだ可能だ。妻以外の女性に使役されることは現在ではそれこそ殆んど考えられないさてもし派出夫というものが社会的に認められて来たらどうだろう男性と雖も、他の家庭の使用人としてその主婦に顧使せられる機会を持ちうることになる。これはマゾヒストにとつて一つの夢であるがこの漫画は正にその夢を描いているのである。派出夫が一生懸命雑布掛けしているのを奥様と御嬢様が火鉢で茶を飲みながら今度は良い人が当つたわね」と話し合つている図（これが映画では奥様が友達とマージヤンやりながらその仕事ぶりをまあ猫よりは増しだわ。と批評する場面になつている）令嬢の所へボーイ・フレンドがお客に来ている、客間にお茶をもつていつて、令嬢から客の前で作法が悪いと叱られたりその客に笑われたりす

る場面。知らずに傭われていつた新家庭の主婦は自分の破れた初恋の人であることが分りもとの恋人に今は使役される身の上にやけになりながら、その人の破れた足袋を繕い、その人の腹巻を洗濯し、便所を掃除する場面。皆甚だマゾヒステイックではないか。

思つたよりこの項が長くなつたので、ここらで端折る。勿論厳密にいえば、小野について論じたとは別の意味で、それぞれに限界はあるのだが、然し限界の範囲内でも、一応形象化されたマゾヒステイックな姿態や情景を楽しめることはマゾヒストとして、これら漫画家にお礼を申したいところである。（尚横山隆一も終戦後、ミスター・マルクスという絵と文を書いた。これは女代議士の夫だつたと思うが、私生活もマゾヒステイックに描いてあつたと記憶する。）

第五　ドミナ（domina）

女主人の意のラテン語で、独語の Herrin 英語の Mistress 仏語の Maitresse に当るラテン語の教科書（文法書）では第一課か第二課できつとこの単語が出て来る。以てローマ人の生活においてドミナの占めた地位の重要性が分るだろう。ローマの婦人は法律上の権利はなかつたらしいが、実際には結婚後は家庭の実権を握り、殊に家内奴隷に対する権力行使は絶大なものであつた。ユヴェナリスの諷刺詩の中にドミナの冷酷な権力行使を物語るマゾヒステイックな数行があるので紹介しよう。

あるドミナが一人の奴隷が自分の気に障ることをしたというので他の奴隷に向つて「彼奴を磔におし」と命じた。命ぜられた奴隷は躊躇し煩悶した。そのドミナの煩悶がドミナの気に入らない。そこで発したことばを原文で引いておこう。有名なものであるから記憶されるとよい。"Ita servus homoest? Hoc iolo, sic iubeo. Pro ratione voluntas sit.,,（然ラバ奴隷ハ人間ナルカ、妾（ワラワ）ハコレヲ欲（ノゾ）ム、サレバコレヲ命ズ、汝（ソナタ）ノ理性ニ代エテ妾ガ意志ヲ存在セシメヨ。）

第六　畜生道

仏説では地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を考え輪廻転生を説いた。然し畜生道と人間界以外はいずれも次元を異にしているので体験の可能性がない。又地獄の一部は別として大体人間がその人間としての形態をそれほど失わない。だから輪廻転生という観念の内容を本当に豊饒にし実感を持たせるものは畜生道しかないのである。六道輪廻の思想は畜生道の観念によつて支えられているといえる。ところで生れ代り自体は暫く措き人間が畜生に生れ代るという思想は考えて見れば随分奇想天外な所がある、西欧にも支那にもない、印度丈の思想のようである。これについての瞻説を述べよう。印度は熱帯性ということもあつて性的早熟が個体としても早いように、民族としても早くから高度の性文化を持つていたことは、カーマスートラ以下一連の性経の製作年代からも分ることである。そして性文化の爛熟は早くから変態性欲者を生んだのではなかろうか。そうなればその中にはマゾヒストもいたであろう。マゾヒストはやはり貴婦人を慕つて犬畜生として扱われんことを願つたであろう。人間でありながら何故畜生の心を持つのか、これは現代でさえ解け切れぬ問題である。古代印度人

がその理由を前世が畜生であつたからだと解決したとしても既に生れ代りを認めてる以上は当時として合理的な答え方だつたといえよう。これが畜生道の観念の萌芽ではなかつたかと私は考えるのである。

更に一歩進めると、当時の人々の畜生道観念からは離れるけれどもマゾヒストはすべて畜生道に堕している人間とはいえないか。極楽も地獄も心次第で今の此の身と説教する輩はうけたがき人身をうけて生れながら畜生の生活を求める人を見てこれ畜生道と説くに相違ないのである。そう考えると、荒唐無稽な畜生道の思想も恐ろしい真理を藏しているといわねばならない。

尚畜生道観念の萌芽には別に精神病としての馬化狂、狼化狂。（旧約聖書ダニエル書のネブカドネザル王の逸話などを参照。）等が考えられること勿論であるが、ここにはマゾヒズムの見地からの問題とその解決のみを記したのである。

第七　舌

マゾヒストにとつて舌は特殊の機能を持つというのは、マゾヒストはあらゆる点で受動を愛し束縛と不自由を喜ぶのであるが、只舌丈が能動的活動をなすものとして残つてるからである。逆に女性のサデイスト（メタトロピステイン）はあらゆる点で積極的能動的であるに拘らず、自分の舌を使う点について丈は消極的であり、男の舌の活動振りに対してはこれを受動的に鑑賞するのである。以上はヒルシユフエルドの所説であるが、彼をまたずして真理であろう。マゾヒストが舌を大事にするのは精神分析的にいえば睾丸が眼球に転位されて去勢の代りに眼を抉り出すと同様マゾヒストにおいては、男性の能動性攻撃性のシンボルであるペニスが舌に転位されてることになるので、舌を抜かれることに去勢されるような恐れをいだくことによるのであろう。だがそれ丈ではない。もう一つの理由は畜生は舌を大切にせねばならぬということにあるのである。人間の手は少し便利すぎる。犬や馬はこれを舌でやるのである畜生にとつて舌は大切である。仮に私が手も足も切られて床を這い廻るようになつても、舌さえあれば犬と同じ生活はできるのである。舌がなくてはそうはいかない。マゾヒストは自分を犬と等しく考えるためにも舌を大切にせねばならない。

右の意味からマゾヒストの舌は長ければ長いほどよい、それ丈舌の活動範囲が伸びて舌の長い犬に近づくことになるのである。（米国の有閑婦人宛に輸出される犬は鼻が低いほど高価だということを昔犯罪科学誌上で読んだことがある。）体験によると人間の舌も練習次第で伸びる。勿論僅かであるが、伸びることは確かである。支那では宦官には生れつき舌の長い者が志望したものだそうで、西太后に可愛がられた宦官（名を失す）は自分の眉間を嘗めることができたそうである。そして丸めるとパロス同様の固さになつたというマゾヒストが夢に描くのは決してペニスではなくむしろこういう「逸物の舌」なのであるこんな舌を持つて支那史上則天武后と並ぶ美貌の女君主に仕え、夜毎彼女の体をその舌を用いて愛撫し、彼女を愉悦させる仕事に従事したこの宦官は天下の幸福者だつたナと思う

のは私丈だろうか。

第八 ハーネスド・マン (Harnessed man)

人力車夫のことである。私達は子供の時からみなれているので何とも思わぬが、西洋人には人力車は恐ろしく奴隷的な労働に見えるらしい。自動車があるのにわざわざ人力車に乗るGIをよく見たが、これは単に好奇心という丈でなく、多少ともサディステイックな優越感を味わつているのではなかろうか。人間が自分の体力で他の人間の全体重を運ぶということはなる程考えて見れば奴隷的な作業である。奴隷解放前の米国風俗を描いた絵に勿論黒人に車を曳かせている絵がある。中でも二人の奴隷を後手に縛り馬車の轅革をこれに連絡して轅かせ、御者台で貴婦人が長い鞭を揮つて駆り立てているのなどは甚だマゾヒテイックである。ゴーテの植民地奴隷小説を読むと、棉花や煙草を栽培していた大農場内での交通、ことに婦人のそれはその全部を轅馬ならぬ轅奴（Zugsklave）の轅く車に依存していた地方があるようである。人力車は明

初年に日本人が発明したというのが当時どの点にどういう発明がなされたのか私には分らない。（ゴム輪使用はもつと後年である。）いずれにせよ人が人を轅くという本質的な点は同じだつたから、馬か奴隷しかそんな車はもつと後年である。）いずれにせよ人が人を轅くという本質的な点は同じだつたから、馬か奴隷しかそんな車は轅かぬものと考えていた欧人を驚かしたのである。明治十二年日本を訪れた大統領グラントが人力車夫を見て「ハーネスド・マン」といつたというのもそれで理解できよう。Harness は「轅具で馬を車につけること」であるから、「馬具をつけた人間」ということで、聞きようによつては人間を馬扱いしたひどいことばである。グラントはともあれ当時の欧人は有色人種としてこの日本人を米国黒人とそれほど違うものと見ていたわけはないから、彼等が人力車に乗つた時の気持も思い半ばに過ぐるものがある。いや欧人に限らず当時封建身分制思想の残存していた頃の華族、貴族は車夫などは畜生同様に思つていたらしい。岩崎彌太郎はいつも二人挽の車を使つてたそうだが、急ぐ時は車中からステッキや鞭でぴし〳〵車夫を鞭つたそうだ。（それのため車夫の恨みを買つたことがあつたという、生理的必要わる）これでは米国の轅奴と同じである。

それで世の中が通つたのだから車夫の方の人権意識の低さも分るが、もう一つ彼等を家畜視せしめたのは御抱え車夫という制度である。仕事の性質が轅馬の代用品見たいな所へもつて来て、既より少しましという長屋に住まわされ、一家眷属丸抱えで、これで全人格的従属状態が起らなかつたら不思議な位だ。馬も飼つる、車夫もいるという大きな御屋敷で、主人が今日は馬にしようか車にしようかという決定をする時の心の中では車夫と馬とは同じようなものだつたにちがいない。

奥様や御嬢様方にとつても車夫は一個の人格として存在する者でなかつたという例を一つ知つているのでこの項少し長くなるけれど書ておく。私の祖父が明治二十年代に後の某伯爵家のお抱え車夫をしていた当時のことである。奥様のお産が間近になつて手洗いが非常に近くなつた、ところが臨月というのにどうしても奥様が数日の間あちこち飛廻らねばならない事態が発生した、その時奥様は尿瓶を携えて車に乗り、途中で用を足し、祖父にそれを渡して空けさせたという、生理的必要

だから仕方がないといえばそれ迄だが、昔の女子の教育として、男性を、人格を祖父に認めていたらとてもできることではない。やはり車夫は人力車の附属物位に考えていたから平気でそんなことをしたのだろうと思う。尤も外にも車夫はいるのにその数日の外出の御用を全部祖父に命ぜられたそうだから、できればそういうことを一人の車夫に知られる丈に止めたいという気持が働いたろうとは推測されるのである。以上は私が祖父から直接聞いた話である。祖父の話には、祖父の意識しない、しかし私達人権思想のある者から考えると実にマゾヒステイックに思える話がまだいくつかある、いずれ段々に紹介したい。

ボクの責め方余稿

宝塚　二一三　夫

本誌の二三カ月前から映画の中の責の話がよく問題にされていたので近代の責の傑作映画〝縮図〟の事に就いて述べたい。乙羽信子のファストシーンで雪中に脹を全部出しての素足の美しさ、脚フエチシズムのボクにはアッと思わせられた。更に布団むしのシーンに於ける乙羽、少しあばれ過ぎであるが素足がピンピン跳ね廻り足の指の五指が大きく開いての足掻きも又圧感であつた。愈々本格的な責のシーンに至つては将に古今にその比を見ないものである。あの父に助け出される立つた後姿の時の縄目。一本の扱帯による簡にして要を得た高手小手、そして乙羽の指先、そして明確なカメラの動き、近来にない見物。

三月号と四月号に升岡金吉氏の緊縛女優列伝を掲載しましたところ読者の皆様から左の通りの訂正と補足を頂きましたのでこゝに発表いたします。

○丹阿彌谷津子
〝東京のえくぼ〟で椅子に縛られて猿轡をかまされる。
○若杉曜子
〝トンチンカン桃色騒動〟で同じく猿轡をかまされて椅子に縛られる。
○西条茂代子
〝青空浪人〟〝悪人に捕われ囮となる、後手に後手に縛られる
○岸　恵子
〝一番手柄〟〝縛られて敵のとりこになる
○鳳　弓子
〝袴垂れ保輔〟〝後手に縛られ将に落花狼藉
○大和久乃
〝怪塔伝〟〝樹から吊され拷問をうける
○志織克子
〝影法師〟〝さるぐつわをかまされ後手に縛られる
○山根寿子
〝三百六十五夜〟〝強盗に縛られ猿轡を、――
○山本和子
〝豪傑一代男〟でぐる〳〵巻にされて地面に転がされる。
〝緋鹿の子異変〟で右門（嵐寛寿郎）に捕えられるのは山根寿子です。（以上岐阜氏投）
○三条美紀
〝群狼の街〟にて殺人現場を見た為に山村総扮するボスに捕まり地下室に閉じこめられた際、後手に

小手先だけ縛られているのがはっきりと分りました。

○山根寿子

〃緋鹿の子異変〃で殺人犯になり最後に嵐寛寿郎扮する右門に後手に縛られて行く処がありました。

○花柳小菊

〃はだか大名〃の中で、海辺にて原謙作の悪人の為に後手に縛られ船の中に乗せられる場面がありましたが美人なる故、印象的でした

○市川春代

〃神変香麝猫〃の最後、役人に後手に縛られていきました。

○浪路はるか

〃酔いどれ八万騎〃中、金の為に間違つて人を殺し、役人に縛られる。カメラが後から撮したのではつきりと後手に縛られ縄が手に喰い込んでいるのが分つた気がします。

○逢初夢子

〃肉体の門〃にて万才型に縛られて轟夕起子にムチの刑を受けるのですがスチールだけではないと思いましたが如何でしようか。

○月丘千秋

〃矢張り〃肉体の門〃にて轟夕起子に縛られてムチ刑を受く。

○杉村春子

〃若い人〃の中にて小沢栄に酔払つてからみ後手に縛されてゆく紐を乳房の前から廻し、手を後手に廻して縛つてゆくのをカットだし で見せて呉れたのは、私達〃縛られる女〃を研究しているものには絶好の見せ場でした。

○折原啓子

〃銭なし平太捕物帖〃にて悪の巣に入り込んで見破られ、山口勇に支那服のまゝ後手に縛られる。支那服の為に両腕が肩迄暴わで私の好奇心をそゝりました。

縛られた女優たち (三)

三月号に月丘夢路が〃七つの宝石〃中云々とありますが（本には替玉としてありましたが）あの女優は紅朱実ではないかと私は思うのですが如何でしようか。間違いでしたらお許し下さい。

〃群狼の街〃にて三条美紀が客の扱い方が下手だと云つて支配人から叱られている場面の処で隣のカーテンを引いて扱い方の下手な女優に対する私刑場面が一カット出後手に縛られ逆さに吊るされている場面がありましたが女優の名は分りませんでした。

三原葉子の処ですが崖の近くの岩の処に荒縄で縛られて傍に嵐寛が逆さ吊りになる場面がありました。

（以上　斉藤氏投）

☆此の外多数の皆様から御投稿を頂きました。誌上を以て厚く御礼申し上げます。

（編集部）

アブノーマル・フアンタジー

岡田唉子

一

（そのドレスを着た女の靴が美代の肩を二三回軽くける。両手をうしろで縛り上げられ、両足もそろえたまま、まるで荷物かなにかの様に、むき出しのコンクリートの床へころがされていた美代は、一体ここは何処なのか、この女がだれなのか、そしてなんのために猿ぐつわさえ固くはめられた自分を、だれがどうしようと言うのだろうか？美代は、口の中へおし込まれているハンカチーフで、声が出ないことが判っていながら、うめき声を上げた。

女はニヤニヤして

「苦しいかい？。さけびたいんだろ？。でも私だつて知らないんだよ、お前さんを知つてるトミ姉さんが帰つてくれれば、すぐ判るよ。ねえもうすぐさ。それまで可愛想でも、がまんしてもらわなくちやアー」

その女は、言い終るとドアーを閉めて出て行つてしまつた。）

私はそこまで原稿を書いて、ホツト一息ついてペンを置いた。さア、この女をどうして責められ、うめきもだえさせれば良いだろうかと、煙草に火をつけて、ぼんやり考えて居た。その時、女中が客の来訪を告げに来た。私は原稿の

さしゑ　玲子

世界から我に返り頭を上げた。
「どなた」
「仲上――さんとか――」
「どなたかしら?」
「女の方ですが――」
「仲上、?仲上?存じ上げないけれど、どんなお用件なのか知ら?」
「奇譚クラブの愛読者ですが、先生に一度、お話うかがいたくて――とおつしやつているんですが――」
「へエ――」
私はまだ小説を書き始めてから、今に至るまで〝先生〟なんて呼ばれたのは始めてのことで、一寸めんくらつてしまつて
「女つて、いくつ位の方なの?」
「洋装の、まだお若い方で――」
「そう、じやまアお通しして――」
私は余り気乗りもせず、そう答えた。

二

「私、仲上しづ子申します。突然、始めての先生をおたずねしたりして、お許し下さい」
恥かしそうに言う声を聞きながら、私はうなずき、そのしづ子と言う人は見守つた。
丸顔の大変洋装の良く似合う、一寸モデルかステージダンサーの様にも見えるスタイルの良い人で、スカートの下のかくされているはち切れそうな腰と、長いすんなりとした脚線を薄茶色のナイロン靴下に見せている両足には、私は何故かドキリとさせられてしまつた――これは全て私が想像していた人よりも意外に美しかつたからである。
「御用件は?」
と、女中が紅茶をはこんで来たのをきつかけに、私がたずねると
「私、先生の小説の大のフアンなのです」
「クラブの?」
「ええ、毎月、読むのを楽しみにして居りますのよ」
「まア!」
下手な素人くさい私の小説にも、こんなフアンが、それも女のフアンが居るのかと思うと、顔が、赤くなつて照れてしまつた私に仲上さんと言うその人も気安さを感じたのか、
「先生つて、私が思つていたよりずうーとお若いし、おきれいですわ」
「まア、仲上さん、お口がお上手なこと―」
「本当なんです」
と真顔になり、一寸体を乗出して
「私、先生の小説を読む中に、一体この作者は、どんな女の人なのか?一度どうしてもお会いしたくなつちまつて、恥しさも忘れてお邪魔に参りましたの。でも良かつたわ。先生が美いし方で、とつてもおやさしい方なんですもの」
「私、先生つて言われるほどえらい作家じやないわ。止めて下さい先生つて言うの―恥しいわ」
私も笑つて答える。仲上さんは真顔をくずさず
「じや、お姉さまつて申上げてもおよろしい?」

私も仕方がなく、苦笑してうなずいた。
「まアうれしいわ。良かつたわ。来てよかつたわ」
仲上さんは飛上らんばかりに喜こび
「ねえお姉さま」
「なんでしようか？」
「私、ね—お姉さまにね。おうかがいしたかつたの」
「なにを？」
一寸言いどよんでいたが決心した風に
「私、先生が何時もお書きになる責めの小説ね—」
「また先生だなんて——」
「御免なさい。でもとつても素敵なんですもの、お姉さまの小説」
と頬をほてらせながら言う、仲上さんの目は次第に輝き、うるみを見せ始める。私はこの人は人妻なのだろうかと思つた。本当にアブノーマルな喜びを知つているのだろうか。それも私が責めの小説だけを書く女だと知つて来たらしい話ぶりである。私はこの仲上と言う不意の訪問者に心をうごかされ始めて居た。
「失礼だけど、貴女、御結婚なさつている方なの」
そうたずねると仲上さんは急に声をたてて笑うと、
「アラ—それは私がおたずねすることですわ。じやお姉さまは嫌、卑怯よ御自分のこと、おつしやらないで—」
「したわ、一度だけ—。でも今は一人つきり。うそいつわりのないところよ」
私が笑つて言うと、仲上さんは大喜びで
「全く素晴しいわ、お姉さま。感謝しますわ言つて下さつて—。私本当は未婚なの。知らないわ、男の人つて—」
「でもそれで御存知なの責めの？楽しみなぞ、私は人妻でなければ未亡人か私のように男の人に、もてあそばされた女でなければ分らない世界だと思つていたんだけれど—」
仲上さんはうるんだ目で私を見つめたまま、私の側へ椅子を近づけて来て、両手で私の両手をにぎりしめた。私の鼻に外国製であろう強い香水のにおいと、むせかえるような体臭を、あびせかける。
そして——
「お姉さま、それは違う。男なんか知らなくても私は判るわ、お姉さまのお書きになる私たち女性が同じ女性と楽しむ責めの喜びは知つているから——。ねえお姉さま、お姉さまはどつちがお好きなの責める方。それとも責められる方。私は教えてもらつたの、女学生の時に寄宿舎で。上級生だつたわ二年上の——。杉村さんて言う方。今でもおつき合いして居るわ。グループの一員としてだけど—杉村さんはその頃から仲良しグループだなんて言つて五人ほどの人が集まつて居たわ。ある晩のことだつた。もうベットへ入つた私を杉村さんが無理矢理に、杉村さんの部屋へ連れて行つたの。私はもし舎監の先生にこんな所みられたら大変だと、ビクビクしながら、行つたのよ。杉村さんの部居には、そのグループが集まつているのそしてね私は大変なものを見てしまつたの。なにかお判りになる。畳の上に置いてあるベットの足の鉄棒に、だれが縛られているじやないの。それも恥しい裸に近い恰好にされて——あとで分つたんだけど、その人は杉村さんの同級の、みんなからクラスの女神だなんてさわがれている佐々木美智子つて人だつたのには、まつたくおどろいてしまつて声を出すことも出来なかつたわ。すると杉村さん

は、ふるえる私を引張つて入ると集つた人たちに〝この人も今夜からグループよ。でも始めてで逃げ出すといけないから、おさえててね〝私は左右の腕を両方から持たれると〟声を出しちやあ駄目よ〟と言われておさえられたまま、逃げるに逃げられずにいたの。杉村さんは佐々木さんに近づくと乱れた髪毛を引張り顔を私たちの方へ上向けたのよ。お姉さま、私はその時の佐々木さんの顔を、今でも覚えているわ。佐々木さんは青い程に白いきれいな顔へとき色の兵児帯で鼻と口とをおほわれ、その帯が佐々木さんの白い頬へ惨たらしく、くい込み、息するのさえ苦しそうに、上向けられた顔をゆがめて呻いたのよ。杉村さんはそのまま私に〝どう素敵でしよ佐々木さん。〟と言つて佐々木さんの耳に口をあてると〟気持良い〟て言うの。そしたら佐々木さん〝うん〟と帯の下で言つてうなづくじやありませんの。これにはたまげてしまつたわ私。杉村さんは私に〝今夜から私たちのグループの一人になつたんだから、その誓約をしなければいけないのよ。〟と言つて私を縛られた佐々木さんのそばへ引きずつて行き〝女神さまに宣誓するのよ、良い。私の言う通りすれば良いのよ。まず、そのベットから佐々木さんをほどくの〝私は言われた通りに佐々木さんを鉄棒へ結えつけて居る細引きをふるえる手で解いたわ。佐々木さんのすべ〳〵とした乳房と二ノ腕に、はつきりついていた細引のあとが、とつても痛々しかつたわ。でも何故だかその時、なんと美しいのだろうと不図思つたのよ。矢張り私にもそのグループの一員となれる要素があつたのね。私はほどき終ると、うしろ手に結えられ、両足首を縛られた佐々木さんの体を引きずるように皆のまん中へ仰むけにねかせたわ

佐々木さんは苦しみとも喜びともつかない表情で目を閉じていたわ」

私はもう恥も外分も、すでに分らなくなつて仲上さんの話につり込まれて、男を知らない処女だけが知つているこの話に耳をかたむける中に体中が汗ばみ、スリッパをはいた足の裏がねつとりして来るのを知つた。

私はとぎれた話を戻そうと

「それで貴女は、どうしたの?その人を——?」

「言われるままに責めさいなんだわ。私は佐々木さんを責めて居る間に夜が明けて来たの。それでやつと許して帰らしてもらつたのよ」

「それから行つたの?毎晩?」

「ええ、だけど始めは恐かつたけれど、その次もその次の晩も呼ばれて行つてる間に、私は縛りつけられ、苦しみにもだえて呻く女の裸体が本当に美しい、まるでそれは神さまが私たち人間にあたえて下さつた一番美しい贈物だと真剣に思うようになつたわ。そして女を責めることが、いじめることが、苦しませることが、本当に楽しくなつてくると、卒業する時はもうぜつたいにグループから離れられない運命になつてしまつたのよ」

「その方たち今は?」

「佐々木さんは、グループで責められながら病気になつて亡くなつたわ——。それから戦争中に杉村さん以外は居所が分らなくなつてしまつたの」

「杉村さんは?」

「私の近くに居るわ。私と同じく奇譚クラブの愛読者で、お姉さまの大ファンよ。でも私も杉村さんも、まだ独身だけれど駄目なのよ」

「何故?」

「対手がないんですもの。責められる人が居ないんですもの。時々私が責められたり、杉村さんを責めたりするんだけれど、私たちはサジストなのよ。駄目なの、矢張り本当にマゾヒズムの人が必要なの、私たちには——。ねえお姉さま、貴女は責められるのがお好きなんじやないんですの?私も杉村さんも読んだわ、お姉さまと喜多玲子さんとのアブノーマル・ラブレターを。もちろん続篇も熱読してしまいましたわ。それで、私はただそれだけが知りたくて恥しさも忘れて、矢もたてもたまらずに来てしまいましたの。お姉さま、そうなんでしよ。責められるのがお好きなんでしよう?。ね、お願いおつしやつて——」

仲上さんは一息にしやべり終るとバッタリ倒れる様に私の胸へ顔をうずめてしまつた。

三

とう〳〵私は、仲上さんの願いを聞き入れてしまつた。でも書きかけた原稿もあり、三日後の夜、杉村さんと一緒に来て下さいと言つて別れたが、私もあの人たちと同じように知る楽しみなのに、ただそのうさ晴しを小説にしてやつとまぎらわして居た時に、仲上さんが突如、わき出したんだから、三日目と言いながら三日目になつても、原稿は一行も進まず、書こうとすると、コンクリートの床へ縛られころがされて居る美代が私になり、ドレスの女が仲上さんになつて、美代が責められるであろう女が、仲上さんの言う杉村という女になつて、久しぶりに味えるスリルに、ただもう夢心持で私は

三日目の夜を迎えた。

ベルがなり、仲上さんが飛込んで来て

「お姉さま、お連れしてよ杉本さんを——。杉村さん、御紹介するわ。」

私の紹介された杉村さんというのは、仲上さんよりだいぶ年上に見える人であつた。背だけも仲上さんよりひくく、顔もきれいな仲上さんよりだいぶ見おとりがした。ずんぐり肥つたスタイルも悪いし、着ている和服も上等ではない。これがあの話の杉村という女かと思つた時には、げんめつの悲哀を感じてしまつた。

最初に、この杉村さんが来てくれたら、こう話も早くは発展して居なかつただろう。私はその二人の対象に迷つてしまつた。

四

仲上さんは

「さあ、お姉さま良いこと。今夜はいじめて差上げるわ。」

私も笑つて

「良いことよ。かくごは出来てるから—。」

「まア！言つたなア。よーし。ねえ杉村さん、その袋をかしてー」

杉村さんは、だまつてうなずき、ビニールの手提げ袋を渡した。

仲上さんは受取つて開けると、中へ手を入れて

「お姉さま、この中にウンと入つてるのよ、お姉さまを責めるお道具が、ほら麻繩。次は荒繩、次が犬の鎖よ。どうきれいでしよ。もうすぐこれが、そのお姉さまのやわらかい体にくい込むのよ。それから大筆。それから鷹の羽根。革のムチ。それから——」

次から次へ目の前へ並べられて行く責め道具に息をのんだ。

「さア、そろつたわ。お姉さまさえお良ろしかつたら——」

言われなくても、私だつて夢中だつた。

「でも此所は駄目。女中部屋が近いから。二階へ行きましよう。和室も洋室もあるしどんなに騒いだつて大丈夫よ。」

と言つて私は二階へ行こうとすると、今までだまつて居た、杉村さんが机の上の原稿を見て

「読まして下さい。」

仲上さんが

「すぐ来てよ。」

私はどうせ未完の原稿だからよまれたつてたいしたことはないと思つた。そして仲上さんと二人だけで楽しめる望みが出来て

「ええ、ごゆつくり。なんなら私の代りに書いていただいても結構よ。」

「ええ。拝見しますわ。」

読み始めた杉村さんを残して、私と仲上さんは二階の日本間へ入つた。今夜は特別念入りに美しくお化粧した仲上さんの体からは、あの強い外国香水のにおいが私の鼻をついて流れた。

「さア用意して、お姉さま」

「用意つて、どうするの？」

「お姉さまは今から私の奴れいになつていただくわ。良くつて？」

「ええ、でも始めつからひどくしないでねえ、お願いよ。」

「判つたわ。じやお姉さま、私、脱がすわよ着物を—。」

私は立つたまま帯をほどかれ、腰ひもをほどかれ、着物を脱がされた私は仲上さんの手で腰まきだけの半裸体にされてしまつた。

仲上さんは、私の腰ひもをひろつて

「まア、素敵ね、お姉さまのお体。さア両腕をうしろへ廻して、」

私は言われるままに両腕をうしろへまわすと私の両手首は、腰ひもで固く縛り上げられてしまつた。

久しぶりに味う縄の味。私は急にわかれた良人を想い出した。嫌で嫌でたまらない男だつたのに、教えられた責められる喜びだけはどうしても忘れられないのは自分自身でさえ不思議にさえ思つたあの時以来、私は男が恐くなつた。でも男とサッパリと別れた今になつても両手首に残る縄で縛られた時の痛みだけは、今もはつきり私の頭に焼きつけられている。

その痛さと同じ痛さが、また始まつている。縛り終つて仲上さんは私を床の間の柱まで連れて行き

「じア最初は、お望みによりお手やわらかに行くとして、この柱へ縛りつけて上げましよう。もつと柱へよりかかつてー」

と言いながら手提げ袋から、麻縄を取出すと、私の胸から柱へ、ぐるぐるまわして、私の体を柱へ縛りつけてしまつた。仲上さんは私の腰まきのすそに手をかけて見たが

「これはまだ早い。許して上げよう。でも一寸乱した方がー。」

私は無意識に仲上さんの手を払いのけようとした。何故だろう？縛られるために全裸体にされようと自分で思つているのに、私は両足をかがめて逃げた。考えようとする私の両足首には麻縄がかけられた。

「どう？これで、こうやつてこゝを見せてはー。」

と私の太股をさすりながら

「まアどうでしよう。このスベスベした肌はー。すごいようね。フフンにくらしいわ本当にー」

私の太股は仲上さんにつねり上げられ、私は思わず呻いた。

「痛い！」

「お姉さま、喜多玲子さんとどつちが痛かつた？さアどつちなの？言わないとほら、もう一度」

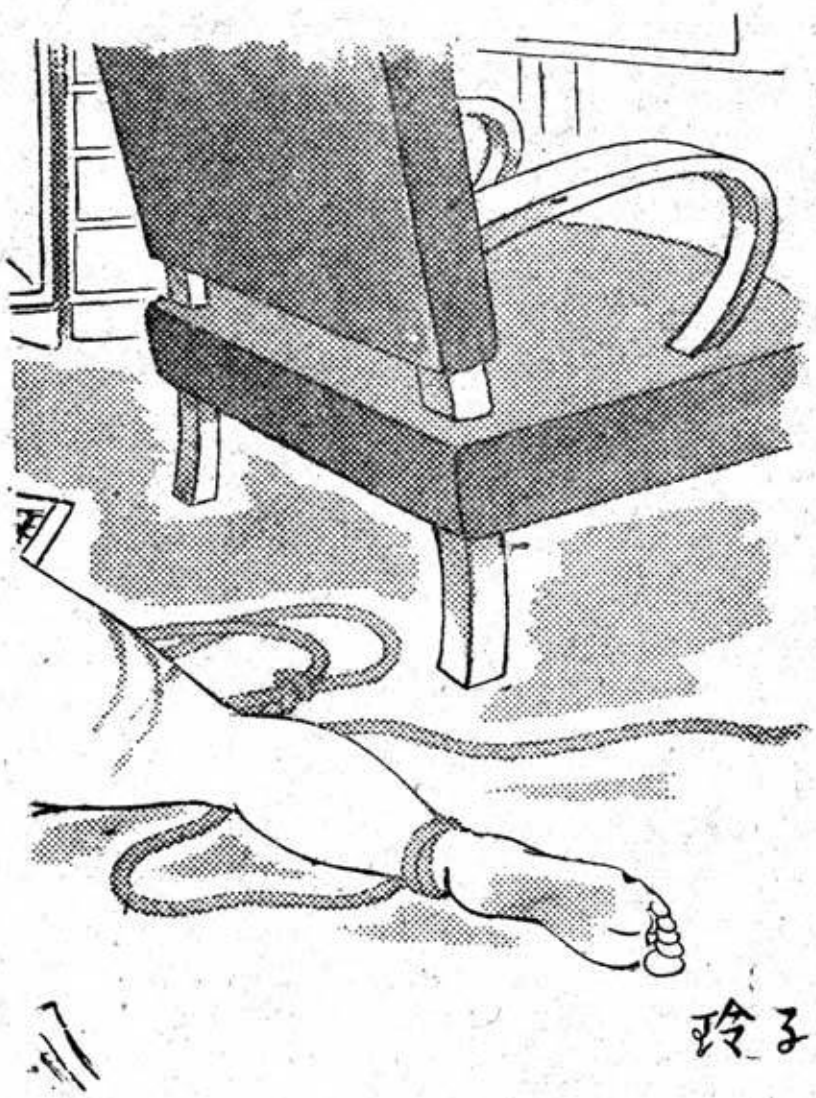
「痛い！」

「そう言つていただけないのね。じや無理にも言うようにして上げるから、ー」

柱を結ぶ縄と、足の縄をほどくと、私は畳の上へ突き倒されてころがつた。

「さアこれからよ。」

仲上さんはスカートを上げ、ガーターをはずして、片足づゝナイロンの靴下をずり下げてぬぐと、片方をまるめて



玲子

「お口を開けて」

そう言つて、私のあごをおさえ、口を開けさすと、それを私の口へかませ、二重三重にまくとうしろで固く縛つてしまつた。私の口へ香水に交つたむせるような足のにおいが、しみ込んで来た。

「これは舌をかまれたら大変だから、こうしたの。一寸言いづらいでしようけれど、まだ大丈夫、声は出るわ。でも言わなければもつと苦しくなるのよ。ねえお姉さま喜多さんつてあの絵の通りにいじめるの?私とどつちが良いの?言わないな。言わないなら、こうして上げようか?」

仲上さんの美しいネトネト汗ばんだ素足は私の乳房の上へ片足かけて、グリグリうごかして、私が靴下の下で、かすかに上げる声をききながら足の拇指にぐつと力を入れ

「どう?参つた?苦しいほらこうやるともつと、苦しくなるわよ」

私は足の裏で、のどをおさえられ、鼻をつまれ、腹をよじられながら

「言う、言う、アーアーもう、もう駄目よ。許して、許して—」

靴下を舌でおし上げてさけんだ。

「そう、じやア許して上げる。」

笑つて私の体を抱き上げて靴下をほどくと、

「私の方が良いのね。」

私はうなずく。

「お姉さまはとつても良い子よ。だからこれから、杉村さんが来るまで、二人だけで秘密の遊びをしましよう、でもこゝ駄目ね鍵がかからないから—洋室へ行きましよう。さア歩いて歩いて—」

私は罪人のように洋室へ引立てられて行つた。その部屋そこは私だけが楽しみを味わい、喜びにひたる部屋。私だけが知つている秘密の部屋。それが始めて他人の手で開けられるのだ。仲上さんはドアーを開き、一歩入つたとたん

「まアー」

おどろきの声を上げた。

そこは私の言わば研究室なのだ。壁には縛られた女。それは私。別れた良人と生活した三年間に、私を縛り上げて、無理につけたポーズで写した写真なのだ。そして、ベットが有る。木馬のような責

め道具もある。みんなどれにも私の汗と油がしみ込んでいる。私は夜になるとその部屋へ入つて行つた。そして、ベッドへねころび、また木馬の上へふせて、私自身で、縛りつけ、猿ぐつわをはめて、その痛さにこうふんし昔を想い出しながら、わずかななぐさめを得ていたのである。でもそれも、今夜人に見られてしまつた。私は目頭が熱くなつた。

「すばらしいお部屋。」

さすがの仲上さんも、ぼんやり突立つているばかりだつた。

五

私は今、杉村さんの手で腰まきなんか取りはずされてしまつていた。杉村さんが上つて来てノックするまで、私は木馬へ両手両足を縛りつけられると、仲上さんは

「私も脱ぐわ。私だつて裸に自信があるの。」

と言つて、素早く上衣もスカートもシュミーズも脱ぐと、パンチーズ一つの姿で、私の縛られたそばへ椅子を二ツ持つて来て、木馬の両側へ置くと、その上へ私の顔を見降すように立つて

「これから見せて上げる、私の全べてを、さアどう」

仲上さんは、私の顔の上で、静かにパンチーズをずり降ろし、片足づつ脱ぐと、それを両手に持ち

「ここに接吻さして上げる。」

言うが早いか、私の口は仲上さんのパンチーズの真中を、おしあてられると、その上を細引きでグルグル縛り上げられ、息をする度に同性の女だけが知る特異なにおいが、体にしみついて居る仲上さんの体臭とミックスされて私はそのにおいをすいつづけた。杉村さんのノックで私たちはハッと我に返つた。

杉村さんは私を見るや、まくれ上つた腰まきをはぎとり

「原稿、よませていただいたわ。そして今から私が解決をつけてあげるわ。貴女はあの美代。しづちやんがドレスの女。私があのお姉さんと言われる女よ。ねえ、その木馬から降して、床板の上へ荷物のように縛つてころがしてよ。」

私の体は数分後には、体中繩でしめ上げられ荷物のように床板の上にころがされた。

杉村さんは肥つた体を椅子に腰かけて

「美代、私は貴女に恋人をとられた女さ。どう思い出しただろあの時の苦しさを今から、お前さんにも味つてもらうよ。ねえ、しづちやん、犬の鎖かして—」

仲上さんの出した鎖を、私の首にかけ、足を腰からうしろへ、まるでえびのように折り曲げて鎖の片方を足首を縛る繩に通して、そのまま鎖と鎖は固く結わえられた。

私の体は、のけぞり、もがけば首がしまる。折り曲つた足の痛さに少しでも足をうごかせば首がしまる。杉村さんの姉さんは、美代にしたてた私の体を見下ろして

「ねえ、しづちやん。革のムチを持つて、力一杯引つぱたくんだ。なにしてるのさ?しないか早く——。」

「だつてそんなことしたら大変よ。息がとまつてしまうわよ。」

「うるさい。じや私がやるよ。」

ピシッピシッピシッと私の胸に、腹に、腰に、腿に、間断なくムチが降りおろされる。

私はその苦しみに呻きもだえた。そのたびに首をしめる鎖は首に

くい込み、あのまま叩かれていたら私は本当に殺されていたかも知れない。

「杉村さん、止めて小説のまねごとなんか止めて！」

仲上さんが私の上へおゝいかぶさつて、さけんだ。杉村さんは大笑して

「これはすばらしい小説の通りになる。しづ子、こつちへおいで」

さけぶ仲上さんを引ずつて、ころがして柱へ縛りつけると

「よくも邪魔したね。」

言うが早いか、仲上さんをけり上げる。なぐる。その度に、仲上さんは悲鳴を上げて、ころげまわる。

私は縛られたままぼんやり見て居た。その狂つた様な杉村さんの姿は、次第に別れた良人に変り、仲上さんの血まみれになつた体はそのまゝ昔の私になつて行つた。私の気は次第に遠くなり、悲鳴と叩くムチの音と、そして私の口をふたする猿ぐつわからもれる異様なにおいだけが、私の全神経を支配していた。それと同時に、私の体中をしめつけている心持良い縄目の痛さに責められる本当のよろこび、そして楽しみを取戻した安心感で、急に深い深い奈落へ引きづり込まれて行くのだつた。

私はそれからどの位眠つたのか、目覚めた時には、ベットの上へねかされていた。

まだ夜が明けないらしい。

私は机の上に目を移した。そこには書きかけの、原稿用紙だけが散らばつていて、何処かで一番鶏がないて居た　（終）

【読者通信】（投稿觀迎）

一、責めの専門的研究誌として永続の方針で真摯な編集に当り名実共に新時代の風俗雑誌として真価を発揮すること。二、創作、告白体験誌のみならず古い文献等を出来るだけ掲載すること、三、責めの写真、口絵を本誌中に多く入れられたし、五月号〃戦後の挿絵に現れた女の責場〃の口絵は良い思いつきです。今度は映画演劇等現れた責めの名場面をスチール其の他で是非紹介して貰いたい。四三月号の女囚私刑体験記の作者に対する註文として特飲街に於ける体験談、特に私刑についての記事発表を望みます。五、四月号の〃風流猿轡〃五月号の〃風流責各態〃は中々一新な傑作です今後も此の種の作品は連載してほしい、六縛られた女の写真について大般に苦悶美に欠けているように考えられるのでこの点について当事者に今一段の工夫と研究を望みたい。私は伊藤晴雨氏の〃女の責場は惨虐美にありとの所説を肯定するものであるが緊縛美がいくら誇張されても苦悶美が此れに伴わなければ本当の責めの魅力は発揮されないものと思う。（沼津I生）

（お答え）

一、二については御希望通りに漸次誌上に現しています。三、についても目下新資料蒐集中です。四、の作者小坂多美枝さんに連絡がとれず弱つています。五、吾妻新氏にはその旨依頼致しましょう六、いろいろ各人好みもあるでしようが、斯界の第一人者伊藤晴雨先生の作品について掲載希望が多いので目下御依頼申し上げて居りますから何れ快心作をお寄せ下さる事と信じます。（箕田生）

○

他の同類の雑誌骨抜傾向の裡に敢然と独自の道を進んで居られる事は心強い事です。さて四月号の開花の契機（信太蓉子）に続く五月号の少年及び女性の切腹（中康弘通）の一貫して流れる女性のマゾヒズムには大変興味を感じました（山下生）

○

中康弘通先生の五月号に於ける作品一寸変つていますね、然し切腹につい只事実だけでは興味が減殺されると思います。矢張り或る程度脚色して小説風にした方がよいと思います。（池野生）

我が告白の断章

須藤律夫

1

霙降る肌寒い二月の夜でした。浅草の或る書店でふと眼に付いた一風変つた珍しい表紙の雑誌、そのエキゾチックな絵に魅せられて思わず頁をめくつた私は、自分がほんとうに永い間求めていた慾求を心の底から満足させて呉れる数々の読物を其処に発見したのです。そしてやがて四月号所載、信太蓉子氏の〝開花の契機〟を読むに到つて、私も今迄の体験を不完全乍らも出来るだけ纒めて発表する決意を固めました。

2

私は東京下町の或る路地裏に、平凡な町の子として生れました。家族は両親と私と姉の四人暮しです。父は以前浅草の公園近くで相当な呉服商の店を出して居たのですが商売に失敗し、その頃は呉服の行商をして、でも一家の者はやゝ平穏無事な生活を送つて居りました。

五つ六つの悪戯ざかりの頃。近所の子供達と剣劇ごつこなどやると私は何時もわざと縛られて、身動きの出来ぬその圧迫感に却つて快よさを感じたり、又或る時は追い詰められた土壇場で美事割腹の真似などやつて除け、そんな事に幼さな心ながら何んとなく快さを覚えては満足して居りました。又私の母は大の芝居好きでしたので、私はよく母や叔母に連れられて芝居見物に出かけました。浅草公園の程近くにあつた宮戸座と言う芝居小屋です。

その頃の私は物の是非も義理人情も殆んど解りませんでしたけれど、舞台で行われる切腹の場面には少なからぬ刺戟を感じました。そして芝居の閉ねた後はその儘家へ帰りましたけれど、翌くる日も、その翌くる日もわざ〳〵宮戸座迄出かけて行き、切腹の看板を眺めては僅かに満足して居りました。今から考えて見ますと演出もの、下題すら判然り覚えては居りませんが切腹そのものが私には捨て難い魅力だつたのでしょう。小学校も平凡な成績の裡に進学して行き確か二、三年の頃だつたでしよう。

国語の予習の時、桜井に於ける楠行父子の別れ、そして正行の切腹未遂を知るに及んで又少からぬ感激と興奮とを覚えた事でした。

3

震災の為め山の手の一角に逃れ牛込区内の或る小学校を卒業した年、私は家庭の事情で日本橋区内の或る貿易商に勤め、傍ら夜間の実業学校に通い始めました。十三才の頃、私のこの奇妙な一つの対象にのみ極度に魅力を感じる習癖は一向に衰えないばかりか却つて激しさを増し愚かしい数々の出来事が起るのでした。勤めて居たのは或るビルの四階、入梅も近い初夏の頃でした。その日は午後から強

い南風が吹き始め、私は独り事務所に留守番をして居りましたが余り室内が蒸し暑いので少し空気を入れ換えようと南向の硝子窓を開け始めたのです。窓は事務所に二つ、南向にあり、陽除けのカーテンがそれ〳〵付いて居り、窓から一尺程離れて大きな出納机が置かれています。思えば私も不注意でしたがふとハンドルに手をかけて開けますと途端に窓は外側に強く押し開き、同時に輪になつているカーテンの端が私の首にかゝりました。

風速二十メートル余りの強い南風にそれ迄少し下がつていたカーテンはずる〳〵と手操られ、恰度風を孕んだ帆の様に強く〳〵私の首を締め上げます。後に逃れようとしても机が置かれていますし声も出せませんまるで風洞実験室の中に喘ぐ様な二、三分でしたがそれでもやつと紐を首から除けると私は夢中で硝子窓を締めました。椅子に腰を下し落ち着いて考えると、この二、三分の間苦しかつたとは言えそれは苦しさと同量の否、同量以上の欣びのあつた事に気付きました。窒息しそうになる圧迫感、それに耐えると同量以上の快感が湧き出て来るのです。そして……

……異様な感触、ふと気付くと私は何時の間にか……して居たのです。（こんな馬鹿気た事があり得るものでしようか？然し現実の私はこの事が寧ろ動機となつて少年の誰しもが辿るであろう思春期の課程へと移行して行くのでした）

4

そのるから私の嗜好は又違つた一つの物に注がれて行きました。それはそのビルの各階にあるトイレット、男便所の朝顔の中に転がつている幾つかのナフタリン、それを手で摘み上げる妙な習癖です。もとより不浄のもの故誰もこんな事する者はありませんけれど、私には何故かそのナフタリンに堪らない執着が感欲求と「摘み上げねばならぬ！」と蔭で叫ぶ大きな命令の声とが聞えて来る感じでした。そんな訳で人目を忍んでは毎日そつと便所に出かけ、例のナフタリンを摘み上げては独り悦に入る幾日かゞ続きました。最初の中こそ摘み上げては直ぐに離して居りましたが私には何故かそのナフタリンに堪らない執着が感じられるのです。そして或る時は摘み上げてはそつと掌の上に置き、暫く眺め、時には激しい執着の余り、そのナフタリンを懐紙に包み、懐深く臍の上辺りに蔵つて置くのでした二、三ヵ月もそんな状態が続いたでしようかやがてその年の秋、再び家庭の事情で勤め先の変つた私は忘れるともなしにその妙な習癖から遠ざかり遂にその儘忘れ去つてしまうのでした。

十八歳の春私は赤坂の或る高商に無事入試をパスして通学する事となりました。四年間の夜学生活に入つた訳です。入学して間もなく春の運動会が武蔵野の一角、豊島園で挙行されましたが、その頃から又私の嗜好は少しくカーブして行くのでした。毎晩の様に放課後残つて応援歌の練習に余念がありませんでしたが、応援団長格のN等双肌脱ぎとなり日の丸の扇を揮つて盛んに活躍して居りました。Nは身長五尺四寸位、体重十八貫近くの相当良い体格をして居り餅肌とでも言いますか裸の上半身は乳房すら盛り上つてほんとうに美しい肉体でした。皮下脂肪の豊かに漲つた腹部は適度の緊張を見せて、その中央部にはゴマを一杯溜めて真黒な臍の穴が、奥深く鎮座しています。――銀盤上に墨の滴とも見るべき臍の上通り云々――私は村上浪六の言つた臍の形容詞を髣髴として想い出しました。肉体の、それも腹部への限りない郷愁――それは私にとつて堪らない魅力だつたのです。

その事が強ち契機ではなく、それ以前からも私は豊満な人体の腹部、殊に皮下脂肪の豊富な女性の下腹部や、その美しさを益々強調する深い〳〵臍の窪みには潜在的な嗜好心を抱いて居りましたが、学友Nの事以来、それは更に〳〵熾烈なものと変りました。或る時は日赤の博物館に出かけ、姙婦の解剖図面、懐胎の腹部標本、及びその断面など、じつと眼を凝して眺め入るのでした。又或る時はデパートに開催される衛生展覧会（時には何の満足も得ないで、空しく帰る事もありましたが）などにも雑踏に紛れて彷徨し、秘かに慾望を満すのでした。又こんな事もありました。それは日曜の度毎に神田の古本屋街に出かけ私は主として医学書、それも解剖学や、産科、婦人科、外科（殊に腹壁の切開や、虫垂炎の手術等）極く限られた、自分の嗜好に迎合されるようなもののみに読み耽るのでした。中でも極彩色の解剖図譜相当に迫真力があつた様に思います。又同じ頃、勤めの余暇（主にそれは昼休みの時でしたが）私は銀ブラの傍ら近くのK画廊に立ち寄るのが日課の様になりました。勿論内外の名画もありましたけれど其処には私の欲する（心から独占したい様な）幾つかの塑像があつたのです。中でも入口の近くに飾られた等身大の裸婦の石膏像には大きな魅力を感じ、無意識の裡に鼓動の高鳴るのを覚えました。それは一見平凡な裸身でしたけれど、乳房はもとより鳩尾の辺りから下腹部に到る曲線の滑らかさ、恰でゴム毬の様に緊張し尽した腹部、そして曲線はそれ〳〵裸身の上を走り少し〳〵仰向いたお臍の穴へと注がれています。その大きなお臍の中を覗くと、其処にはゴマの筋迄刻まれていて私には又と得難く蠱惑的に感じられるのでした。

さて神田の書店街を読み漁つていた私は間もなく通学の余暇を盗んで、日比谷の図書館に通い始める様になりました。それは図書館の方が一般の書店よりも判然と区分してあり従つて索引も楽ですし、それに好きな本を探すのにも何かと好都合だつたのです。けれど其の頃から私のこの奇妙な性癖は更に〳〵募つて行き、一方軽度の露出狂的な傾向すら露わして行くのでした。——未完——

切腹問答

中原弘通氏へ

中康弘通氏の「切腹史談」（三月号及四月号連載）を面白く読ませて戴きました。

切腹の意義とか作法に関しては、新渡戸稲造氏著「武士道」と加えて二度目ですが、今度の御説では、自己加虐のマゾヒズムの点から観察せられている点非常に面白いと思いました。然し私は新渡戸氏の「特に身体の此の部分を選んで切るのは、之を以て霊魂と愛情との宿る所となす古き解剖学的信念に基くのである、云々、かゝる信仰は単なる迷信では無く、心臓を以て感情の中枢となす一般的観念に比して科学的でもある、日本人は（この臭骸のいずれの醜き部分に人の名が宿るか）を僧に聞かなくても、ロメオ以上によく知つていた、近世の神経学者は腹部脳髄、腰部脳髄と云うことを云い、これ等の部分に於ける交感神経中枢は精神作用によりて強き刺戟を受けるとの説を唱える。この精神生理学説が一度び容認せらるゝならば、切腹の論理は容易に構成せられる、我はわが霊魂の座を開いて君にその状態を見せよう、汚れているか、清いか、君自らこれを見よ」と云うこともマゾヒズムの中に織り込まれるべきではないかと考えます。

次に腹を切る方法ですが、義経、並に忠信の場合には「上腹部に刀を加えられたらしい

事」とあり、これはよいでしようが、後世の整斉期に於ける作法の所で「左手で三度腹を撫で下し、臍下一寸でもよい、深さは三乃至五分」とありますが、はかまをつけて果して臍下一寸の所がうまく切れるのでしようか。

又「深ければ刀が回り兼ね、又腸が流れて見苦しい」とありますが、一文字に切つた丈けで腸が流れ出すでしようか、例えば、滝善三郎の例でも、深く刺し云々、とありますがそのような事は書いてありません、私は矢張り腸が自然に流出するのではなくて、手繰り出すようなみにくい事をさせぬ為、ほんの切りきずを残す程度にしか切れないように、三分乃至五分という事になつたと思いますが如何ですか。

以上に対して、中康氏の御考察を御願申上げます。尚少年婦女の切腹、文芸と切腹に就ての稿を御待ち申上げて居ります。

（奇譚クラブ愛読生）

下腹部は臍下丹田とも云われ、こゝに刀を加えるのは、赤心を吐露し、真情の所在を示す所以、との解釈が、戦時中の講談倶楽部に記され、又、中正夫氏の「切腹殺法記」にも此の意味の記述が有つたと記憶します。

是は最も素朴な解釈でしよう。新渡戸博士が「愛情」の一項を加えられた事は、拙稿に重要な影響力を与えて頂きました、拙見は従来の研究に慊き足りず執筆したものですが、元より研究には真の完成はあり得ず、発表も亦進歩人の一階梯と存じ敢て諸兄姉の御参考に供した次第、御愛読甚だ嬉しく有難く存じます、ただ現実の切腹が殆ど廃れた今日、尚文芸演劇に於て屢々、主題とされて居り、又四月号の「開花の契機」昨年八月号の「自虐淫楽」の如く、切腹願望（高橋鉄氏命名）なる日本人独特の異常性心理が立証される以上切腹は極めて衝動的なエネルギーのサドマゾヒスチックな顕現、と解する事が却つて可逆的に切腹の思想を跡付けるのではないでしようか。

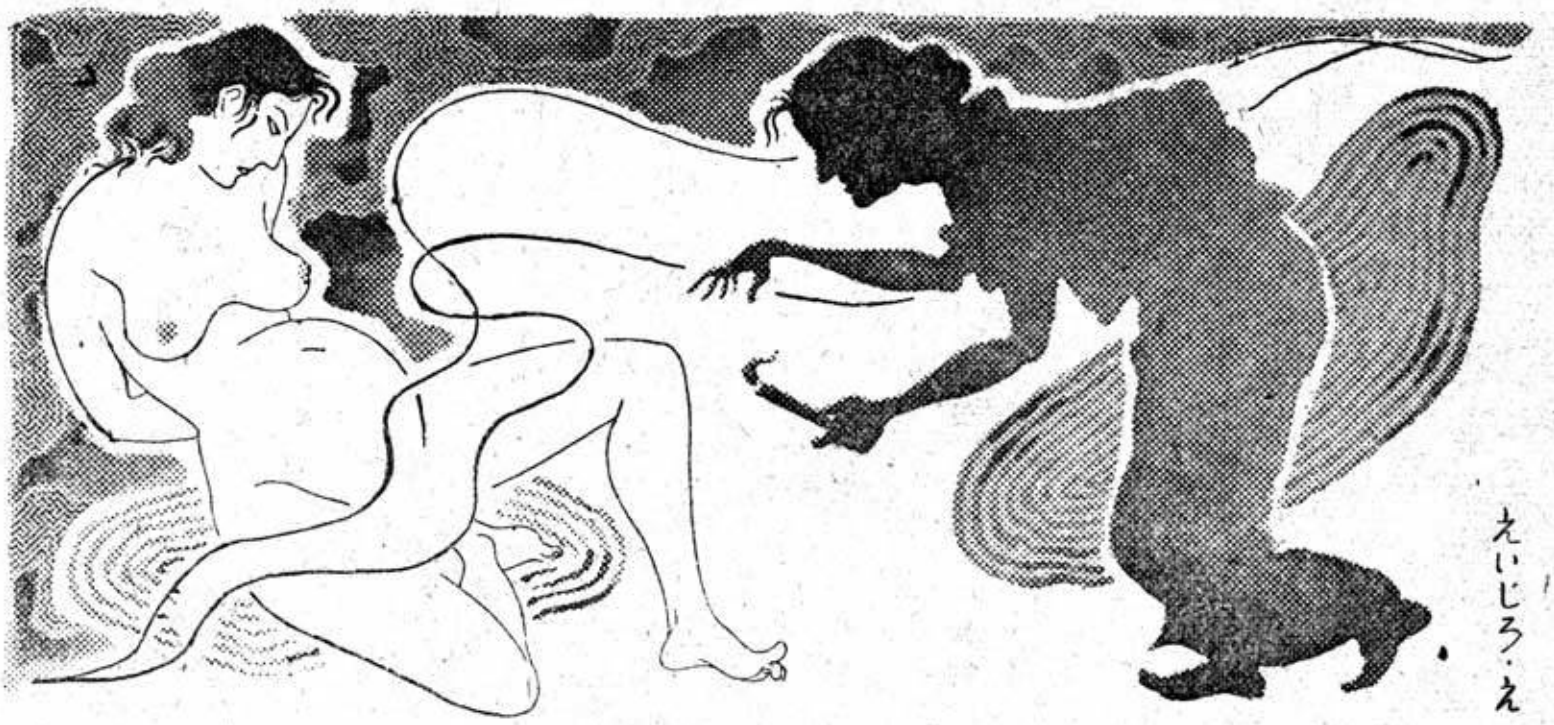
次に切腹の方法は、拙稿に脱落が有つた事を深くおわび申上げます。即ち、「臍上一寸又は臍下一寸でもよい」が正しいのです。

臍下を切る場合は、滝善三郎は腰の辺りまで露わした、とあり袴の紐を押下げたものでしよう、当時の草子類を見ても悉くと云つてよい程に臍下まで露出しています。（西鶴の「男色大鑑」挿絵参照）浅く切るのを尊ぶのは江戸時代に入つてからですが、一般に腹は縦に切ると腸が流れず、横に切つて腹膜を破ると、小腸が流出する様に、法医学の方面でも聞いて居ります。「土佐偉人録」所収の、弘瀬年定の曰く、先ヅ刀先ヲ浅ク左腸ノ下部ニ突立テ、キリリト右ノ腹へ一文字ニ引キ廻シ、即チ刀先ヲ斜ニ刎上ゲ、其手勢モテ一思ニ左乳下急処ヲ刺サバ、腸ヲ破ラズ血出ルコト少ク、直ニ絶息スルモノナリ、とあります又、長州の長井雅楽が幕末に切腹した時は深く切つたゝめ、大層血が出た、という事です。次に千代田の刃傷で有名な松平外記は、余り深く腹を突いたゝめ、刀が引廻せず抜いて又突き立てた、という事です（甲子夜話）直木三十五氏の「由比根元大殺記」「勘平腹切」久米正雄氏の「天と地と」等も御参照下さい。

切腹の研究文献目録は、山名正太郎先生の「自殺について」の巻末にも出ていますが、何れ紙面の都合つけば、本誌にも他日発表させて貰う心算です。

尚、読者諸兄姉の御批判御感想をお待ちして居ります。今後の研究発展の為にも御協力お願い申上げます。

（中康弘通）



えいじろ・え

責苦

竹谷十三作

夕起子は、今迄信一から度々結婚して呉れと申込まれたが勿論彼を眼中に置いた事は一度もなかつた。遊び人で若い時羅つた罹丸炎のため子供をつくる事さえ出来ない男等、自分の様に美しい女の相手には不足過ぎると思つていたのだが、さて、信一に恋人が出来てその女と結婚されてみるといやな気持になつた。

夕起子は、五年も前から、親子三人—母親と大学を出て、ヨタ者になつてる弟と二人を連れて信一の家に世話になつて居るのだが、さて、そこに、別の女が信一の妻となつて入つて来る事は、心から憎悪を感じさせるものがあつた。

信一は、湘南の淋しい山に、大きな家をもつて、金物商売で金廻りもよく、親類も東京には一人もない気軽さで、家計すべてを、夕起子と母に長い事まかせてあつた。そこへ、妻なる女が入つて来る事は、夕起子の一家には、我慢のならないものがあつた。前にも言つた様に、信一は夕起子に何回も言い寄つて来たが、夕起子が、ガンとして相手にしなかつたと言つたもの丶決して、二人の間に、肉体的関係が全くなかつたわけではない。夕起子だとて処女ではなく、信一の他に幾人もの男を知つて居たし、もう三十に手の届く円熟し切つた女なのだから。

信一は、夕起子に結婚を拒絶されると、案外あつさりと、外の女を次々に相手にして居た。その信一が、遂に、身も心も打ち込む女

が出来、結婚する事になつたのだ。

信一の妻になつたスミは、信一の取引先で女中をしていた女で、孤児同然の身の上だつた、スミは二十五ではあつたが、娘々した小柄な可愛らしい女だつた。尤も、色好みの信一の目にとまるだけあつて、小柄でやせ型ではあつたが、乳房の驚く程大きい、腰や尻の肉のしまつたぽつちやりとした身体つきをして居た、兎も角、スミが来た事は夕起子一家、特に、彼女にとつては、大きな動揺を起させた。

しかし、初めの半年程は、まあ、何でもなかつたが、信一夫婦の仲のよいのを見せられて居る夕起子の気持は、次第に、変つていつた。スミのやる事なす事が、夕起子の感に触つた。母親の桂子も、そうであつた。夕起子の母親桂子は、五十に近かつたが、芸者上りだけに、水々しい若さをもつて居た。二人は常に、スミの事では共同戦線をひいて行動した。スミは、優しい気持の女だつたのでこの二人が、どんなにひどく当つて来ても夫に話さなかつた。夫の恩人の一家と信じて居たからだつた。この事は、信一が、夕起子一家を紹介する時言つた冗談だつたのだが、スミは本当だと信じて居たので、夕起子の母親を信一の母親の様に、お母さまと呼んで居たのだ。

ある春の夜だつた。夕起子は湯上りの体を鏡にうつしながら、しみ〴〵と考えた。処女の様に固く盛り上つた胸乳、あぶらの乗り切つた腰、少し胴長ではあるが、たつぷりとした大柄な白い肢体——

「フン、こんなに美しい姿が、あんな女に負けるもんか、よし……どうするか見ていろ。必ず、信一をあの女から奪い取つてみせる。いや……それだけではない、あの女の肉体を二目と見られないものにしてやるから……」

そんな事を考えて居ると、夕起子は、今迄感じた事のないいらだゝしさを覚えて来た。

「夕起子さん、もう、入つてもよろしいでしよう」とスミが入つて来た。「えゝ、もう出るわよ」と夕起子は、さりげなく言い乍らジロッとスミを横目で睨んだ。スミは、洋服をぬぐとニッと微笑を浮べて風呂場に入つた。小麦色の若々しい肌、大きなふつくらした乳房。夕起子は、スリップをつけながら心の中で言つた。「あの大きな乳房が憎い。必ず、見ていろ。じわ〳〵と苦しめてやろう……」

その夜から、夕起子は、スミを苦しめる方法をあれこれと考え出した。「そうだ。時々しか帰つて来ないが、弟の健に、スミを慰ませてやろう。それも知らないうち……よし、いゝ方法だ」と夕起子は、美しい顔に冷めたい笑いを浮べた。

機会を待つた。信一が商用で関西に、二三日行つて留守になつた。丁度、折りよく健が家に居た。夕起子は、母親や健とも相談をした。二人共大賛成だつた。その晩、スミの知らぬ間に食後のコーヒーに混ぜて睡眠剤を飲ませた。そして、スミが眠りつくと、健が、スミの室へ忍んで行つた。夕起子は、朝早く健を呼んだ。

「どうだつた」

「大成功さ、一晩中、楽んだよ。いゝ女だねあれは、俺一人で楽んでは、もつたいないよ」

「気がついたらしい？」

「さあ、朝方の時は、半分ねぼけて、信ちやんだと思つて居たらしいが、大丈夫気がつかないよ。」

「ホホホ……いゝ気味、今夜もどう」

「うん、今夜は、俺だけでなく、俺の親友を連れて来よう」

「信用出来る人でなければ困るわよ。大掛りの仕事なんだから。」

「大丈夫だよ、仲間の松坊さ」

「あゝ、松本さんならいゝわ、面白くなつたわよ、本人は知ぬが仏さ」

スミは、何時になく八時半まで眠つてしまつた。昨夜は、何となく寝苦しかつたし、朝になつても頭が痛かつたが、まさか自分がこんな事をされて居るとは思いもつかなかつた。次の晩も、前より多量の睡眠剤を、頭痛の薬と言われ飲まされた。

こんな事があつてから、時折り、信一の留守に、そんな事を繰り返えされて居た。しかし、或日の事、スミは、自分の知らぬ間に、右の乳房にキッスマークのあるのを発見して驚いた。そしてこんな悪戯をするのは健の仕業に違いないと警戒をし始めた。しかし、もう遅かつたスミは姙娠して居たのだ。でも、スミは、夫が子供をつくる能力がない事は知らなかつたので、夫の子供だとばかり思つて居た。

スミから姙娠した事を知らされて驚ろいたのは、信一だつた。「変な事があるなあ、俺は子供をつくる能力はないと思つていたのだが」と半信半疑で居た。しかし、人間は、誰でもよい方に解釈するもので、信一も、始めは、矢張り自分の子だと思つて喜んで居た。

夕起子や母親は、たゞ黙つて時の来るのを待つて居た。信一を喜ばせば喜ばせるだけ、失望が大きくなるからでもあつた。信一の居ない留守の時は一日中、二人は女中の様にスミを酷使する事だけで満足して居た。六ケ月七ケ月とスミの腹は大きくなつた。臨月になつた頃から、夕起子と母親は、事ある毎に、スミに男が出来た、いや、前から男があつたらしいと信一の耳に入れた。

ある日、再び信一は、二日程家を留守にした。帰つて来た晩、夕起子は何時になく美しく飾り、信一を自分の部屋に呼んで囁やいた。

「矢張り、確証を見うけた事よ。奥さんはね昨夜、男と逢つたのよ。第一、朝、洋間の窓が開いてたし、それより大切な事はね、私、風呂で見たけど、奥さんのお乳の上に、キッスマークがあるわよ。あんたは知らないでしようけれど、」と夕起子は、コケテッシュな笑みを浮べて言つた。信一は、グキッとした洋間の寝室に帰ると、ベジヤマに着更てるスミの肩をぐいと引いた。

「おい、胸を見せろ！」

スミは、ハッとして、右の乳房を手で押えた。この仕草は、信一を怒らせた。ぐいと、胸を開くと、ある。褐色に美しく色づいた乳輪の上のところに、赤紫色の斑がある。

「この野郎……男をつくつたな！」

と信一は、力一杯にスミの肩を打つた。

「アッ……あなた…」

「何が、あなただ！、誰だ、相手……」

と激昂した信一は、スミの髪の毛を摑むとベッとの上に倒した。

「知りません。そんな……、私は、男なんかあなただけしか知りません」

スミは、余りの事に、気も顚倒して叫んだ。その様子が、益々、信一を怒らせた。

「昨夜、どうした。こら、誰と寝た！言え！貴様は！」

と信一は、力一杯髪の毛を引いた。

「アッ、あなた、アッ知らないのよ。ぐつすり眠つたの、朝の九時まで！」

「この野郎、どうしても白状しないナ」

洋間から聞えて来る叫び声と悲鳴を、夕起子と母親は、二階で聞きながらニヤリとした。

翌日、ぐつたりとした青い顔で、信一が現れて来た。夕起子は、いそ〳〵と茶の間に迎えた。

「どう白状した。しないでしよう。あの女は

とても強情なのよ、お母さんも私も手を焼てるのを解つたでしよう。どうしてる奥さん」
「裸にして縛つて来た。白状するまで責めてやる。」
「そんなに急にしても駄目よ」
「あいつ腹の子は、俺の子でない事もハッキリしたよ」
「そうね。あんたに出来るのは不思議なものさあ、会社に行くのでしよう」
「うん、スミの奴、逃げない様に見張つて居てくれ」
「えゝ大丈夫よ、私達が監視して居るから」
信一が会社に出て行くと、夕起子は、洋間の鍵を開けて、内に入つた。スミは、髪を乱して、裸のまゝ後手にベットの足に縛られて居た。
「フン、いゝ姿ね、自業自得よ」
「まあ、夕起子さん、あなたもそんな事をおつしやるの……」とスミは泣きはらした黒い瞳で、うらめしそうに夕起子を見た。
「さあ、そんな事はいゝから、私が解いてあげるからスリップを着て、洗濯をして頂戴。洗濯ものがうんとたまつているからね、洗濯が済んだら前の様に縛つて置くわよ。信ちやんに頼まれて居るのだから。あんたが逃げない様に、私達で見張つてるのよ」
「私は、逃げたりしない事よ、身に覚えのない事ですもの」
「ホホホ……大変強い事を言うのね。さあスリップだけ着るのよ、洋服は着せないわよ。スリップだけなら、この寒さに、逃げられないものね」
と夕起子は愉快そうに笑つた。
一日中、スミは、二人に酷使され、夕方には、前の様に裸にされベットの足に縛られた

信一は、遅く酔つぱらつて帰つて来た。そして、気の済むだけ、スミを打つたり蹴つたりして、ぐつたりと床に倒れて寝てしまつた。こうした日が四、五日続いたある朝、夕起子は信一に親切らしく言うのだつた。
「ねえ、信ちやん、そう毎日、奥さんを責めて居たら、第一、あんたもお仕事に差支えるし奥さんも倒れるわよ。奥さんの事は、私達にまかせて呉れない。」
「うん、俺は、どうしても白状させる気なんだ」
「そうよ、それは解つてるわよ。でも、あんたの奥さんの様な強情な女は、じわ〳〵と責めるのがいゝの。あんたの様に唯、打つたりんるだけでは駄目よ、私が必ず白状させるから、奥さんの体は、私と母にまかせて……」
「よし、どうでもして呉れ、あれがすみませ

んと白状しなければ殺してもいゝ」

「ホホホ……殺人なんていやよ、私のは、気長くやるのよ。半年、一年かゝつて」

「何でもいゝ、君にまかせる」

「では、奥さんの事について、何をしても、文句なしよ。」夕起子は、惨忍な笑いを唇に見せて言つた。

「いゝとも、約束する」

「では、第一に、奥さんは、今夜から土藏の方に母と一緒に寝る事にさせるわよ」

「俺は、どうするんだい。」

「あんたは外で遊べばいゝでしよう。事件が片づく迄……」

「君は、来くてれない?」

信一は、まぶしそうに夕起子を見た。」

「そう、あんたの態度がよければね、まあ、当分、独身を楽しみなさいよ」

その日から、スミは土藏に入れられた。そして、公然と夕起子や母の責め苦を受けねばならなかつた。弟の健は、その頃、情婦の所へ転げ込んで同棲生活を始めたので、家の中は、昼間は夕起子達の思うまゝになつた。スミは逃げるからと一日中半裸の姿で、重労働をさせられ、少しでも反抗すれば、昼間の間から土藏の中で夕起子の母親から責められた時には、天井から逆さに吊られたりした。

「どうだい、白状したかい」と二、三日毎に信一は夕起子に聞いた。

「とても強情よ、今夜も、これから責めるけど、見に来る。」

「うん、久し振りだから、見学させてくれ」

信一は夕起子に連れられて土藏に入つた。丁度桂子がスミを責めて居る最中だつた。スミは床の上に素裸でねかされたまゝ、両足は細引で固く縛られ、両手も後手に足と一緒に縛られて居た。そして、大きな両の乳房にも幾本も細引が喰込む様に縛つてあり、唯、臨月の腹だけが、大きく波を打つて居た。

「あゝ、信ちやんかい。私も、この女には、ほと〳〵手を焼くよ」と桂子は、側に坐つて煙草を吸つて居た。

「あつ、あなた!助けて!」とスミは、髪を乱した首をあげて信一の方を見た。

「何が助けろだ!それより白状しろ、腹の子は、誰のだ!」と信一は、足でスミの腹を蹴つた。

「あなたの子です……本当です……信じて」

とスミは叫んだ。

「莫迦俺の子じやない。教えてやろうか俺は本当は…」と信一が言いかけた時、夕起子が大きな声で、「信ちやん駄目、そんな事を教える事ないわよ。こんな女に、自分の恥を言うなんて、それより、母さん、もつと責めなさいよ、何をしてるの!」

「一服やつてたんだよ。さあ、始めるかね」

桂子は、立ち上ると、二寸余りもある厚い四角の板を持つて来て、スミの胸の上に置いた。そして、その上に、蒲団を乗せ、どつかと坐つた。

「アツ……くるしい」とスミは叫んだ。桂子は、側の箱から艾を出すと臨月の腹に灸を据え始めた。夕起子が坐つてスミの顔を覗き込む様にして言つた。

「どう、男の名を言う……」

「……」スミは黙つて眼を閉じて居た。

「フン……黙つて居られなくしてやるよ。母さん、こんな責め方は駄目よ。例の手よ、あたは少しはこたえるらしいから……お灸なんて駄目よ」と夕起子が言つた。信一の腰かけて居る椅子を取ると「ねえ、そこに坐つて見て居て、今から、私の考えた責め方をするから」

夕起子は、桂子と一緒に横になつて居るスミを起し乳房を縛つてあつた細引を解いた。両の乳房は、パツと脹れ上つた様にとび出し

た。両足の細引を解くと、後手のまゝスミを椅子に掛けさせた。そして、両足を開けるだけ開いて、椅子の足に縛りつけた。

夕起子は、棚から変な革帯を出して来た、それは、前と後に、皮があり、両側に紐がついたチョッキの様なものだつた。それをスミの大きな腹に着せた。そして、二人は、両側の革紐をぐい〳〵と締め出した、片足をスミの腹にかけて、力一杯に締め上げるのだつた。

「ウウ！アッ……ウ……」とスミは、唸き始めた。二人は、締まるだけ締めると紐を止め金で止めた。

「どう、信ちやん、これだけでも、相当に苦しいのよ、ほら、契さんの額を見てよ。この寒いのに汗を出してるでしよう」と夕起子に言われ信一も、広い額に、あぶら汗のにじみ出てるのを見た。大きな二つの乳房は、苦しさに波をうつて居た。

「水を打つと、もつと皮が締るのよ」と夕起子は、水をザアーと腹当にかけた。

「さあ、これでも白状しないから、乳当もつけてやろうね」と桂子が前と同じ様な皮の胸当を出して来た。そして、二人は、それをスミの乳房の上に掛けて締め始めた。

「ウ…ユルシテ…アッ…苦しい…アッ」

とスミは体をくねらせて叫んだ。

「どうだい……白状するか」と桂子は傍から言つた。

「知りません……私は……身に覚えないの……あなた信じてアッ苦しい……」

「ホホ……あんた……向うへ行きましよう」

と夕起子は信一の手を取つて言つた。

「母さん、後をたのむわ、さあ、信ちやん行きましよう」

あんなにも大きな乳房をしたスミの胸は、男の胸の様に平たく見えた。信一はもつと見て居たい慾望にかられたが、同時に、夕起子の悩ましい姿にも誘惑されて居た、実際、今夜の夕起子は桃色のナイトガウンの胸を開けコケテッシュな姿で、信一にしなだれかゝつて居た。

その夜、久し振りに、信一は、夕起子の体に触れる事が出来た。そして、その夜からの信一は、完全な夕起子のとりこにさえなつて居た。二日程して、スミが責苦のため、死産した事を知つても、信一は「ざまあみろ！」と言う気持で平気で居られた。産婆に金を充分にやり、すべては、内密に片づいた。スミが産後どうしたか、信一は気にも止めなかつた。それ程、夕起子は、こゝ毎日、信一を誘惑して、満足させて居たのであつた。

ある晩、夕起子は、ベットの上で煙草を吸いながら信一の方を見てニヤ〳〵して言つた机の上のコップに牛乳があつた。

それを指差しながら「ねえ、この乳は、あんたの奥様のお乳よ。不義の子に飲ませるお乳よ。どう、飲んでみない。」

「いやだ！」と信一は怒つた様に言つた。

「何故、君は、そんな事を言うんだ。俺は、もう、あんな女の事は、どうでもいゝのだ」

「ホホホ……どうだかね…見ると好きになるでしよう。奥さんはね、お乳がたつぷりあるのよ。それを、毎日、母さんが一滴なしになるまで、しぼり取つてやるのよそして、私が見て居る前で飲んでやるの。どう、面白いでしよう。それからね、私達は、奥さんを責めるだけで藏の中に入れて置くのは面白くないから、これから、奴隷として、私が使つてやろうと思うの。近頃は、大分おとなしくなつたから……」

「どうでも、君の思う様にしてくれ。奴はまだ、白状しないのだろう白状するまでは奴隷でも何でもいゝさ」

「大丈夫なの、あんた、近頃、白状させ様と

言う熱がさめたらしいけど……」

「それは……君が大好きだからだ、ね…」と信一は、夕起子の桃色の乳首に手を触れ様とした。夕起子は、サッとガウンの胸を合せて

「駄目！、私は、あんたが本当に、あんな女を忘れるまで、そして、あの女が、あの女のお乳が、あんたを誘惑しない様になるまで、私は、あんたのものではないのよ……」

「早く、そうしたら、いゝじやないか、別の男に可愛がられた乳房なんて、どうなつたつて平気だよ、それは、スミの乳房は、素晴しいには違いないが」……

……」

そんな会話が、二人の間にあつてから、夕起子はスミを昼間は、土藏から出して働かせる様になつた。夜も、時には、信一が帰つてからもスミは女中の様に、否、それ以上に働かされて居たのだ。しかし、スミの姿は、常に、腰に犬の鎖がつけられ、桂子が持つて歩いて居るのだつた。そして、台所とか、玄関の様に人目のつく所には出されなかつたし、働く用も、洗濯とか、薪割とか重労働だけをさせ、冬と言うのに、裸に近い姿で居た。

ある晩、夕起子と信一と夕起子の女友達二、三人と酔つて帰つて来た時の事、夕起子は、大機嫌で、皆に言うのだつた。

「ねえ、これから、もつと酔いましようよ。じやん〳〵飲んで騒ぐのよ。今夜、皆さんに面白いものを見せるわよ、私の女奴隷、信ちやん、早く、お酒の仕度して、そのペットを向うへやつて、さあ皆さん、女奴隷を連れて来ますから」

夕起子ははしやいで部屋を出て行つた。信一と女達は、酒を飲み猥らな歌をうたい騒いで居た。そして、もう皆疲れてぐつたりした姿で椅子に寄りかゝつていると、やつと夕起子が、ドアーを開けて、半身現わした。夕起子はシュミーズ一枚の姿で入つて来てドアーの所で言つた。

「皆さん、遅くなつて済みません。私の女奴隷が今夜は、なか〳〵言う事をきかなかつたので今迄、拷問してやつたのよ。でも、やつと連れて来ました。さあ、入るのよ！」

夕起子は、片手で鞭を持ち片手で廊下から鎖を引き、力一杯に室の中に、引き入れたものを見て、皆はアット叫んだ、鎖の先には、犬の首輪がつけられ、四つ這いにされた素裸の女がズル〳〵と引き入れられてきたのだ。

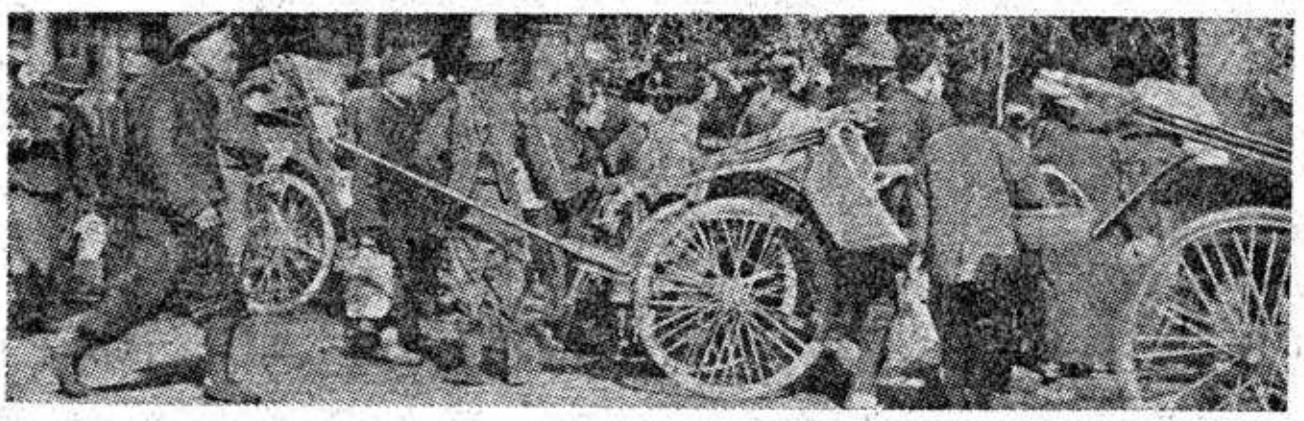
女の手足には、鎖がつけられ、立つ事が出来ない様に四ツ共互いに結びつけられて居た口には、猿轡がかまされて居た。

「皆さん、これが、私の女奴隷！」と夕越子が言うと同時に、酔つた女達は、「まあ素晴らしい、矢張り夕起子さんね」と讃美の声が起つた。特に、未亡人の絹子は、立ち上つて

来て、女の髪をぐいと摑んで顔を覗き込んだ
「お望みなら、どなたか、この馬に乗りませんか」と夕起子が言つた。信一は夕起子のやる事をぼんやりと人ごとの様に眺めていた。
「私に乗らせて」と未亡人の絹子が上服を脱いでスミの背中の上にどかつと乗つた。
「さあ、歩くんだよ、これでも、歩かないのか！」と夕起子は、片手の鞭で、ビシリーとスミの尻を打つた。スミの二、三歩動いたと思うとぐた〳〵と崩れる様に坐つてしまつた
「あら、駄目なのね」と絹子は不満らしく立ち上つた。
「よし、そんなら、皆さんに、もつと面白い事を見せるわ、さあ、皆さんも手伝つて、この女を苦しめてやりましようよ」
「どうするの、面白いわ」と金持の二号をして居る高子が声を昂らせて言つた。
「そのベットの足に縛つてやるの」と夕起子は、スミの手足の鎖を取り、それで手早く後手に縛り、坐らせた。首の輪についた鎖は高くベット上の柱に結んだ。
「さあ皆で、責めて頂戴、私は、あきてるのよ。猿轡をしてるから、声は出ないから何をしても平気よ」
高子は、ぐいとスミの大きな乳房を摑んだ乳首から白い乳が流れた。
「アラ、この女、お乳が出るのね、子供があるの」と高子は夕起子の方を顧つて言つた。
「えゝ、不義の子があつたのよ。まだ、お乳が出る、夕方しぼつたのよ……」
「生意気ね」と高子は、両手でぐい〳〵と乳房をしごいた。
「私にもやらせて」と今迄黙つて見て居た一番年下のある実業家の娘邦子が、我慢出来なくて立つて来た。夕起子は、ベットに腰掛けて、信一を抱く様にして見て居た。そして、信一の耳に囁やく様に、「ね、面白いでしよう、今夜は、私が満足するまで黙つて見て居たら、御褒美をあげるからね」と言つた。
三人の女達は思い〳〵に、スミは、体をくねつたり、しぼつたりした。スミの乳房を捻らせるだけだつた。
夜中近く、三人の女達は、自動車で帰つて行くまでこの乱痴き騒ぎが続いた。
皆を送つて帰つて来た夕起子は、スミの猿轡を取り、ぐいと髪をもつて引き立てた。
「さあ、これから、あんたの旦那さんの目の前で、みつちり責めるからね、覚悟をし。信ちやん、今夜は、土蔵で寝ましようよ。こゝでは、責め道具がないから……母さんは、二階で寝て貰うわよ」
そう言つて、夕起子は、再び、スミを引きずる様に土蔵に連れて行つた。そして、天井から後手のまゝ吊し、棒で下からスミの体を突き乍ら言つた。
「どう奥さんいゝ姿だね、あんたの旦那さんは、前から私のものよ、ねえ、信ちやん。ホホホ……さあ、これから、奥さんじやない女奴隷を拷問するの。」
再び、春がめぐつてきた。スミは、痩せ細つた傷だらけの体になつて居た。あんなに豊満だつた自慢の乳房はまるで老婆のそれの様にしなびて肌全体にぽつ〳〵と赤黒い痣が残りいくつものひきつりのようなものが一杯にあつた。
信一はこういう哀れな身体になつたスミをしつかり抱きながらポト〳〵と大粒の涙を彼女の顔の上に落していた。「済まない、僕が不明な為にお前をこんな身体にしてしまつてどうか許してくれ」
健が姉の夕起子に小遣をせびつて罵倒された事から信一に総ての事実をばらしてしまつたのだつた、桂子も夕起子も追い出されてがらんとした広い屋敷の中で信一はいつ迄も妻の身体をかき抱いていた。

靜安劇場後日譚

—— 魔都上海の思い出から　(その二) ——



姫　宮　四　郎

前号に於て、私は裸踊りの常設館である静安劇場を、初めて訪れた時の模様についてお話し致しましたが、それから後しばらく経つて同所へ出かけた私は、その様子が少からず変つていることに一驚を喫したのであります。そこで今回は、その間における同劇場の変貌と発展ぶりをお伝えして、これで一応その御紹介を終ることにしたいと考えます。

私が再びそこを訪れたのは、最初の時から半年余り後、昭和十五年の初秋の頃でしたが、日中はまだ残暑が相当きびしく身に感じられるので、私は夕方近くになつてから出かけることにしました。静安寺で電車を降りて、劇場の前まで行きますと、既に二十人余りの人が入口附近で待つて居ります。昼間に比べて夕方以後はどうしても客が多いものと見えて、私が到着してからも続いて三々五々観客が集つて来ます。私はその中に若い女性の姿を二人ばかり発見してちよつと頼もしく感じました。

待つ程もなく、何回目かの公演が終つて劇場の内部からどつと一度に観客が出ました。そして入れ替りに入場が始まりますと、さすがに誰もが早く良い席を占領しようとして、先を争うように中へ入ります。私は前回の体験が教える所に従つて、入ると直ちにボーイの一人を呼び、いくらかのチップを与えました。すると、金額が少し多かつたのか、彼はしきりに「先生、謝々」をくり返して、早速例の補助椅子を舞台と客席の長前列との間に並べ始めます。そして私をその中央の席へ導いて坐らせるのです。

私がそこへ落着いて居りますと、再びそのボーイが現れて、お茶と蒸しタオルを盆の上に載せて持つて参ります。私はチップの威力に少々あきれながら、彼の差し出したタオルを取りあげたものの、

どうもそれは余り清潔でなさそうなので、簡単に手だけを拭いてボーイに返しました。お茶を入れた湯飲みは、舞台をテーブル代りにしてその上に置かれるのですが、この方はどうやらいただける代物でした。

中国人のお茶好きなことは今更申すまでもありませんが、どのような小さな町や村にも必ず「茶館」というものがあつて、そこで彼等は用の無い時には半日でも一日でも、悠々とお茶を飲みながら過すのを楽しみにしています。その様子は誠にどうも落着いたもので我々日本人の如く、電車がまだ駅へ着かない大分前から、そゝくさと席を立つて降りるのを待つているような国民には、到底こうした真似はできません。

それらの茶館には「瓜子児」といつて西瓜や南瓜の種を塩漬けにしたものや「鶏蛋糕」というカステラに近い菓子などもありますが真にお茶好きの中国人には、それらがさ程お茶菓子として必要なものともされないらしく、大ていの場合（大都会に於てはやゝ異りますが、）お茶だけをゆつくりと味わつている者が多いのです。

中国で茶を入れるのに用いられる湯飲みは、それには必ず蓋が附いて居りますが、此の蓋には特別の役目があります。即ち湯飲みの中には我々が驚く程沢山の茶の葉が入れてありますので、その蓋で茶の葉が口へ入るのを防ぎながら飲むのが、一種の作法のようなものになつているのであります。

私もそうしてお茶を飲みながら、入口で渡されたプログラムを出して眺めて居りますと、そのうちにふと以前とは異つたものを、その中に発見しました。プログラムには、例によつて裸踊りの前に行われる劇のあらすじが、その出演者の名と共に印刷されているのですが、それによりますと、劇の内容が相当これまでとは違つた性質のものらしいのであります。

従来、中国人以外の者には全く興味の無い、退屈極まる家庭劇であつたのが、今回は劇の中に多分にエロチシズムが採り入れられている傾向が窺われます。蓋しこれは、かゝる劇場としては当然考慮さるべき方策でありまして、観客の側でも単なる普通の演劇より、はるかにこうした傾向のものを観迎することは、疑いの無い所でありましよう。

果せるかな、それから行われた劇の内容は、このような私の予想を裏切らず、否、それ以上に大胆なものでありました。静安劇場はかくしてその前座の劇を改良することにより、重大なる一進歩を劃していたのであります。次に私は、その時に見た演劇の大要を、御参考までにこゝに再現してお伝えすることに致します。但し、劇中人物の名は殆んど忘れましたので、それからは仮りに私が名づけたものであることを、あらかじめ御諒承願つておきます。

構成　一幕五場

時　現代

所　上海某路に在る商人張玄文の家

登場人物

張玄文（主人）	五十才前後
〃世英（長男）	二十五六才
〃之望（次男）	二十二三才
〃是公（三男）	二十才前後
周紅蘭（主人の妾）	二十七八才
銭君華（女中）	三十七八才

李愛齡（〃）　十八九才

第一場　主人の書斎

幕が開くと、舞台にはデップリと肥つた張家の主人が、一人で手紙のようなものを書いております。やがて彼は筆を置いて、椅子から立ち上りながら女中を呼びます。返事をして出て来たのは君華という年増の女中で、彼女は色が黒く、容貌はどちらかと言えば余り美しい方ではありません。

「旦那様、お呼びでございます？」

「うん、儂はこれからちよつと出かける」

「どちらまでお越しになるのですか？」

「商用で南京までじや。帰るのは恐らく明日の夕方になるだろうから、今晩、昌新洋行の者が来たら、此の手紙を渡しておいてくれ」

「承知致しました」

「それから、儂の留守中よく気をつけて、何も間違いの無いようにせんといかんぞ」

「はいかしこまりました」

そう言つて、女中は主人の外套と鞄を手に持ち、彼の後に従つて見送りに出ます。間もなく女中だけが再び登場、そこへ此の家の三男が姿を現わします。彼は次男と共に父の店の手伝いをしているのですが、少々不良のような傾向がある若者です。

「親父はどこかへ出かけたのかい？」

「はい商用で南京まで行くとおつしやいました。」

「ふーん、またかい。よく出かけるんだな…。商用だなんて怪しいものさ。ひよつとすると、また外にいゝのが出来たのかも知れないぜ」

「あら、そんなことはないでしよう。何ですか、帳簿なんかも沢山鞄へ入れてお持ちになりましたよ」

「どうだかねえ。だが、そんなことはどうだつていゝや。時にお前こんな文句を知つているかい？——十七八歳的小姑娘穿開襠子自己也方便、人家也方便——つて言うんだ」

（こゝで、客席のあちこちから期せずして笑声が起ります。此の俗語を直訳しますと、——十七八の小娘が開襠子を穿けば、自分でも便利だし、他人様にとつても好都合である——というような意味で「襠子」とはパンツもしくはズロースのこと、「開襠子」とは、それが真中で二つに分れる開放的なものを言い、中国では子供がよく穿いているものです。なお、念のために説明を加えますと、自分が便利だというのは、排泄の時にそのまゝで用が足せるからであり、他人様にとつても都合がよいというのは、またそれと違つた意味であつて、この場合他人様とは男性に限ることは言うまでもありません。）

「まあ！そんな言葉があるんですか？。坊ちやんもなか〳〵隅には置けませんね」

「なあに、そんなにびつくりすることはないよ。ただね、この俗語で言うように、十七八の小姑娘が、本当に開襠子を穿くことなんかあるものかね？」

「そりやありますとも。もつとも近頃は一般に余り使いませんがそれでも長い習慣でその方が具合のよい人もいます。現に、うちの愛齢だつていつもそれなんですよ」

「へえ、そうかい。そいつは知らなかつたな」

「ですけど、こんなことを私がしやべつたつておつしやつちや嫌

ですよ。あの子の秘密なのかもわかりませんからね」

こう言つて、女中は笑いながら退場しかけます。三男は何かちよつと考えていましたが、それを見て、急に次男を呼ぶように言いつけます。やがて次男が登場——

「何か用なのか？是公」

「あゝ、兄さん今忙しいのかい？」

「別に忙しくないさ。最近は店も少しひまだからな」

「実はね、面白いことがあるんだよ」

「何だい、そりや？」

「君華が言う所によるとね、愛齢のやつはいつも開襠子を穿いているんだそうだ」

「へえ、だがそれがどうしたんだ？」

「俺はね、一人前の姑娘が開庫子を穿いているのは、一度もお目にかゝつたことがないのさ。それで、何とかしてそいつを見たいんだが、兄さんも手伝つてくれないかい？」

「手伝うつたつて、どうすればいゝんだ？」

「愛齢の身体検査をしてやるのさ。何かうまい方法はないものかね？」

そこで二人はお互いに何だかひそひそと密議をこらすのです。

第二場　——居間——

君華と愛齢が二人で立ち話をしています。愛齢の方は小柄でまだ子供つぽい感じですが、色白で容貌も人並以上に整つております。話の内容は、隣り近所に於けるあれやこれやのゴシップですが、ひと通り話がすむと、君華は愛齢に居間の掃除をまかせて、自分は台所の方へ引き上げます。

あとに愛齢だけが残り、ハタキを取り上げて掃除を始めますが、途中でふとテーブルの上を見ると、そこに置かれている本の間から紙幣が何枚かはみ出しているのが目にとまります。ハッとして思わずあたりを見廻しますが、誰も人の気配はありません。愛齢はしばらくテーブルのそばで考えていましたが、やがて恐る〳〵その紙幣を抜き取ると、急いでそのまゝ立ち去ろうとします。そこへ次男と三男が現れ、彼女は呆然として立ちすくんでしまいます——。

「どうしてそんなに慌てるんだ？」

次男が問いかけますが、彼女は答えることもできません。すると三男がテーブルに近づいて本を取り上げたかと思うと

「おや！こゝにはさんでおいたお金が無いぞ！さてはこいつが怪しいな」

そう叫んでツカツカと愛齢の傍らへ寄り、その腕をつかまえます彼女は手に持つていた紙幣を放り出すと、ワッと声を上げて泣き出します。それを見て二人は占めたという風に顔を見合せ、三男は床の上に散らばつた紙幣を拾い上げて、更に彼女を追及します。

「これだけしやない筈だ。もつと持つているだろう？みんな出してしまえ！」

「いゝえ、それだけです。どうか許して下さい……」

「嘘をつけ！どこに隠したんだ？」

「違います。決して嘘は申しません」

「出さないな。よーし、それじや今から身体検査をして調べてやる！」

「後生です！もう二度と致しませんから、勘忍して下さい！」

愛齡は懸命に兄弟に向つて哀願しますが、二人はきゝ入れようとはせず、彼女に服を脱ぐように迫り、若し言うことを聞かなければ警察へつき出すと言つておどしつけます。彼女はそこでやむなく、泣きながら紐子（ボタンに当る）をはずして藍色木綿の中国服を脱ぎ、下着のシャツ一枚と庫子だけになります。すると兄弟は彼女に近寄つて、二人で代るゝ〳〵その身体を調べ始めます。

愛齡はもはや観念したかのように、されるが儘に目をつぶつてじつとしていますが、それでも、男の手が乳房に触れたり、尻や腰のあたりを探る時には、本能的に身をすくめようとします。それを、一人が両手を捉えて後ろから身動きをしないように押えつけ、他の一人がゆつくりと身体の至る所を、撫でたりさすつたりするのです彼女の穿いているのは問題の開庫子でありますから、両脚だけは必死になつて固くひきしめておりますが、やがてそれと認めて、彼等は更に苛酷なる命令を下します。

「うむ、どうやらその庫子が怪しい。その中へ隠しているに違いないから、そこを見せろ！」

「いやです！どうかお許し下さい」

「駄目だ！中を見せるんだ」

「いや！それだけはいやです」

「開かないと承知しないぞ！どうしても嫌なら、この家に居らなくなるのは勿論、お前の親も一緒に警察へ訴えるが、それでもよいのか？」

「……」

「言うことをきけば、こんどの事は一切無かつたものとして許してやるが、そうでないと容赦しないんだぞ！」

こゝに至つて、愛齡は遂にあきらめたようにして首をうなだれてしまいます。二人に促されて、愛齡は羞恥と屈辱で真赤になつた顔を両手で蔽い、やむなく正面を向いたまゝ……

（此のクライマックスの場面になると、客席からは盛んに「好々」という声や、チョッチョッという舌打ちが聞えます。中国人は日本人と違つて、映画や芝居などを見て気に入つた時や、感嘆した場合に、この舌打ちをするのがくせになつているのです）

薄桃色の庫子が両方に分れて、その間から白い肌の一部がチラリと露出します。彼女は実際にその下には何も著けていないのですから、全く驚嘆の外はありません。さすがの観客も鳴りをひそめ、場内はちよつと緊迫した空気に包まれます。やがて、舞台の奥の方で何か物音が聞え、兄弟は慌てゝ女に服を著せると、そゝくさとして退場致します。

第三場——長男の部屋——

机に向つて長男が読書しております。彼は長身白哲のインテリ青年で、或る大学に籍を置いて勉学しているのです。そこへドアをノックして、主人の若い妾である紅蘭が入つて来ます。彼女はすんなりした姿体と、近代的な容貌の持ち主であります。

「坊ちやん、また御勉強ですの？」

「あゝ、君は何しに来たんだ？」

「あら御挨拶ね。来ちやいけないんですか？」

「だつて、君が用の有るのは親父の方なんだろう？」

「お父さん居ないわよ。商用で南京まで行かれたんですつて。明日の夕方までお留守らしいわ」

「ふーん、そうかい。道理で君華のやつ、先程から大声で歌なんかうたつてやがつた」

「私大嫌いよあの人。あの人つたらとても私を憎んでいるのよ」

「そりや、君が若くてきれいだから嫉むのさ」

「そうじやないの坊ちやんご存じない。？あの人は私が来る前までずいぶんお父さんに可愛がられていたんですつてね。それで、私がお父さんを横取りしたと言つて怒つているらしいの」

そう言つて彼女は、何か事のあるごとに君華が彼女に対してとる底意地の悪い仕打ちを一々例を挙げて長男に語るのです。そしてひとしきり女中の話がすむと、こんどは態度をガラリと変えて、彼女は色つぽい目つきをしながら、長男に話しかけます。

「でもね、私は何もそんな話をしに来たんじやないんですのよ」

「だから、さつきから何の用だと言つてるじやないか」

「私、お願いがあつて来たの」

「お願い？」

「そうよ。私、坊ちやんが好きなの。ずーつと前からそう思つているの」

「どうしたんだい？突然そんなことを言い出したりして――」

「坊ちやんは、私の言うことを信用なさらないんでしよう？」

「だつて、君」

「いゝえ、私は坊ちやんが私のことを何とも思つていらつしやらないことは、わかつています。それどころじやない、軽蔑されているらしいことも知つているわ。でも私は、自分がしていることをどう思われたつていゝの。ただ、私は本当に坊ちやんが好きなのよ。大好き！」

「……」

「お願いと言うのは、坊ちやんに一度でいゝから抱いていただきたいの。それだけ」

こう言つて彼女は長男の手を取ると、それを自分の胸に持つて行き、豊かに盛り上つた乳房の上にピツタリと押しつけるのです。長男は、余りにも単刀直入的な彼女の求愛にやゝ圧倒せられて、しばらくぼう然としておりますが、やがて自分の手に女の温い弾力のある乳房の触感が伝わると、思わずそのまゝ彼女を引き寄せて接吻します。するとこの時、ドアが一寸ほど開いて、そこから女中の君華が部屋の中をのぞき込み、すぐにまた顔を引つ込めてしまいます。

二人は長い接吻を終ると、長男は、もはや身中にたぎらせた若い情熱の堰を切つたように、ドアに近づいて鍵をかけるのです。

第四場 ――主人の書斎――

翌日の夕方――

主人が外出から帰つてくつろいでいる所へ、君華が盆の上に湯飲みを載せて出て参ります。主人はそのお茶を飲みながら、彼女に向つて問いかけます。

「留守の間、何も変つたことはなかつたか？」

「はい、それが」

「それがどうしたのだ？はつきり言え！」

「実は一番上の坊ちやんのことですが」

「世英がどうかしたのか？」

「いゝえ、坊ちやんが別にどうということはございませんのですが、紅蘭さんの方が……」

「紅蘭が世英に何かしたと言うのか?」
「はい……」
「はいだけではわからん。もつと詳しく話してみろ!」
こうして、君華は日頃快からず思つている紅蘭が長男を誘惑した一件について、自分が実際に見たこと以上に輪をかけて、主人に告げ口をするのです。それを聞いて激怒した主人は、早速彼女に命じて紅蘭を呼び寄せ、その彼の若い妾に対して荒々しい語調で詰問を始めます。
「紅蘭、お前は今までどこにいたのだ?」
「私の部屋に居りました」
「儂が帰つても迎えに出なかつたではないか?」
「申し訳ありません。何だか気分がすぐれないものですから…」
「嘘をつけ!お前はこの儂に顔向けのできないようなことをしたのだろうが!」
「いゝえ、そんなことはございません」
「何だと!儂が知らぬとでも思つているのか!お前は昨日世英の部屋で一体何をしたのだ?」
こゝに至つて、紅蘭の顔色がサット変ります。併し、彼女は何事かを決心したもののように、あく迄も長男との情事を打ち明けようとはせず、じつと黙つたままで坐つております。
「何をしたと言つているのがわからんのか!」
「何も致しません」
「なに!お前は自分のやつたことを儂に隠そうとするのだな!」
「私は旦那様のおつしやることがよくわかりません」
「バカ!お前は誰にも知られなかつたと思つているのだろうが、証人はこの君華だ。これが何もかも見ていたんだぞ!」
こう言つて主人は傍らに居る女中を指さしますと、君華は、それ見たことかと言わんばかりの顔つきで、冷やかに妾の方を見ております。併し、紅蘭は大体予想していたというような態度で、ジロッと女中を眺めたきり、一向に悪びれた様子を示しません。それを見て主人は立腹の極に達し、大きな赤ら顔を益々紅潮させてどなりつけます。
「よしお前がその気なら儂にも考えがある。痛い目に合せてでも白状させてやるから覚語しろ!」
そうして、いきなり彼女の手を捉えると、それを後ろへねじ上げます。
「痛い!何をなさるんです?」
「痛ければ、昨日お前のしたことをみんな言つてみろ!」
「いやです!私は何も致しません」
「強情なやつだ、今に見るがいゝ。君華、そこを閉めろ!」
主人は女中に命じてドアに鍵をかけさせますと、片手で机のひきだしから荷作り用の細引を取り出して、それで後へ廻していた紅蘭の両手を縛り上げます。そして、大声を上げられないように、手許にある布で彼女の口を蔽い、猿ぐつわをはめます。
「さあ、これでよい。君華、お前、こいつを少し引きずり廻してやれ!」
すると女中は、日頃の恨みをはらすのは此の時とばかりに、紅蘭の頭髪を鷲摑みにして、後ろ手に縛られたまゝの彼女を、荒々しく引きずり廻します。猿ぐつわの下から紅蘭はうめき声を洩らしながら、それでも決して許しを乞おうとはしません。

「しぶとい女だね、これでも懲りないのか——！旦那様、どう致しましよう？裸にして辱めてやつたら、少しは懲りるかと思いますが？」

「よし、かまわんから、そいつの服を剝いでしまえ！」

女中は紅蘭の服に手をかけて脫がせようとしますと、す早く彼女はとび起きて縛られたまゝで逃れんとしますが、すぐにまたテーブルの上に押し倒されてしまいます。そして、必死になつてもがくのにもかまわず、二人の手は、彼女の着ている派手な中国服の紐子を一つに一つはずして行くのです——。問もなく、紅蘭は下着だけにさせられ、更にその西洋風のシユミーズも、女中の手が荒々しく肩の吊り紐を引きちぎつて、無惨にも剝ぎ取られますと、遂に彼女は僅かに純白のズロースだけという浅ましい姿にされてしまいます。

そうしておいて、こんどは主人がその髪を摑んで彼女を引き起します。紅蘭は両膝をついて、辛うじて自分の身体を支えますが、その肌理細かな真白い肌はまん丸いふくよかな両の乳房もろ共、惜しげもなく舞台の正面に向つてさらけ出されます——。

「ふん、いゝ恰好だよ。ざまあ見るがいゝ！」

女中は憎々しげにそう言うと、紅蘭の傍へ寄つて、力まかせにその肩のあたりをキユーッとつねり上げます。主人はそれを見て

「そんな手ぬるいことでは駄目だ！もつとやわらかい所を力一ぱいやるんだ！」

こう言いながら、なおきびしく責め立てるように促します。すると君華は、こんどは彼女の腋の下から横腹へかけて、所かまわず、満身の力をこめてひねり廻します。紅蘭は、女中の手を逃れようとしてしきりにもがきますが、身体の自由を奪われている為にどうすることもできず、そのたびごとに美しい顔を、苦悶の表情で大きくゆがめるのです——。

「よし、もういゝから止めろ！そのくらいのことではまだ〳〵こたえないものと見える。それじやこんどは、こうしてやるんだ！」

益々興奮した主人は、後ろ手に縛つていた彼女の手を一旦ほどいて前で縛り直し、もう一本の細引を持つて机の上に上るとそれを天井の釘に結びつけます。そして、紅蘭の両手を頭の上へ高く引き上げて、天井から吊された細引に結び合せ、その恰好のまゝ彼女を後ろ向きにして立たせるのです。然る後に、彼は机の上から一メートルばかりの竹の物差しを取り上げます。

「君華、いつそのこと、そいつを素裸にしてしまえ！」

女中は紅蘭に近寄つて、彼女の身体に残された最後の物であるズロースに手をかけますと、わざとゆつくりした手つきで、ズルズルと下の方へ引きおろして取り去り、形のよい彼女の尻をむき出しにさせます——。

主人は手に持つた物差しを振り上げて、彼女の腰から尻、太股のあたりを、容赦なくピシリ〳〵と打ちすえます。紅蘭は、猿ぐつわの下からしきりに低い悲鳴を上げ、前後左右に大きく身体をくねらせてあがき廻りますが、その間に、向う側にかくれている彼女の全裸体の前面が、二度三度客席の方に露呈せられて、観客を興奮の絶頂に導くのであります——。

第五場

——間——

それから更に二三日して——

舞台では、女中の愛齢が一人で何かその辺の物を片づけておりま

す。そこへ次男が登場。それを見て、彼女は急いで立ち去ろうとしますが、次男はそれを呼びとめます。」
「愛齢、ちよつと待て。話があるんだ」
「……」
「お前はまだ、この間のことを怒つてるんだろう?」
「いゝえ……」
「いやそうじやない。あれから、お前は俺の姿を見ると、今のようにすぐ逃げようとする」
こう言つて、次男は彼女の手を取つて引き寄せます、愛齢はうつ向いたまゝで、敢えてそれに抵抗しようとはしません。
「実を言うと、俺もあのことを後悔しているんだ」
「あれは私が悪かつたのですから、仕方がありません」
「いや、余りひどいことをしたので、お前が怒るのも当り前だ」
「いゝえ、かまわないんです」
「それは一体どういう意味なんだ?」
「私、坊ちやんにならどんなことをされたつていゝんです……」
「お前、この俺が好きなのか?」
「……はい」
「そうか、それじや本当にすまなかつた。もうこれからあんなことは決してしないから。先だつてのことは勘弁してくれ」
「いゝえあやまらなくつてもいゝんです。私本当に何とも思つていないんですから……」
そう言つて、愛齢はシクシク泣き始めます。次男はその彼女をやさしく抱きかゝえて接吻するとやがて、二人は楽しそうに連れ立つて退場します。入れ替りに三男が登場。つぶやくようにして、一人で独白を始めます。
「チエッ!くそ面白くもねえ。みんなうまくやつてやがる。紅蘭は親父の大金をかつぱらつて逃げるし、大哥(長男のこと)はその後を追つかけて行つちまう。二哥(次男)は二哥で、とうとう愛齢を手なずけてものにしやがつた。それに、君華まで親父と夫婦気取りで居やがるが、親父の方はどうせまた若い女をこさえるに決つている。一番つまらないのは此の俺ということだが、なあに、俺は一番若いんだしそれに女なんて掃いて棄てる程あるさ……」
こう言つておりますと、そこへこんどは主人と君華が姿を現わし三男は慌てゝ奥へ引つ込みます。その後で二人の会話が行われます——。
「お坊ちやんは家を出られたきりお帰りになりませんが本当に大丈夫でしようか?」
「なあに、金が無くなれば帰つて来るさ」
「でも紅蘭と一緒に居られるのなら、果してお帰りになるか少し心配だと思いますが?」
「あの女にもすぐ飽きるに決つているよ」
「お帰りになつたら、坊ちやんを許しておあげになりますか?」
「今さら怒つてみたところで仕方があるまい」
「それにしても憎らしいのは紅蘭でございます……」
「うむ、だがまあ、あれだけ痛い目に合せてやつたのだから、持つて行つた金にしても安いもんだ」
「旦那様、本当はまだあの女のことを思つてらつしやるんではありませんか?」
「バカを言え!あれだけ勝手な真似をされて、それでまだ性懲り

もなく未練が残ると思つているのか？冗談もいゝ加減にしろ！」
「そうだつたら嬉しいんですけど」
「これからはお前を十分可愛がつてやるから、そのつもりで居るがいゝぞ」
そう言われて、君華は嬉しさの余り主人の首にかじりつき、二人はそこで互いに固く抱擁し合うのです——。
（幕）

以上、私はその時に見た演劇の内容を、やゝ詳細にわたつてありのまゝに御紹介致しましたがこれによつて、曾て我国で空気座が好評を博した「肉体の門」等よりも、はるかに徹底して大胆なものであることが、おわかりになつていただけると思います、但し、この劇に於ても、その演出の俳優の演技は、後日私がナイトクラブ其の他で見たものと比較して、未だ稚拙な点も多く、そしてこれは、続いて行われる裸踊りについても、同様のことが申せるのであります。
劇が終つた後は、例によつて十分間くらいの休憩時間がありますそして間もなく、場内の照明がやゝ薄暗くなり、幕が左右に分れてレコード音楽が鳴り始めると、それと共に全裸の女が舞台へ現れ出るのですが、これらについては前回に申し上げましたから、こゝでは省略致します。
裸踊りの形式は、いずれの場合にも大同小異でありまして、踊りそのものには大した違いが認められません。ただ、いつも同じようなことをしていたのでは観客に飽かれてしまいますので、此の劇場の経営策としては、裸踊りに出演する女を一週間ごとに全部新しく交代せしめ、同時に前座の劇の演し物も変えることによつて、お客の吸収に努めているのであります。

その日の出演者に見られた特徴としては、いずれも皆二十才前と思われる未だ少女らしい感じの残つている者ばかりが集められていたことであります。従つて、舞台での踊りはやゝぎこちなく、大胆奔放な動作も至つて少い憾みはありましたが、その代りに一挙手一投足にも、まるで処女でもあるかのような羞恥と初々しさが十分うかがわれて、また異つた興趣を与えてくれました。
彼女等は、フイナーレに続いて起る例のアンコールの時になりますと、はにかみながら、それでも精一ぱいの愛嬌である微笑を浮べて舞台の前端にまで進み出るのですが、私の坐つている所からは、実際に手をちよつと伸せばその肉体に触れることができますので、思わずもそうしたい衝動を押えるのに、いさゝか自制を必要としたものです。
（この項終り）

【読者通信】

貴誌益々御発展の段心からお喜び申上げます。さて何かのお役に立てばと思い小生意見を申上げます。現在の責めも誠に結構に存じますが、その外に世の男性たる者の最も知りたい女の内幕といゝましようか、女の決闘図といつたものを載せて頂きたいと思います。例えば男を中に挟んで取りあいの決斗とか女の同性愛による相手の取り合いから起つた決斗とか、不良少女の縄張り争いから起つた決斗とか色々あると思います。貴誌には以前に女斗美として載つていましたが、小生はそれを決斗の場面そのもののみに重点を置かず、口喧嘩より決斗場面に至る過程に重点を置かれたならば尚更興味をそゝると思うのであります。これは小生一人の意見ではなく貴誌を読んでいる小生の友人の意見も入つて居ります。どうか小生の意見を出来るだけ早く実現して致きとうございます。
（S・I生）

奇譚クラブ最近号主要目次

○九月号 特集倒錯の告白○
○十月号 特集切支丹迫害史○
口絵 責め場面挿繪集……喜多玲子・構成
切支丹迫害史画集……五井野弘・画
縛られた女写真集……辻村隆・構成
切支丹迫害史……漆島 迫平
氷責めの断罪……赤城 芳年
遊女花菱の受難……花山 剣作
江戸の刺青模様……潮 マリ
マリヤ・マグダレナ……桂 牧次郎
或る医師の告白……亀岡 恭二
大衆文学に現れた「女の責場」……高月 大三
愛と苦痛の交錯……鳥上 源一
恋の烙印……松井 籟子
呻される夢……波多野 新
男色の海……井口 正憲
あらたま村の奥にて……二俣志津子
アブニストの記へぼきうり……鬼山 絢策
夫婦愛と緊縛の考察……辻村 隆
サーニン……戸森 暁
宿命に哭く……浅田 正人
悪 女……岡田 咲子
縛られた妻……早川新二郎
遺 書……小峰登美子
猥褻五態……喜多 玲子

○十一月号 宗教刑罰戦慄画集
口絵 宗教刑罰戦慄画集
風俗便所考 淫書開好記
緊縛の受難（縛られた女の写真）
悲恋の笞刑……松井 籟子
局部装飾としての文身……高野 雅和
続・へぼきうり……鬼山 絢策
羞恥と潮紅……波多野 新
ストリップ変態記……朝見 速夫
現代陰間茶屋談義……染田 玄
好き者放談……鷲見 東一
続・変態艶書……岡田 咲子
誌上雑感……小田 利美
少年矯正院体験記……獄 牧一
桃色の地獄……藤安 節子
反戦論者の弁……三富 浩生
夢性の美少年……三村 幾夫
堕胎と出産風俗……阿久津 猛
珍版・南国随筆……井村 幸男
羞恥心の発達……赤坂 剛
都会の異態交響楽……中河津規男
江戸寄習 縁切寺……畑村 連治
悪魔と口紅……桂 牧次郎
発狂文学者の研究……杉山 清詩
ジャンベルネル夫人の狂楽シャルロット
男色魔の虜……井口 正憲
性愛描写の文学……紀市 郁栄
切支丹迫害史……漆島 迫平

○十二月号 惑溺の愉悦特集号
口絵 フランス貴婦人の変態性生活
扉 甘き歓楽の後
耽美派小説名場面集 潤一郎の巻
折込口絵写真 縛つた女を写す辻村 隆
濁れる愛……松井 籟子
切 夜……笹田 嘉
奴隷妻……片矢 薫
指の秘密……武山 武彦
男装龍姫伝……亀岡紘七郎
孤独なファンタジー……芳野 眉美
モンテカルロの拘 僂 男……モオリス・ブルウジエ
中国艶話毛のない女の物語……赤塚与志夫
女性器崇拝……雨森 順一
糊と泥と砂……長岡変一郎
4Sクラブ探訪記……二俣志津子
非公開映画世界の闇房……藤安 節子
囚衣或る人妻の生活記録……古川 裕子
膣に関する怪奇な報告……村田 生
SODMIEの珍裁判……鳴尾 善治
ロマンチックなサディズム……森山 美歌
香具師放談……浮家 鷹三
女囚私刑体験記……小坂多美枝
セックスの記憶……綾 久江
錯乱の倫理……近東規矩也
夕映え燕の教訓……丘 正雪
狂い咲くカンナ其の後の告白……羽村京子

○新年号 縛つた女を描く○
口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子
中世紀の宗教刑罰画集
扉 愛の使徒 色刷口絵 椋鳥
口絵写真 縛つた女を描く
アブニストの記・らぶ すれいぶ鬼山絢策
脱落者……小森 原平
徳川闇門痴情録……的場 通
淫火（みだらび）……松井 籟子
戦争処女の手記……藤安 節子
長崎らしやめん考……花山 剣作
お国自慢・好色民謡……七条美樹子
人妻告白記・妻の復讐……辻 佳月子
桃色のベールに包まれて……川端多奈子
読者座談会交悦に伴う責めの衝動心理
マゾヒストの果て……福田 英一
糊の熱著……長岡変一郎
鼻腔礼讃……升岡 金吉
変の字問答……浮家 鷹三
告白記 僕の記録……黒井 珍平
女の責場を描く時の心境……伊藤 晴雨
少年の恋……守田 雄二
貞操帯奇譚……ジョルジュエフカルトル
あなたのムチの下に……角田 平八
赤につかれた男……上村秀久雄
男色の花道……堤 行房
風変りな作戦……笹田 豊

★緊縛による一表情★

—或るポーズ—

辻村隆・構成

塚本鉄三・撮映

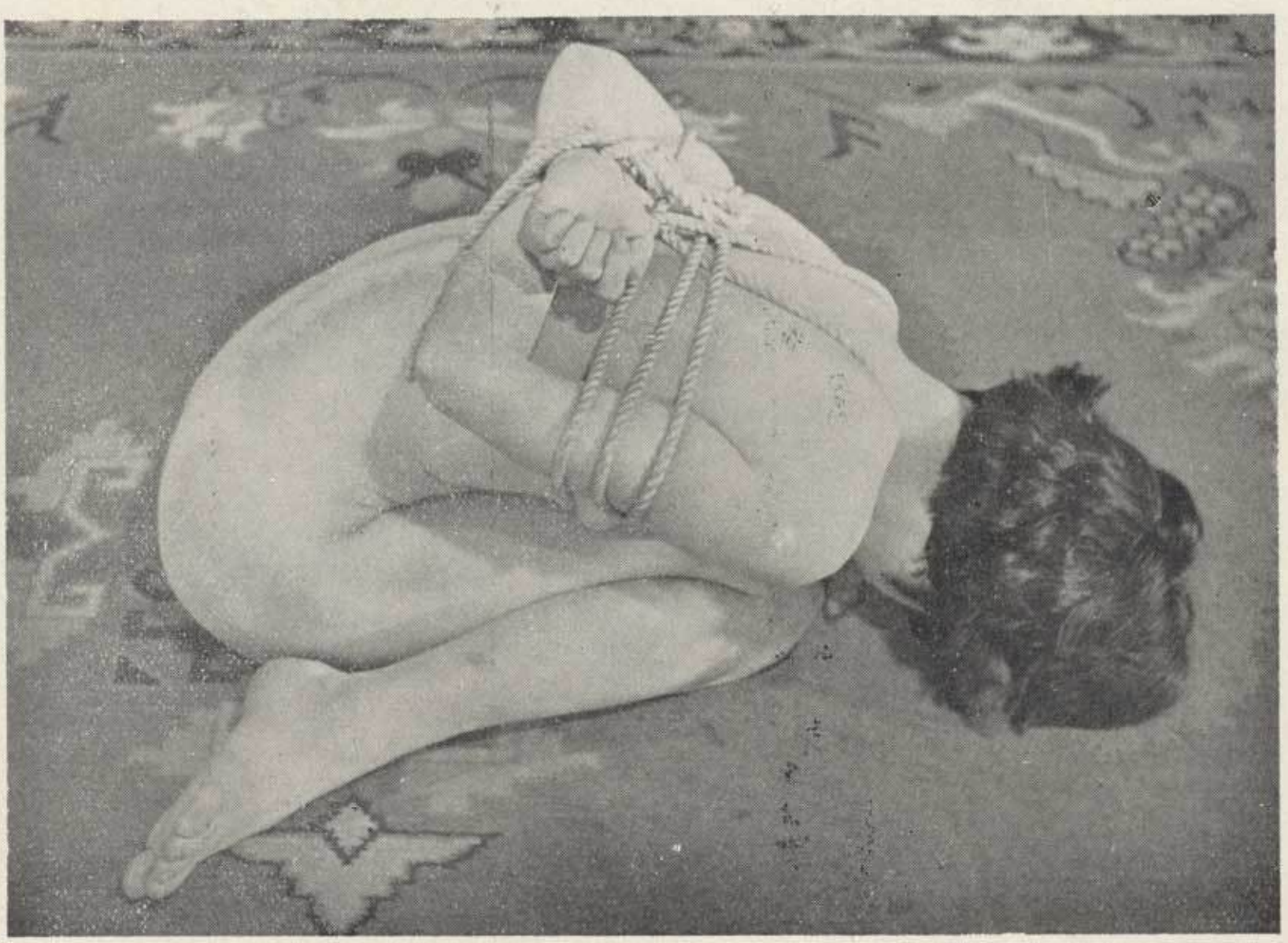
―うしろ手―

縛られた女の写真のモデルになつて貰つた娘さんの中で本号の口絵写真に掲載した雲井久子嬢（或るポーズ）と中林カオル嬢（うしろ手、高手小手、さるぐつわ）の二人は縛られる事について中々承知しなかつた方に属している。此の点特に川端多奈子嬢なんかと対照的なのは中林カオルさんでヌード撮映に際して繩を用いる事を納得させる為に一方ならぬ苦労したものである。そんなわけで最初は嫌になつたらいつでも止めるという条件で縛らして貰つたわけであつた。然し若い女性の〝いや〟という言葉は或る場合〝すき〟という言葉とシノニムであつたりする事がよくあるので表面の言葉だけで判断することも出来ないわけであるが、ゼスチュアだけにしても〝いや、いや〟と言うのは或る半面、苦悶美を強調されて思わぬ効果を出すことがある。〝さるぐつわ〟を撮映する時は後手に縛り上げた繩目が痛いといつて苦情を言つている所を邪険に猿ぐつわをかましたので御機嫌すこぶる斜めの表情をパチリとカメラにおさめたものであつた。従つてその点顔の表情がよく出ているので思わぬ収穫をしたと喜んでいる。

或るポーズの雲井久子嬢は中林嬢ほど嫌がらなかつたが、他の進んで自らズーズを申し出たり、或は縛られる事に嬉戯

している人達に比較すると余り積極的ではなかつたようで、身体のこなしなんかにも何んだか反抗するようなところがあり、それが又〃責場〃という事から考えると雰囲気を出していたという事もいえる。然し今迄十数人のモデル嬢に接して〃縛りたい〃という申出に対して最後迄拒否した人は一人もなかつた。最も積極的に協力して呉れたのは川端多奈子嬢ともう一人、嫌々ではあるがそう迄言うなら仕方がないから一応やってみようというのが、雲井、中林の二嬢、他の人達は別に大して関心はなかつたようで(縛られることについては)ある。

中林カオル嬢は長身にしては比較的ヤセ型で両手を後で縛り上げると面白い程上へ上るし又二の腕にも繩が喰い込む、この敷物の上に押し倒した高手小手にしてもそうであるが、後で腕の骨迄こたえて痛かつたそうで、もう二度と〃責めのモデル〃になんかなるもんじやない、とつくづく思つたそうである。しかし、それでいて時々は思い出したようにカメラの前に立つてくれるのであるから乙女心というものは不思議なものである。〃縛られた女の写真〃について従来いろ〳〵の御指示や御希望を沢山頂いて居りますが今後共何卒御遠慮なく御叱正の程御願い致します。



—さるぐつわ—

（モデル）• 雲井久子
中林カオル

○二月号 責めの小説特集号○
口絵 怪奇派小説名場面集（乱歩の巻）
口繪写真 恋に狂つたワン・カツト
スペインの宗教裁判
妖花（心の悪魔）……羽村京子
夜開く孤島……岡真史郎
淫火（第一回）……松井籟子
若衆散華（同性愛欲史譚）…戸崎平馬
変の字問答（第二話）……浮家鷹三
らぶ・すれいぶ（第二回）…鬼山綯策
燐光……久留木栄
女嫌いの種々相……仁比山等
アレキシナの日記 花井お梅さんげ談…小町石近
女囚獄中記 花井お梅さんげ談…小町石近
糞尿崇拝とトーテム思想……三瀬淑朗
処女崇拝と宗教売淫……島影映
比丘尼開眼……久松俊介
琉球の女達……木之下白閾
悩ましのサディズム……森山美歌
切支丹迫害史……漆島迫平
死刑執行奇談……茂木芳久
黒井珍平氏に答う……伊藤晴雨
しいたげられるよろこび……林田澄子
破つた日記帳……川端多奈子
硝子便所……芳野眉美
つわもの哀史……吉井川洋
映画とサディスムス……雲井彰

○三月号 東西拷問くらべ○
口絵 柱に縛られた女 喜多玲子
口繪写真 東西拷問くらべ
サディズムの精髄……吾妻新
切腹史談……中康弘道
同性的男性愛の謎……染田玄
受難記（ある女の告白）……岡田咲子
妖異聚楽第……戸崎平馬
らぶ・すれいぶ（第三回）…鬼山綯策
女囚私刑体験記（其の二）…小坂多美枝
黒井珍平さんへ……羽村京子
艶書通信（喜多玲子さまへ）高野すみ子
文学歴史に現われたるサディズム
仁比山等
悲痛と快楽……波多野新
第七天国の夢想……梅井清
伊藤晴雨先生へ答えて……黒井珍平
屍臭……丹波太郎
色情の価値……角田平八
猿轡雑考……千葉三郎
白い便器の幻想……芳野眉美
伊藤晴雨氏の解答を読んで…和泉としを
破つた日記帳……川端多奈子
緊縛女優列伝縛られた女優たち升岡金吉
アドニスの灯……鷲巣千芳
ジプシイの性的生活……有馬正秋
淫火（第三回）……松井籟子

○四月号 錯倒の告白特集○
口絵 くすぐられる女 喜多玲子
口絵写真 緊縛美の考察
後手と高手小手について
擽衣（続少年矯正院体験記）嶽収一
神の酒を手に入れる方法……沼正三
肥満体への郷愁……麻生津和夫
乗馬服と長靴と鞭……森本愛造
不思議な拷問……有馬稲高
私の新婚生活……島村康雄
開花の契機……信太蓉子
キヤメラ愛好会……岡田咲子
妓の影……泉辰之助
交感……藤安節子
支配者と被支配者……波多野新
責めの美的表現……小此木閾一
らぶ・すれいぶ（第四回）…鬼山綯策
春婦哀歓（飛田の娼婦たち）花村鶯二
新裸体狂崇論……七条美樹子
続・囚衣……古川裕子
地獄繪行脚……長岡変一郎
美少年の死……岡真史郎
恍惚境と法悦境……高取辰治
切腹史談（二）……中康弘道
縛られた女優たち（二）…升岡金吉
風流閨響……吾妻新
人獣交婚談異婚抄……山崎浩平
或る家庭教師の告白……角田平八
淫火（第四回）……松井籟子

○五月号 特集男性MASOO
口絵 戦後の插繪に現れた女の責め場
高月大三
口繪写真 荒縄による緊縛感のスポット
塚本鉄三
怪奇画集
（ドイツのグロテスク画集より）
マゾヒストの会……沼正三・訳
風流責各態……吾妻新
捕縄雑考……嶽収一
僕の記録（完結篇）……黒井珍平
らぶ・すれいぶ（第五回）…鬼山綯策
家出の味……牧さち子
雌獣の手記……近見啓
女王様ごつこ……飛田良二
偽われる殉教者……成瀬亮
続・硝子便所……芳野眉美
道徳的な物語……笹田豊
私の歓び……瓜生珠子
少年及び女性の切腹……中康弘通
実験室にて……角田平八
淫火（第五回）……松井籟子
吊られた白鳥……川端多奈子
魔都上海の思い出から……姫宮四郎
奴隷の安の記……中野安太郎
縛られた妻以前……早川新二郎
盲いたる手……藤安節子
真空地帯の一插話……簑六平
暴帝イワン罪悪史……高取辰治

籟子女史を囲んで

★第二回 讀者座談会★

日時　昭和二十八年三月十五日　午後二時
場所　大阪　アベノ　料亭　よしや

出席者　松井籟子女史
川端多奈子嬢

讀者側　西沢芳造氏（32才）貿易商勤務
三山武夫氏（40才）纖維会社々長
五野明氏（38才）商店主
森菊三氏（47才）運送業
芝利助氏（53才）大学教授

本誌側　箕田京二
司會者　高月大三

○〝淫火〟の作者に対する興味

司会　新年号から連載しています〝淫火〟について作者の松井さんを中心として話をすゝめてゆきたいと思います。松井さんにお伺いしたいことがございましたら——

森　新世界のことを〝淫火〟ではよく書いていられますが、相当お詳しいのですか

松井　別にあまり詳しいということはないんです。たゞ舞台として扱っているだけにもつとよく知りたいと思っています

三山　失礼ですが大阪出身ではないと……

松井　えゝ戦後こちらへ参りました。ずつと東京だつたものですから。……それで今度の〝淫火〟なんかでも大阪の特に新世界あたりのことをよく知りたいといつも思つて……前回の原稿でも地下鉄で昭和町へ行つたと書いてしまつてあまりよく知らないものですからあとで実際に行つてみたりしたんです。

司会　新世界の小屋掛けの見世物だとか責めの写真のようなものは矢張り御覧になつてるんでしょうね

松井　えゝ、ある程度興味を持つています

司会　どうです〝淫火〟の作者として松井さ

松井

んにどんな興味をお持ちになります？

芝　松井さんは縛りたい方、それとも縛られたい方ですか？

松井　サア、……フ、フ、

西沢　〃恋の烙印〃読んだ時は僕は五分五分という感じがしたナ、しかし現在の〃淫火〃は松井さん自身が小百合夫人だと思いますねお目にかゝってからそんな気がするのが特に強い

五野　〃邪恋の焔〃を読んだ時に私はこの作者はどんな人だろうと大変関心を持ちましたあの役者に責められるところはいゝですね自分から虐められるところ何か予期しながらね

司会　松井さんの作品だけから考えて如何ですか、どちらの傾向と……

芝　やはりマゾの方が強いんじやないかと

西沢　僕も今じやそう思いますね

松井　あら、イヤですわ、恥しい

司会　では皆さん、松井さんの第一印象は最初考えていられたイメージとどうですか、ピッタリでしたか、それとも

五野　全然違つた感じです

西沢　もつと肥つた方だと思つていました

森　私は失礼な話ですが、もつと年配の方だと思つていました。そしてサドの方の感じの強い人だと、——

芝　あまりお若くてお奇麗なので驚きました。肥つた肉感的な方のように考えていました

三山　肉感的というのは作品から想像されますね、どうしても

松井　作品はエネルギッシュだとよく云われますのよ、身体はこんなに痩せていますのに

司会　せいぜい松井さんを攻撃して下さいよ散会になつてから、アッ、あれも聞くんだつた、これも言うんだつた等と思つても手おくれですヨ

松井　まあ困りましたわ、皆さんで私をお責めになるおつもり？

司会　いやそんなわけでは——

（一同笑声）

松井　つるし上げね、一種の精神的な〃責め〃ですわ、これは——（笑声）

芝　内心その責めに喜んでいられるんじやないですか？

松井　そうかも知れませんわね（笑声）

三山　あの小説（淫火）の内容について矢張りあんなこと実際に体験せられたことあるんですか、たとえば……

芝　そう、たとえば縛られるとか……、誰かに苛められたとか……

松井　縛られたいと思うことはありますわ、きらいじやないんですから——

三山　思うだけで実際に縛られたことはないんですか、小説読ませて貰つてると実感が出てるんですが……（笑声）

松井　えゝ、そりやア、ないこともないんですけれど……

三山　興味をお持ちになつた動機は一体何んですか、私はそれを聞かせて頂きたいと思つているんですが

松井　フフ……、皆様だつてそうなんでございましよう、先に出して頂かないと……それに私にばかりお聞きにならなくても、皆さん、相当に（司会者に向つて）ねえ、

司会　では、松井さんがあゝおつしやつてるんですから、読者の皆さんの方へ矢を向けましよう。責めに興味を持たされた動機を西沢さんから一つ……

○責めに興味を持ち初めた動機

西沢　僕は子供の頃、堺の龍神の近くに住んでいましてね、夏でしたが海水浴の帰りに或

松井女史

る娼家の二階の窓から女が覗いているのを見たんです。腰巻一枚でね、両手に腰紐かなんか持ってそれをヒョイとこんなぐあいに（型を示す）肩から前に廻してね、何の気なしに鼻唄まじりにやつたんでしようけれど、こちらは子供ながらゾクリとしました。白い肌に淡紅色の紐でしよう、美しいなアと思つたんです。

司会　それから？

西沢　それからですヨ、好きになり出したのは、尤も他にも原因があるんでしようけれど一番何か印象に残つていますね

芝　幾つ位のとき？

西沢　さア、十才ぐらいのことでしよう

森　相当な……（笑声）

芝　いや、みんなそんなものでしよう、それ以前にも意識しないで持つているんですよ

松井　潜在意識？

芝　そう

司会　三山さんは、どうです？

三山　私の場合はね、隣の家が高級バクチ場だつたんです。始めは近所の人も何の商売してる家だか判らなかつたんです。しもた家でね、別荘風な——そこへ手入れがあつたんです。私も隣の事ですから見に行きました。相当みんな抵抗したらしいんですが、その中にその家の主人の二号さんがいたんです。長襦袢一枚で後手に縛り上げられて、勿論跣足なんです。髪も長襦袢も乱れて、引かれてゆく時はきれいだなアと思わず見惚れました。そして後をずつとついて行きました

松井　三山さんのおいくつのときのこと

三山　二十才のときです

松井　その時の連れてゆかれた他の男の人達は？

三山　男の人達のことは目に入らなかつたです（爆笑）

司会　五野さんは？

五野　私は住吉新地の中に住んでいたんです花柳界でしよう、環境が悪かつた（誰か「良かつたんでしよう」と云つたので大笑いになる）

五野　女の方が多いんです。それに昼間は殆んど大人がいないんですがね、少年時代にはいろんな遊びをしますけれど、女の子の友達が多いんでしよう。男の子といつたら私ぐらいで、それでまゝごとやなんかするんですがこれが気に喰わない（笑声）矢つ張り泥棒ごつこや何か強引にやるんです

司会　いくつ位？

五野　十才前後でしよう、始めは面白半分に女の子達を縛つていたんです。だん〳〵油がのつてきて……（笑声）押入れに入れたり猿轡をはめたりね

西沢　初めは一応そんなところなんですね僕は中学校以来だんだん意識してその傾向にかたむいてきました。映画なんかにその場面が出てくるでしよう、そうしたら、二度も三度も見に行つてその場面を楽しむんです。実際にやつたのはやはり支那で……

三山　私も支那では特務機関に居たのです。それで憲兵達が敵の諜報員に対して拷問したりするのを随分見ました。

芝　それは男にですか？

三山　男にはやりませんね、すべて女にですそれも若くて美しい——。死刑と決定した者に拷問するのですから相当ヒドイ事迄やりま

三山氏

した。例えば股裂きとか、

森　股裂きなんて実際に裂けるものですか

三山　裂けますね、牛を二頭使つて――

司会　残酷ですね、そういう話は、読者の方々から大部出揃いましたが、松井さんは如何です。

松井　フフフ……（笑つて答えず）

芝　（松井さんに）「あなたはマゾの方ですかそれとも……」

松井　マゾなんでしようね、どちらかといえば――

三山　縛られたことおありになりますか

松井　えゝ、小さい時に

森　あゝ、小説にありましたね、小百合夫人が、あんな風に？

松井　そうなんです。矢張り子供の遊びにあんなことやるでしよう。五野さんのおつしやつた様なこと……、潤一郎の〝少年〟に出ていたようなことですわ、押入れに入れられたり、縛られたり何か筋書きをこしらえて……

司会　残酷ですね、そういう話は、読者の方々から大部出揃いましたが、松井さんは如何です。

松井　フフフ……（笑つて答えず）

芝　（松井さんに）「あなたはマゾの方ですかそれとも……」

松井　マゾなんでしようね、どちらかといえば――

三山　縛られたことおありになりますか

松井　えゝ、小さい時に

森　あゝ、小説にありましたね、小百合夫人が、あんな風に？

松井　そうなんです。矢張り子供の遊びにあんなことやるでしよう。五野さんのおつしやつた様なこと……、潤一郎の〝少年〟に出ていたようなことですわ、押入れに入れられたり、縛られたり何か筋書きをこしらえて……或る時等縛られたまゝで押入れに入れられたんですが。そしたら私を縛つた子の家の人が食事に呼びに来たんです。その子はそのまゝ帰つてしまつたんであとで大変弱つたことがありますわ

森　現在は？

松井　さあ、どうですか――

西沢　〝淫火〟では小百合夫人がマゾなんでしよう、縛つてほしいんだ、僕が雄作なら夫人をあんなにじり〳〵させないナ

司会　西沢さん、昨年の何月号でしたか、スペースがなくてあなたの読者通信も尻切れトンボになつて残念でしたが、奥さんを縛られた体験談は中々詳しいものでしたね、何時頃から初めました？

【高月註】（十一月号九三頁の読者通信）

西沢　結婚三ヵ月目位にやりました。しかし初めは縛らせてくれなんて中々云えませんからね

松井　それでどうなさいました？

西沢　僕は英語が日本語位に話せるので通訳をしていたんですがあちらの将校と一緒に女を探してくれというんで行つたんです。そしてドアーの外で待つているんですが、酒は入つているし、これはたまらんというわけですそれでその将校をおつぽり出して帰つてしまつたわけですが帰る途中、方々へ寄つて酒の勢いでちやんと計算しといたんです。深夜に帰つたもんだから玄関まで迎えに来ないでしよう。溜つていたモヤモヤが出てきましてね〝折檻だ！〟という訳で一晩中寝させなかつたんです

松井　どんな風に寝かせなかつたの？

西沢　裸になれつていうわけです

司会　素直に裸になられましたか？

西沢　駄目ですね、そんなにカンタンにゆかないですヨ

芝　案外その方がよかつたんじやー（笑声）

西沢　脱がなきや別れるつて言つたんです。第一着衣のまゝじや面白くないですヨ、縛つたまゝで一晩中そのまゝでした。案外翌日はケロリとしていましたが

三山　縛るということはだん〳〵慣れてくるんですね、特に花柳界の妓なぞ、その傾向がありますね、こちらの持つてゆき方次第で

西沢　初めからじやなく、だん〳〵興奮してきてから繩を出すんです

松井　森さんは如何ですか、奥さんを？

森　私は独身です。今のところ、家内を亡くしましてね、誰かいゝ人があつたらお願いします。松井さんのような方なら、もう……

（一同大笑い）

司会　芝さんはどうですか、やはり奥さんを？

芝　私は専ら或る後家さんを縛つています

五野　私はちよつと変つているんです。妻を裸体にして縛つて食卓にして食事をするんです。足はこちらで頭はお膳の向う側に、そして（この間速記中止）……また時には縛つておいて化粧をしてやるんです

司会　あなたが奥さんの化粧をなさるんですか？

五野　そうです。とても楽しいですね、顔の感じを変えるんですヨ、面白いんです。家内も化粧されてしまうと〃鏡を見せて〃なんて云つて自分の顔を映してみています

芝　おしろい、特に練白粉などを私もやつた事がある。あの白粉の匂いは何かセックスアッピールを感じますね

松井　そうですね、白粉のあの匂は女でも催情するんじやないでしようか

芝　そうですか、それなら男は尚更ですね

司会　三村さん、あなたは？奥さんを

三山　私は結婚媒介所を利用します。または花柳界ですね

司会　奥さんにはやりませんか

三山　やりませんね、好みに合わないというか、どちらかと云えば痩せていて肉体が貧弱なんです。それに齢も齢ですから——それよりお金で解決出来る方を選ぶんです。相手も選べるしね

司会　最初から縛るということを条件にですか？

三山　そうじやないんです。直ぐ仕込めますヨ、アパートなんかを借りてやつてね、そろ〳〵その傾向を持ち出すんです。一二ヵ月で飽きてくるとまた次に新しいのを…（笑声）

司会　社長さんともなれば大したものですねこれは驚いた

三山　芸者でも居りますヨ、場所や名は云えないが相当有名なんです。御存知でしようが

芝　あゝ成程、話に聞いたことがあるんですヨ

三山　座敷で縛つてくれというんですヨ

松井　女の方からですの？

三山　そうです、そして酒を飲ませて貰う、そのまゝ唄を歌うんです。

五野　お客の中で変なことする人がありませんか、動けないでしように

三山　いや、大勢いますからね、座敷では少くともそんな事はしなかつた

○女の縛りについて

司会　松井さん、小説を書かれる時に画とか写真とかを参考にされますか？

松井　えゝ、矢張りね、玲子さんのものなど参考になると思つています。挿絵も描いて頂いていることだし、好きですわ、今日はどうしておいでにならなかつたんですの

三山　お逢いになつたことはあるんでしょう？

松井　いえ、いつも駈け違つて……でもぜひ、一度、お目にかゝりたいと思つています

司会　此の次には玲子さんにも来て頂くことにしましよう。ところで縛られた女性の姿ですが、松井さん、どのような姿態をお好みになりますか？

松井　私は口絵にある柱に縛られて後手になつたのなんか好きです。それに岩田専太郎さんのようなタッチや姿態が好きですわ、あまり変なのはどうかと思います。やはり美しさというものを先に考えたいと思いますから、

（芝氏、先刻からスケッチブックを出して松

井女史をスケッチしている傍の鞄の中には相当いろ〳〵な資料がつまつているらしい）

芝　こんなのは如何ですか、ちよつと皆さんにはお見せ出来ない代物ですが

（何か絵を出して松井女史にのみ見せる）

松井　……

芝　私は足は縛らない方が好きですヨ、可能性がありますからね

司会　ハ、、、、可能性がね、たしかにそういう事は言えますね、足を縛らないというところには、

芝　ハ、、、

司会　松井さん、写真なんかお好きですか

松井　最初は一枚見ても鳩尾のあたりがゾクリとしたんですが、この頃ではそう感じなくなりました。

司会　昇華されたつて訳ですか

松井　はじめは見たい〳〵と思つていたんですけれど、ない物は見たいという心理で、でも今ではもうなれつこになつてしまつて。

司会　いつ頃から、そんなのを？

松井　女学生の頃、書店で雑誌をペラ〳〵めくつてそんな挿絵があつたりすると、もう胸がドキドキして、あたりを見まわしながら立ち読みしましたの、そして三日もその書店へ通つて見たことがありましたわ

司会　女学生の頃からお好きだつたんですか？

松井　えゝ

森　私は後手にされて観念しきつたポーズが好きですね、余情といゝますか、空想の限界が広いから。奇クの写真でもこれからお仕置になるという前の写真ですね、あれがたまらない程好きです

西沢　僕は胸の感じがいゝ、なにしろこんな風に繩が喰い込んでね（手を後に廻して型をする）裸でね、乳首が繩で押さえられるんですす

芝　でも、素ッ裸というのはよくないですヨ、それにズロースもいけない、どうしても腰巻だね

森　そうですね、同感です。風情がある

三山　喜多さんの絵はきれいです。見た目に非常に美しい感じがしますね、第一に残酷味がないのがいゝ

松井　そうですわね

西沢　晴雨氏のは繩が多過ぎるんじやないでしようか、何かこうグルグル巻いてしまうやり方で……

森　晴雨氏の物はあまり私も好みません、然し、なんといつても氏は責めに関しての第一者ですネ

三山　晴雨氏の作品で髪を顔がかくれる位たらして、その上から鼻も眼も口も目茶苦茶に縛つたのがあつたでしよう。あれなんか嫌ですね

司会　芝さん、あなたは晴雨さんのものを殆んど蒐められたという事ですが

芝　えゝ、私は晴雨氏の物が好きです。日本髪のくずれた姿はとても美しいものがありますヨ

松井　日本髪もいゝものですわね

西沢　日本髪の問題で新年号以来大分もめていましたが、あれはどうですかねエ、お互の好みなのですから別に自分の畑に引きずり込まなくてもいゝんじやないですか、私はどちらかと云うと感覚派だから、日本髪はどうも

司会　感覚派なら日本髪を美しいと思われる

川端さん

ラリ〳〵として、つまらないのは雨の日ですよう。薄いドレスの外からゴム紐が見えるつていつて。

（一同爆笑）

司会　街を歩いても楽しみが転つているつてわけですね、しかし今の娘さんは腰巻なんかしていますか？

森　少いでしようね

松井　私の娘の頃にはズロース等着物を着た場合はきませんでしたね、着くずれがするつていつて、だから着物を着た姿が悪くなると云いましてね

芝　そうですね

松井　いつだつたか白木屋が焼けた時、女店員が落ちたことがあつて……

芝　そう、そう

松井　綱を持つて窓から降りて来たのですところが下からの風にあふれて着物の裾がぱつとまくれ上るんです。あの頃は百貨店のショツプガールも着物でしたから、……それでまくれ上つた裾を片手で押えた途端、落ツこちやつたんですね

司会　可能性がとんだ命取りつて訳ですね、と云われますけれど、本当でしようね、知らず〳〵に色気がなくなつてゆく。

五野　今でもダンサーあたりはノーズロでしようけれど、何か現実に直結したもの、ネツクレスだとか、イヤリングだとか、今のクツんじやないですか？

西沢　いや、日本人は身体が小さいんです。それに頭が大きい、髪を結うと尚その比率が大になつて、何かこう釣り合いがとれない気がするんです。尤もこれは写真や実際の場合ですが、……絵の場合は違いますね、ある程度釣り合いが取つて描いてあるから絵の美しさはわかります。

三山　私はあの髪のくずれたのは嫌いです。それに今、西沢氏が云われた様に纏が多いのが気になるんです

芝　私はまた別の意味があるんです。素つ裸があまり好まないのはフエテイシズムの傾向があつて腰巻や肌着等に気を引かれるんですいつも街を歩く時には物干し場の方を向いて……。それに娘さんの裾を見て歩きます。風の吹く日等は特にいゝですね、裾がチ

森　それはスタイルの問題でしよう。

司会　女の人がズロースをしていないと気分的の大分影響するんじやないですか、

三山　今の娘さんはズロースを穿いているつていうんで随分きわどいことをやりますヨ

五野　足を投げ出したりして。

芝　やはり腰巻がいゝです。

西沢　然し僕は海辺で海水着姿の女性を見ますね、今脱いできたズロースのゴムのあとが股に残つている様なのに、とても引かれるんです。

司会　ハゝア、なるほど、

三山　私の会社では今作つているクツ下は全部、根元の所にゴムをつけています。使つている女の子にも長いクツ下をはかせてね……太股の所でゴムがグツと喰い込む、あれはいい、

松井　裸に対するポイントというものがあるんでしよう。全裸でなくて何か生活のつながりを身につけている、といつた様な、……何もつけていなければ昔も今も一緒なんでしようけれど、何か現実に直結したもの、ネツクレスだとか、イヤリングだとか、今のクツ

下だと……か、そしたら裸というものが却つて強調されることになると思うんです。

○縛られることについて

司会　折角川端さんもおいで下さつていることですから、皆さんの中で何かお尋ねしたいことがあつたら、どうぞ

川端　いややわ、

（川端嬢この時ちよつて頬を染める）

松井　いつもお写真拝見してますけれど、着やせする方じやないの？裸だととても豊かな感じするのだけど、着物着てらつしやると感じが違うようですわね

川端　えゝ、そうかも知れません

松井　縛られてどんな気持？痛いでしよう、

川端　えゝ、後手はとても痛いですわ

松井　特にどのあたり？

川端　こゝんところ（肘の所を示す）

西沢　写真の中に縛られていて掌を開いていてるのがありますけれど、矢張り手は握つた方が感じが出るんじやないですか？

川端　緊く縛られている時は握つていると痛いんです。開いている方がどちらかといえば楽なものですから、縄のしまり具合が

芝　あゝ、それはそうかも知れないネ、握るというとどうしても手首に力が入りますから

松井　手首なんかに縄のあとが残るでしようね、お風呂なんかには？

川端　えゝ時によると二日位取れないことがありますわ、そんな時お風呂に行けなくて困ります。

松井　川端さん、吊るされたことあるんでしよう？

川端　えゝ

松井　どこが一番痛い？

川端　やつぱり手ですわ、くるぶしの所に綱がかゝるととても痛くつて辛抱出来ませんわ

松井　何分ぐらい吊されてるの

川端　いろ〳〵、三十分くらい放りぱなしにされたことあるわ

松井　こゝんところ等では吊れるでしようか

（隣の部屋との鴨居を指さして）

司会　そりや吊れるでしよう、ポーズによつては、

西沢　縛るものは絹紐がいゝですよ、あとが残らなくてよく締ります。見た眼には痛たそうですが案外こたえないようです。

五野　ナイロンもいゝですよ、買物を包むときに使う、あれを何本を綯りあわすのです。

松井　街で太いものを売つていますか、御自分でお作りになる？

五野　自分で綯りあわします。それが又楽しみでね、私は縛る型もアクロバテックなものが好きですから、いろ〳〵道具を使つたりして……これは今日こゝへ来る前に書いたものですが、いろは四十八年の縛り方を示した図解です。

（五野氏、画用紙に書いた縛り方の図解を廻覧させる）

森　一寸無理なところもありますね、

五野　頭の中で考えただけでまだ全部やつていませんから、出来ない分もあります

司会　或る読者からあまとりあの高橋鉄氏の提唱しておられる体位論、あれと同じく縛り方にも系統的に考えてみてはどうかと提案がありましたが、これなんか面白いですね、芝

さんはその方で高橋さんに御手紙を出されたとか

芝　そうです、私一流の論がありまして一度高橋さんに詳しく書いて出した事があります。勿論返事は来ませんでしたが

司会　それはラーゲの問題でしょう、縛り方の体位といゝますか、それについては？

芝　こゝに方円流の捕縄術の略画を持っていますが、こんなものも研究しています

（大学ノートを廻覧する）

高月　あゝ、方円流なら五月号に嶽収一氏の捕縄雑考で扱っています。

芝　それ縛り方まで書いてある？

高月　あれは確か縛つたところの図解でした

芝　私はもつと詳しく書いたものを持っていますが何れお見せしましょう。

司会　五月号は今印刷中ですが、出来ればその捕縄雑考をお読みになつて御批評下さい

芝　ちよつと実演してみましようか

（此の時芝氏、方円流の縛り方についての型を一同に示す）

西野　クサリは駄目ですよ、あれは、皮膚を挟んで、やつてみましたが抓つたようになつて、あとが大変でした

司会　西野さんはお若いけれど中々その方面の権威者ですね、奥さんにそんな跡が残るまで何時もやられるの？

西野　跡をとるのに蒸タオルで湿布したりマッサージしたり大変ですよ

司会　えゝ？そんなことまでやられるですか

西野　勿論ですとも、恋女房ですもの

（一同爆笑）

司会　猿轡の問題について話が出ませんが

芝　猿轡は豆しぼりに限りますね

西沢　僕は大型のハンカチか何か身近かなものがいゝ、豆しぼりは時代おくれだ、

森　猿ぐつわってそんなに簡単に出来るものですか？

司会　歯を喰いしばれば出来ないという

五野　鼻をつまんで口を開けたところを布か何かを押込んで——

西沢　あれは中々ムツカシイですよ、指で押し込むと噛まれる恐れがある。それにすぐ舌で押し出しますよ

司会　経験者は語るという所ですナ、それであなたなんかどうされます？

西沢　箸なんかで押込んです早く口を布で巻いてしまうんです。

三山　猿ぐつわをかましても相当声にはならないが、声音は立てますね、

芝　猿ぐつわもいゝが、ないのもいゝですよ、悲鳴や呻めきも、音楽的な効果があつて悪くないですよ、

五野　猿ぐつわは顔を振りまわしたりするとすぐゆるんでしまいますね

森　声を立てさせないという目的だつたら外に方法があるでしょう

西沢　口の中へ押し込んだものを細引のようなもので吐き出さないようにしておくとか、

松井　猿ぐつわは声を立てさせない目的の外に自殺させないという目的があるんじやないでしようか、舌を噛んで——

芝　そう、昔は舌を噛みきつてということがよくあつたらしいですナ、

司会　鼻も口も豆しぼりで掩うつていうのは大分に美的効果も狙つているでしようね、

芝　そういうところもある

司会　五野さんなんか奥さんに猿ぐつわをされますか

五野　まア、したりしなかつたりというところです。その必要は余りないのですが、時にはそうした方が喜んだりしましたネ、

司会　晴雨氏の外に誰か責めの絵を専門にやつておられる方を御存じですが、皆さんのコレクションの中に……。

芝　さあ、どうですか、自分では描いておりますが

司会　スケッチ大分お出来になりましたか

芝　いや、大したことはありませんが、摸写やなんかが……。これからためるつもりでいます。

司会　モデルは例の末亡人の方？

芝　えゝ

司会　やはり長襦絆腰巻で

芝　そうです。私は腰巻にフエテイシズムがあるらしいんですナ

三山　私も支那ではいろ〳〵集めましたけれどね、日本では絵というとやはり晴雨氏ですかな

森　その他にはないのじやないですか、勿論かくれた人は居りましようが……（松井氏に向つて）松井さんの書かれる小説には火責めが多いようですが、ローソクだとか煙草だとか

三山　そうですね、そういえば御経験がおありなんですか？何かのお自身でなくとも、そんなものを実際に見られたとか——

松井　まあねえ……だけどローソクや何かは谷崎先生のに出てくるでしょう。ヒントはあんなところですわ、大体こんなことになるだろうと想像出来ますもの。

五野　作品を書いて居られてどんな気持がします？　たとえば小百合夫人がだん〳〵責められてゆくといつたようなところは……矢張りそんな気持になつて書かれるんでしようね、そんな時一度縛られてみたいとお思いになりませんか

松井　それは思いますわ、そんな場面を書く時は手を後へ廻してみて、こうすればこうなるだろうだなんてね……どう思われますかやありませんか

松井　さアネ、ホ……ホゝゝゝ……

司会　縛られたいつていうのはどんな気持からくるんでしようか？

松井　後手に縛られて身動き出来ない姿を見られるという期待、見られるかも知れないというところに興味があるんじやないかしら、川端さん、どう？

川端　えゝ私もそう思いますわ

芝　迫力からいえばやはり実際に縛られてみてその感じを表現するのが本当でしような

西沢　淫火には迫力がありますよ、その点からいえば経験派かな

芝　無論そう考えるべきでしようね、淫火の作家だもの

松井　フランスあたりには〃責め〃を商売にしている娼家があるそうですが、サドもマゾも両方の女が居るんですつてね、日本にはそんなのありませんか

芝　曾根崎にありますよ、それからこのアベノの近くに〃おかま〃に縛つて貰うというそれを人に見て貰いたいんですね

司会　それは男じやないといかんと言うんで〃おかま〃を使うんでしよう。金を払つて

芝　そうなんです。

五野　男同志のは見世物にはなりませんな、女同志のはいゝけれど

三山　金を払つて迄見ようという人はないでしよう。

西沢　堺の龍神の或る娼家にいる妓ですがね

西澤氏

○子（特に伏せる）というんです。これはマゾでして縛られないといけないというんですそのかわり縛つてやれば大満悦つていうところです。

○本誌の性格について

司会　〃責め〃という言葉がよく使われていますが外に何かいゝ表現方法は無いものでしようかね

西沢　〃悦虐〃なんていうのはいゝ言葉だと思いますが、

司会　芝さんの後家さんね、その話を一つして頂けませんか、お齢はいくつ位？

芝　三十過ぎです。縛るのは赤いしごき等でほん軽く手を前へ廻せない程度に、それで足は前に申し上げたように縛らないのです。腰巻からちろ〳〵と白い肌が見えているのはとてもいゝものです。

西沢　新しい筆などを使うでしよう。それに妖花にあつたような話、油を塗つたり、それに……

芝　私はゴムマリを使います。それから香水の瓶なんかもいゝです。男は女の排尿について大変興味を持つものです。私なんか…

三山　戦前の上海では女が首を吊る見世物がありましたね、

司会　本当にですか？

三山　いや、そのあわやという寸前に下ろすんですが、首を締めるといゝらしいですねえ

森・　命がけの大変な見世物ですナ

三山　大阪でも劇場で責めの芝居をやればいゝのですが、東京ではやつていますね、

西沢　大阪ではお客が入りますかな、

司会　劇場ではやはり安全性を狙うからどうでしようかね、

五野　奇譚クラブあたりが主催でどうですか

三山　我々が発起人となつて責めの芝居を企画すれば面白いですよ、小屋を借り切つてね

司会　好きな人が集まるんでしたら会員組織でもやられたら、劇場でやるとしたらいろ〳〵制約もあるだろうし、それに一般の観客が入らないでしよう。

三山　赤字は我々で負担するとして——

司会　同好者が集つてやるのか一番無難だと思いますがね、

芝　本日の様な会合ももつと繰り返しやつてほしいですナ、

司会　これからドシ〳〵開くつもりです。東京方面の読者の方々からやかましく云われましてね、次は松井さんに喜多さんそれに岡田さんあたりと一緒に出張してやりたいと思つています。

森　少しは会費をとつて頂いた方がいゝですよ、こうしてすつかり編集部の御厄介になると心苦しくて、

司会　いやいや、何にも出来なくて、——じや終りに皆さんに御意見を伺いたいのです本誌の青少年に対する影響といつた事について如何ですか？

芝　悪い影響は全然ありませんナ、これは断言出来ます。

三山　そうですね、

五野　私も同感です。

芝　堅苦しい家の子供程問題を起し易いのです。これは私は職業柄からもはつきり申し上げられます。かくすからいけないんです。

西野　そんなに青少年の眼に触れますか？

芝　触れたつていゝじやないですか、芸者屋の子供なんか危かしそうに見えていて問題を起さない。問題をよく起すのは石部金吉の家からですよ、かくすべきではない、知らすべきです。かくしたつて便所の落書にだつてありますからね、知るということはそれだけ人生が広くなる。

司会　適当な時期に知らすという事はそれだけ人生に於ける生活内容が豊富になるというわけですな、特別会員の申込書を見ても三十以上のインテリが多いのです。あの内容では二十前後の人は見ないと思いますが

西沢　そりやそうです。まア、どちらかといえば高等戦術に属しますからね

三山　そうですあの味は青二才にはわからない

森　私も奇譚クラブはあらゆる意味で益はあつても害はないと信じます。どうか張り切つてやつて下さい。

五野　そうですとも、害なんて云つたつて、西部劇でピストルの射ち合いをやるから強盗が増えたつて言うこともないでしよう。子供の玩具はやはり刀にピストルですからね、

西沢　街には競輪だつてパチンコだつてありますよ、害になるというものは街に氾濫しています。そういつた影響を受ける立場にある者は文字を通してという雑誌なんかより、もつと直接感覧に訴える映画なんかへ走るでしよう。

芝　奇クは煽情的でないところがいゝ、極めて良心的でその点感心しています。現在のまゝで十分存在価値があると信じます。

司会　有難うございます。そう皆さんから応援されると大変意を強くするのですが、まあマイナスの点よりプラスの方がより大きいとは思つていますが、時によつて迷う事があるのです。

芝　下劣な読者に媚びる事なく、私達の様なインテリを目標にやつて下さい。大体私は思つているのですが、助平は変態でないという意見です。

司会　はゝあ、するとお助平が常態というわけですよ

芝　そうなんです

司会　芝さんは芝文庫では性教育の方もやつておられたんですか、

芝　いや、あれは只図書の閲覧だけです。

司会　これから追々逆コースで戦争中のようにに取締りがきつくなりますと配本がむつかしくなつてくるのです。定価も本当は一冊五十円位にしたいのですがそういつた隘路があるので駄目なんです。

芝　今でも安いですよ、百五十円でも買いますよ——。値段は安くする必要はないと思う。

森　二百円でも買うと思います。定価は高くすることですナ、価値があれば買います。

司会　お金持は金にあかして待合とか料理屋でいろんな面白い遊びも出来ますが、大衆のさゝやかな娯楽とか慰安、これは認めてほしいと思います。その意味で値段は余り高くしない方がより多くの人々に楽しんで貰えると思つて、でも今の状勢ではムツカしいのです

三山　特別会員を中心としてやられるという企画は？

司会　只今申込書を整理中ですが、特別会員の件については何れKK通信に発表したいと思つています。

森　会員を中心にして今後共いろんな会合や催物をして頂きたいと思います。

芝　私も本日はお招きを頂いて本当に嬉しく思つているのです。

司会　出来るだけ御期待に副うよう努力致します。丁度予定の時間になりましたのでこの辺で終りたいと思います。どうも有難うございました。

（了）

ヴァンプ女優列傳

朝見速夫

近頃の映画女優には「ヴアンプ女優」と言うのがなくなつた。これは一部の映画ファンにとつて極めて寂しい事である。エロ全盛の時代に復帰してヴアンプ女優が復興しないと言うのは物足りない現象である。

元来エロと言うものはいつの時代でも、世の中の政治の動きにつれて盛衰がある。本来なら、人間が生きて飯を食つて居る以上、絶対にすたりのないもの〻筈であるが、時の政治が必要に応じて弾圧し、緩和してコントロールして居るために、抑える手さえなければいつでもムク〳〵と起上つてくる根強い力を持つて居るものなのである。

昭和に入つて第一時エロ全盛期は、昭和四年頃からで、若い人達が赤に染まる事を恐れて時の政府がこれを〝桃色〟に染めようとしてエロ抑圧の手を弛めた時に派生したのが、映画に於ける〝ヴアンプ女優である〟当時のエロ女優、ヴアンプ女優を拾つて見るのも現在初老期に入つた人達には懐かしい想い出となるのではなかろうか。若い人達には「そんな女優も居たのか」と現在のエロ女優と比較して読んで貰えばよい。

峰吟子（1）

日活映画華やかりし頃、夏川静江、入江たか子等が大スターとして人気の絶頂にあつた頃、突如として現われた峰吟子の、豊満な肉体、妖艶なマスクに、当時の映画ファンは一ペンに魅了されてしまつた。

牧逸馬原作の〝この太陽〟に夏川、入江と共演して艶を競つたが彼女の爛熟した肉体から発散するエロチシズム殊にベットルームで小杉勇を誘惑するシーンなどは観る者をして生唾をのみこませる昂奮を誘つた。〝エロ吟〟とニックネームされて、その海水着姿のプロマイドはにきびはなやかな青年達のマスターベーションの対象となつた、

映画雑誌は彼女を表紙にさえ出せば文句なしに売れた。彼女の男をとろかすような瞳とムッチリとした肩から二の腕にかけての肉づきと、豊かに逞ましい腰部から太腿へかけての線は、サデイストにとつては垂涎の的であり、マゾヒストにとつては渇仰の魔女であつた。

彼女の演技は屢々カットされたが、それはアクションとしてはさのみ猥褻ではないのだが、彼女が演ずるとアッピールが強過ぎるの

で、当時の検閲官の神経を刺戟したらしい。他の女優が同じ事をやつたらカットされずに済んだであろうものを、〃エロ吟〃がやるとカットと来るのには監督諸氏もクサツた事であろう。事程左様に峰吟子の肉体と容貌はエロのエッセンスであつたのである。

伊達里子（1）

日活の峰吟子に対抗して、松竹には伊達里子がガン張つて居た。今でこそ彼女はデクデクのオバアチヤンになつてしまつたが、若い頃はどうして峰吟子に負けない美事な肢体と男の欲情をソ、ルものを多分に持合わして居たのである。

八雲恵美子（後に理恵子と改名）が芸者から映画スターになつて、第一回のデヴユー主演に、伊達里子も助演として顔を出したが、彼女のイットは完全にヒロイン八雲を圧倒してしまつた。その時の役も、八雲が純情型であるのに対して、ダテサトは断然ヴアンプで八雲の恋人を横取りして、序でに人気も横取りしたカタチであつた。日活の〃エロ吟〃に対して彼女は〃イット女優〃の尊称を送られたのである。

彼女の海水着写真も彼女を崇拝する青年達から夜毎そのふくよかな太股に接吻の雨を浴びたのである。

入江たか子（1）

彼女の美貌は今更喋々する迄もない、いまだにウツクシイのであるが、最近では如何にせん少々トウがたつた感があるのはお年のせいとは言え甚だイカンであるが、昭和四、五年の頃の彼女と来たら、水々しくつて、太モの線だつてピン！とハリキツテ居たのである。

彼女の自慢とするところはその麗わしいミメカタチよりもむしろスンナリとのびた脚線にあつたので、〃生ける人形〃とか〃この太陽〃の〃多美枝の巻〃などに主演した時には誇らかにスカートを蹴つて御自慢のアンヨを拝ましてくれたものである。

一方時代劇に出るようになつてからは〃滝の白糸〃で岡田時彦に組んで凄艶そのものゝ演技を見せ、スタイルの上から言つたら、水谷八重子のオハコである〃滝の白糸〃も彼女の前には土下座しなければならぬ程の差があつた。

大河内伝次郎と組んだ「栗山大膳」に〃お秀の方〃として出た時は、流石に気品のある上臈姿であつたが、忠臣栗山大膳を呪う時の片眼を細めて、下唇をギュッと噛みしめた表情には、何とも言えぬ凄味が漂つて居て、あの表情だけは、映画ファンにとつて忘れ得ぬ思い出となつて居る。彼女の売出した頃は〃フラッパー〃が適役だつたが段々貫禄がつくに従つて〃ヴアンパイア〃に転向して来たようである。

酒井米子（3）

妖婦役としては日活の大姐御である。河部五郎の相手役として「江戸三国志」の〃芸者幾松〃谷崎十郎と組んだ「鳴戸秘帖」の〃見返りお綱〃等、数々の印象に残るヴアンプ振りを見たがどうも彼女は総体から受ける感じが線が細くて、アッピールの点で些か物足りない、只今の言葉で申上げると「ヴオリユームに乏しい」と言う訳。だが彼女の多くのヴアンプ役の中に一本だけイタダケるのがある。それは〃清水次郎長〃河部五郎主演の映画で何とか言う女侠客になつた時、眉をおとしてお歯ぐろを染めて出たが、一寸スゴイ立廻りをやつて見せた。片肌脱ぎになつて梯子段の中途で階段を二段位跨いで肌脱ぎになつた腋の下に男の首をかいこみ、匕首を振かぶつて見栄

をきつた所は、一寸みるべきものがあつた。

五月信子（3）

古い所が出た序でに最も古いヴアンプのシーニアを紹介せねばなるまい。

大正初期に講談社で出したエロ小説「人肉の市」が物凄く売れたので、これを映画化した時に主演したのが彼女で、腰巻一つの裸体姿を大正時代の映画でやつてのけたのだから当時としては大胆不敵と言える心臓の持主である。

然しこの人は間もなく水々しさを失つてしまつて、生気に乏しくなり、早く言えばオバアちやんになつてしまつたので、如何にスゴンで見せても、どうも困つた次第と相なつたのである。「鬼神」と言うのに〝鬼神のお松〟になつて出た時、その凄味のある眼ざしと言い、笑つた口もとが美しいのであるが、眼の下の皺が気になつて残念ながら頂けなかつた

註 名前の下の数字は筆者独自の見地から見たヴアンプ女優の接点で(1)に一流(2)は二流と言つた大まかなランキングである

大江美智子（1）

市川右太衛門の相手役として松竹下加茂の映画に演て居た頃は、あの独特の凄みのある瞳でファンを悩殺したものである。

彼女の容貌は、素顔の時は可愛らしい顔で少女歌劇に居た頃はあどけない表情をして居たのであるが、映画に入つて、ヴアンプのメイクアップをすると俄然スゴクなつて、彼女の一ベッにフラ〳〵になつたファンは相当多かつた。

然し彼女が真に艶名を謳われたのは、後に実演に転向して鈴鳳劇を組織し、女剣劇界のクインとなつてからの方が、更に彼女の真価の発揮したのであるが、これはこゝでは畑違いだから又別の機会に譲る。（現代の大江美智子は二代目である。）

梅村蓉子（3）

現代劇に出て居た頃は純情な娘型で、岡田時彦と共演した「紙人形春のさゝやき」の如きは優秀なメロドラマとしてミーハー族の紅涙を絞つたものだが、時代劇に転向するや、「孔雀の光」でチヤンバラを見せ、次第にヴアンパイアの様相を呈して来た。然し彼女のエロ味は野性的なものでなく、シットリと練れた色つぽさで、それが「唐人お吉」に依つて完成されたが、彼女のなよ〳〵とした姿態とウツトリとしたなが眼は毒婦というより淫婦の感じである。

原駒子（2）

この辺りからそろ〳〵ドギツイ演技の女優を引つ張り出そう。

彼女の居た東亜キネマと言う映画会社は大衆的な製作専門で、俗悪、低級、浅薄、下劣の酷評は毎度の如くだつたが、斯うした中に又捨て難いものがあるので、恰度談談の豆本のような魅力がある。狙いはエロとスリルの一点張りで、その代表的な女優が原駒子である。

「これでもか、これでもか」と言つた調子で観客に迫つて来る。彼女のメークアップは一つの新しい流行の型となつたもので、眉を思いきりつり上げ、時代劇だと言うのに、眼の上に真黒なアイシヤドウをつけ、眼尻にとげ〳〵しい紅をさして、彼女が睨んだ形相の如き、今から思えばバケモノのようなオツカナイ顔だつたが、当時はこれで結構イケたのである。

着つけにしても思いきり胸をはだけて、帯を斜めに解けそうに結び、裾前から白い湯もじをチラ〳〵させた姿は、中年男の劣情をか

きたてた。

ハラコマの毒婦役としての代表作は「からくり蝶」と言う嵐寛寿郎主演の映画にミしがらみお仙〃と言うアバズレ役で出た奴だろうこの映画では大名の玄関先で、肩に豆絞りの手拭をのせてケツを捲つて啖呵をきると言う河内山と弁天小僧のアイノコみたいな事をしたり、立廻りでは無手で捕方を四、五人相手にする所がみもので、向つて来る捕方の横つ面を平手でピタリ〳〵と張り倒し、足をあげて蹴倒したりする、中でも捕方の一人を四つン這わせて、その背中へ足をかけて踏まえ、下を向いて、「フ、ン」とあざ笑う所の半身像は非常に良かつた。裾を捲つて白い腰巻を出し、その腰巻の下から太股がチョツピリ覗いて居る、それは画面の最も下部で、踏まえられた捕方は写されてなかつたが、非常に暗示的な印象を与えた。

「女左膳」などと言うシロモノに至つては、まるつきりエログロの連続で、背景だとか筋の運びなどはテンで神経を使つてないオソマツな写真だつたが、それはそれで結構タノシメた。

鈴木澄子（2）

東亜キネマこ名が出れば当然帝キネも紹介しなければなるまい。此処で一番に指を屈するのは鈴木澄子である。

彼女のヴアンプとしての経緯は一寸変つて居て、大抵の女優は娘型から段々ヴアンプに変つて行くのが普通だが、お澄さんのは最初は物凄くあくどい毒婦役から、次第に梅村蓉子式のウットリ型になつて行つた。

彼女が後年大映に移つて「お伝地獄」や「お伝〃でも〃花井お梅〃でもあまり凄味はなせん」などで、浮世絵風の湯上りで爪をきる所や、向い風に裾を捲られる場面は、エロではあるが、ヴアンプにはあまり関係ない。〃かつた。更に肉体の衰退からバケネコ専門に変つた頃は、もはやヴアンプもエロも姿を消してしまつて居た。

彼女のヴアンプとしての良さは、やはり帝キネ時代にあるので、昭和六年頃に作られた「かるめん」と言う映画はあまり知られて居ないが、なか〳〵いゝ場面が多かつた。あぐらをかいてトランプの独り占いをやる場面では、懐ろ手をして、トランプをキル所が切られ与三が懐ろ手で金勘定をするあれを真似たのだろうが、一寸いゝポーズだつた。男をだまし討ちにして、男が足許で苦悶するのを見下して快さそうに笑い、日和下駄で背中を踏んづけた揚句、パッと蹴とばすと、男の身体がコロ〳〵と石段を転がつて行く、その頃のお澄さんは綺麗だつた。

「祇園の姉妹」と言う映画で、全裸の後姿を見せる行水のシーンはヴアンプとは関係ないが、一応記しておくべきだろう。

松枝鶴子（3）

鈴木澄子を出したら帝キネの先輩である松枝鶴子も一寸出しとかないと義理が悪い。

彼女は映画の上ではあまりスゴイ所は見せなかつたが、スタジオ内では大したエロ姐御として有名だつた。

「うわばみ」と異名のある酒豪で、一升ぐらいは軽く平げて、酔つぱらうと腰巻までクルツと捲つた大あぐらで「よく拝んどきな」茶腕でグイ〳〵やる所は、当時としてはズバ抜けた度胸ともてはやされた。

大林梅子（3）

東亜、帝キネ、と語つた上はマキノ映画も引きあいに出すのが仁義であろう。

ところがこの会社にはあまり優秀なのがいない。僅かに大林梅子、松浦築枝、マキノ智

子の三人位だが、後の二人はヴアンプ役は二三度やつたが、どうもピンと来ない。

大林梅子はなか〳〵素質のあるいゝ味を見せて居だが今一つ思いきつたところが出せなかつたのは惜しい。

桜井京子（3）

日活で沢田清と一緒にデヴューした頃は娘役だつたが、人気が落ちると、東亜だつたかマキノだつたかに移つてヴアンプに転向したが、その頃には既に容色衰えて、肩をムキ露しにしたり裾を捲つて見せたりしても左程に感じなかつた。

三城輝子（3）

大都映画の社長の娘と言うのが一寸魅力を感じたが、あまり美人ではない。「女やくざ巡礼」と言うのに股旅物の女剣戟をやつたが白いパッチの下からムキ露した太股のハチキレンばかりの若さが美しかつた。「弁天小僧御用陣」と言うのもフンダンに裾をはだけてチヤンバラを見せた。

山田五十鈴（2）

「弁天小僧」が出た序でに「ベル」女史のことを一寸記しておこう。

この人はヴアンプ女優の中には入らぬが芸域が広いので、その一部にはその匂いも多少するのである。

大体彼女の売出し映画「愛憎峠」が劇中劇で弁天小僧をやり、エイッとお尻を捲つて見せたスチールが人気を呼んだが、映画ではカットされて、何が何だか分らない場面になつてしまつた。

彼女の主演映画で、日活時代に「競艶白浪五人女」と言うのがあつて、彼女の他に、原駒子、梅村蓉子などが、大いにヴアンプ振りを競つたのがあるが、その頃は今よりもつと綺麗だつた。

自殺の手段としての女性の切腹について

池田敏夫

四月号で拝見しました信太蓉子様の記事の中に女性の切腹は殆んどないだろうという事がありましたが、実は私が自殺について少しばかり調べていました間に僅かな新聞記事から拾つたものだけでも昭和年間に六十例ばかりありました。資料は戦災で焼いてしまいましたので今は唯記憶に残つている数例だけお報せ致します。

この二人の娘は丙午を苦にしての自殺です。

同年　網島温泉で娘二人が同性愛から二人とも腹を切つている事件があります。

昭和九年三月（？）横浜磯子の芸者（三二才）西洋剃刀で割腹、大腸露出して死す

日本刀を用いたのは大てい人妻で、世田ヶ谷の請負師の若妻がすつかり薄化粧までして美事に腹一文字に切つたのがあります

同年、尾久、商家の娘（二三才）剃刀で腹一文字、頸動脈切断。

少し古く大正年間でしたが牛込で長唄の師匠（四二才が）情夫と飲酒中、痴話が嵩て腹を十文字に掻切つたのがありました

同年（或は前年）千葉蘇我町の娘（二三才）日本剃刀で割腹死。

又四谷で日本刀を臍の下から背中まで突貫いた女房（三五才）があります。

鎌で割腹した例が高田義一郎氏の「自殺学」（新青年連載）に二人の女性が挙げら

小川雪子（2）

彼女には特筆すべき一大エロシーンがある然しこれは残念ながら映画時代でなくて、後に女剣戟に転向してからのことなので、此処に書く事が出来ないのが残念である。

映画時代でも相当アバレたが、何と言う映画だつたか題名は忘れたが、日和下駄を片手に振り廻して、男共を殴りつける変つた立廻りを記憶して居る。

木下双葉（1）

最後にトツトキの二人を出そう。大都映画随一のエロ女優木下双葉は素晴らしかた。

昔帝キネ千草香子と言う素晴しく綺麗な女優が居たが、木下双葉はその種の美人で、更に妖艶だつた。

彼女の売出し映画「競艶刺青双紙」で、刺青した背中を全部見せる場面があり、彼女の豊満な肉づきが先ず観客の第一印象に残つた

彼女の殺陣は相当乱暴だつたが、惜しい事に下半身を充分に露した場面がなかつたのは残念である。その頃はそんな場面があろうものなら直ぐカットされてしまつたので、露出症の彼女としても残念だつたろう。

その代り有名なエピソードがある。彼女が

れています。何れも群馬県下で一人は失恋の娘、一人は人妻でした。蓉子氏の文中の女工員というのは、東京都下であつた事件ではないかと思いますが、剃刀で下腹を十文字に切つた人だと思います。

伏姫をそのまゝ姙娠五ヶ月の腹を剃刀で真一文字に切つた娘（一七才）が私の知つている処では一番年若だと思います。

劇的な実例はたしか請地（向島）だつたと思いますが妹娘（二二才）がその情夫の結婚を悲観して式の当日短刀で腹を切つて苦しんでいるのを発見した姉娘が傷口を晒でしつかりくゝり車へのせて男の家まで伴つたのがあります。

結婚といえば、すつかり花嫁衣裳をつけて式場から脱け出して、人気のない場所へ逃れて衣裳の裾をまくり上げて下腹を抉つた娘があります。原因は性交不能を悲観したものでした。

以上数例に過ぎませんが、とに角、女の割腹自殺は決して少くないものと思います。しかし概して何か性的不満があつたり、性的衝動にかられたりした時、発作的に行われるらしい点が覗がわれるようです。もつとも大津事件の畠山勇子の様に国家の重大事とばかり割腹した女性もありますが、洲崎の娼妓照子（二五才）の如きは全く性的衝動からの割腹のようです。この女は日本剃刀で下腹を掻切り腸を摑み出して死にました。信太様の云われる女の腹切も決して非現実的ではなさそうです。唯、あまり近代的でない方法であることは否めないと存じます。

奈良の若草山でのロケの時だつたか、捕方を相手の猛闘で、捕縄を摑んだまゝ、ズル〳〵と地べたを引ずられるシーンがある。その時彼女がサツと片膝を曲げ、次いでグイと足を開いた所を足許の方からクランクして居たカメラマンが「アツ」と言つて中止してしまつたのである。この時の試写室は未曾有の超満員となつたそうだが、勿論スタジオでカツトしてしまつた。

惜しい哉早逝してしまつたが、もう少し生きて居れば、まだ〳〵暴れたに違いない、もう一寸彼女の肉体の部分を観賞しておきたかつたファンがあることは一人筆者のみではあ

其頃を語る（一）

新派劇の責場

伊藤晴雨

慶長以来三百有余年の多彩なる歴史を有する所謂旧劇と明治中期時の為政者の圧迫に反抗して起つた非芸術的なる壮士芝居は新派という名称になる迄約二十年にしかならない短い歴史しかもつて居ないから其の演じた脚本は量に於ても質に於ても前者に劣るものがあるかも知れないが、写実という点から一新機軸を出して現在の如き地位を得る迄の新演劇は女の縛られる場面を観客の吸引策として生長して来た事を何としても否定することは出来ないと私は考えて居るものである。

明治初期の話は現代の青年諸君には痴人の白日夢としか思われないであろうが、当時女の責場の舞台を見たもので無ければ語り得ない雰囲気を記して置く事も亦徒爾では無いと信ずる。

新派という名称は明治三六年頃と記憶して居る。其以前は壮士芝居といつて居た。壮士芝居の起りは実に明治二二年六月十二日、大阪新明座（友人柿永二郎氏著、新派六十年史に拠る）に於て角藤定憲が座長となり一年半で著名な明治の政客兆民中江篤介を顧問として発祥した、狂言は「豪胆の書生」切狂言は「勤王美談上野旗風」で中将姫の雪責を世話で書直したもので新派の責め場は其の発祥第一歩に於て既に因縁浅からざるものがある。

昔の狂言作者（桜田治助であつたと思う）も見物に受ける狂言を書こうと思えば人気のある美しい女形（女優の無かつた時代）を桜の木の下に荒縄で縛つて酷い責め方をまい。

伏見直江（1）

ヴアンプ女優列伝なら一番先にトビ出して来なけりやならない筈の女が一四居やしませんかツとヒラキ直るファンがあるに違いないそう〳〵忘れてましたよ。一番スゴイのをこりやもう文句なしに一番スゴイ、だが惜しい事に少々肉体が貧弱だ。

生れは日活のウズマサスタジオ、がきの時から男のように育てられたのが役立つて、度胸のいゝ事はアプレそこのけ。

「直つべい今日はどんなズロースはいて来た？」

「おう、今日はこれだよ」

スタジオで谷幹一だの神田俊二などと言うヨタモンがからかい半分で聞くと、彼女は即座にこれを反撥して、洋服の時だろうと和服の時だろうとお構いなしにズロースを見せたなんてのは、今では大した事はないが当時ではオドロキの一つだつた。

大当り「大岡政談」での〃櫛巻お藤〃のスゴさは最も著名なもので、大河内の丹下左膳に髪の毛を摑んで引ずり廻されるマゾヒズム伊藤みはるを荒縄で縛つて、いじめ抜くサデ

をすれば大抵の場合は大入を取る事疑ないし、と作者秘伝とも云うべき書物に記してある。

出発当時素人同志の集合で時の官憲の圧迫を避ける一種の手段に過ぎない壮士芝居がこうした近道を歩んで、数年にして伝統のある旧派の墨を摩して一時は旧派を凌がんとする程の流行（？）を見たのは、少しく我田引水の観なき能わざるも女の責場を以て低級の観客に媚びたのが成功したとも云えるのである。

其最も女の責場が流行したのは明治三十年以後三六・七年、即ち日露戦役後迄約八九年間連続的に責場の全盛期であつた。当時の新派（と称する名称は本郷座から始まつた様に覚えて居る）の脚本は、大劇場は別として小劇場専属の作者が無いので俳優自ら脚色した脚本で、警視庁の検閲もやかましく無かつたので時には「口立て」といつて大体の荒筋をシヤベツて幕をあけた事さえある位で其脚本は主として各新聞の続き物（現代の大衆小説）から取材して、今の東京新聞には渡辺黙禅氏も女の責場の礼讃者であつて「殺さば殺せと馬子の時」の原作者「堀のお梅」其の他の小説では女の責場が出ない時は殆んど無い位。これを選んで上場する新派はあの責場に重点を置き其責方も亦、思い切つて惨酷を極めて居た其方は後に記す事にする。

角藤定憲から少し後れて壮士芝居を始めたのは、現代新派の根幹を為す処の所謂書生芝居で川上音二郎である。川上は大阪二輪加をやつたり政談演説をやつたりして居たが明治二四・五年の頃、角藤より一足先に東京を志して東上し浅草鳥越の中村座で「板垣君遭難実記」を演じて認められたが其の発祥の劇場は実に堺市の卯の日座であつたという。

私が川上の芝居を見たのは明治二七年九月八日、浅草新猿屋町の浅草座で「日清戦争」の通し、川上の新聞記者、比良田鉄哉と藤沢浅次郎、同、水沢恭二が北京で中国兵に捕われた石田信夫の扮する日本赤十字社の看護婦、春田しげと共に李鴻章の面前に引き出されて拷問される場面がある。

茲で一寸書かなければならない事は当時はまだ一座に女優が無く女形であつた。其の凄も現代の如く自然で無く「旧グリ」といつて旧派のそれを用いて居たので顔のこしらえも亦、旧派の俳優と何等選ぶ処が無いズム、ドカント一発ガンを打放して、煙の出て居る銃口をペロリと舐めるシーン、捕方に囲まれて、屋根から屋根え、梯子へ乗つて飛び移る場面、下でエキストラの捕方連中がどんなにズイ喜の涙を流した事か。

然し筆者の見たうちで一番魅力的だつたのは、「八剣飛龍」と見う沢田清と共演した時のヴアンプ振りで仰向けに寝転がつて、両手を組んで頭の下に枕にすると、二の腕が捲れて刺青がチラリと覗け、胸の隆起から今にもオッパイがこぼれ出そう。カメラが次第に移動して下つ腹から太股の方にナメるように悠くりと写し出して行くと、それを待つてたようにに片脚をグイとくの字に曲げる。——

兎に角彼女の表情には非常に凄まじいサディズムがひらめく事があるのが、堪らぬ魅力だつた。

彼女が同性の純情型の娘を責めるシーンは数えきれない程見たが、彼女の表情を見て居るだけで充分堪能出来た。

男性マゾを扱かつた彼女の映画に「背中の磔」と言うのがある。

これは男性マゾヒストにとつては見応えのあるシーンがある。

尾上華丈と光岡龍三郎の二人の浪人が直江

かつた。赤十字社の看護婦が戦地で「銀杏返し」結つて居るなどは可笑しいが束髪のカツラなど出来ない時代であつた事と、責められて髪の乱れる形の上からこうしたものと思われる、事の序でに云えば此の興行に北京市街の背景を仏国から新帰朝の洋画家、高橋勝蔵（明治四三年没）が描いて居る以前二五年二月、赤坂新市村座（後の演技座）に於て福井茂兵衛の明治天一坊の狂言で、高輪海岸を描いて居るが私は見て居ない。

日清戦争という有史以来の大事件に有頂天になつた国民は何処かしこも戦争芝居、素人上りの一夜漬の俳優が雨後の筍の如くに殖えたが番茶に毛の生えた様な芝居が永続性の有り相な筈が無く、二九年頃から探偵小説やら新聞の続きもの（今の大衆文芸）を脚色する様になつたが、前に云つた様に脚色に困れば女の責場を一幕加えるのが新派の定石のようになつて居た。

其頃の新派の女形は責め場で観客の同情をひく為、思い切つた残酷な方法を以て演出した。其の一例を云えば、立木へ吊し上げて弓の折れで叩く（ホントウに叩く）位は序の口で、ビール壜を舞台でメチヤ〳〵に叩き割り硝子の「缺けら」で令嬢の頬を切ると血の流れるのや、雪責めの場合など女の身体が全く雪（紙を切つたもの）で埋まる迄責める様な事もあつた。責められる女形はステッキで力一杯打たれる。（勿論、杖に仕掛はあるのだが）着物の下に着込んで割竹で責められる。割竹は折れて飛び散るのを見て観客は涙を流し乍ら拍手を送るという非芸術的な舞台を見せたが責場の迫真力は旧劇の明烏の雪責とは雲泥の相違であつた。

西南戦争を脚色したもので谷村圭助の味を出し、縛られた両腕の間へ小銃を突つ込み両方から引張るので負傷した細野勝次という女形があつた。此の俳優はカツラの髪の壊れ具合が不自然だというので吉原の馴染の女郎を縛つて髪の壊れ具合を研究した程熱心な舞台を見せて居た。当時の脚本は現代の如く知名の文士が筆を執るなど極めて稀で大抵は座附作者の一夜漬けか、又は他の芝居の当り狂言をコツソリ処か大ツピラに失敬するのだから甲の脚本が乙の座で演ぜられてから丙へと移動され、題名丈けが御都合主義に変更されるので「十万円」が「百万円」と変つたり、「子故の闇大陰の酌婦を争つて斬り合いになる。二人共傷ついて苦悶するのを、気持良さそうに眺める直江が、二人の傍に突立つて上から見下すと、二人が足許に這い寄つて来て、両方から彼女の膝にすがり、腰に抱ついて行く、それを尻を一振り振つて、二人を振りとばす所などは見落した人は残念がつたものである。

中村直江（2）

こんな女優を知つて居る人は今では殆んどないだろう。映画関係の人でも殆んど知らない人が多いと思う。

大都映画で三城輝子や大河百々代、水川八重子などが花を咲かせて居た時分に「毒蛇」と言う写真を一本撮つたきりで、後は姿を消してしまつた女優である。

この「毒蛇」と言うのが物凄かつた。中村直江扮する所の毒婦が、蚊張の中で男を殺す場面がある。

男の寝て居る上へ馬乗りに跨がつて匕首で喉を刺す。七転八倒するのを上からギユッとおさえつける。蚊張を通してのボカシ具合が素晴しい。そのうち蚊張が外れて、男が這い出してくるのを、その背中へ跨がつて匕首を逆手に又喉元へ止めの一えぐり！

謀」が「可憐の令嬢」「八重霞」等と更衣をするといつた様に袋が変つても中味は変らず似たり寄つたりの財産争いのお家騒動責められる女形が美しければミイちやんハァちやんの大喝采、長夜の夢をむさぼつて居る内に旧派の俳優と高田藤沢坪井等が「金色夜叉」や「不如婦」を出す様になつて責場芝居は影が薄くなつてしまつたが、それで映画の盛んならざりし大正初期迄、東京市内十八劇場に於て演ぜられた美人の責場を数えたら、大同小異とは云え数百種に上るであろう。

脚本の共通点を一括して記せば序幕は大抵花見で華族の令嬢が巨万の財産を隠した場所を知つて居て女役者になつて居る。これを悪い家令が華族の令夫人と密通、共謀して其の令嬢を誘拐し、華族の奥庭で、財産の有り場所を白状しろと責める。これを忠義な侍女が自分の兄が仕事師をして居るのでそこへ急報する。兄の仕事師は令嬢を取り戻しに単身其の邸へ乗り込むと反つて大勢の書生に袋叩きにされて、眉間を割られて門前へ叩き出される、眉間の疵を見て仕事師の子分が仕返しに行くという折柄打つ込む半鐘は其華族邸内の出火を知り一同勇んで飛んで行くと舞台一面の猛火の中に仕事師は令嬢を火中より救い出し悪人は自滅するという目でたし〳〵の大団円がナント五幕十三場という通し狂言、馬鹿々々しいと云つてしまえばそれ迄だが当時の十八番、女の責場は新派の独壇場でおかずに困れば雁もどき、狂言につまれば忠臣蔵と旧派の芝居では決つて居たが女の責場が如何に当時の人々を喜ばせたかという事を考えると「責場の美」という点が好奇心をそゝつた以外に荒み切つた戦争後の人心を緩和した一種の安全弁では無いかと私は考えて居る。

（未完）

伊藤晴雨

其頃を語る

（二）辻番附の話
（三）明治期の被縛画家
（四）絵看板の咄

と言うのである。

この女優さんはヴアンプ女優列伝の中には缺く事の出来ぬスクープである。

以上一昔前のエロ女優のうち特にヴアンパイアのみを拾つて見た。

この他に**高山広子**、**雲井八重子**なんてのもそのハンチユウに入るかも知れないが紙数の都合でオミットした。

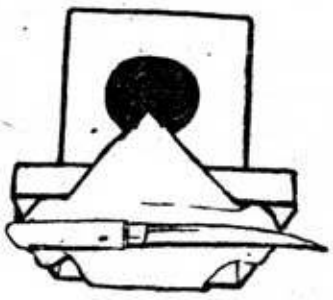
京マチ子、荒川さつき、木暮実千代、あたりになると現役の部類に入るからわざと抜いた。

どだい〝ヴアンプ〟と云う言葉が流行おくれなくだから、文章もなるべく当時流行した調子を出したつもりである。

なつかしいと想つた人が何人でもあるとすれば、筆者は満足である。

◎次号予告

川端多奈子さんへ
信太蓉子さんへ
羽村京子より
因獄の思出　**獄　収一**



文藝に於ける切腹描寫

—サド・マゾヒズムの藝術—

中康弘通

日本の文学史上、殊に近世以後は、武士道精神の象徴として、仇討と切腹は最も重要な作品構成要素であつた。然し切腹が歴史的文献——軍記もの——を除く文学的作品に扱われたのは、幸若舞曲を以て最初とすべきであろう。青墓、長田、清重、高館等は、源氏の興亡に絡る、朝長、義朝、清重、亀井六郎等の切腹を描いているが、必ずしも史実ではない。其の伝承は古浄瑠璃と浮世草子とに承け継がれ、やがて近松を以て代表される浄瑠璃と、西鶴の草子乃至は読本に姿を変え、近代文学の発生迄続いた。近代に入つてからは、軍記ものを種本とした軍談読みを始祖とする実録ものと、読本との綜合的発展として歴史小説が勃興し、今日見られる如き大衆時代小説が、大正以後興隆した。

本来なれば上記の各過程における切腹描写の歴史的変遷を例証すべきであるが、読者にとつて興も薄いと思われるので、近代以後の小説から、切腹の事情により分類的に概説したい。

切腹は先に発表した「切腹史談」にも説く如く、種々の素因に依るけれども究極は武士道の意地と義理に絡んで、或は欣然として止むなく、自己加虐の限りを尽くす。従つて何れの場合もサディズム、又はマゾヒズム、或いは両者の複合的性質を帯びている。

文芸作品に会て強調されるのは、サディスチックな凄惨さ、又はマゾヒスチックな悲愴さが主眼となり、其の各々に凄愴な美的感覚を産み出すべく、描写に意を用いられている。切腹の表現芸術として文学を除けば、浄瑠璃、琵琶、浪曲等は声調に頼る余り、悲愴感の盛り上げに努めるのは諒とするが、露出過度に陥り、緻密な実感を却つて稀薄にしている。

殊に演技を考慮する浄瑠璃に於ては、年歯も行かぬ少年が、腹を切つた苦痛を怺えつゝ長々と、母や祖母と悲愁を交すが如きは、文章の魅力を著しく削減せずにはおかぬ無理がある。是は誇張を主とした馬琴以後の近世作品にも見られる所である。

さて近代文芸に切腹描写の最高峰を求めるならば、まず何人と云えども村上浪六の「三日月」に指を屈するであろう。

主人公治郎吉は、十四才で一人の武士と争い、両手を橋の欄干に小柄で縫われた。

然し屈せず手を引けば残る疵痕を其儘異名に、三日月と名乗る男伊達である。後年旗本の横暴を挫き、奉行白須甲斐の侠気に救われ、佐倉の家老田原大角に頼つた旗本一味を懲らしめたが、大角の策略で盗賊の汚名を被る。一方、町奴と旗本の抗争を憂えた大老酒井若狭は、今は隠居の白須寛斉を招き、治郎吉切腹の密諭を与える。その帰途寛斉は討たれ、治郎吉への遺品は藤四郎吉光九寸五分。

悲愁に暮れる次郎吉の隠れ家へ、佐倉で重傷を負つた子分の源次は、辛くも逃げ帰つて来たが、次郎吉の隙を窺い、件の吉光を腹巻の上から背骨へ徹れと許りにぷつりと音立てて突込む。呻きに驚いた次郎吉は行燈の灯を吹き消し、苦しむ源次に手を貸して一文字に腹を切らせる。佐倉藩邸の出火から寛斉暗殺の真相も知れ、大角は切腹仰付かり、思い残しなく次郎吉も、妻の菊に源次の遺児を託して、酒井邸へ腹を切りに行く。

以上が梗概で、いよ〳〵次郎吉の切腹となるが、少し長いが其の日の準備から解説しよう。

当の次郎吉は、早朝から身を清め麝香を身に擦り込んで、時刻を待つ。夜に入つた酒井邸では、芝生に二間四方の仮屋を組み修業涅槃の二門を設け、中なる畳には白絹を巻く。対して十余間隔てた武者塚には、庭上の篝火と光を争う銀燭をかゝげて、主人若狭を中心に、白須甲斐以下藩士百余人座に連なる。

時刻至つて治郎吉登場、挨拶有つて若狭は最期の送りに一曲、と琵琶法師を呼出す。

治郎吉は、其の一曲腹掻つ切りながら、介錯人も御免蒙つてと言上すれば、一同驚嘆の眼を見張る。さて現われた六十余りの盲人に、勇者の最期を送る曲、心神を凝らせよ、との若狭の命、前代未聞の男伊達、故あつて只今屠腹致す。と若狭は告げる。此の盲人、かつて治郎吉を小柄で縫つた其の武士の成れの果てであつた。

以下暫し、浪六一流の名文を、篤と御鑑賞願いたい。

治郎は一礼して稍や反身となりつゝ、無紋の肩衣はねのけて襟くつろげ、左手を伸して前なる短刀これぞ、恩人が形見の藤四郎吉光九寸五分、せめてこの罪亡ぼしと推戴きつゝ逆に巻付けたる白布の中際とつて右手に持替え、空三方を後へに廻すと等しく、いくたびか腹なでおろして臍の上通り一寸ばかりの左り坪折しも撥つて掻き鳴らす琵琶の曲、篝の水の落つるにや、笹葉を伝ふ夜の雨にや、謡う唱歌の声冴えて、哀れに凄く聞ゆるは、

武蔵野に。草はしなじ多けれど。つむなにすれば偕もすくなし。

治郎吉は耳をすましてニコリと笑み、篝火に照る尖鋒を思ふ坪にあて掌に一ゆり込むると見れば、早や白刃の光り半ば没して、迸しる血しほを見せじと、左手を添へて刃を指股に挟みつゝ掌もてピタリと切口を抑へ、静かに抜きし吉光を両眼の間近く取上げて、差出す輩束の火にスカしながむる不敵の剛（原文ノマヽ）凄絶さに若狭守は耐え兼ねて膝を乗り出し、皆の者子孫に伝えて手本に致せ、と云

えば、甲斐も、治郎吉夜風が吹くぞ、と感無量の言葉を洩らす。やがて琵琶の低調の一ときは冴え、唱ふ声澄みまさる時。

治郎は刃の血糊を嘗め取つて、鬢の毛に刃亘り三四度サラ〳〵と引き、流石に今は震う拳ながらも見ごと切口に探り入れ、半ば俯しつゝ横一文字に右へ引きまわしつ、息ふかじと歯の根のたゝんばかりに唇を結び、抜て返す尖鋒を過たず咽喉三寸。（原文）

後には篝火も影を潜め、夜風冷やかに湿り亘る時、検校の声のみ細く哀れを引くのみである。当時うやむや隠士の評に「凄愴の状益々愴に……悦惚の間に全章を収めたり全章の妙所は高雅なる琵琶をひきいだして惨澹たる自殺に配合せるところにあり……」と云える如く、誠に殺伐悲惨なるべき屠腹の情景を、斯く迄精細に而も明瞭且つ高遠に描き出した文字は、他に類を見ない。

切腹にサデイズム性ありとすれば、美貌の妻にすら心を残す事無く、欣然と切腹の座に就き、腹掻切りながら聞きたいと、悠揚腹撫で下し、腹切刀を左脇腹に差し当てゝ、琵琶の弾奏を待つ姿は、正にサデイズムの法悦境と云えよう。何一つ湿り気の無い、開濶たる心境である。やがて掻鳴らす琵琶の曲を合図の如く、深々と突立てた白刃を、苦痛を怺えて抜き出す様は、まことに耐え、間もなく終曲と気付くや、流石に震う手で元の切口へ刃を探り入れる。かくて刃はきり〳〵と右へ引廻され、溢れ流れる血汐の中に俯伏しつゝ、一代の侠勇、治郎吉の生涯は終る。

「三日月」の描く一文字腹の凄絶さに比すべき十文字腹の典型として鷲尾雨工「覇者交代」より一例を示そう。波瀾興亡極まりない戦国の悲史を材とする此の小説の中でも、鳥取城主吉川経家の切腹は、全篇の圧巻であろう。秀吉に攻められ城を守り切れなくなつた経家は、衆命に代るため堀尾茂助を検使に迎えて切腹する。原典は「太閤記」その他の戦記であろうが、見届ける側の緊迫した空気をも書き加えて、一層劇的効果を昂めているのは、流石に雨工一流の雄勁な文章の力である。

「わしの首は、安土におはす信長公の実検にそなえられるものゆえ、能く打てよ！」そう云いつけてから、おもむろに肌を披き、一尺五寸の脇差の刃に中巻して

「えゝッ！」

と、脇腹に深く突つ込み

「やをつ！」

と、またも声をかけて一文字に、右脇まで引廻し、それから静かに鋩子先を腹から抜いて、中巻を握り直し、ぐさつと心窩の下へ刺した。

検視の堀尾が、思わず

「見事つ！」

と云わずにはいられなかつた。

経家は

「うゝつ！」

呻きながら臍の下へ、刃を押しおろした。（原文ノマヽ）

此の間、茂助の眼は瞬きもせず、余りに

も見事な腹の切りようを瞠めている。

横に左から右へ腹一ぱいに切つた上、縦にも、胸元から臍下まで切り下げた経家は、ふたゝび鉦子先を抜き取つて、刃を握つたまゝ両手を膝の上につき

「辞世の歌――」

と云つた。

かくして歌を詠じ終えるや介錯を受けるのであるが、敗北に悪びれもせず、敵軍の使者に見守られつゝ、敢然と腹十文字に切る経家の心境を、雨工の筆は無駄なく、然し刃を抜くさまを書きそえて効果的ならしめている。

斉しく自ら欣然と受け入れる自決に際して一沫の悲愁と陰鬱さが附きまとうのは、海音寺潮五郎の「愛情無双」であろう。

勤王の士早瀬陽之介は、井伊直弼討滅に画策する内、反動的な旗本一味に腰を傷つけられる。弟陽二郎と異り真面目一方の陽之介は、再起困難と知るや焦慮の極、短銃で直弼を狙撃して失敗、逃れて附近の商家に入り、再起を説く弟に介錯を命じて、凄惨極まりない切腹を遂げる。少し長いが例によつて引用する。

坐り直して陽之助は脇差を抜て、切先を少し出してきり〳〵と袖を巻き付けたその間に陽二郎は刀を抜いて背後に廻る陽之介は舌で切先をなめて、切味を見てから、しづかに腹をくつろげた。左の手に二三度撫で廻すと

「エイッ」

取直した刀、左の脇腹にあてゝじり〳〵と右に引廻す。一旦、真赫になつた顔が、氷のように青ざめて、額に汗がにじんで、もとゞりの切れた髪がばさりと顔の周囲に垂れかゝる。

「まだゞぞ、まだゞぞ」

苦痛をこらへて、ぶる〳〵とふるへる手に右の脇腹まで引廻した陽之介は、一旦抜いた刀を鳩尾のところに押し当てよとして、幾度かあてそこなつた。

「兄上、まだ、まだですかまだですか」

兄の苦痛を見るにしのびず、よろめきながら陽二郎は叫んだ。

「まだだ、まだだ、わ、わ、わしがよしと、よしと、云つてから――チーッ」やつとのことであてゝ

「ウム」

凄惨な呻き、両手を刀のむねにあてがつて、一息に、力まかせにぐつと押下した。

文字通りの十文字の見事な切腹。

「よし」

「エイ」

熱湯のような涙と共に、陽二郎は刀を振り下した。（原文ノマヽ）

生真面目な性格の陽之介は負傷していた事が既に大打撃だつた。そこへ傷の内攻が判明した結果、彼の自信は完全に打ち砕かれた。最後の決心だつた狙撃にも失敗する。是は同志の後難を招くかも知れぬ。健康は失われ、事志と違う。彼にとつて死以外の何ものも考えられない。勿論、狙撃に成功しても生き延びる気は無かつたかも知れない。然し其の時こそ、彼は茫爾として群がる捕吏を見下し、腹一文字に掻切つたであろう。失意の極に有る故に、介錯する弟を侍らせつゝ猶、腹を十文字に切る事によつ

て、絶大な苦痛を忍ぶことによつて、絶望の窮極に自己加虐の快感を貪らねばならないのである。是こそマゾヒズムの切腹を描写する代表的なものであり、テンポの遅さが却つて自虐を昂めて行くのである。

小山寛二の「隼人の歌」では、薩藩幕末の不祥事、お由良騒動に連坐した、山田一郎左衛門の最期を描いている。

手を伸ばして三方の上の短刀をとり、鞘を払つて、鎚で膝の上を三寸許り、スーッと引いて刃だめしをして、「ゆくぞッ」凄烈のかけ声。寛げた下腹の皮を右によせグザと鎚つきたてゝ、一息に引廻し、ムウッと低く呻きざま、刀を返して斜め上に刎上げたのは、古法通りの鮮かな十文字腹。

血糊のついたその短刀を、三方に戻して、少し前のめりになつた体を起し、「よしつ」（原文ノママ）

かくして彼は、日頃目をかけていた青年の介錯で、妻に見送られつゝ、覚悟の切腹を遂げる。是も「三日月」の系列に属する従容たる最期である。

壇一雄の「狼煙」では、長篠城攻めの人質として武田勢に捕われていた黒尾甚九郎が、脱走に失敗し、主君の幼弟、奥平仙千代と共に強いられて切腹する。

「仙丸殿、これが切腹の正しい作法でござります。」

グサリと左腹に匕首を突き立てた。少し浅いかと自分でも気になつた。それで渾身の勇を引きしぼつて、右脾腹に迄割り上げかけた裂いた。最後に臍の方に切り上げたのが、その時早く、周囲の枯れ葉が一斎に焔を上げたので、グッタリと前にのめつた。

むしろ仙丸の方が見事だつた。キリ、と左腹の中心迄抜き通した。真直ぐにその手を右に運び、運び終つた時はすべての力を失つた。（原文ノママ）

是も甚九郎は十文字法に従つている。

叙上の切腹描写は精粗を問わず、軍記ものの節調、修飾、語法に従う傾向がある。是に対して近代小説風の描写を用いたのはまず山田美妙の「二郎経高」であろう。

承久の変に北条勢に抗して敗走、北条方の使者に宥められ却つて潔しとせず、奥の間に入つて切腹する。異様な唸り声に気付いて、走せ入つた使者の前に、凄惨な自虐図が展開されるのである。

見れば是は如何。大肌脱ぎの経高の真正面、腹は一文字に切り割かれて、食み出す臓腑もろとも盛り上がる様に血が噴いている。

もと〳〵小説は美感の点からも、流出する内臓の惨は取上げないものが多い。写実主義盛行の明治中期らしい作品である。此の切口の描写を更に細密にしたものが直木三十五である。

三十五の「由比根元大殺記」は、駿河大納言忠良が家光に憎まれて滅亡する経過を描いたもので、中院典六の切腹は主題ではないが、陰惨なトーンを深めるために役立つている。主命で切腹する典六の為に、若

覚は裏返した畳に白布を敷き、青磁の香炉に香を炷き、背後には逆さ屏風を引廻していた。三十五は、部屋の空気は泥沼のように沈み込んでいた、と形容している。

典六は、左手に持っていた鎧通を抜くと、切先を舌へ当てて見た。そして袴をまくり上げると、太股を、一寸ばかり切つた。そして袴を下へ圧し下げると、太つた腹を出した。（原文ノママ）

切腹直前の緊張した一瞬である。若党はもう「臓腑も、顔色も蒼ざめ切つて震えていた。」と描かれている。

「佐内、よく見ておけ」

若党が顔を上げると、典六は左手で、腹の皮を右の脇坪へ引寄せながら、張り切つた左の脇坪へ切先を当てゝいた。

「よく見よ。」

若党は、極度の神経の緊張から、異様に光る瞳をしていた。頭も、身体も放心して了つて、鎧通しの切先が、圧倒するような力を、佐内の眼球の底へ与へた。

切先は、冷酷に典六の命ずるまゝに、肉の中へ入つた。切先が五分ばかり入ると、

「う、う――」

それは、幽鬼のような、低い呻き声であつた。典六の額は苦痛で、薄い紫暗色に変じて来た。

「さ、佐内、見て居るか。」

「は、拝見――拝見――。」

切つている者よりも、見ている者の、苦悩の方が大きいようであつた。典六の右手は、微に顫へを帯びて来た。一寸、二寸、傷口は、二分ばかり白い口を開けた。

切口は次第に三寸四寸と、大きく――

血が微に滲み出た。右の脇坪で、はを止めた典六は、大きく肩で呼吸をすると左手を白布の上へついた。（原文ノママ）

三十五の描く切腹は殆ど、左手で腹の皮を右へ寄せ、張り切つた左脇腹へ切先を突込む事にしている。彼の描写の特異な点刻々と若党の顔色を描写することによつて切腹者の肉体的痛苦と、見届ける者の精神的苦痛とを、対比的に描く点である。

「見、見たか。これが、武、武士の――」

大きく呼吸をつくと、乱れる視線を、乱すまいと、残りの力を集めて、左内の顔を見ながら、低く、

「見たか――」

と云つたかと思うと

「うむ、うむ――」

それは人間が死の苦痛と争闘する凄惨な呻きであつた。そして、ばたりと、刀を持つた右手も、白布の上へついた。灰色の大腸が、脂肪の中から、押し出されて来た。（原文ノママ）

凄状を通り越して陰火の燃えん許りに陰惨な、刻明な描写は、此のあと、典六が頸動脈を断つ所迄続いている。佐内は、典六の苦痛を見るに忍びず、

然し起つ事も出来ない。あくまで見届けさせる典六の心情は、サデイスチックな自己が加虐の極点であろう。

今一つ、三十五の「南国太平記」から引きたい。お由羅の変に連坐した山田一郎左衛門の切腹である。

一郎左衛門は、肩衣を脱いで、袴をぐつと下へ押し下げた。そして暫く、左の手で腹をもんでいたが、膝の前の、鎧通を取つて、鞘を払つた。人々が、時々、軽い咳をするだけで、何んの物音もしなかつた。（原文ノママ）

縁故の人々に取り巻かれて、一郎左衛門は自ら、愛用の鎧通しの切先三寸残して白布を巻き、左の二の腕を切つて刃試しの後再度腹をなでる。

暫くそうしてから、腹のたるんでいる皮を、左手へ、ぐつと、引寄せると同時に、刀尖を、その指の際へ当てゝ、肩で大きい呼吸をした。一郎左衛門の眼も、一座の人々の眼も、異様に、光つて来た左手の指先で、尖先を、こゝと思うところへ当てて、一郎左衛門は、眼を閉ぢた唾をのんだ。又、大きい呼吸をした。

（原文ノママ）

此の辺り、切腹直前の緊迫を写す。

そして、人々が、同じように、溜息をした時、「うむ」と、低く、声をかけると、右手を押した。その瞬間、ぐつと、口が引締つて、眉が歪んだ。額に、冷汗らしく、きら〳〵と浮き出して来た。一郎左ェ門は、眉に、眼に、口に力を入れながら、刃が一寸余り入ると、張切つている皮を、左から右へ——拳が、目に立つて震えてきた。（原文ノママ、）

かくて既に二寸余り切つた一郎左衛門の顔は、苦痛と死の前兆に曇り、灰色になる強いて微笑する彼に誰も応えず、切腹の手許を凝視する者、眼を逸らす者、皆冷汗を流し、震いを禁じ得ないのである。

切口の上と下とに、微かな血が滲み出して来て、細く肌を伝ひかけた。一郎左衛門は、眼を閉ぢて、暫く、ぢつとしていたが、「えいつ」と、叫んで——人々が、その叫び声に、ぐつと、胃の腑を突かれた時、力任せに、右手へ、掻切つてしまつた。（原文ノママ、）

切口は、五分余りも、口を開けて、血に染んだ白い脂肪が、厚い層を現していた。

そして、その分厚な脂肪の下から、灰色の大腸が、ちらつと、見えていたが、一郎左衛門が、苦痛に、呼吸を大きくし身体中に、力を入れると同時に、それがぐつと食み出して来た。そして、呼吸をするたびに、少しづゝ、押し出されて来て、一管が、切口から食み出すと同時にすぐ、そのつぎが、だら〳〵と出て、切口から垂れ下つた。（原文ノママ、）

「介錯を」と呼ぶ人々に首を振つて、断つた一郎左衛門は、腹から刃を抜き、左手で食み出している大腸を押し込もうと努めるいつの間にか、分量の多くない血ではあつたが、下腹一面が、薄く、血染めになつて、帯の辺まで、滲み出していた。

（原文ノママ、）

切り裂かれた腹部の凄惨な状況である。やがて自ら頸動脈を断つて、一郎左衛門は崩折れるのである。

見事な一文字腹である。

筆は切口の描写に移る。

彼の作品には、上記の他、得意の仇討物があり、その中に扱われる切腹も少くないが、以上の二書ほどの精密さは見られない「勘平切腹」と題する小品も、芝居の勘平ものと、実際の萱野三平切腹の様相とを批判的に記述したもので甚だ興味深い。こゝでも、三平が、腹の皮を左へ引寄せ、又を突き刺し、俯向き加減に掻き切つたに違いない、と断定し、深く突けば腸が流れ出そう、とも記している。とまれ緻密さに於て鑑賞すべきものを含んでいる事は否めない

切腹のマゾヒズム性は、それが女性の面前に於て行われる時、一層深度をます。

例えば、長田幹彦の「天皇」に於て、重臣襲撃に失敗した一青年兵士は、同志将校を訪ねて白刃の決意を打明ける。そこへ事情を知つている某高貴の血統を引く若い女性が、案じて来合せ、間接に彼の決心を聞く。彼女は思わず熟くなる眼頭を抑えつゝ、見送つて上げたい、と云う。やがて別盃を交し、将校と某女性は其の兵士が、亡兄の墓前で、まず腹一文字に切り、頸動脈を断つて果てる様子を、見届けるのである

切腹する青年は、失敗が同志に累を及ぼす事を恐れ、自責の極切腹を選ぶ。彼の切羽詰つた心情は、高貴な女性に見送られる事によつて、一層慚愧と、反射的に自虐する歓びに満たされていたに違いない。

その故に又、実録小説とは云え、月明の夜の墓地に、粗末な軍服姿で腹を切つて死んで行く兵士の悲愁が、絢爛たる美貌高貴の女性の容姿と、照応の妙を見せているのである。

尾崎士郎の「村上六等警部」では、神風連に官・賊に分れる村上兄弟の苦悩を描くが、嫂に知られて神風連参加を兄に阻止された弟は、兄が官服で出動したあと、「嫂さん、腹を切りますから見ていて下さい」と、嫂に見守られて潔く同志への申訳に切腹する。

己れの志を奪つた憎い嫂、然し又、己れの身を誤らすまいと兄に告げた嫂、彼は嫂を憎み切れず、寧ろ失意の身を彼女——直接自決の因を作つた——の前で切腹する事に、自虐的な快を覚えたであろう。

然しマゾヒズムの切腹は、愛恋を絡ます時一層悲劇的な悲愴美を昂める。我と我が腹を断ち切る事によつて、愛する女性への恋情と、更には愛する女性自身の慕情をも同時に断ち切る情景は、寔に悲愴美の極致と云わねばならない。

歌舞伎に於ける腹切場の中でも、取分け人口に膾炙して来た「忠臣蔵」「味背山」「菅原伝授」等が、殆ど其の類である。

忠臣蔵の塩治判官は、美貌の妻への邪恋故に辛く当つた師直を、討ち洩らしたまゝ妻を残して死んで行かねばならぬ。その無念は極りない。而も彼は取乱す事なく、覚悟の白装束を押寛げ、顔世に見守られつゝ逆手に持つた腹切刀を弓手に突立て、潔く引廻すのである。

勘平に至つては、思いかけぬ誤解から切羽詰つて腹十文字に掻切る。而も其の直前に演ぜられる道行の華麗さ故に、予想されるお軽の悲愁が、ひし〳〵と観客の心に迫る。

「妹背山」の久我之助は、来世こそ愛し愛される雛鳥と夫婦ぞと、信じつゝ今生で離れ離れのまゝに腹を切つて死んで行く。

菅原伝授の桜丸は、主家の為を計つて却つて仇となり、死ぬ他に申訳の仕様も無く

なる。折から妻の八重が彼の帰るのを待ち佗びている父佐太夫の家へ、彼は帰るなり切腹の仕度をする。妻の驚きと悲嘆を前に彼はあくまで腹一文字に掻切らねばならないのである。

即ち是らの切腹は互に愛慕する女性の面前で行われる時、女性達の悲愁は悲劇性の効果を一層鮮烈ならしめる。彼女達の悲嘆と慕情を振り切つて切腹する姿には、悲愴美への陶酔さえ感じられる。愛し且つ慕われるが故に、切腹は、苦痛と歓喜の交錯する、マゾヒスチックな殉教的陶酔に於て遂行されるのである。

実録に例を取つても、黒田騒動実記の有川駿河は、此の好例であろう。若い遊女小女郎身請けの為に金に詰つた駿河は、お秀の方の奸計に乗り、罪過を知つた時は既に遅く、自刃以外に途を失う。驚いて泣き縋る小女郎を諭しつゝ、左脇腹に突立てた刃を真一文字に引廻す時、彼の胸中には、不忠の自責の奥に、愛する女の為の金策に身を誤まつた末の切腹を、少しも悔いてはいなかつたであろう。

寧ろ彼女故に招いた死の苦悩を、彼女に見送られる事によつて、快く自ら与えたに違いない。

此の種の主題は近代以後に於ても屢々効果的に用いられているが、まず異例に属するものを先述しよう。

久我荘多郎の「腹切り小普請組」では旗本の冷飯喰いが、遊蕩の金策に強請を常習とする話柄である。彼は「腹切り左馬二郎」と異名を取る。是と思う商家へ難題を吹かけ、聞き入れねば店先で腹を切る、と厭がらせをするからだ。然し一日、娘をくれと強請りかけた、その娘に真剣な恋を感じた。やがて其の娘が悪旗本に強請り奪られると聞くや、興入れの日に乗込んで、悪旗本一味を斬り、娘の感謝に微笑しつゝ、芝居で無く腹を切つて了う。

所詮叶わぬ恋への諦め、世相への憤り、自巳嫌悪、その総てが彼に死を希わす時、せめて恋い慕う娘の感謝を聞きつゝ腹を切る事こそ、彼の言葉通り、一生一度の快い気持だつたに違いない。

長谷川幸延の「長襦袢道成寺」も、自巳嫌悪が自虐を齎す経過を描く。

江戸猿若座の舞台で娘道成寺を踊つていた、中村新之助の衣裳が切れ落ちた。仕掛の糸に誰かゞ仕掛をして一枚落ちるべきものを、皆散らしたのだ。嗜みよく長襦袢を着ていた新之助は、無事に舞い納め卸つて好評だつたが、笛の日下部弥八郎は、はッと気付いた。彼は衣裳方の文吉の家に飛んだ。そこへ訪ねて来たのは、彼とは旗本の冷飯仲間左平次であつた。文吉は主人筋のお八重に恋し、お八重は新之助に惚れているようだつた。成らぬ恋に苦しむ文吉を、是又お八重への成らぬ恋に仲好しながら新之助を怨む左平次が、唆かして大事を惹き起させた成行を、察した弥八郎であつた。

然し真実は、お八重は左平次に恋し、勝気が災して自分では言い出せず、新之助が仲に入る相談が出来ていたのだつた。真相を聞かされた左平次は、自分の醜さに耐え切れず、そのまゝ泊つた文吉の家で夜明け方、苦痛を洩らすまいと手拭いを口に含み腹真一文字に掻切る。

「お八重の本心を知らず、新之助を陥入れようとした俺を、お八重が許しても俺自身が許さない」

それが左平次の最期の言葉であつた。

左平次は許嫁迄有る武士の家を捨てゝ芝居道に入つた。その彼が衣裳屋の娘に恋着した時、武士の名誉を捨てゝいた。然し的外れの嫉妬から小細工を弄し、意外にも女が自分を慕つていたのだと知つた時、それは喜びと同時に苦しみであつた。心底芝居者になり切れない彼の劣等感が、武士の名誉への異常な執著を、破局に於て彼の自虐を誘つた。恋女房と結ばれる日が目前に迫り、その結び手が自分の醜い策謀の対象だつた事を知るや、彼は苦悶の極、死を選ばざるを得ないのである。

お八重が自分を慕つていた。それだけが死んで行く彼の救いであり、それ故にこそ尚更、彼は自虐的な屠腹を武士の名誉にかけても選ばねばならない。のであつた。

左文字勇策の「長崎遊撃隊」では、幕末の、勤王と佐幕の抗争の渦中、愛人に心を遺して時代の犠牲となる。白井龍太の切腹を描いている。勤王に目覚めて長崎を出奔していた龍太は、平和に朝廷方へ長崎を明渡さす為に帰郷する。彼を慕う娘たかの父上原源之丞は、長崎奉行直属の長崎遊撃隊取締である。

鳥羽伏見の戦が幕府の敗北に終つた時、遊撃隊は抗戦を呼号する。龍太と親しいたかの兄雄之助の努力も空しく、源之丞以下抗戦を決した時椅子に掛けていた龍太は、そのまゝの姿勢で静かに腹をかき拡げた。用意の手拭いを巻いた刀は、既に逆手に握られていた。

「龍太！何をする。」

飛びつく雄之助を、龍太は左手で遮ぎりながら、右手で腹を一文字にひいた。もう止めようはなかつた。鮮血がぽたぽた床に落ちた。左手を右手に添へ、ぐつと深く脇腹を突き、上へ掻き上げた。型どをりの切腹だつた。（原文ノママ）

こゝで述懐一とくさりあつて、

右脇で深く突き入れてから、上へ掻き上げて切るのは、十文字法として興深い描写である。腸の流出を恐れて一文字に浅く切り、思う存分突込んでから上へ掻切る意図である。

源之助は「おたかが、どんなに泣くだろう。」と悔みつゝ、友の壮烈な最期を見送る。

古くは尾崎紅葉の「二人比丘尼色ざんげ」も此の一例である。

浦松小四郎守真は従妹芳野と約婚の間柄だつたが、養育の恩ある伯父とは主家が仇同志の仲となつた。合戦の末、伯父に救われ芳野に侍かれて保養する間に、彼の主家は滅亡。嘗ての許婚芳野の思慕も、又主君の声がゝりで慕情に燃えて嫁いで来た若葉の愛慕も、彼は主君の死に殉ずる為に、敢て断切つて切腹を決意する。即ち、

取直す大刀を袖に巻き、切先少し露して襟押寛げ、下腹を左手に撫廻し、

（原文ノママ）

「南無阿彌陀仏」声の上、あゝつという叫喚。突立てしか……沸出す血汐、左の小脇から五六寸、病苦に震ふ手は進まず唇を噛裂くまで力を籠めて、じり〳〵と一文字に、仕てやつたり右の傍腹まで敢なく絶ゆる命。（原文ノママ）

一種夢幻的なシチエーションと、二人の美女に慕われながらも、義理一筋に腹切つて果てる主人公の若さの悲劇とは、当時その浪漫的な特異性を謳われた。

余り他人の知らぬもので大橋乙羽の「人鬼」がある。

強慾な養母お幣に操られる芸者お君を慕う余り、武芸も廃するに至つた薩摩藩士、二十五才の武島軍内は、犬追物に後れを取り雪辱の切腹を決意、お幣お君を斬つて自刃する。

既ちお幣を家に襲い一刀に貫徹し、帰り来つたお君をも免せと一声、袈裟懸に斬殺す。

折しも雷光に見れば、お君は絶命、衣桁に残る花縮緬の晴衣を引つ被り、軍内は夕立の中を伊皿子へ向う。大円寺は薩摩の菩提寺、切腹堂の設け有つて、落度あれば我と此の堂に入つて切腹するが習わしであつれ。

肌身離さぬお君の衣裳を傍らの松ヶ枝に懸けて見惚れた軍内は、やがて玉垣の扉を開け、切腹台に端座、諸裸脱いで腹撫で下し、逆手に持つた脇差の刀を、臍より下一寸にあてる。その心境は如何。即ち、

あアお君不憫なことをした。詫びは未来で云うべし、と、落る涙を鉄拳に受けて、愁然として天を仰ぎぬ。――（中略）色に本心を失いて、犬追物には恥辱をとり、――（略）――伯父上には合すべき顔もなく、絶体絶命の今に及ば切腹すると云わねばならぬ。さて切腹のさまは、

紅葉、乙羽、共にその時代がゝりな筆致が面白い。是は女性に絡まるものではないが、幸田露伴の「奇男児」に於ける村上喜剣の切腹は、雄勁な筆致で高名である。即ち、

大石が墓前に端座し、一通の遺書残す事もなく、朱鞘に記せし何時にても死申候丈けを遺品に、腹割剖きて音もなく死したる後は松杉暗く月光弱し、二百年の春の夜毎。（原文ノマヽ）

最後に、佐々木味津三の「神風時雨組」を紹介して稿を終ることにしよう。

高遠の若殿内藤清邦は、尾張へ人質の婿として幽閉され、姫との婚姻を拒み通す内ふと垣間見た姫に好意を抱く。然し旧臣達が彼の救出に乱入したゝめ、責任上、切腹を決意する。折から姫は彼の身を案じ、

いざ切腹なさんと、左の脇腹へグザと刺せば颯と迸る鮮血は、袴の襞を伝わり

探し当て、白装束の清邦に、「妾をさほどお厭いか」と掻き口説くのであるが、その制止も裏情も、却つて彼の決心を固めるのに役立つのみであつた。「嫌いではない、好もしくさえ思う。姫、辛いが身分が妨てる。」と小藩の悲哀を吐露して、彼は切腹の刃を執り上げる。

「これよりほかに清邦の行くべき途はない、最期ぢやッ、百年の長寿お祈り申しまするぞ。……十郎太介錯せい。」

途端止めるひまも遮切るひまもない。キラリと右手の九寸五分が光つたかと見るまに、清邦君の白無垢綸子は、ぱつと朱に染まつた。（原文ノマヽ）

女性の面前で腸の流出を恐れたのか、着衣のまゝの切腹である。

「ま、――では、どう致しましても。」

「オウ、！　姫……儚ない縁で有りましたのう！　心よい切味ぢや、十郎太！」

きりきりと左十文字に引廻しながら、淋しく微笑すると、詰諤にいささかの案れすらも見えなかつた。厳然として清邦君は、うしろの十郎太を促した。

「介錯ッ」

姫は、血汐の流れるのを見守りつゝも尚止め得ぬ無力を嘲ち未練に悶える。

清邦は彼女の悲愁故に、一層自虐的な刀を、心ゆく迄我が腹に加えねばならぬ愛情を断つて相愛の女性の面前で行われ切腹こそ、マゾヒズムの極限であることを此の作品ほどまざ〳〵と例証するものは少いであろう。

（附記）既に本稿を以て四回に亘つた筆者の切腹研究は一とまず是で筆を擱きたい。然し今尚資料は有志諸氏より筆者の手許に齎されているし、四月号の「開花の契機」を挨つ迄もなく、高橋鉄氏が既に説かれる如く、「切腹願望」なる性心理異常に就ても、検討されるべき現象は少くない。今後も随時資料は公表し読者諸兄姉に供すると同時に、一層の御示唆御教示を待つ次第である。元より、浅学非才ながら、御質問には前回同様、筆者の及ぶ限り研究し御回答申上げる所存で居る事を申し副えたい殊に女性の御批判を待つ。

特に本稿の為には、著作権法第三章第三十条に従い、多くの小説作品より引用文を頂いた。出来る限り事前に御諒解を求め、故直木、佐々木、鷲尾諸氏の御遺族を始め春陽堂等の著作権保有者、左文字氏を始め現在執筆活動を続けて居られる方々の御快諾を得た事は、感謝に堪えず、こゝに記して厚く御礼申上げたい。御住所が判明せず御連絡方、出版社等に依頼し、或いは全く連絡の方途無かつた諸氏に対しては御海容をお願い申上げる次第。

文中煩雑を避ける為、敬称を略させて頂いた事も併せてお詫び申上げる。（完）

〃切腹研究〃の権威、中康弘通先生より三月号の切腹史談(一)、四月号の切腹史談(二)五月号の少年及び女性の切腹、に引続いて本稿の文芸に於ける切腹描写、と四回連載の貴重なる研究文献を頂き、文献誌としての本誌に一段と精彩を放つた事は読者と共に喜びたいと思います。先生は更に稿を改めて新しい角度からの研究を執筆下さる予定ですからどうぞ御期待下さい。（編集部）

時代小説

廓（くるわ）の灯（ほ）影（かげ）

片矢薫

あたり一面漆黒の闇である。深々とした夜気が立ち籠めて人の気配もない、つい今しがた迄、不夜城を誇り、管絃の音にさゞめき、艶かな唄声に満ちていた新町も、四つ半を過ぎる頃から、人影もまばらに、秋の日射しのようにみる〳〵灯も消えて行つた。大戸を卸す音が一しきり終ると、客足も落ちつく所へ落ち着いたと見え、後はしんと静まり返つた町並が残つただけであつた。

広い通りを吹きぬける風が、遊び戯われた名残りのように、そこら一面に散らばつた紙屑を、かさ〳〵と乾いた音を立てゝ吹き運ぶ外物音もない。僅か遥か向うに検番の小窓の灯が一条のほの明い光を路上に這わせて何か物寂しい。

見廻りが通り過ぎると同時に、新町に一きわ豪華な構えを誇っている讃岐屋の裏木戸が、ひつそりと音を秘めて開いた。しばらくあたりを窺うように口を開けていた木戸から。やがて一人の女が出て来た。手拭で頭を包み、裾を端折つて素足である。風に当つて手拭がひら〳〵と舞うと慌てゝ手で押えて改めて顔をかくしその両端をかつきりと口にくわえた。一人が表へ出ると続いてもう一人同じような恰好をした女が、これも吹きつける風から顔をそむけるようにして表に立つた。始終無言でお互いに何か頷き合うようにして眼を見合せた。二人出た裏木戸の扉が、風に乗つてばたんと少し大きく閉つた。ぎくりとして立ち止つた二人は、一瞬あたりを見廻したが改めて扉を閉めるのも恐ろしげに、急ぎ足で格子戸の屋根下を伝つて検番の方へ逃げるようにして歩み始めた。

「太夫」

後からそつとついて来た女が呼びかけた、風にさえぎられて吹き消されそうな低い〳〵声である。太夫と呼ばれた女は、讃岐屋の抱え遊女、梅本太夫であつた。夜目にほんのり白く浮き出して見える顔は、僅か手拭の間から乍らその水際立つた美しさが偲ばれる

「しつ、静かに」

梅本太夫、そう制止し乍ら、まつ毛の長い眼を幾分見開くようにして連れの女を振り返つた

「検番の前をどうして通り抜けやんす」

「何の気弱いことを、検番小屋の裏を廻つて木戸を開ければこちら

のもの――福岡太夫には気遅れしなさつたかえ」

福岡は大仰に首を横に振つて見せると、今度はせき立てるように梅本の背を押して見せた。

近くなつた検番の灯をはゞかるように、身をひそめ息をころし乍ら、梅本は次第に高まつて来る動悸の中で、歩いている大地が今にも音を立てゝ崩れ落ちて行きそうな不安におの〳〵く足を踏みしめた。

今こゝで見付かつてしまえばすべてが最後である。その為に危険を冒し、身の破滅を覚悟して救わねばならない敷島の顔がちらつと眼をかすめた。敷島は楼主嘉助の連日の折檻で殆んど死を待つばかりの衰え方をしている。奥の部屋の方から耳をつんざいて聞えて来る敷島の悲鳴が今梅本の耳朶に残つている。朝から始まつて敷島に加えられる嘉助の折檻は夕方漸く下男に引きずられて部屋に帰つて来る迄つゞくのである。部屋に漸く帰される頃は敷島は既に半死半生である。介抱のし様もない程に、隈なく打擲の跡で腫れ上つている。恐らく着物も剝ぐのであろう。他人の身体と思えない程の念の入つた残酷さであつた。毎日続り返えされ、傷の癒える筈もない。このまゝでは敷島は責め殺されるばかりである。

こうした嘉助の残酷な仕打ちが、次第に死へ近づいて行く敷島の身体と共に梅本にある衝動を与えた。それはかりではなく、敷島の身の上が、いずれ梅本自身、果ては福岡の身、皆の遊女の身の上にふりかゝつて来ることは予知し得ることであつた。

敷島は枕探しの嫌疑をかけられていた。或る夜、敷島の取つた客が翌朝になつて紙入れの紛失していることに気付いて大騒ぎになつた。客は威丈高になつて嘉助を初め、遣手のおかねから敷島に当りちらした、もとより勘定を払う筈もなかつた。最初からそうして芝

居を計つたと思えない程の豪遊であつたから、誰も客を怪しまなかつた。結局敷島が疑われる羽目に陥つた。嘉助は専ら敷島に泥を吐かせようときめてかゝつていた。嘉助にとつては、その客の使つた勘定と、それに店の面目が丸潰れという口惜しさを言い立てゝ連日敷島を責め立てた。もとより敷島は身に覚えのないことゝ言い張つた。若し折れてしまえば、更に数年の酷使はもとより、懲らしめの折檻は筆舌に尽し難い残虐なものであることもよく分つていた。更に悪くすれば何処か田舎の女郎屋に言り飛ばされ、そこで一生を下賤な男達の餌食になつて果てなければならないという運命も待ち受けているからでもあつた。

どんな方法でどんな風に嘉助が敷島を責めているのかは知らなかつたが梅本は、どうしても他人事として見送つてしまうだけの気にはなれないのであつつた。敷島の悲鳴が梅本の肺腑をえぐり、その身体に刻み込まれた折檻の物凄さが梅本の身体をぎり〳〵とさいなんだ

梅本がお上の手に縋つてこの嘉助の手から敷島を救い、梅本自身も逃れようと決心したのはその日の朝であつた。新町を出れば二丁か三丁先に自身番がある。そこに駈け込んで訴え出ればお上もこうした非道な振舞いを見捨て置く筈がないと考えたからであつた。

その朝、下男の徳造が、半ば哀れむように、半ば嘲けるように言つた言葉もこの梅本の決心をそゝつた。

「お前さん方も敷島太夫みたいにならねえように気をつけることつたあね。親分は睡気ざましに太夫をなぶつていなさるんだ。たかゞ二両や三両、どうてこたあねえんだが、女を痛めて音をあげさせるなあ、あの人の病いだ。まあ敷島太夫も死ぬ迄逃れられめえよ。」

半白の髪をもの憂げに振り乍ら、箒を手に遊女部屋の庭から話しかけた徳蔵の、その冷い口許には、遊女達をぞつとさせるようなものがあつた。

「可哀想に、今も敷島太夫は、丸裸にされて向うの納戸の梁にぶら下げられているぜ。今に、身体の何処かに焼火箸でも突込まれなやいゝが、——」

遊女達は互いに顔を見合わせたまゝ、徳蔵が帰つて行つた後までも、立ちすくんだ表情であつた。今迄漠然と恐れていた気持が急にみる〳〵一杯にそこら中はつきりと現れ始めた恐怖におのゝき、まるで蠟細工の人形のように皆の顔を硬ばらせているのだつた

「お上に訴えて出やんしよう」

最初に言い出したのが梅本であつたことは言う迄もない。他の女達は息を呑んでしずまり返つた。こうした。梅本の言葉は空恐ろしいことであつた。然も今敷島が手ひどい責めに逢つている最中に考えても見られない無謀な大それた考えであつた。然し誰もが心の裏にはそうした気持を持つていた。尻ごみしていた女も思い切つて口火を

切つた梅本を眩しそうに見遣り乍ら次第に話に乗り始めた。

「そうでありすなあ、わちきも早くこの家から逃げ出しとうて、生きた心地もありんせんどえ」

「どうせ、生血をしぼられる身、一思いに抜けて出てしまえば拾いもの若し見付かつたとしても、元々でありんすぞえ」

こう言つたのは。福岡であつた。昂奮した中で、ひそかな謀議が交され、結局、梅本と福岡の二人今宵夜が更けてから、そつと新町を抜け出して、自身番へ駈け込んで訴え出るという寸法に話が決まつた。

「若し見つかつたら、梅本大夫と福岡太夫、二人だけを見殺しにするようなことは、神に誓つてしようものか、きつとわちき等も、一緒に身を投げ出す覚悟でありんす」

他の女達は、感慨を込めて二人の決心に感謝の眼差しを送つた。

その日の夕方、徳蔵にかつがれて帰つて来た敷島は一糸まとわぬ裸のまゝどさりと畳の上に気を失つた身体を横たえたまゝであつた。その後から一まとめにした衣類を抛り出すと、徳蔵は目をそむけるようにして黙つて去つた。つい四五日前までは水々しく豊かに乗つていた肉もげつそりと落ち痩せ衰えた肉体の所嫌わず青白く腫れ上つた敷島の裸身を、遊女達は放心した目で眺めるだけであつた。そして何故かしら今夜逃げ出そうとしている梅本と福岡にもその痛々しげな眼を送つて見るのだつた、俯伏せに倒れている敷島の裸体からは、楼主嘉助の淫虐な顔付がぼつかり抜け出して、それが何時か鞭を持つて髪をふり乱して泣き叫ぶ敷島の身躰を力任せに発止〳〵と打ち据えている面影が、一様に皆の脳裏に明滅し、知らず〳〵に身をかゞませ、深い〳〵吐息に追い込むのだつた。

× × ×

検番の裏を、どうにか気附かれずに通り過ぎた後はすぐ木戸であつた。重い門が、恰もこの新町に住む遊女達を牢獄の中に押し込めているように、重々しくかゝつていた。女二人の手で然も物音も恐れ乍ら、錠を外してしまう迄には凡そ小半時もかゝつた。梅本の心に最早恐怖は無かつた。たゞ無我夢中で、荒れ狂う大海に乗り出した船乗りのような異常な緊張だけがあつた。幸い検番の中では男衆が眠りこけているらしい。ずつと遠くにかすかな拍子木の音だけが静まり返つた夜気を通して響いて来た。

木戸はぎいと鈍い音を立て、軋み乍ら徐々にその門口を拡げた。先ず福岡が素早くくぐり抜け、梅本がそれに続いた。一歩外へ出ると、初めて梅本は、かつと恐怖が沸き上つて来るのを覚えた。同時に素足の足裏から冷え切つた夜の寒気がぞつと上つて来るのを感じた。

木戸を閉める勇気も無かつた、脱兎の様に福岡は梅本の袖を摑む

と、いきなり駈け出した。それにつられて梅本も、乱れる裾に気もつかず、背後からのしかゝつて来る脅威に追い立てられるように必死に去つた。

どれ程走つたか。だが女の足であつてみればそう長くは駈けられない。梅本は尚も脅えたように小走りに走つている福岡に、

「もう、大丈夫ですぞえ」

と声を掛けた。福岡は疲労と恐怖に蒼ざめた顔を梅本の方に向け、

「……」

何か言い度い様に口を動かしたが、言葉にはならず、ごくりと咽喉に息をつまらせ、ぜい〳〵とむせぶばかりであつた。

梅本はすべてが悪夢のようであつた、讃岐屋を抜け出してから今迄、身躰は梅本自身であり乍ら、心は何か自分以外の悪魔の仕業のまゝ動いていたような気がするのだつた。その時思いつめては見たものゝ今思い起してみると、二度と出来そうもない大胆な空恐ろしいことであつた。

福岡も同じ思いか二人は黙つて歩いた。木戸を卸して寝静まつた町の通りを、二人は、きつと手拭を噛みしめて歩いて行つた。

新町の遊女、梅本太夫と福岡太夫の二人が、新町の程近い番所に姿を表わしたのは始んどその夜も明けようとしている頃であつた。自身番では御用聞きの与吉が囲炉裡の火をかき立て乍ら半ば眠りかけていたが、ぼつと霞んで行燈に浮き出たように這入つて来た、乱れ姿の二人の遊女に左程驚いた風もなく、

「一体どうしたんでえ」

と無造作に訊ねた。

「助けておくんなさいまし」

「楼主嘉助の非道の数々、お取り上げの上わちき等の訴えお聞き届け下さいまし」

口々に言う言葉を、

「まあ〳〵落着いて話しねえ」

と押し止め、

「お前さん等、ずらかつて来たんだなあ」

与吉は額に皺と寄せて哀れむように二人の姿をまご〳〵と眺めたそれから梅本が、必死の面持ちで語る話を聞いていたが、

「で、敷島つていう女郎は、まだ泥を吐かねえのかい」

と言つた。

「敷島大夫はそんな人じやありんせん、すべては嘉助の非道から出来たこと。どうか、わちき等の訴えお取り上げ下さいまし」

梅本と福岡は、番所の土間に頭をすりつけ、恥も外聞もなく与吉に縋らねばならないと必死であつた。

「朝晩二度の食べ物でさえ、苧殻又は豆腐殻、汁は味噌も入らず、塩ばつかし、時には、芽出し莖の葉の雑水、それで客を取らぬと又責め折檻、人の心じやありんせん」

どういう風に聞いているのか与吉は、時折生欠伸を交えて合槌を打つていたが、やがて一通り梅本の話を聞き終えると、

「時々あるこつたあ、夜が明けたら、おれがいゝ様に計つてやらうじやねえか、それまで奥に一眠りするがいゝ」

事もなげに言つた。

梅本はこうした与吉の事もなげな態度が心配であつた。何も考えず、たゞお上の力に縋ればすべてが解決すると思つて疑わなかつた自分の考えが、何時しかぐら〳〵と揺れ始めたことを、妙に暗い予

感として感じ取つた。

「わちき等を、元の讃岐屋へ帰さないでどうか逃しておくんなまし」

「判つたつてことよ、さあ休みな」

二人には与吉の心が摑めないのだつた。安堵と不安が交る〳〵のし上つて、おち〳〵寝ることも出来なかつた。

夜がすつかり明けて、街には少しづゝ人通りも騒しくなり、蛤売りの声が屋根〳〵に呼びかける頃、自身番の一段高い畳の上で、不安な夜を過した梅本と福岡が、互いに乱れて髪を直し、着物をつくろつていると。

「おい」

といきなり後から声がかゝつた。驚いてと向くと、そこには、脂切つた顔に冷い嘲笑を口のあたりに浮べた嘉助が立つていた。

「随分と世話を焼かせるじやねえか」

さつと蒼ざめて知らず〳〵身をくつつけ合う二人を憎々しげに見乍ら、

「さ、いつまでぐず〳〵してるんだ、帰るんだ」

その嘉助の後から、何時どうして報せたのか、与吉が、

「嘉助さんにや、話をつけといたぜ、お前さん等今から逃げ出したつて、格別どうつてあてがあるわけじやなし、こゝん所は、黙つて讃岐屋へ帰るのが分別というものだ」

と口を添えた。

「嫌でありんす、死んでも嫌」

そう叫び乍ら、どつとそこへ泣き伏したのは福岡であつた。もう何も考えられなくなつたのか、たゞ口にいや〳〵と繰返し乍ら、身をよじらせ、結い直しだばかりの髪を畳にすりつけてわめいた。

「親方、これじや話が……」

梅本は気丈に与吉に喰つてかゝろうとしたが、横合いから嘉助が取つて

「違うというのかい。笑わせるな、お上の旦那衆は、お前達のような阿婆ずれの世話を焼いている程暇じやねえんだ。泣き事は後にして、帰るんだ」

「太夫、悪く思わねえでくれよ」

与吉も、一寸後味の悪さからか、そう言うと顔をそむけて

「嘉助さん、この太夫達に手荒な真似をしちやならないぜ、何事も水に流して元の通り働かしてやんなせえ」

「へい、判りやしたとも、どうも面倒かけて相済みやせん」

打つて変つた様に柔和な顔付になると、嘉助は与吉の方へ向くとそう言い乍ら、懐から紙包を取り出すと、そつと与吉の手に握らした。与吉は照れ臭さそうに、黙つて受取つて急いで、袂にしまい込んだ。

嘉助は尚も暫く与吉と何か話していたが、やがて話がついたらしく

「こんな所に長居は、お上にもお邪魔だと仰言る。さ早く立ちな」

梅本は立ち上つた。自身番の与吉も決して梅本達の味方ではなかつた。理由の如何に拘らず遊女は遊女としか見て貰えないという諦めが、まるで梅本の心を空虚にし、亡骸のような身躰に抵抗を失わせてしまつていた。泣いている福岡を起すと、先に立つて番所を出た。

梅本の心は惨めであつた。自分の浅墓さを呪う気持と、嵐のよう

に襲つて来る世間への憤りと、それと知らずに危険を冒した自分への自嘲的な後悔とが織り交つて、すつきり晴れ上つた朝空の下で、梅本の心を駈け廻つて行つた。

泣き腫らした眼に尚も涙をにじませて、後からついて来る福岡に

「往来でめそ〳〵するんじやねえ、今にたつぷりその涙を出させてやるからな。どんな眼に逢うか覚悟してやがれ」

と嘉助は憎々しげに浴びせた。

昨夜、命がけで脱け出した木戸は、開け放なたれ、忙しげに人影が往来している。暗い闇の中で手探りで閂を外した時は、これで全部の命が救われ、何もかもが浮び上れるという希望で手が慄えた。然もこうして再びこの木戸をくぐるなどとは夢想だにしなかつた二人である。

木戸をくぐりぬけて、何事も無かつた様に、まだ昨夜の疲れを漂わせて寝静つている新町界隈の様子を見た時、初めて梅本の心の中に、これから自分がどんな刑罰を加えられるかも知れないという恐れが、夏雲のようにみる〳〵拡がつた。同時に、息も絶え〴〵に呻きもだえている敷島太夫の、あの身慄いしそうな傷痕が目の前に浮び上つた。

ふと立ち止つた梅本の腰の辺りを、どんとつき上げると

「早く歩かねえかい。太いあまだ。今に見てやがれ、声も上げられねえ程に、叩きのめしてやるからな」

梅本の眼には、昨夜開けた儘出て来た裏木戸の戸が、矢張り風に揺られて、その儘ゆら〳〵と揺れているのが、何故か信じられないもののように写つた。

× ×

讃岐屋の遊女が逃亡して摑まえられた、という噂は、その日の中に新町一帯にひろがつた。が誰も特別な関心を寄せるものはなかつた。通常有り勝ちな事として、僅か顔見知りの人達は、梅本太夫と福岡太夫とに心ばかりの同情を寄せてみるだけであつた。然も二人が決心した時、あれ程諍い合つた他の遊女達も、関り合いを恐れて誰一人どうする者も無かつた。ひたすら嘉助の見幕を恐れて、鳴りをひそめていた。自分の身が安隠であるようにと最早、その渦中に飛び込もうとはしなかつた。

梅本と福岡は、連れ帰られるとすぐ裏の土蔵に監禁されたまゝであつた。

梅本は恐怖に脅えて唯泣くばかりの福岡を慰めようもなく、高い天井の明り窓から射し込む光を仰ぎ見ては、吻と溜息をつくばかりであつた。これから受けねばならぬ折檻が重くのしかゝつて、言葉も出ず、押しひしがれたような心が狂ほしい程の不安を包んでいるばかりであつた。

その日の夕方近く、二人は母屋の庭先に引き出された。其処には楼主の嘉助、遣手のおかね、嘉助の女房のさくの三人が待ち受けていた。

さくは、その場に引き据えられた二人を激しい憎悪のこもつた眼で見ていたが、いきなり福岡の頬を力任せに二三つ撲りつけると、

「よくも讃岐屋の顔に泥を塗つたね。お上に訴え出るとは、何て恐ろしい根性だろう。前借を踏み倒し、わたし等を罪に落して、それで笑い物にしたかつたんだろう」

おかねもさくに負けられないといつた風で、梅本の髪を手に巻きつけると、ぐいぐいと捻じ上げ乍ら、

「太夫、太夫と甘えさせておきや、つけ上つてさ、恩知らずの犬畜生とはお前達のことだよ。犬畜生の扱いはどうするかよく思い知るがいゝ」

と言いざま、梅本の髪を摑んだまゝ後へ引き倒し、

「旦那さん、おかみさん、先ずこいつの着物を脱がしてやりましよう。雌の折檻は裸にしてからと相場は決まつてまさあ」

そう言つて乾からびた笑い声を上げた。過去何人かの女を、こうして責め折檻にかけて来たおかねの血が、獲物を倒して満足げに眺め入つている獣のように、力も無くうなだれ、恐怖に脅えている二人の姿に沸き立つて来るのであつた。

残酷な三人の手にかゝつては少しばかりの梅本の抵抗も空しかつた。みるゝ着物は身躰から離され、襦袢はもとより、見事に熟れ切つた腰を包んでいる布も、おかねの非情な手によつて剝ぎ取られた。身躰を蔽う物は何一つ残つていない。それでも梅本は身躰をちじめ足をすくませた。

「何さ女郎の癖に、小娘のように恥しいとさ。ふん、客を取る時やどうするんだい」

さくと嘉助が素肌の梅本の手をねじ上げ、後手に縛り上げている前に廻つたおかねはそう言い乍ら、草履の足で、身躰全体で隠そうと果敢ない努力をしている梅本の、柔い股の間を踏みつけた。むつちりと弾力のある肉体が、おかねの足の下で弾んだ。

「誰が一体言い出したんでえ」

嘉助が言つた。

梅本が黙つていると、今度は敷石の傍で慄えている福岡に、

鳳聲余滴

（読者の便りより）

五月号の巻頭に「マゾヒストの会」を出していただいたのは恐縮でした。

私の気になるのは、五月号九七頁のような発言で、勿論読者中サデイストの方が多いのは当然で男性のサデイズムは変態性慾でなく通常性慾の過剰形態であるというヒルシユフエルドの説をいずれ書くつもりですが、それ丈にサデイスト向きのものは他にもないではないのに反し、同性愛やマゾヒズムの記事の載っているのは御誌しか無い所に、稀少価値が生じて来ていると思います。商品性を失わぬためにサデイスト向きの記事が主となるのが当り前とは思いますが、どこまでも変態性慾全般にわたる編集をなすべきでしよう。読者は自分の好むものをその中から選んで読み取るべきであつて、自分の気に入らぬものを載せるなと云うのは小児的なエゴイズムです。そういつた配慮からも、特に希望されるのは、特別会員数の統計分析です。全数の発表は、商品として困るかも知れませんから敢えて要求しませんが、全数の中、希望の何割がサデイズム関係、何割がマゾヒズム関係、何割が同性愛、更に男女の別、などのパーセンテージ丈でも、個数自体とは無関係に、傾向を分析し得る良い資料でしよう。

「お前が張本人だろう」

と言い、逃げ腰の様子に気附いたらしく、

「こいつもくくつとかなきや」

本能的に逃げ様とする福岡の腰を一蹴すると、梅本と同じ様に三人掛りで泣き叫ぶ福岡を情容赦も無く裸にして縛り上げた。

「弄り物が二匹出来たぜ。どつちからだ。どつちを先に可愛がつてやろうか」

ともう何一つ自由の利かない様に縛り上げた二人を交互に見乍ら丁度二つ並んだ好物を膳の上で吟味する様に、嗜虐的な眼をきらめかせた。

すると、おかねが言つた。

「二人共一緒に可愛がつてやりましよう。先に音を上げた方が負けで、我慢の強い方を幾分勘忍してやるつてことにすりや」

嘉助は、にやりと笑うと、

「いゝだろう」

と言い、

「お前達の競争だ。先に音を上げた方は勘弁出来ねえ。我慢強い方は、これで勘弁してやろうじやねえか」

と荒々しい声で笑つた。

「先ず臀を叩きのめすんだ」

さくがそう言うと、用意してあつた太目の竹の折れを手にした。おかねも厳丈な根竹を持つて一つ素振りをくれると、梅本の顔を地面の砂の上におし倒した。足の裏に乗つて臀部が持ち上り、微かな風が宙に浮いた臀部を撫でる感覚が伝つた。

福岡もさくの冷い言葉にまるで繰られる様に言うが儘であつた。

会員番号が一連番号とすれば私の貰つた数字から見ても優に統計的分析に耐える丈の数になつているようです。発表はKK通信紙上がよいようです。編集部の一考をお願いしたい。

（沼　正三）

○

小生は貴誌の熱狂的ファンの一人ですが、どうも小生に言わすれば女を縛る写真というものは見たくないので雑誌を買うとそこの所は早速破つて棄てゝいる仕末です。マゾに比しサドの男性の多い事は事実のようで営業面からもサドに重点を置かれるのもやむを得ないでしようが、これはソドミー等を含めて博愛的にやつて頂きたく写真や絵についても偏重的にならないよう願いたいものです。この点から見て小生の読んで面白かつたのはやはり〃らぶ・すれい〃とコプロラグニーの実話で神の酒も至極絶品です。それに美歌さんの女性サドの文も大いにいただける。小生もかつてこの秘密を解決したいと苦心したが今迄とかく遠慮がちで失敗したのですが最近は娼婦を相手に八分通りの成功をおさめました。

（福島江成）

○

書店に出るなり早速五月号を買い求めましたが期待を裏切つて男色記事が殆ど見当りませんのでがつかり致しました。目次の中に二、三の男色記事があつたつて緊縛の読者が減る訳ではないでしよう。このまゝですと同性愛好の読者を失う事は必定です。私達ホモ傾向の者は数多い緊縛記事には目もくれず、たつた一篇の男色記事にとびつくのです。一方にばかり片寄つた編集方法は御損じやないでしようか。五月号九七頁の磐田氏

「膝をのばすんだよ、そうさ、そうして立てゝいるんだよ」

梅本は今福岡がどんな醜い恰好にされているか、茫とした頭の中でちらつと思い浮べた。福岡は後手に縛られたまゝ、頭と顔を砂の中に埋め、足だけを立てゝさくの打擲を待つているのであろう。

それは奇妙な風景であつた、いかに罪人とは云え、女の羞恥を無視し、身体は元より、魂までも辱しめねばすまない地獄の、私刑の図であつた。

同時に鞭は振り下された。二人の若々しい白い臀部に打突かり、赤い朱墨の跡のような線を引いた。梅本は顔が砂の上をすりつけてのめるのを、鋭い臀部の痛みと共に感じた。が声は出さなかつたもとより嘉助の約束はざれ言にしか過ぎないことはよく分つていた。がそうと知り乍ら、溺れる者の藁のように、果敢ない乍ら縋らねばならない土壇場であるのだつた。それは二人の意志を無視して自然におかねの提案通り張り合わねばならない破目になつていた。すつかり苦痛に虐げられたひ弱い本能を利用されていた。

一つ振り下された後は、鞭は狂つた様に次々と間断なく臀を襲つた。焼火箸を突き通される様に、一撃毎に耐え切れない痛みが全身を走つた。梅本は口中に入つた砂を思わず歯でかみ合わせ乍ら、たゞ祈るように口を閉じた。福岡の耐え切れなくなつた悲鳴が高く鳴る鞭の下から聞えた。がそれと同時に、梅本自身も苦痛の呻きを洩らしていることに気附いた、それは口から出た声ではなかつた。堪えよう〳〵と念じている心とはまるで別に、突きぬける痛みが自然に何処からか抜け出る声であつた。あ、うゝん、と思わず発する悲鳴は振り下される鞭の先からかも知れなかつた。どれ程経つただろう、二人は何もかも忘れ果てる、たゞ臀に止まない鞭の苦しみを、

の意見は偏狭です。一五一頁の染田様の企画本当に推進して下さい。四月号も男色ものは一篇しかありませんでしたが、久しぶりに岡直史郎先生の作でしたからやつと堪能させられました。どうぞ今後もリアルな男色ものをお願い致します。

（渡辺生）

○

御誌益々御発展お喜び申し上げます。十九才の少年である私はマゾの傾向を持つ一方同性愛（受身）のみに望みをつないで生きております。現在も三人の人から相当激しく愛されています。五月号の信行さんの御意見、アクチイブとパッシブの違いはあれ、我が意を得て嬉しく思いました美少年のヌードもいゝですね御誌が中心となつて東京でも男子同性愛者の会合や座談会を開いては如何ですか、四七頁のモデル募集広告は少年でもいゝのでしようか、顔には自信ありますけど、磐田生君の御意見、私は大反対です。何を持つて男子同性愛者の読者が少いと言われるか伺います。男色の記事は毎号必ず載せて下さい。私は縛られた女より縛られた少年に興味を感じます。もつともつと男色の記事がほしいのに。

（不破千作より）

○

貴誌の充実は只感嘆の二字あるのみ、特に告白物は自分の体験を他の人が換つて発表していてくれる感じ、縛られた女の写真に絵は実に素晴しい。只かえすがえすも残念なのは折角よい気持で陶酔境に入つているのにまるで冷水をぶつかけられたような気分にさせられるのは糞尿に関するものや男色の記事である。こんな記事に嘔吐を催しそうになるのは私一人ではなかろう

（森一輝）

ひいつ、とその毎に逃れる様に泣き叫んだ。

嘉助は先刻から縁側に坐つて、血色のいゝ顔を赤く染めて、眼をぎら〳〵光らせ乍ら、残忍な、痺れるような快感に酔つているのだつた。

大柄な肉づきの豊かな裸の身体を、あられもない姿でのたうたしている二人の女、それを狂つた様に責めさいなんでいる二人の女、何かしら身の毛のよだつてくる様な不気味さの中に、得も言われぬ陶酔を祕めて、地獄図絵は佳境に入つている。

二人の女が廊から逃げ出そうとした。そんな事はもうどうでもよかつた、又その為に加えられる折檻それも嘉助にとつては大した意味を持たなかつた。たゞ女が、その美しい顔に乱れた髪を巻きつけて、耐え切れぬ責苦にのたうつ。それがすべてであり、最後のものであつた。

嘉助は梅本を見、福岡を見た。砂を噛んだ二人の顔は蒼白に変り肉体に響く鞭の毎に、ひつきらせた顔が物凄い美を添える。

「もつと打て」

思わず嘉助は口走つた。もつと〳〵苦しめ苛み度い。見飽きる事のない凄惨な状景が、陰惨な嘉助の性格を怒濤のように揺り動かすのであつた。

小半刻も経つておかねとさくは疲れ果てゝ鞭を投げ出したは頃は梅本も福岡も半死半生の態であつた。嘉助はその二人の髪を摑んで泉水のふちまで引きずると、浅い乍ら、未だ冷え〳〵とした色をたゝえている水の中へ二人の裸身を投げ込んだ。

後手に自由を奪われている二人が、したゝか水を飲み、肌にしみ込む寒気に気附くと、改めてひきずり上げて、

「気持はどうでえ」

と覗き込む様に言つた。

「少しは廓の掟が分つたか。だが未だ済まされねえよ。これからが本物だ」

せゝら笑いを浴びせて、夢中に許しを乞う福岡に、

「未だ身体は保つと言つてるぜ」

乳房を逞しい掌で力任せに捻じ上げた一方さくはじつと歯を喰いしばつている梅本を見ると、

「こいつは、強情な阿魔だよ。未だこたえないんだねよ」

と罵り、弓の折れの先を、尚もきつくしめている腿の間へねじ込んだ。柔い肉体では厳丈な杖を支えることは不可能であつた。

「ひえーつ」

と叫んだ梅本の、両足が宙に躍つて恥もなく露な隅々迄が容赦のない杖の前にのぞけつた。だが力はゆるまなかつた、そしてさくの冷やかな声が、

「さ、何と言つてお上へ訴え出たのか、口上をこゝでもう一度言つてみるんだ」

おかねの足がもがく梅本の顔をふみにじつた。梅本は当ての逞しい意志が、こうした情容赦もない拷問の前では、淡雪の解けるよりも果敢なく飛び散つてしまうのを思う暇もなく、とぎれ〳〵に、

「白状しやんす。もう少しゆるめて……」

だが喰い入つている弓の折れも、顔を押しつぶしている草履も、何一つゆるまなかつた。

「——すべては嘉助の非道から出たこと、——わちき等を助けておくんなまし」

梅本は霞んだ意識の下で、ぼつと明るんだ自身番の灯と、それを求めて歩いた自分の姿とを思い浮べた。その時はこのような苦みは夢想だにしなかつたのに。

この口上は、再び嘉助を逆上させた。嘉助はおかねとさくの手から梅本を受け取ると、泉水の端から築山の裾との間の松の枝に、梅本を吊り下げた。

「お前も敷島みてえに二度とそんな口の利けねえようにしてやる」

嘉助の心には敷島の死と同様梅本の命など何の関り合いもないことだつた。自分を憎む梅本の、あやしいまで白い肉体を根限り精限り苛みつくことが怒りを晴らす唯一の方法であるかのようであつた。

嘉助は持出した、長さ三寸ばかりの三つ目錐を、松の枝から吊り下つた梅本の豊かに張つた太腿に、ぷつすり突き刺した。消え入る様な悲鳴を上げる手答えにまだ飽きぬかの如く、刺し通した錐をぐい〳〵もみ上げた。梅本は一本の棒のように身体を背り返らせて苦しんだ。二度三度、噴き出る血潮に頬を染めて嘉助の悪魔の仕業は何時果てるとも見えなかつた。白い裸身の太腿から美しく揃つた足の指先にかけて真紅の血がしたゝり落ちた。

何時か日は暮れ果てゝいた。居間から流れる行燈の火影が、悪鬼のような嘉助の姿と、燐光を放つ如く、夜風にも白い梅本の裸身とが、ゆれる灯光にゆらして照らし出した。

新町の通り〳〵にはもう灯がついた頃である。何時に変らぬ管絃音曲が、人々の群れ行く町に満ち〳〵て、一夜のさゞめきを操りひろげるのも間もないことであろう。

（終）

武家男色秘話

若衆武士道

戸崎平馬

もと男色は、妻帯を許されなかつた僧侶の間に、可成り古くから行われていたが、後に剛毅勇武なるべき武士の欲情の対象として、女色を柔弱なるものと戒める余り、美童を寵愛する風が盛行した。

蓋し情婦故に進退を誤つた武将も其の例少からず、その点稚児姓は、軍陣に於ても側近く召して差支えなかつたからでもあろう。

男子ではあるが風貌は女子同様容顔美麗、風姿嫺妍、濡羽色の前髪立、鬢髪あくまで美しく、雪白の皮膚は輝く許りで、一度朱唇を開けば春鶯の囀るかと思われる程で無ければならないのである。

新之丞より先の寵童、是は京より下つた島方主悦、時に齢十九才、互に寵を競い合う事も無く、新之丞よりして兄分と立て、何れは共に追腹と定めた奉公にゆめ怠りは無かつたが、主悦は二十才で元服、三百石の目付に取立てられた。君寵は専ら新之丞に注がれたのである。

主悦もさる事ながら、新之丞の一際立勝つた美容には秘かに胸を焦がす家中の士も少くはなかつた。森越内記も其の一人だつた。

内記は指南番二百五十石、二十七才にして尚独身であつた。生来衆に優れて聰く、文武に秀で、十七、八才の頃は、左門保堯の嫡男保長のお相手を勤める顕脱ぶりを示した。特に選ばれて柳生但馬守宗定の門に入り、三千の内弟に伍して二年余の修業の後は、二十五才の若さで指南番を仰せ付かつた。

江戸から帰つてからは、既に設けられてあつた道場に、内弟子六人、通い稽古の者若干を預かつたが、従前の、事有る度に人に先ずる勢を失つた。何事にも控え目で、剣道指

濃州大垣は十万石、戸田左門保堯の治世であつた。側用人五百石取り田部治太夫の一子新之丞は、美童の誉れ高く十四才の春より稚児姓として、保堯の寵愛を受ける身であつた

南に際しても、細かい大刀さばきの巧拙には重きをおかず、眼の付けどころ、心のおきどころ、という類の事どものみを、常々門人に説き聞かすのであつた。

十で神童十五で才子、二十過ぎれば唯の人か、と家中蔭口も聞えた。然し家老の久田宗太夫始め、家中に重きをなす人々の間では、眼を注けられている人物だつた。

従つて宗太夫が娘を嫁がせたがつたのも無理はない。然し内記は、

「未だ妻帯致すまでに修業が出来ては居りませぬ。」

と、簡単に断つて了つた。断られて一層やりたくなるのは人情だが、一方、

「修業の業は一生の業武士たるは生れてより死ぬ迄の修業ぞ。」

と常々門人に説くのを聞けば、妻帯の意は無いものの、ようであつた。

時恰も、島原の乱、慶安の変等相次いだ浪人狩の厳しい頃であつたが、偶々、十数人の浪士の一団が、近藩天領を掠めて大垣に入つた事があつた。城下で狼藉の限りを尽くしたので、藩の威信にも関わる事ではあり、討手を差向けたものゝ、死者狂いの浪士どもとてその幾人かを傷つけたに止まり、却つて藩士の傷を負う者少からず、死人さえ出た。翌日協議の席で何人も尻込みする中に、内記は大命を受け、浪士の宿る一軒家へ単身乗り込んだ。

折柄、夜暗に野中の一軒家を遠巻きにしてかがり火を焔々と燃やし、殺気漲る中に、内記は浪士の首領と対面した。即ち順々と逃がる能わぬを知らせ、散り際の名誉が大切と説き聞かせたのである。

もと〳〵幕府の外様大名取潰し策に、主家を失い生活に離れ、世相への反感を自暴自棄に打ち撤ける事によつて、僅かな生甲斐を感じつゝ死場所を求めていた浪士共である。流石に名を惜しみ、順逆を説かれては、潔い最期を遂げたしと、進んで願うのであつた。内記は用意の酒を、相図と共に馬で運ばせ、主君に願つて許されていた新之丞に酌をさせた。

妻壮の気の漲る一軒家に、月下の紫陽花にも扮う許りの美童の酌は寧ろ妖気をさえ孕んだであろう。とも角、十人余りの浪士共は、内記、新之丞に検分を頼みつゝ、快く腹を切つた次第である。

然し、主悦の跡を、又京から抱えられた吉井数馬という稚児性もいたから、保堯は、前言の手前にも、新之丞を稚児姓より免され、中小姓に取立てた。即ち闇の御用は御免と成つた次第である。

凝然と彼等の苦悶を見守るのであつた。

さて何方にも傷つかぬ此の処置を、保堯が何なりと思賞は望みに任す、と讃えた時、平伏した内記が、

「向う三年間、田部新之丞を賜りとうござる」

と言上したから、並居る家臣は、あッと驚いた。当の新之丞も、半ば蒼ざめた頬を伏せた。内記が、永く妻帯を肯んじなかつたのも道理と、人々は始めて気付いたのである。

内記は更に語を継いで、

「お聞き入れ無くば、此のまゝ切腹仰せ付けらるゝもお恨みには存じませぬ。却つてお情けと存ずる次第」

俯向いたまゝの新之丞を横目に見て、言い切つた。

是より以前、内記は新之丞に剣術を指南していた。武士は一生の奉公、と思い定めた覚悟にも関らず、その美貌は内記の煩悩を掻き

立てる。かくては御奉公相成り難しと思う程彼は身を焼く思いに悩んだ。折柄の事件出来は、罷り間違つて斬死とならば二人同道と定めて、新之丞を一軒家へ伴つたのである。

やゝ蒼ざめながらも凄惨な屠腹の景を瞰める新之丞が、一層内記の恋心を煽つた。

恩賞は望みのまゝと言われた時、彼の決心は固く一途だつた、所詮叶わぬ思いに御奉公の道に欠ける位なら、新之丞も見る前で、思う様腹掻剖いて果てる方が、潔よかつた。命を堵けて主君にねだつたわけである。

其の夜、新之丞は、若党の佐六一人連れて花鳥を美しく染め抜いた大振袖も艶やかに、絖の袴を綺羅びやかに波打たせて、内記の邸を訪れた。

生娘にも見まおしい、肌理濃やかに香る美貌に、そこはかとない羞らいさえ湛えている微かに笑みを含んで座に着いた新之丞の淑やかさに、内記に誓いの盃を交す暇も遅しと許り、引き寄せ掻き抱くのであつた。

「其方は憎い何故拙者を、此のように痩せる程も苦しめたぞ」

秘恋の苦しさを囁けば、

「お許し下さいませ。新之丞も苦しうございました。頼もしき御方様と、何時とはなしに慕わしう存じて居りましたなれど、不義はお家の御法度、殿のお情かけられます身には、所詮成らぬ恋と諦める苦しさ、……」

「何と申す、左様聞けば猶のこと、そなた、愛しうも憎らしうも相成るわ、今宵は心行く迄離すまいぞ。」

「今宵と申さず、いつまでも新之丞は、今は生き死にさえ、お前様のお心のまゝにござりますものを」

しなやかな指が内記のそれに絡み、白い頬は紅に燃えて、黒く輝く瞳の色さえ、妖しくも悩ましげに内記を振り仰ぐ新之丞であつた

尤も、道場での内記は殊更めいて見える程に新之丞に厳しかつた。たゞ風にも堪えぬかの風姿にも関わらず、新之丞の上達は早く厳い稽古にも随いて来るので、内記の愛情は一層深まつて行く。御用に差支えぬ範囲で、新之丞は折々、内記の邸を訪れるのであつた。

好事魔多しとは此の事と見える、約束の二年も僅かに半ばを過ぎた許り、新之丞十六才の秋である。

治太夫の知人で、江戸に町道場を開く川島典膳からの紹介状を手にして、早川清三郎と称する武芸者が田部家を訪れた、白面にして朱唇、如何にも才子型の青年である。小野一刀流に自ら考案を加え更に完璧を期した、と云う触れ込みである。紹介者の手前、治太夫は断り切れぬ義理も有り他流試合と決つた

保堯に、誰を出すか、と尋ねられた内記は門人の三沢市太夫が宜しかろうと答えた。師範代ですらない市太夫は、忽ち打込まれて了つた。

清三郎の態度に、あり〳〵と愚弄の色が有つたので、苛立つた保堯は内記に立合を命じた。今度は流石に清三郎も慎重に構えていたが、暫し対して竹刀が触合つたか合わないかに、「参つた。」と内記は剣を引いた。

保堯の面上に不機嫌の色が動いたが、内記の退き振りに呆気に取られた形であつた。

試合が終つて直ちに内記は呼ばれた。主の顔色を見て内記は、

「お抱え無用と存じまする」

「何故、敗けてやつたのだ」

と問われて、

「打ち込めるも益無い事、花を持たせた事が判れば帰ろうもの、と存じました」

と答えた。保堯も気乗りしていなかつたので、召抱えの事は沙汰止みとなつたが、是が禍根になろうとは、誰も知らなかつた。

治太夫は元々戸田譜代の臣では無い。江戸で浪人している内に、典膳の紹介で戸田の先代に引合され、計数の才を以て保堯に仕えた。累進して側用人に迄出世したのである。典膳と戸田の当代とは、仔細有つてその後疎遠となつたが、治太夫としては典膳には義理が有る。清三郎が召抱えられなかつた事はさておき、一応のもてなしはせねばならなかつた。

その夜の宴で、酔うに任せた清三郎は、諸国遍歴の話の末に、此処彼処の大名を悪しざまに批評したが、保堯をも暗に貶し、内記を武士らしからぬ狭量未熟と諷した。末座に侍つた新之丞の眉をひそめるにも構わず、手を握り弄んだ。

夜更けて例の如く内記を訪れた新之丞は、

「何故、今日は敗けておやりなされました」

と詰るように云つた。

「殿や、お前様を悪しざまに申し、剰え、私に嫌らしい振舞い」

そこまで聞いた時、内記の顔色が変つた。

「此の指を、此の手を、だな」

新之丞を抱きながら、内記は呻くように云つた。さりげなく寝物語の内に、清三郎の発足は、明朝辰の刻、と聞取つていた。

翌朝、稽古は師範代に任せて、内記は治太夫の邸を訪ねた。早川氏に御意を得たいと云うので、清三郎も武士の嗜みに大刀を手にして、式台に立つた。

「昨日の指南番とかだな」

「御身、昨夕拙者の事許りか、殿のことまで何とか申されたそうだが、まことか。」

「念を押す迄も無いわ。旅の武芸者に引けを取る指南番も指南番なら、抱えおかれる殿も殿、と存じた迄よ」

昨夜の酔も覚め切らぬ、傍若無人ぶりである。

「引けを取るか取らぬか、武士の勝負は一生一度と存ずるが」

そう内記が言い切つた、次の瞬間、何方からと知れず、二人は抜き合つていた。白刃が朝の陽ざしに閃いて、清三郎は、前のめりに崩れて行つた。血が玄関先の砂利を赤黒く染めて行つた。治太夫が止める暇も無かつた。

己れを頼んで訪れた清三郎を、むざ〳〵と玄関先に討たせては、治太夫の武士が立たないのである。愚かな義理を立て意地張りであつた内記にして、清三郎を斬る上は、治太夫との摩擦は覚悟していた。新之丞に討たれてやればよい、と考えていたのである。

治太夫は勿論内記の敵では無かつた。急変に目付の島方主悦が馳せ付けた時、既に治太夫は斬り伏せられていた。内記は主悦の邸に預りの身となり、出仕して居合せなかつた新之丞は、仇討後に跡目相続の主命を伝えられたのである。

いよ〳〵明朝、是も辰の刻に仇討と決つた夕方、新之丞は、頬も蒼ざめ、めつきりと窶れを見せて、庭の木犀の花を見つめていた。

冷く冴えた顔が夕闇に白々と浮かび、凄艶の趣がある。やがて花も見え分かぬ暗さと知ると、行燈に灯を入れさせ、文机に向つた。

その夜更け、佐六は彼の居間に呼ばれた。

「其方も知つての通りの仕儀なれど、内記殿に向ける刃は持たぬ。生き死にも共にと誓つた仲なれば、新之丞が先に参る他はない。田部の家と、二人の仲の義理と、責められた揚句に、此の他の道は無い。女どもに知れぬよう、夜の引き明けに腹を切る。仕度致せ。」

はッと驚く佐六に、きつぱりと申し付ける新之丞の、瞳も声も最早冴え返つていた。

治太夫は、妻が女子を産んで直ぐ没した後は、妻を新たに迎える事はせず、小りんという女中が側に勤めた。新之丞の妹が一人残されるのである。

「お心安く、遊ばしませ。佐六にもお供仰せ付けて下されまするか」

じつと新之丞を見上げる佐六の語尾が軽く震えた

「そちには頼まねばならぬ事もある。ならぬぞ」

佐六は黙つて頭を下げた。

当日は暗い内に起きた。秘かに身を清めて居間に帰ると、佐六は云い付け通り、裏返した畳に白い布を巻き、切先三寸残して紙縒で巻いた九寸五分を、三宝に載せていた。

「世話のかけついでに、切腹と同時に是を島方殿へ届けてくれい。」

昨夜認めた書面を流した。

「森越殿も恐らくは近々最期と覚える。そちは新之丞に代つて見届けてくれい。今度はもつとよい主人を持てよ。」

と、透き通るように白い頬に、強いて微笑を浮かべた。身には、初めて内記に抱かれた夜の、花鳥の紫振袖を、思出にまとまつている。髪も態と若衆髷のまゝになで付け、最後の身嗜みに紅も交えて、薄く化粧さえして、静かに三宝の前に坐つた。

まず両肌脱いで袴の紐を押し下げ、艶やかな肌を惜しげもなく下腹迄露わすと、刃を執つた。廊下で俯向いている佐六に、

「さらばじや、さ、早う行け」

漸く仄明るむ障子を閉め切らせた。

腹を撫で下した時、ふと、夜毎、腹を揉みほぐしてくれた稚児の嗜みが、今更の如く思出されて柔げた瞳が湿る。お先に参りますよ、と口の中で独り言う、静かに左の脇腹へ切先を差し当てると、うむ、と力をこめた、忽ち血汐がぱつと噴く。激痛が寧ろ快く全身を震わせた。その儘きり〳〵と真一文字に引き廻すと、予て内記に教えられた通り、右脇で止めた刀を引抜いた。介錯無しに我と我が腹を切り裂く痛苦も、昨夜迄の心の苦悩に比べれば何でもない弾む息を殺し、柄頭を握り直すと、苦痛を怺えながら、鳩尾へ力一杯突込んだ。滑らかな下腹に血が流れて行く。両手で切り下げる。臍の辺り迄断ち切れたか、と思いながら、意識は薄れ、がつくりと俯伏した。新之丞が息絶えても、血だけは少しづゝ白布の上を拡がつた。

有るか無いかの微風に、木犀の花が、暁光の漂う庭で、ぽろ〳〵と散りこぼれた。

主悦が受取つた手紙には、酒席の言葉を取次いだ身の不用意故に、思いがけず大事を惹き起し、讐は打たねば武士の一分立たず、さりとて命に替えてもと、殿より乞い受けられた義理有る念者に、向ける刃は持ち合さず、所詮刃を合すとも返り討は必定ながら、それでは態と斬られたか、と見る人も有ろう、又よし内記が自分の刃に果てゝくれても、末永く人の口に上つて名折れとなろう、若かじ自

ら刃に伏さんには、と其の苦衷を述べ、共に追腹を誓い合った仲の、先立つは苦しけれど殿万一の節は、待受けて黄泉の案内仕らん、と結んでいた。

主悦の報告で、内記は改めて切腹を仰せ付かった。新之丞の死を聞いて、

「早まったり、……勝は取らするに。」

と内記は口惜しげに呻いたが、主悦宛の書面を見せられ、主悦の去ったあとで涙を落した。

あの美貌、あの愛しい体、それは既に此の世に無い、と思い知る時、限りない悲しみが胸に衝き上げた。追いようもない、最早やその現し姿を遂に見る術の無い悲しみは、身を砕かれる思いであつた。

翌日、内記は菩提寺で切腹するに当つて、式通り設けられた席に就くと、介錯人に、

「介錯は御免下されたい」

と申し入れた。

新之丞が嘗て寝物語りの末に、

「新之丞の死ぬ時は必ず追腹、何となれば、お前様にも殿にも……」

と言つた事がある、内記は聞われるまゝに介錯有る時は、左脇より右迄一と筋引けば足ろう、無ければ苦しくとも十文字に切らねばならぬ、手本は昔、義経の臣佐藤忠信の手ぶり。」

と教えた事が思い出された。此の度それが役立とうとは思いがけなかつた。

此の一種殺伐な話題が、結構、武士の教養を示すものとして、寝物語りの一部なのであつた。

若年の新之丞、さぞ苦しかつたであろう、と思う。その愛おしさ、傷わしさに、同じ苦痛を味わうことによつて、新之丞の真心に報いる心算の内記であつた。

白装束を押肌脱いで、三宝の九寸五分を取り上げると、内記は、庭上の佐六に、

「佐六、よく見届けて居れよ」

と声をかけ、ゆつくり右手を廻して、

「新之丞、今参るぞ」

と呼ばわりざま、刃を左の脇腹へ、左側から発止と突き刺した。苦痛に耐える内記の脳裏に、過ぎし日の新之丞の艶姿が、まざ〳〵と蘇えり、右へと廻す手に、ぐつと力がこもつた。

検使の主悦が、喰入るような凝視を続けている間に、内記は見事に腹を切り裂き、辛うじて左手を突いた姿勢で、

「首を、首、を、打たれい」

と申した。

戦国の遺風未だ廃れ切らぬ、慶安の頃であつた。

【読者通信】

本誌の編集はあくまで縛られる女性の美及び女性を対象したと責めを主体として下さい。現在の状態ですと男色及び男性を対象とした責めにお株を奪われそうで心配です。私は男色を扱つたものや男子同性愛をテーマとした作品は題名を見ただけで嫌悪の情を催し全然読む気がしませんどうか私達多数読者の希望の夢をこわさないようにして下さい。

（日向道夫）

○

御誌の編集の大胆さとその勇気にはホトホト頭が下ります。何んだかんだとうるさい島国根性の日本でよくこれだけの雑誌を作り上げられたものだと思います。只私一人の雑誌ではないからやむを得ませんが慾を言えば陰惨なものや男性マゾ等は減してほしい。五月号の編集期待を裏切られた様で興味半減、硝子便所は便所という字を見た丈で読まなかつた。九七頁の磐田氏の意見に大賛成、これは一般読者の声と信じます

（森　一夫）

淫（みだらび）火（第六回）

松井籟子
喜多玲子画

一

――とうとう駄目だつた――

そう思うと、貴船一郎は泣き出してしまいたいような気持がした。

会いたいと思う人に会えないことが、こんなにも苦しいものだとは思つていなかつた。それはもう、心をしめつけるというよりは、体全体に痛みを感じるなよう切なさだつた。

つる子という名だと村山富男は言つた。

「つる子さん！」

そう呼んでみたが不思議にその人の面影がうかばない。何となく

彼女には似合わない名のような気がした。

それでも「つる子、つる子」と、口の中でくり返えした。どうしたらもう一度会えるのだろう。たつた一度会つたきりの人に、どうしてこうまで惹かれるのだろう。恋とは案外こうしたものなのかもしれない。何度も会い、お互にお互を知り、積み重ねられていつた愛情は、愛ではあつても、恋ではないのだろう。愛情は静かに温かく身をつゝむのにくらべて恋情は激しく、熱く、燃えさかるのだ。

貴船一郎はどこをどう歩いたかわからない程、ただ一ずに小百合夫人の面影を追いながら、我が家へ帰つて来た。酔つぱらつても自分の家は忘れないように、恋に酔つても、やはり帰える家は今の所一郎にはそこよりなかつた。

しかし、崩れかけた垣の間から、借りている離れへ戻ると、椽側の雨戸はとざされていたが、その横の丸窓から、明るく灯が洩れていた。

一郎は順子という女がいたことを忘れていたのに気がついた。瞬間、一郎の足が渋つた。順子に会いたくなかつたのだ。しかしいんとした夜の闇に、そこだけが明るい灯の色は、妙に仕合わせそうなあたたかさを感じさせた。彼はふと、もしかしたら自分の気持がつる子というあの人に伝つて来てくれたのではないかという気がしてきた。自分が会いたいと思うように向うも会いたいと思つてくれた、約束の時間に、約束の喫茶店へ来られなかつたのを、誰かに自分の住所を聞いて、たずねて来てくれたのではないだろうか。あの窓の灯の下には、あの人が自分を待ちあぐねて、座つているのではないだろうか……。

恋は人間を悧口にも馬鹿にもする。どう考えても無理な願いが、まるで夢の様に、恋に酔う人の頭にえがき出されると、夢と現実が混沌と入り交つてしまうのだ。

貴船一郎はその灯の下にいるのは順子だと知つていながら、まるでわざとその思いを押しのけるように、順子と小百合夫人を入れかえて考えたのだ。そして、一郎はもう、その窓の灯に背を向けて、踵をかえすのは心残りに思えてきたのだつた。

「おそかつたのね」

声をかけたのはやつぱり順子だつた。それでも一郎は、まだ部屋の中に小百合夫人がいるかと探す様に、順子の顔を見ずに、先ず部屋を見廻した。

見廻すまでもない、一と目で順子しかいないとわかるせまさだつた。ただ、一郎の瞳が心の中の影を追つて動いただけだ。

彼は急に疲れが出たように、深い溜息をすると、コートを着たまゝ机の前に座つて、両手で頭をかかえてしまつた。

「どうしたの？」

後から順子がのぞきこむようにきいた。

それに答えるのも物憂かつた。

「どうしたのよ。さあ、これぬぎなさいよ」

うしろからコートを脱がせようとするのに無言でボタンだけはずして、順子の脱がしてくれるのにまかした。

「マフラは？」

順子が聞いたが

「うん」

と、一郎は溜息の様な曖昧な返事をしたきりだつた。

「ねえ、マフラをどこへ忘れてきたの？どこかで外套ぬいだのね、

どこでぬいだの？　おかしいわね。あんた、誰かにやつてきたんじやないんでしようね。え？　今までどこへ行つて来たのよ？」

立て続けに、とがめる様にいう順子に

「うるさいな。少しだまつていてくれよ」

一郎は言つた。

「だまるから言いなさいよ、マフラを誰にやつて来たの？」

「落したんだよ」

「嘘おつしやい！　かりに落したのなら落したでもいいわ。何故落したの？何故私のあげたものを落したりするの？　大切だと思つていないからだわ。どうしてそう薄情なの？　くやしい！」

順子は後から一郎に手をかけて、引き倒した。

「少し静かにしてくれ」

転びながら言う一郎の咽喉を、順子の手がしめつけた。

「殺してやる。あんたの気持が他に移つてるの私知つてるわ。あんたを他の女にやる位なら、私の手で殺してやる。あんたを殺して私も死ぬわ、無理心中してやる」

「やめろ」

一郎は順子の手を押さえた。

小百合夫人に会わない前だつたら、いつそ順子のするがまゝにまかせて、順子の手で息の根をとめてもらつた方がいいと思つたかもしれない。自分よりおくれて学校を出た連中が、何人か新進画家としてみとめられて来ているのに、自分は書きたいと思う絵も書けず安い稿料の小説書きでは食べてもいけず、二た言目には「私が買つた」「私があげた」と順子に言われながら、愛慾の渦にまきこまれている。いつそ死んだ方がましかもしれない。いつかはいい絵を描

前号迄の梗概

富と美しさと、やさしい夫とを持つ小百合夫人は、その欠けるものゝない幸福さの中で満ち足りていなければならない筈だつたそれなのに、彼女の白いなめらかな皮膚の下を流れている血は、時々妖しくさわぎ出す。誰かに苛めてもらいたいとさわぐのだ。そのひそやかな欲求にそそのかされて、街の不良少女の様に装い新世界を歩いてみた。そこは東京でいえば浅草の様な、下町の盛り場だつた。彼女はそこで村山富男を知る。村山は美しい女に虐げられたいと思つている男だつた。その村山の情婦の誤解から、小百合夫人はみじめな目にあう。それを救つたのは貴船一郎という画家だ。一と目見て、貴船一郎も小百合夫人も、お互いに激しく惹き合うものを感じるが、一郎にはすでに順子という情婦があつた。小百合夫人は自分のマゾヒズム的欲求がだん激しくなるのを恐れて、夫の雄作を旅に誘う。夫の正常さに頼るつもりだつたのだが、雄作は学生時分にふと知つた男色の味を忘れ切れない男だつた。南部邦彦という後輩の美青年と、小百合夫人の目を盗んで交渉を続けていた。雄作が夫人の誘いに応じて一緒に旅に出ようとしたのも、自分の性癖を正常に戻したいと思つたからだ

一方、貴船一郎も又、暗い私生活を持つ男である。彼は小百合夫人の肉体にひそむマゾ的欲求を知らず、その清らかな美しさにすがつて、自分のサジズム的傾向をためていきたいと思う。そして、小百合夫人に再会を願つたが、約束の日、夫人は来なかつた一郎は夫人の所も名も知らぬ。村山が知つているかと思つて聞くと、村山はわざと嘘をついて、一郎を自分の家にともない、一郎の怒りをあおぎ立てて、ひどいめに合わされ、自分の慾望を満足させようとするのだつた。

こうと思い、描けると思い、筆の荒れるのをおそれて安易な絵筆の仕事をするよりはまだエロ小説を書く方がましとまで思つているのに、それがすべて、自分の才能に対する恐るべき過信だつたら、いつそ自分の手で自分の咽喉をしめてしまつた方がいい。

小百合夫人に会うまで、一郎は何度そう思つたかしれないのだ。しかし、人が生を絶つということは容易なことではなかつた。自分で自分を殺してしまいたいと思うな苛立ちが、順子をいじめることにはけ口を見出したともいえるだろう。

しかし今は違う。一目見て小百合夫人に心を惹かれ、夫人に再び合うことを命かけて願つている。会えればそこから一郎の別な人生が開けるかもしれないという希望があるのだ。順子の為に自分の生を絶つことは出来ないのだ、

「死んで！　一緒に死んで！」

順子はいう。

「私はもうあんた以外の人とは結婚出来ない体になつてしまつたのよ。こんな女にしたのはあんたなのよ、あんたが私をこんな女にしてしまつたんだわ」

順子は一郎の手をはらいのけると、自分の腰紐をといて、腰からすつとぬくようにとり出した。そして、それをいきなり一郎の首にかけた。

「私、どうしてもあんたを私だけのものにしてしまうわ。殺してしまえばあんたは私のものよ。私だけのものよ。いくらあんたがあの女に惚れたつてどうにもならないわ。こうして、私の手で殺してやる！」

順子は一郎の首にかけた紐をぐつと締めた。

「うゥッ！」

と、思わず一郎は息苦しくなつたが、片手で咽喉にかかつた紐を強く前へ引いてゆるめた。

「ばか！」

片手が順子の頬へとんだ。

「あつ！」

と順子はひるんだが、腰紐にかけている両手をがむしやらに引いた。

「はなせ」

一郎は片手で紐をゆるめながら片手を順子の顎へ下からかけて、押しあげた。

「はなさない！」

順子は押し上げられた顔を醜くゆがめると、白い咽喉を一様にのばしながら、手だけは紐にかけて引張つている。

「はなせ！」

一郎は順子の肩へがくつと歯をたてた。

「ああつ！」

と、順子は呻いてしばらくこらえていたが、一郎の歯の力は肉にくいこんで、思わず順子は手をはなした。その手を一郎は後へねじあげると、今、自分の咽喉に巻かれていた順子の腰紐で、後手に縛つてしまつた。そうしなければ順子を静めることが出来ないのだ。彼女が殺すとか、死ぬとかいうのも、どこまで本気で、どこまで狂言なのかわからない。しかし、後手に縛りあげてしまえば、一応順子は人を殺すことも、自殺することも出来なくなるのだ。

そう思う一郎をまるでからかうように、順子は後手に縛られたま

ゝ、外へとび出して行こうとした。
「死んでやる。ひとりで死んでやる。」
腰紐で後手にくくられたあまりを帯の様にたらしながら、足で椽側の戸をあけようとするのだ。
「死んでやる。このまゝ踏切からとびこんでやる」
順子は叫ぶ。戸はがたがたと音を立てるだけで、順子の足ではあかなかなかつた。いや、本気であけようとしていないのかもしれない。
「静かにしないか」
一郎はもうやぶれかぶれの気持になつた。
順子の繩尻を後からぐつと引くと、順子は足をすくわれたように椽側へ転んでしまつた。それをずるずると柱の所まで引きずつてくると、廻り椽になつている角の柱へ結つけた。
そして、着物の衿をゆるめて、ぐつと肩まで押しぬがせ、裾は裾で、白い太股まで見える程にまくしあげた。順子の着物は胴の所で帯の様にまとつているだけになつた。
順子は裾を合わせようと足をもがいたが、一郎は押入から麻繩をとり出すと、もがいている足首を無惨にもかたくそろえて縛りつけてしまつた。順子の体の重心は、片方の尻と、片方の太股とつながる僅かの部分にかけられて、そこを椽側の冷たい板に釘づけされたように動けなくなつてしまつたのだ。
「こういうめにあわされることが、どんなに浅間しい姿だか、自分で自分をよく見て見ろ」
一郎はそう言つて、順子の鏡台を柱の前へ持つてくると、電燈のコードをのばしてわざとその上に光がくるように柱の上の釘に吊つた。
見ろと言われても、順子は顔をあげられない。出来るだけ体を前に倒していれば、手首にかゝる紐は痛いが、一ところにかゝる体の重みは少くて、わずかに体のバランスをとつていられるのだ。
「見ろといつたら見ろ」
一郎が言うが順子はだまつて顔をさげていた。
「よし、見ないな。じやあ、見せてやる。自分で自分の姿にあいそをつかしたらし、一度はその病気がなおるだろう」
一郎は樫の棒をとつてくると、それで順子の首を上へ向かせた。そして順子の咽喉の前へ真一文字にその棒を横にして、再び別の繩その両端を仕に結ひつけた。不自然な体位で、順子の尻の痛みに背と腰の痛みが加つた。
それでも順子は強情に目をつむつて、自分の姿を見まいとした。それがどんなに浅間しい姿であるか、見ないでも解つていた。
「目をあけろ」
一郎は言つた。
「あけないな。よし。」
一郎は順子の鏡台の引出しをあけると、髪へウェーブをつける金属製のクリップを二つとり出した。そして、無理やりに上瞼と眉毛とを一緒にしてはさんでしまつた。
順子はもういやでも鏡の中の自分の姿を見ないわけにいかない。まるで捕われた獣みたいな姿だつた。両方の瞼の上の銀色に光つたクリップが、よけいに順子の顔をおかしくゆがめて、仕置されている小悪鬼の様に見えた。
そればかりか、一郎はもう一度鏡台の引き出しからクリップをと

り出して、唇の両端を頬の方へはさんでしまつた。

何と可笑しな顔になつたことか……。

「もう、やめて！」

順子は叫んだ。それすら「オウ、ヤエテ！」としか声にならない。

順子はその侮辱に耐えられなくなつた。

今まで一郎にどんなひどい目にあわされても、それは一郎の愛情の変つた表現だと思つていた。しかし今夜のは違う。一郎は順子を苛めることに喜びを感じていない。ただ彼女を侮辱しようとしているだけだ。クリップで縦に横にゆがめられた顔の、どこに美しさがあるだろう。縛られ、打たれ、苛められて、苦悶する女の姿にはある美しさがあるものだ。順子はその美しさを一郎が好いてくれると思つていた。けれど、今日の自分の姿、特にその可笑しな顔に、何の美しさがあるだろう。滑稽なだけではないか。その位ならどんなに痛くとも、鞭で打たれる方がいい。裸で吊るされる方がいい。どんなに苦しくても猿ぐつわをはめられる方がまだましだ。

それなのに一郎は、順子をそのまゝにして、手拭と石鹸を持つてだまつて家を出て行つてしまつた。夜更けまでやつている銭湯へ行くつもりなのだろう。順子が大きな声で助けを呼べば、母屋へ聞えるだろうが、おそらくそのみじめな恰好を一郎以外の人の目にあきらさまにするようなことはしないだろうと承知している。鍵もかけずにそのまゝふらつと外へ出て行く一郎を、順子は目で追うことも出来ない。鏡の中の自分と対峙して、身動きもならず、ただ呻いていた。

二

「今晩は」

外でおとのう声がした。

「今晩は」

はじめのは男の声だつたが、あとのは女の声だつた。

順子は返事もならず、じつとしていた。そんな遅い時間にたずねてくる人の見当もつかなかつた。だまつていればそのまゝ帰つてしまうだろうと、順子は息をころしていた。

「もう寝たんですか？」

そう云つて、外からそつと雨戸にかけた手が、案外すると戸があいたので、はずみに中をのぞきこんで

「あら！」

と言つたのは、村山富男の情婦松枝だつた

「あら、まあ……」

と、松枝は大仰な声をあげると、入れとも言われないのに、靴をぬいでさつさと上つて来た。その後から、おずおずと村山がのぞきこんだ。

「ふーん」

と、松枝は縛られている順子の姿を面白そうに立つたまゝ見おろした。

「貴船さん、どこへ行つたの？」

「銭湯……」

順子は答えた。唇を合わせる発声のない言葉だつたので、わりにはつきり言えた。ただ、唇の両はしをクリップではさまれているような口で物を言うことが、打たれるようにつらく体にひびいた。

それでも順子はあえてはつきり答えたのだ。一郎に用事があつて来たのなら、そのまゝ一郎に会いに出て行つて欲しかつた。村山達

とは顔見知りの間で、二人の性癖も大かた知つていたが、特別親しい関係でもなかつた、虐待されている自分の姿を二人の目にさらすことはたまらなかつた。松枝に自分の繩をといてもらうよりは、今すぐ、外へ出て行つてもらいたかつた。

それなのに松枝は靴をぬいで上つて来ようとしている村山に

「あんた、貴船さんは銭湯だつてさ。一寸迎えに行つといでよ」

と言つて、自分は出て行こうともしない。

「行つたつていいけど、どの辺か俺は知らねえよ」

「気のきかない人だね、一寸その角へ出て煙草でも買つて聞けばいいじやないか。早く行つといで。何、のぞくんだよ、あんたの見るものじやないよ」

松枝は追い立るように村山を外へ出した。そしてもう一度感心したように

「ふーん」

と、大きな溜息をすると、まじまじと順子を見るのだつた。その松枝の目は病的にぎらぎらと輝いて、得体の知れない微笑が口元へ浮かでいた。

「たいした苛め方があるものなんだね。一枚役者が上だね」

松枝にどう見られようと、どう言われようと、順子は動くことも出来ないのだ。

「今日はね、貴船さんに一寸物をお聞き申しに来たのさ。このマフラ、あんたの旦那のだろう?」

順子の鼻さきへ松枝は貴船のマフラをつきつけた。

「あたしがうちへ帰えると富男の奴、このマフラで縛られているじやないか、いつたいどういうわけなんだつて富男にきいても言わないのさ。おかしいじやないか。そのわけを聞きに来たんだよ」

順子は一郎との喧嘩の手を縛るのに使われていたとは意外だつた

順子にもそのわけは想像さえ出来なかつた。

「あたしが頂度今日うちへ帰つたからいいようなものだけれど、さもなければ富男の奴、ひぼしになるところさ。あたしはそう毎日家へ帰えらないからね。ここの所一寸間があいたものだから、富男が浮気しようとしたんだろう。こつちはまさか富男が貴船なんかつれこむとは思わないからね。私だけのものだと思つているのに、あたしの目をぬすんで誰かに苛めてもらつていたなんて……。私しや嫉けるんだよ。このマフラで縛られて、富男が喜んでいる所を考えると、相手が男であろうと誰であろうと、私は嫉けて仕様がないよおかしいかい?笑つているんだね」

「いいえ」

順子は辛じて言つた。笑つている様に見えたとしたら、口を歪めているクリップのせいだ。

それにしも、浅間しい姿で柱にくくられている同性の女を前にして、平然と話をしている松枝の神経はよほど異常なのかもしれない

「いい恰好だね」

松枝はまるでおいしい御馳走を前にしているように舌なめずりして順子を見ていたが、いくら見ても見飽きないという風なのだ。

「いいこと考えた。あんたの旦那がうちの亭主と浮気したんだからあんた、私と浮気しようよ。え? 私に苛めさせておくれよ。そしたらそれで五分五分じやないか」

松枝は変な理窟をあみ出した。そして、それがさも当然の理窟の様に順子に言うのだつた。

「厭です。もう帰って下さい」

順子は言った。

「帰れ？」

「私を放っておいて下さい」

「ふん、私達を追っぱらって、後で貴船にたんと可愛がってもらうつもりなのだろう。だから私が可愛がってあげるよ。あんな富男の様なごつごつしたのと違って、たまにはあんたみたいな軟らかい体を、抓ったりくすぐったりしてみたいじゃないか」

そう云うと松枝は柱に縛られている順子の足の裏に指を走らせた。

「どう？　いい気持だろう？」

足首を一つに縛られているから、松枝の指は両方の足の裏をかけ廻る。

「あっ！」

と身悶えするにも、咽喉に渡っている棒にしめつけられて、僅かに腰を少しひねっただけだった。

松枝は指をだんだん上へ移して、股から横腹へとくすぐっていくそれに身をよじると、又足の裏へ戻り、又胸から咽喉へ指先が這い上る。その度に順子は柱を中心に右に左に泳ぐように身を動かし、身をもんで呻いた。そしてその姿は目の前の鏡にいやでも写って、水族館で硝子越しにのぞいている魚の動きの様に怪奇だった。

松枝には松枝の責め方がある。

夫だけしか知らなかった人妻が、他の男に無理やり貞操を奪われはじめは厭悪の情しか感じなかったのが、だんだんに相手の男の技巧にひきずりこまれ、いつしか歓喜の声をあげるように、順子は松枝の指先に弄れているうちに、不思議な陶酔が全身を流れていくのに気がついた。

松枝は順子の顔のクリップをとった。順子はもう、鏡の中の自分に目をつむろうとはしなかった。むしろ苦悶する女の体の美しさを自信をもって鏡の中にとらえ、鏡の中の

女のうごめきが、順子の体を熱くした。そして、それは松枝にも伝って、責める女と、責られる女と、二人は体の火を一つに燃して、貴船の存在も、村山の存在もしばし忘れていたのだつた。

三

夜更けの街に月が昇つていた。

湯上りの爽やかさが、貴船一郎の心をいくらか軽くした。夕暮時の煙つたいような匂いではなく、冴えた夜気は香ばしかつた。

小百合夫人に会えなかつたやるせなさが幾分消えて、又いつか会えるという希望に変つていた。とに角順子と別れなければ駄目だ。その為には少しの間旅に出てもいいと思つたりしながら、ぬれ手拭を片手に歩いていた。

「先生」

電信柱の蔭から声をかけられ、振り向くと、村山富男がてれ臭そうな顔で近付いた。

「先生さつきはすみません」

ぺこつと頭をさげると

「松枝の奴が帰つて来て、変なやきもちのやき方をして、あつしを此処まで引張つて来たんですよ。あつしさえ知らねえ先生の家を、松枝の奴どうして知つていたのか……。ところで先生、お願いがあるんだが……」

貴船一郎は渋い顔でだまつて歩いていた。

まさか村山から駈け出して逃げ去るのも大人気ないし、村山をなぐるのはもう厭だつた。

「松枝の奴がいくら嫉いても、相手が先生ではどうしようもないと思うんです。ただ、あつしと先生との間に、あの新世界で遊んでいたつるちやんの話が出て、それで先生があつしの家まで来たとわかると話が面倒になるんでさあ。それをだまつて貰いたいんで……」

もみ手をする様に言うと、一と足おくれながら、一郎について歩いて来た。

「俺の家に松枝の奴がいるのか?」

一郎ははじめて口を開いた。

順子がどうしたろうと思つた。

「へへ、、、。先生も好きだね、え?、見やしたよ、あつしがよく見ようと思つたら、松枝の奴あつしを外へおん出しやがつて……」

一郎の胸に又にがい水が上つてきたような気がした。一郎は自分の性癖を人に知られたくはなかつた。漠然と知つている者があつたとしても、その証拠のような順子の姿を村山達の目に見られてしまつたとは……。

まだ家も建たない焼跡が道の横にひろがつていた。

一郎はだまつて道からそれると、焼跡の石の上に腰をおろした、月の光が戦後建てたバラックの屋敷を照らして、その中に住む人達の生活からは遠い、おとぎの世界の家の様に美しく見せた。一郎はじつと動かなかつた。そうして月の光を全体に浴びていると、体の中まで清められるような気がする。中天に輝やく月は誰かの瞳の様に一郎をやさしく見ている。誰かの……。

一郎は又小百合夫人を想つた。

村山が無言で一郎の横にしやがんだが、ぽつぽつとしやべり出した。

「先生、あつしはつるちやんつて女にもう一度会いたいと思つているんでさああの女の所を知らねえのは、嘘でもなんでもねえ、本当に知らねえんでさあ。つるちやんという名だつて、本当か嘘かあつしは知らねえんです。ただ、あの女が自分の口でつる子という名だと言つたまででさあ。ねえ、先生、どうやつたらあの女にもう一度会えるでしようね。易でもみてもらつたらどんなものでしよう?」

一郎は村山の言葉に嘘はないと思つた。

村山に尋ねたらわかるだろうと思つていた望みが、はつきり絶ち切れたのだ。

二人は同じ様に溜息をした。そして空を見上げた。あの同じ月をどこかで小百合夫人が見ている筈なのだ。しかしそれはどこなのだろう。村山も知らない。貴船も知らない。

ややあつて村山が言つた。

「たつた一つ俺が気になることは、あの女にそつくりの奥さんが芦屋の方にいるんでさあ。そつくりだけど、あの女の方が俺は好きだ」

「芦屋?芦屋のどこだ?」

一郎の声がふるえた。

「どこだか俺も自分で行つてみないことには人に教えられねえんです」

「又、だますんじやないだろうな」

「本当でさあ。嘘でない証拠に俺は恥をお話しまさあ」

村山は芦屋の家へ泥棒に入つた話をはじめた。そしてそこで新世界で会つたつる子という女そつくりの奥さんに会い、あくる日。もう一度たしかめに行つたが、どうしても同じ人間だとは思えなかつたと話した。

「行こう!」

聞き終ると一郎は強く見つた。

「僕をその家へつれて行つてくれ。いや、その家の前まで行けばいい。僕に教えてくれ」

一郎の心の灯がポッと灯つた。

村山は別人だという。しかし、同一人かもしれないのだ。別人でもいい。とに角あの人にそつくりだという人に会いたい。その人にあの人の面影を偲んだら、せめても自分の心が救われる。

「頼む」

一郎は村山に手を合わせたいような気がした。一郎は家に待つている松枝のことも、柱に縛つておいた順子のことも忘れたのか今からでもすぐに芦屋へ行こうとするように立ち上つた。どこかで火事でもあるのか、けたたましいサイレンの音が聞えていた。

(つゞく)

【編集部より】

手記〃妻は縛らず〃を御送り下さいました岡田圭介氏へ七月号に引続いて八月号にも掲載したいと思いますので至急続篇をお寄せ下さい。女囚私刑体験記の予告を頂きました小坂多美枚さんへ、続稿お送り下さるようお待ち致します。羽村京子さんへ、貴女のお便りに対する川端多奈子さんと信太蓉子さんの御返事はお送り下さるよう各々連絡してありますから八月号に発表出来ると思います。貴女の作品も是非お寄せ下さい。沼正三氏へ、毎度お忙しい所御厚意を賜り厚く御礼申し上げます。予告通り誌面をとりますから何卒引続いて御送稿の程御願い申し上げます。

K K 通信大好評

見本一部三十円
半年分 百 円

本誌の愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いの機関誌として発足しましたKK通信は号を追つて発展、今や特別会員の連絡誌としての母胎になりつゝこゝに第九号を迎えました。本誌をお読みになられた方は是非KK通信も併せて御覧下さい。

特別會員募集　愛読者の強い要望に応えて特別会員制による諸行事を企画しました。会則の詳細はK通第七号に掲載、申込用紙も同封してあります。

原稿募集

一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
一、内容は本誌に適当と思われるものでしたら如何なものでも結構です
一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
一、発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
一、締切日は特に定めません。
一、読者の体験告白文は内容及びその長短は問いません誌上匿名は御自由です。奮て御応募下さい。

（奇譚クラブ編集部）

◎編集方針について

尚本誌の内容編集方針に関して（塚本鉄三）
見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい
一、縛られた女の写真について（染田　玄）
二、男子同性愛の件について（松井籟子）
三、縛られた女の件について（箕田京二）
四、編集方針の一般について

◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年八月号以降より毎号若干保有して居りますが、七月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の分は一部送共九十円、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信第四号以前品切れ。

◎御願い◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封を願います。但し文書輻輳の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尚理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願います。

先ず書店へ　御予約下さい

熱狂的な本誌ヲアンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さいる一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊（送料共）三　百　円
半年分六冊（送料共）六　百　円
一年分十三冊（送料共）壱千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真三枚一組一年分御申込の方には八枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ　第七巻　第六号
毎月一回一日発行
六月号　定価　百　円
昭和二十八年五月三十日印刷
昭和二十八年六月　一日発行
編集人　箕田京二
印刷人　上田庄之助
発行人　吉田　稔
大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇
発行所　曙書房
振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。